

平成29年度

博士論文（指導教員 寺村政男）

## 日本における漢語受容の諸相

大東文化大学大学院外国語学研究科  
日本語文化学専攻博士課程後期課程  
(学籍番号15233101)

鐘 一沁

## 目次

序章 .....	1
第一節 漢語受容について .....	1
第二節 本論文の構成 .....	9
第一章 『和名類聚抄』に見られる中古漢語語彙の日本語への流入 .....	12
第一節 『和名類聚抄』所引漢和辞典について .....	12
第二節 『和名類聚抄』と『世説新語』の比較を中心に .....	19
第三節 『和名類聚抄』と『太平廣記』の比較を中心に .....	33
第二章 日本漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入 .....	44
第一節 幕末明治期漢文小説における創作作品 .....	47
1. 『唐話纂要』巻六、『和漢奇談』における傍音について .....	53
2. 「孫八救人得福」から見る近世漢語語彙の受容 .....	63
3. 「徳容行善有報」から見る近世漢語語彙の受容 .....	81
第二節 幕末明治期漢文小説における翻訳作品 .....	95
1. 『通俗赤縄奇縁』に見られる近世漢語語彙の受容 .....	95
2. 『勸懲繡像奇談』に見られる近世漢語語彙の受容 .....	119
終章 .....	142
付論 林文月による『源氏物語』の漢訳について .....	143
謝辞 .....	158
資料編 .....	159

## 序章

### 第一節 漢語受容について

最初に、日本と周辺諸国の政治文化交流を概観しておく。

807年（大同2年）に齋部広成が著した『古語拾遺』の序文に「けだし聞くならなく、上古の世、いまだ文字あらず、貴賤老少、口々相伝へ、前言往行、存して忘れず、といふ。<sup>1</sup>」とあるように、漢字が伝来する以前の日本には文字がなかった。記録可能な文字がなかった日本では、神話や歌謡、あるいは物語が口承と言う手段で伝承され、仮名が発明されるまで、日本語の音を漢語音借用した所謂万葉仮名での表記など、様々な工夫をこらして記録されてきた。

地政学的に見て上古における日本周辺で交流可能な地域は、朝鮮半島と中国大陸という日本と比較的、接近する漢字文化圏の東アジアの一部地域であった。

漢字は国々の間に公的な交流が築かれる前に、既に日本に伝来した。北九州市守恒遺跡では、紀元前一世紀頃に作られた漢字が刻まれた貨幣が発見されている。しかし、その時漢字を目にした人は漢字を理解し、認識できたかは判断できない。中国南朝宋の時代に、范曄が編纂した『後漢書』卷八五、東夷列傳第七十五では、「建武中元二年、倭奴国奉貢朝賀、使人自称大夫、倭国之極南界也。光武賜以印綬。<sup>2</sup>」（建武中元二年、倭の奴国が奉貢して朝賀し、使者は自ら大夫と称した。倭国の極南の界である。光武帝は印綬を下賜した）という記載が見られる。建武中元二年は西暦57年であり、日本においてはまた弥生時代であった。後、『魏志倭人伝』には次のように書かれている。「倭国在帶方東南大海之中，依山島爲國邑。舊百餘國，漢朝有朝見者。今使譯通三十國。<sup>3</sup>」（倭人は帶方郡の東南の海の中にあり、山島に依って国とし、もとは百余国で、漢の頃には大陸への朝貢があり、今は30箇国の使者や訳者を通わせている。）よって、西暦3世紀頃、邪馬

<sup>1</sup> 齋部広成撰 西宮一民校注 『古語拾遺』 （岩波書店 1985.03.18）

<sup>2</sup> 渡辺義浩・高橋康浩・池田雅典・三津間弘彦編著 『全訳後漢書』第十八冊（汲古書院 2016.09.08） p.398

<sup>3</sup> 水野祐 『評釈 魏志倭人伝』（新装版）（雄山閣 2004.11.25） p.111

台国時代には、一部の知識階級または渡来人が漢字を理解し、文書を扱うことや言語交流が可能であったと判断できる。

また、4世紀後半から5世紀初めの頃、中国は南北朝時代を迎え、朝鮮半島においても内戦と周辺からの外圧を受け、東アジア全体の動乱期を迎えている。それによって中国江南地域や朝鮮半島から数多くの人々が高度な文化を持って日本列島に渡来した。このような朝鮮半島との交流や渡来人の渡航によって本格的な漢字表記の文化が移入され、職業的に書記活動に携わる者も現れた。その漢字の用法は大きく2つに分けられる。1つは漢文によって、事柄を書き記すことで、もう1つは漢字の音だけ借用し、固有名詞を表記することである。前者は表意文字である漢字の本来的な用法で、意味概念を表出するものである。後者は漢字本来の意味とは関わらず、漢字の語音を用いて書き表す用法で、固有名詞や日本語特有の意味を持つ語を原語音に従い、音訳したものである。前者の表意文字として主に使われた最古の文学作品は、日本最古の歴史書でもある『古事記』であろう。『古事記』の原本は現存せず、いくつかの写本だけが後世に伝わった。写本の序文によると、成立したのは和銅五年であり、西暦712年である。本文は主に変体漢文を使用し、古語や固有名詞など、漢文では表出し難い言葉は漢字の音だけを借用した。一方、漢字の音だけを用いて大和言葉を表現した典型例は、日本に現存する最古の和歌集である『万葉集』である。そして、このような漢字の使い方は『古事記』にも見られるが、『万葉集』において最も多く使用され、「万葉仮名」とも呼ばれている。

日本における漢籍および漢文の伝来は三世紀末からだと言われている。『古事記』の「応神天皇二十年己酉」では「又、科賜百濟國、若有賢人者貢上。故受命以貢上人名、和邇吉師。即論語十卷、千字文一卷、並十一卷、付是人即貢進。<sup>4</sup>」（また、百濟国に「もし賢人がいったら献上せよ」と仰せ、それで命を受けた百濟国が献上したのは和邇吉師という人であった。『論語』十卷と『千字文』一卷、合わせて十一巻をその人と一緒に献上した。）という記述が見られる。『千字文』の成立は諸説ある。中国南北朝の梁の時代に周興嗣が作成した『千字文』が一番有名であるが、成立したの

<sup>4</sup> 西宮一民校注 <新潮日本古典集成>『古事記』（新潮社 2014.10）

はおおよそ 6 世紀頃で、応神天皇二十年に日本に伝入したとは、考えられない。

また、漢籍の伝来に関してはその他にも歴史事実と言うよりも伝説的傾向が強いと考えられるが、「徐福齋来の説」や「神后征伐収還の説」がある<sup>5</sup>。しかし、「徐福日本渡航説」は確実な証拠が見られず、前述したような歴史事実ではないであろうが、日本までたどり着いたのかどうかも証明できない。また、「神功皇后征韓収回説」の証拠としている『日本書紀』における「遂入其國中、封重寶府庫、收圖籍文書。<sup>6</sup>」に関しては、幕末江戸期からの学者の研究によると、回収したのは地図や戸籍などの公文書だということでは明らかである<sup>7</sup>。

以上歴史事実とは考えられないが、古代にあってこれらの記述は、日本が周辺諸国と何らかの接触があった事の、象徴的な話を仮託したものかもしれないので一応、参考までに挙げておく。

推古天皇十五年（607 年）聖徳太子がはじめて正式に隋に使者を派遣した。それは、小野妹子と難波雄成を大小使とし、鞍作福利を通事とした一行であった。隋が滅亡した後、唐の時代になると、舒明天皇二年（630 年）にまた、犬上御田や薬師恵が唐に派遣された。

延暦十三年（794 年）、恒武天皇が平城京から平安京に遷都してから約 400 年間は平安時代と言われている。中古文学は詩歌を中心に発展し、漢字による漢文表記や一字一音の「万葉仮名」が生まれた、漢字の草体化による平仮名の成立も見られる。

中古文学の中心である詩歌は、漢詩集や和歌集などがあり、三大歌集と呼ばれている『万葉集』、『古今和歌集』と『新古今和歌集』が編纂された。また、嵯峨天皇の勅命により編纂された『凌雲新集』や『文華秀麗集』などの漢詩集も出されている。平安時代における漢詩と中国文学との比較に関する研究は多く見られる。博士論文として、于永梅による『平安時代漢

---

<sup>5</sup> 岡田正之 『日本漢文學史』増訂版（吉川弘文館 1954.12.10）

<sup>6</sup> 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注 <日本古典文学大系> 『日本書紀』（岩波書店 1965.7）

<sup>7</sup> 小島憲之 『上代日本文学と中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察 下』（塙書房 1965.3）

詩文における中国文学受容の研究』<sup>8</sup>や馮芒による『平安朝漢詩文における唐代律賦影響』<sup>9</sup>などがある。馮芒は、平安時代に作られた漢詩文を唐代律賦の押韻・詩体・換韻などの面から比較し、唐代律賦が平安朝における漢詩文にもたらした影響を明らかにした。

また、仏教の隆盛により、漢文で書かれた仏教説話集も多く現れた。延暦23年(804年)、空海は正規の遣唐使の留学僧として、唐に渡った。同行した人の中には、当時すでに天皇の護持僧の一人に任命されており、当時の仏教界に確固たる地位を築いていた最澄もいた。しかし、最澄は地位的に高いが、中国語力がさほど高くないため中国明州(現在の中国浙江省寧波市相当)に到着し、天台山(現在の中国浙江省台州市境内)で密教を勉強し、一年後に帰国した。一方、空海は日本で習得した中国語や梵字・悉曇などの知識を生かして長安(現在の中国陝西省西安市)に2年間滞在し、真言密教について詳しく学習したようである。そして、空海が「虚しく往きて実ちて帰る」と書かれるように、わずか二年で無名の一留学僧が得た成果がいかに大きなものであったかを如実に示している。それを基礎に、平安時代初期、空海が日本における最も古い漢字辞典である『篆隸万象名義』を編纂した。承和七年(840年)日本最後の遣唐使である藤原常嗣が日本に戻ってから、885年に唐物の売買が禁じられ、894年に遣唐使政策も廃止された。これまでの間日本に伝入した漢籍は、平安時代の学者である藤原佐世が寛平年間(889年～898年)に編著した『日本國見在書目録』<sup>10</sup>によれば、全四十類あり、千五百七十九部、一万六千七百九十巻ある。その漢籍は主に経史子集を中心としたものであった。

当時の漢字や漢文における学習においては、優秀辞書類が大きな役割を果たした。平安時代中期に、『和名類聚抄』が生まれた。『和名類聚抄』は承平年間(931年～938年)、源順が勤子内親王の求めに応じて編纂した辞書である。平安時代以前の語彙や語音、また当時の漢語の和訓を知るため

---

<sup>8</sup> 于永梅 『平安時代漢詩文における中国文学受容の研究』 (大阪大学 文学研究科文化表現論専攻 博士論文 2006.3.24)

<sup>9</sup> 馮芒 『平安朝漢詩文における唐代律賦影響』 (大東文化大学 外国語学研究科日本語文化学専攻 博士論文 2016.3.22)

<sup>10</sup> 藤原佐世 撰 古典保存会 編 『日本國見在書目録』(古典保存会 1925.11)

の資料として重要視されている。かつ、『和名類聚抄』は単なる国語辞書ではなく、漢和辞書や百科事典の要素も多く含み、当時の社会・風俗・制度などを知る史料としても重宝され、国文学・日本語学・日本史の分野での貴重な書物である。『和名類聚抄』には『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『弁色立成』等の漢和辞典も引用されている。

平安末期から鎌倉にかけて入宋禅僧により各種「禅語録」が日本にもたらされた。それらの書物は禅宗の基本理念の「写真（真を写す）」の思想から、全編が禅師の発言通りに方言音も含めて当時の口頭語で書かれている。これらの思想の定着に伴い、早期近世漢語彙が日本語へ流入し定着してきたと考えられる。

慶長8年、徳川家康は征夷大將軍に任命され、江戸（今の東京）に幕府を成立してからの、徳川將軍家が日本を統治していた約260年間を江戸時代と呼ばれている。慶長十七年（1612年）に幕領の禁教令によって、キリスト教伝来を防ぐための鎖国の政策が下された。鎖国中の貿易は全て幕府が制限し、管理していた。長崎を通してオランダと中国（明、清）との貿易を除き、他国との貿易や国交を全て断絶させた。しかし、対馬藩を仲介にした朝鮮半島との貿易や、薩摩藩を通しての琉球王国との貿易は維持されていた。

遣隋使や遣唐使の制度が廃止され、中国との貿易まで制限されたにもかかわらず、江戸時代において日本はまた漢文学の繁盛期を迎えた。江戸時代日本に來航した中国人のことを「唐人」と呼び、中国船のことを「唐船」と呼んだ。大庭修の説では、「鄭成功ら鄭氏の勢力下の人たちが、自らを、清朝には従わない明の人間であるという意識から、唐王の支配下にあるという意味で唐人と称した<sup>11</sup>」とされている。

長崎における清国との貿易により、「唐話学」が盛んであった。唐話学とは漢学及び漢語口頭語を主体とした学問である。唐話学の中心になったのは、「唐通事」と呼ばれる、長崎において清国との総合商社的な役割も兼ねた、貿易実務に従事した人々であった。一方、16世紀に來日したイエズス

---

<sup>11</sup> 大庭修 『日中交流史話 江戸時代の日中関係を読む』（燃焼社 2003.04.30） p.30

会宣教師によるカトリックの布教を契機に、西欧の言語も日本に流入してきた。この流れはオランダ通詞として脈々と受け継がれてきた。「通事」と「通詞」に書き分けられているように、オランダ通詞たちは文字通り「詞に通じる」と言う役割で、オランダ語の記録などは厳禁されていた。唐通事の方は、「事に通じる」役割を持ち、今日の「商社」としての役割を担っていてもいた。唐通事、オランダ通詞のそれぞれの役割は専著に譲るが、厳重な鎖国政策の下にあっても、江戸時代の知識人は漢語口頭語、オランダ語、朝鮮語を学習していた。

幕末期を迎えると、必要に応じてロシア語、満洲語、英語、フランス語と限られた人々の範囲とはいえ、バラエティー豊かな言語が学ばれていたことは事実であろう。福沢諭吉の『福翁自伝』<sup>12</sup>では、幕末渡米の際に、東洋の小国の未開の人物だと思われ、アメリカ人が物知り顔で得々と先進科学の成果を説明するのに対して、驚くこともなく、冷静に対応した事が書かれている。諭吉たちは既に書物を通して「先進科学の成果」に十分な知識を有していたのである。敢えて言えば、明治維新後急速な欧化政策に、明治の知識人が苦も無く付いて行くことができた基礎が、既に用意されていたと言えよう。したがって明治初期においては、伝統的な漢学及び唐話学の流れと、西欧諸国の言語などが混在していたとも言えるのであろう。

このように漢字及び漢語が次第に日本語に浸透して、大和言葉と融合し、変化してきた。文化的コミュニケーションに欠かせない言語活動の基本単位である単語は多くの機能を持っている。よって、漢語受容の歴史は単なる模倣でなく、国語史における重要な事象でもあり、日中言語接触の分野においても重要な一環である。

言語接触と言う概念は言語学上の用語としてはなじみの薄い言葉であるが、それを理解する上で、例えば1つ例を挙げてみよう。

漢語に「哈叭狗」(狺)と言う犬の種類がある。清朝の後宮でも珍重され愛玩された種類の犬である。「哈叭狗」(狺)は、元々はモンゴル語「qaba」(子犬)から来ている。これが満洲語になると「kabari」となり、満洲語固有の「indahūn」とは別の固有名詞として成立している。清朝の入関によ

<sup>12</sup> 福澤諭吉、矢野由次郎 『福翁自伝』 (時事新報社 1899)



り、中国語になると「哈叭」と表記され、固有名詞の実態を明らかにするために犬を表す「狗」が添えられる。

一方、日本語の文献においても「哈叭狗」(狎)の用例が見られる。それは、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』、第七輯巻五に「番狗長毛、庫脚身絶小、高四五寸、爲哈叭狗、來自京師最貴」とあり「哈叭狗」に右側に「カフ」左側に「サツパツク」とカタカナが振られている。右側の「カフ」と言うのは「狗」(犬・唐音は **gou**) であろう。左側の「サツパツク」は誤刻で「哈叭狗」を音読した「ハツパツク」であろう。(実際の発音はハッパックと促音便化して呼ばれていたと考えられる) これは恐らく江戸期の唐人貿易により、それが日本にもたらされ、長崎、京都、江戸と広まって行き江戸城の大奥でも珍重愛玩されたに違いない。「來自京師最貴」とあるのは、唐話学の興隆が長崎から京都を経て江戸へとその興隆が進んで行く過程と類似しており大変興味深いものがある。

上記の分析から、「哈叭狗」という言葉は「qaba」から「kabari」に、「哈叭狗」、「ハツパツク」そして「ハッパック」という口頭表現と変化してきた過程が明らかである。

よって、ある言語の語彙がさまざまな過程を経て、他の言語と接触する際には、接触した言語の音韻体系に変化して必要要素を付加され、その国の表記手段を使い表記され、移動して定着して行く。もちろん言語語彙は常に消滅と増加を繰り返してゆくので、現代まで継承されている事は却って稀である。

しかし、各言語間の言語接触においては、接触する両言語の間、例えば漢語と和語の間には、漢語の持つ語義の全体が和語に伝わるのではなく、漢語語義の一部が伝わる可能性がある。

現代語においてもこのような現象はま見られる。

例えば「虫」は生物全般を指すが、『水滸伝』などの白話小説においては、「大虫」で「虎」を意味する例が見られる。また、忙しい・不如意を意味する「緊張」という言葉があるが、現代漢語においても「手頭緊張」で「手元不如意」といを表す例が見られる。

このように、「ムシ」や「キンチョウ」といった言葉については、漢語と

しての語義の一部は日本語に流入したが、一部は日本語の中に吸収されなかったという例が見られる。

上記を踏まえて、本研究で扱う漢語語彙の日本への流入の研究は、「東アジアの言語接触」の研究の一端を担うものであり、日中両言語が接触する際に起きる語義や語形、語音の変化する現象を再確認し、和語（日本語）・漢語間の言語接触を視座に置いたものである。

## 第二節 本論文の構成

本研究は以下の二章七節、序章及び終章で構成されている。

### 序章

序章では、第一節で背景となる、漢字受容の歴史を時代順によって簡略にまとめた。第二節では、本論文の構成を述べている。

### 第一章 『和名類聚抄』に見られる中古漢語語彙の日本語への流入

第一章では、『和名類聚抄』採録語彙を研究対象とし、中古漢語語彙としての意味その和訳の相違点に関する比較研究を行った。

第一節では、『和名類聚抄』所引漢和辞典に関する紹介及び先行研究を検討した。本研究で用いる『和名類聚抄』の版本、そして初歩的な資料整理を行った。

第二節では、『和名類聚抄』採録語彙を『和名類聚抄』と『世説新語』の比較を中心に検討した。漢語としての語義を検討する際には『世説新語』における用例を中心に用いた。本節では、『和名類聚抄』に採録されている、『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』から引用した計 480 語から、『世説新語』における用例が見られる計 42 語を採取した。そして本節では、典型例を 15 例取り上げて分析を施した。これにより、『世説新語』にも用例が見られる『和名類聚抄』採録語彙の漢語としての語義とその和訳の比較によって、中古漢語語彙の日本語への受容の様相を検討した。

第三節では、『和名類聚抄』採録語彙を『和名類聚抄』と『太平廣記』の比較を中心に検討した。漢語としての語義を検討する際には『太平廣記』における用例を中心に用いた。本節では、『和名類聚抄』に採録されている『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』から引用した計 480 語から、『太平廣記』における用例が見られる計 154 語を採取した。そして本節では、『世説新語』にも用例が見られる語彙を除き、典型例を 10 例取り上げて分析を施した。これより、『太平廣記』にも用例が見られる『和名類聚抄』採録語彙の漢語としての語義とその和訳の比較によって、中古漢語語彙の日本語への受容様相を検討した。

### 第二章 漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入

第二章では、江戸期から明治期にかけて、日本人が作成した漢文小説を

対象とする。本研究では、江戸期から明治期漢文小説を翻訳作品、創作作品、翻案作品に分類している。本章では、翻訳作品として『通俗赤縄奇縁』と『勸懲繡像奇談』を取り上げ、創作作品として『唐話纂要』巻六に収録されている「孫八救人得福」と「徳容行善有報」という作品を取り上げた。この四作品における漢語語彙に振られる傍訳と、その漢語としての語義を比較し検討することによって、近世漢語語彙の日本語への流入実態を明らかにする。

第一節では、江戸期から明治期における漢文小説創作作品を検討する。本節では研究対象として、『唐話纂要』巻六である、版心書名によれば『和漢奇談』という題がついている作品を取り上げる。『和漢奇談』は、「孫八救人得福」と「徳容行善有報」の二つの物語によって構成されている。また、『和漢奇談』における振り仮名は傍注音と傍注訳が混じっているため、本節では、傍訳だけでなく、『和漢奇談』における傍注音の検討分析を試みた。

第一小節では、『唐話纂要』巻六、即ち『和漢奇談』における傍注音を研究対象として取り上げ、分析検討を試みた。本小節では、『和漢奇談』に現れる傍注音が振られている延べ4214、実数1017文字を出現頻度順に並べ、出現回数10回以上の20文字を採取した。上記基礎資料を踏まえ、『南京方言辞典』、『寧波方言辞典』、『杭州方言辞典』の漢字音を比較対照し、分析を施した。これによって『和漢奇談』における傍注音の特徴を明らかにした。

第二小節では、「孫八救人得福」において傍注訳が振られている漢語語彙を研究対象としている。本節では、「孫八救人得福」において傍注訳が振られている漢語語彙計236語を採取し、典型例を15例取り上げて分析を施した。これによって、「孫八救人得福」における近世漢語語彙の受容様相を明らかにした。

第三小節では、「徳容行善有報」において傍注訳が振られている漢語語彙を研究対象としている。本節では、「徳容行善有報」において傍注訳が振られている漢語語彙計90語を採取し、典型例を10例取り上げて分析を施した。これによって、「徳容行善有報」における近世漢語語彙の受容様相を明

らかにした。

第二節では、江戸期から明治期における漢文小説翻訳作品を検討する。

第一小節では、『通俗赤縄奇縁』を研究対象とする。『通俗赤縄奇縁』において傍訳が振られている漢語語彙計 492 語を採取し、天明四年に序刊された唐話辞典『畫引小説字彙』にも採録されている 74 語をまとめた。本小節では、その中から典型例を 13 例取り上げて分析を施した。これによって、『通俗赤縄奇縁』に見られる近世漢語語彙の受容様相を明らかにした。

第二小節では、『勸懲繡像奇談』を研究対象とする。『勸懲繡像奇談』において傍訳が振られている漢語語彙計語を採取し、天明四年に序刊された唐話辞典『畫引小説字彙』にも採録されている 33 語をまとめた。本小節では、その中から典型例を 16 例取り上げて分析を施した。これによって、『勸懲繡像奇談』に見られる近世漢語語彙の受容様相を検討した。

## 終章

終章では、前述した各小節における分析で得た結論を整合し、本研究の最終結論を提示した。

また、本研究ではまだ幾つか検討する余地が見られる処があるため、最後に、今後の課題を述べた。

## 付論 林文月による『源氏物語』の漢訳について

本研究においては、傍訳を手掛かりに、漢語語彙の漢語における本来の意味と日本に伝入した語義の間における相違を検討することにより、漢語語彙が日本語において受容される実態を明らかにする研究方法を中心にした。付論では、この研究方法を用い、序文検証を兼ねて、林文月による『源氏物語』の漢訳を研究対象として取り上げた。

附論では、林文月による『源氏物語』の漢訳から、「桐壺」、「帚木」と「空蟬」の三帖を取り上げ、注釈を抽出し、「吉澤訳」、「小学館本」、「谷崎訳」における注釈と照らしあわせて分析を加えた。初歩的分析で注釈全 77 件を検討し、典型例を 8 例採取し、分析を施した。これによって、林文月による『源氏物語』の漢訳の序文に書かれている参考文献を検証することができた。そして、注釈を参考とする際の意図や傾向を推測することができた。

## 第一章 『和名類聚抄』に見られる中古漢語語彙の日本語への流入

### 第一節 『和名類聚抄』所引漢和辞典について

遣隋唐使時代を背景とする近江奈良朝から延暦・延仁を経て宇多天皇の寛平に至る二百数十年間は、外国文学としての漢文学の第一隆昌期だと言われている<sup>13</sup>。この時期においては詩賦や文章が多く現れ、儒学がさほど盛んでなかった時代であった。しかし、平安期になると、現存する最古の漢和辞典である『新撰字鏡』が編纂され、のち、莫大な影響力をもつ漢和辞典、『和名類聚抄』も編纂された。特に遣隋唐使時代を終え、漢籍がほぼ民間貿易を経由し、日本に伝来した。その時には経史子集などの経典のほか、俗書も多く伝来してきた<sup>14</sup>。

平安中期に源順によって編纂された『和名類聚抄』は、日本最初の分類体漢和辞典であり、漢字を意味別に分類した辞書である。現存する『和名類聚抄』には十卷本系と二十卷本系の二系統の写本が存在し、十卷本系は掲出語を二四部・一二八門に、二十卷本系は三二部・二四九門に分類する。それぞれの系統の写本が存在するが、撰者源順の原撰本については、未だ定説がない。題名は『倭名類聚抄』や『和名類聚抄』とも書かれ、その表記は写本によって一定していない。本研究では『和名類聚抄』と統一表記する。『和名類聚抄』においては漢語名詞に万葉仮名で対応の日本語読みが付けられているため、平安時代以前の語彙や語音、また当時の漢語の和訓を解明することができる。また、『和名類聚抄』は単なる国語辞書でなく、漢和辞書や百科事典の要素も多く含まれ、当時の社会・風俗・制度などを知る史料としても重宝されている。

#### 1. 『和名類聚抄』諸本について

『和名抄』の諸本について、以下の文献より、表1と表2にまとめた。

・馬淵和夫編著 『十卷本系古写本の影印対照』<sup>15</sup>

<sup>13</sup> 石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』 (光明社 1967.09.15) p.5

<sup>14</sup> 大庭修 『江戸時代における 中国文化受容の研究』 (株式会社同朋社 1984.06.15)

<sup>15</sup> 源順撰 馬淵和夫編著 『十卷本系古写本の影印対照』(馬淵和夫編著 『古

- ・馬渕和夫編著 『二十卷本系諸本の影印対照』<sup>16</sup>
- ・中田祝夫解説 『倭名類聚抄：元和三年古活字版二十卷本』<sup>17</sup>
- ・京都大学文学部国語学国文学研究室編 『諸本集成倭名類聚抄』<sup>18</sup>

[表1：十卷本系『和名類聚抄』諸本]

真福寺本	卷一・巻二の零本	鎌倉時代	名古屋市大須宝生院蔵
伊勢	十卷本	室町時代初期	神宮文庫蔵
前田本	全巻	明治時代	前田家尊経閣文庫蔵
松井本	完本	江戸時代前期	静嘉堂文庫蔵
箋注本 和名類聚抄	全巻	明治一六年	内閣印刷局出版
天文本	全巻	江戸時代後期	東京大学蔵

[表2：二十卷本系『和名類聚抄』諸本]

天正本	全巻	室町時代中期	大東急記念文庫蔵
伊勢	廿巻本	室町時代初期	神宮文庫蔵
元和古活字本	全巻	元和三年	勉誠社文庫刊行

『和名類聚抄』は奈良朝初期に日本人が唐代中国語を習得するために編纂した漢和辞書である『楊氏漢語鈔』、『漢語抄』、『辨色立成』から引用し、和訓や音義を標示したという。源順の序文によると、三辞書とも奈良朝初期、養老の時代に作られた辞書である。蔵中進の論述<sup>19</sup>によると、『楊氏漢語鈔』は奈良朝の法曹官人楊胡史が編纂したもので、三辞書いずれも日本人によって編纂されたものである。

よって、『和名類聚抄』に現れる、漢語との共通性を持つ語彙の和訓や意味解釈を中古漢語表記・語意と比較し、中古漢語語彙の日本語への流入・

写本和名類聚抄集成』 第2部) (勉誠出版 2008.08)

<sup>16</sup> 源順撰 馬渕和夫編著 『二十卷本系諸本の影印対照』(馬渕和夫編著 『古写本和名類聚抄集成』 第3部) (勉誠出版 2008.08)

<sup>17</sup> 源順撰 中田祝夫解説 『倭名類聚抄：元和三年古活字版二十卷本』 (勉誠出版 1978)

<sup>18</sup> 京都大学文学部国語学国文学研究室編 『諸本集成倭名類聚抄』(臨川書店 1971-1981)

<sup>19</sup> 蔵中進 「奈良朝初期の白話漢語辞書 —『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について—」(『水門一言語と歴史』 第21号 勉誠出版 2009.04.18)

定着の様相が明らかになる可能性がある。

本節では、中国南朝、宋の時代の臨川王である劉義慶が編纂した逸話集『世説新語』を主として用例を収集し、『和名類聚抄』に現れる漢和辞書から引用された語彙と中古漢語語彙の語意的相違を検討する。それによって、初唐から奈良初期の中古漢語語彙から日本語への受容の様相を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

『和名類聚抄』の引用書目に関しては、尹仙花による「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 十卷本系・廿卷本系における『法苑珠林』の引用」<sup>20</sup>がある。その他にも、「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 五臣注『文選』を中心に」<sup>21</sup>や「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 『芸文類聚』を中心に」<sup>22</sup>、「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 李善注『文選』を中心に」<sup>23</sup>、「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 『法苑珠林』を中心に」<sup>24</sup>、「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 『漢武故事』を中心に」<sup>25</sup>、「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 「江表伝」を中心に」<sup>26</sup>などがある。

尹仙花は論述で『和名類聚抄』における、仏教類書『法苑珠林』から引用した項目を『江表伝』、『吳時外国志』、『広志』、『魏略』、『南州異物志』、『漢武故事』等における記述と比較し、『和名類聚抄』における『法苑珠林』の受容実態を明らかにした。

また、『和名類聚抄』所引漢和辞典に注目した先行研究も見られる。

---

<sup>20</sup> 尹仙花 『和名類聚抄』引用書目の研究 - 十卷本系・廿卷本系における『法苑珠林』の引用』（デザインエッグ社 2015.05.25）

<sup>21</sup> 尹仙花 「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 五臣注『文選』を中心に」 『外国語学会誌』第38号（大東文化大学外国語学会 2008）

<sup>22</sup> 尹仙花 「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 『芸文類聚』を中心に」 『外国語学会誌』第39号（大東文化大学外国語学会 2009）

<sup>23</sup> 尹仙花 「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 李善注『文選』を中心に」 『語学教育研究論叢』第26号（大東文化大学語学教育研究所 2009）

<sup>24</sup> 尹仙花 「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 『法苑珠林』を中心に」 『語学教育研究論叢』第27号（大東文化大学語学教育研究所 2010）

<sup>25</sup> 尹仙花 「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 『漢武故事』を中心に」 『指向』第8号（大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻 2011.03）

<sup>26</sup> 尹仙花 「『和名類聚抄』引用書目の研究 - 「江表伝」を中心に」 『語学教育研究論叢』第28号（大東文化大学語学教育研究所 2011）



主たるものは蔵中進による、「『新撰字鏡』と『楊氏漢語抄』・『漢語抄』・『弁色立成』」<sup>27</sup>、「『和名類聚抄』所引『弁色立成』考」<sup>28</sup>、「『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』考」<sup>29</sup>、「『和名類聚抄』所引『漢語抄』考」<sup>30</sup>などがある。そして遺稿の「奈良朝初期の白話漢語辞書—『楊氏漢語抄』、『弁色立成』、『漢語抄』について」<sup>31</sup>と、寺村政男による増補注、「増補注：奈良朝初期の白話漢語辞書—『楊氏漢語抄』、『弁色立成』、『漢語抄』について」<sup>32</sup>がある。その他には、マニエーリ・アントニオによる「『和名類聚抄』「牛馬毛」門と奈良朝の下級官人層：『漢語抄』『楊氏漢語抄』『辨色立成』をめぐって」<sup>33</sup>がある。

『和名類聚抄』の序文では、『辨色立成』と『楊氏漢語抄』について、「是故、雖有一百秩文館詞林三十卷白氏事類、而徒備風月之興、難決世俗之疑。適可決其疑者辨色立成楊氏漢語抄」という記述が見られる。これは、「それ故に、百秩の『文館詞林』と三十卷の『白氏事類』があり、風月の興は備えたが、世俗の疑問は解決し難い。丁度この世俗の疑問を解決できるのは『辨色立成』と『楊氏漢語抄』である。」という意味である。即ち、『辨色立成』と『楊氏漢語抄』は「世俗の疑問を明かす」ことが出来る辞典であり、収録されている言葉が当時伝来した俗語である可能性が高い。

『楊氏漢語抄』は蔵中進によると、「奈良朝初期養老の頃の実用的中国語（唐語）辞典として編撰されたものであった。その実用性（唐との外交関係・唐文化の吸収）」という点から語彙の部門別配列が採用されたのであり、

---

<sup>27</sup> 蔵中進 「『新撰字鏡』と『楊氏漢語抄』・『漢語抄』・『弁色立成』」 『国語と国文学』第75号（至文堂 1998.01）

<sup>28</sup> 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『弁色立成』考」 『東洋研究』第141号（大東文化大学東洋研究所 2001.11）

<sup>29</sup> 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』考」 『東洋研究』第145号（大東文化大学東洋研究所 2002.11）

<sup>30</sup> 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『漢語抄』考」 『東洋研究』第150号（大東文化大学東洋研究所 2003.12）

<sup>31</sup> 蔵中進 「奈良朝初期の白話漢語辞書—『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について—」（『水門』第21号 勉誠出版 2009.04.18）

<sup>32</sup> 寺村政男 「増補注：奈良朝初期の白話漢語辞書—『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について—」（『水門』第21号 勉誠出版 2009.04.18）

<sup>33</sup> マニエーリ アントニオ 「『和名類聚抄』「牛馬毛」門と奈良朝の下級官人層：『漢語抄』『楊氏漢語抄』『辨色立成』をめぐって」 『東アジア比較文化研究』第11号（東アジア比較文化国際会議日本支部 2012.06）

また唐代の口頭会話語（唐代俗語）やより卑俗な罵語、卑語の類も取り上げられることになった<sup>34</sup>」のである。

また、『辨色立成』（又は『弁色立成』）について、蔵中進は論述で「事物の漢語名辞を類聚（収集、分類）し、その語に俗解（通俗的和音、和訓）を施し、立ちどころに理解せしめるための語彙集であったものと考えてよいであろう。<sup>35</sup>」と述べている。

一方、『和名類聚抄』の序文では、『漢語抄』について、「希存辨色立成十有八章、與楊家説名異實同、編録之間頗有長短。其餘漢語鈔不知何人撰。」という記述が見られる。よって、『漢語抄』（又は『漢語鈔』）は「漢語抄」と名付けられた漢和辞典の集合であろう。蔵中進による論述でも、『漢語抄』はおそらく複数存在するという可能性を挙げられている<sup>36</sup>。また、『漢語抄』と『楊氏漢語抄』は同一作品ではないということが明らかにされている。

上記の論述によると、『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』は、日本にも中国やその他東アジア諸国にも、その完本が伝わらず、逸文だけが『和名類聚抄』に伝えられているという。また、内容から見ると、三辞書とも口頭語、或いは俗語を多く扱っている。

そのうち、蔵中進は論述で、「『楊氏漢語抄』等三辞書に標出されている約二〇〇語は、いわゆる経史子集に属する正統漢籍や仏典に類には殆ど見出すことができない特異な語彙が多数見出される。それらの中には帰って正統漢籍以外のいわゆる俗書（志怪小説、俗小説、白話詩など）の類にその用例を見出すことが出来るものが多い。<sup>37</sup>」と述べている。

一方、中古漢語語彙の1つの指標とも言うべき『世説新語』と『和名類聚抄』との関連性を検討した論述は、管見の限り見当たらなかった。『世説新語』は中国南朝宋の劉義慶が、後漢末から東晋の貴族や文人たちの話を

---

<sup>34</sup> 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』考」 『東洋研究』第145号（大東文化大学東洋研究所 2002.11）p.37

<sup>35</sup> 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『弁色立成』考」 『東洋研究』第141号（大東文化大学東洋研究所 2001.11）

<sup>36</sup> 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『漢語抄』考」 『東洋研究』第150号（大東文化大学東洋研究所 2003.12）p.3

<sup>37</sup> 蔵中進 「奈良朝初期の白話漢語辞書 一『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について一」 （『水門』 第21号 勉誠出版 2009.04.18）p.9

集め、編纂した逸話集であり、当時使われている俗語（口頭語）が多く現れている。

また、『太平廣記』は俗書を集合した著作であり、『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙を『太平廣記』・『世説新語』における用例を通して、語彙の漢字表記や語意の相違を検討する可能性を示している。

よって、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義は、中古漢語語彙との間に微妙なずれが見られると考えられる。本章の主たる目的は中古漢語と『和名類聚抄』採録語彙との語義の一致と当時の日本語に吸収されなかった語義の差異を考究することである。

### 3. 資料

本研究で用いるのは『和名類聚抄』二十巻本であり、参考資料としては『狩谷椽斎箋注和名類聚抄』<sup>38</sup>、『箋注和名類聚抄國語索引』<sup>39</sup>や『倭名類聚抄十巻本廿巻本所引書名索引』<sup>40</sup>などの索引を用いた。

底本として用いたのは寺村政男所蔵の二十巻本系元和三年序刊本『和名類聚抄』であり、20巻10冊で、外題は「倭名類聚抄」であり、内題も同じく「倭名類聚抄」となっている。見返しなしで、元和三年（1617年）丁巳冬十一月羅浮散人による序ある。

序文により、『和名類聚抄』は『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』を参考にしたということが明らかである。これ等の辞書はいずれも奈良初期日本人によって編纂された漢和辞典である。そして、いずれも后世に伝わらず、逸文だけが『和名類聚抄』に伝えられている。

筆者の整理によると、『和名類聚抄』における『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』からの所引記載が見られる語彙は、以下の通りである。

『楊氏漢語抄』（楊氏・楊氏漢抄・楊氏抄を含む）……………163語

<sup>38</sup> 澤瀉久孝（代表）京都帝国大学文学部国語学国文学研究室編纂（古典索引叢刊1）『狩谷椽斎箋注和名類聚抄』（全国書房 1943.11）

<sup>39</sup> 澤瀉久孝（代表）京都帝国大学文学部国語学国文学研究室編纂（古典索引叢刊2）『箋注和名類聚抄國語索引』（全国書房 1944.01）

<sup>40</sup> 蔵中進、林忠鵬、川口憲治共編『倭名類聚抄十巻本廿巻本所引書名索引』（勉誠出版 1999.05.20）

『漢語抄』（漢鈔を含む） .....215 語

『辨色立成』 .....137 語

これは、延べ語彙計 515 語あり、掲出語彙計 480 語である。部ごと詳細に分けると、次の通りになる。

天部...4 語、地部...8 語、水部... 1 語、人倫部...10 語、形體部...15 語、  
術藝部...13 語、音楽部...1 語、局處部...30 語、船部...13 語、車部...7 語、  
牛馬部...27 語、燈火部...6 語、布帛部...1 語、装束部...25 語、調度部...113  
語、器皿部...25 語、飲食部...19 語、稻穀部...8 語、菓蓏部...7 語、菜蔬部...18  
語、羽族部...37 語、毛群部...7 語、鱗介部...43 語、蟲豸部...4 語、草木部...38  
語<sup>41</sup>。

---

<sup>41</sup> 分類及び逸文は資料編 p.1~29 を参照。

## 第二節 『和名類聚抄』と『世説新語』の比較を中心に

### 1. 『世説新語』について

『世説新語』とは、中国南朝宋の臨川王である劉義慶が、後漢末から東晋までの貴族・文人・僧侶など逸話を集め、編纂した逸話集である。当時の社交界で行われた「清談」の雰囲気をよく伝えている。『隋書』卷三十四、志第二十九、「經籍三」では、「世説八卷宋臨川王劉義慶撰」という記述が見られる。よって、この書は最初単に「世説」と呼ばれていた。その後、『宋史』卷二百六、志第一百五十九、「藝文五」では、「劉義慶世説新語三卷」という記述が見られるように、「世説新語」と定着した。

作者である劉義慶は南北朝時代、宋の文学者で、出身は彭城である。王室の一族で宋の初代皇帝（武帝）の甥として臨川王を継ぎ、侍中・中書令などを歴任、その後荊州刺史・江州刺史など地方の役人を務めた。彼は文学を好み、鮑照など当時一流の文人をその幕僚に招いたという。『世説新語』原本は10巻あったが、現行本は3巻である。

本稿で使用する『世説新語』は早稲田大学図書館所蔵、三巻六冊の万暦37年（1609年）序刊本である。封面は題簽なし、見返し無し。「吳郡袁褫撰」と書かれ、「萬歴巳酉春周氏博古堂刊」の序がある。また『世説新語』の現代日本語訳と本文の句読点は目加田誠編明治書院出版、新釈漢文大系『世説新語』<sup>42</sup>を参考にした。

### 2. 先行研究

『世説新語』と『和名類聚抄』との関連性を述べた論述は、管見の限り極めて少ない。寺村政男は「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 一『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」<sup>43</sup>において、和名類聚抄所収『楊氏漢語抄』、『弁色立成』、『漢語抄』に現れる白話語彙の分析に、『世説新語』における用例を用いた。

上記を踏まえると、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色

<sup>42</sup> 目加田誠著 『世説新語（上）』 「新釈漢文大系」第76巻（明治書院1975.01）『世説新語（中）』 「新釈漢文大系」第77巻（明治書院1976.06）『世説新語（下）』 「新釈漢文大系」第78巻（明治書院1978.08）以下「大系本」と略称する。本節における『世説』の訳文は「大系本」による。

<sup>43</sup> 寺村政男 「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 一『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」（『水門』第21号 勉誠出版 2009.04.18）

立成』における漢語語彙の和訓や音義と中古漢語語彙との関連性と和語への流入の際にずれが起こると考えられる。

本節の主たる目的は中古漢語と『和名類聚抄』採録語彙との意味的一致とずれを明らかにし、考究することである。

### 3. 『和名類聚抄』における漢語語彙と『世説新語』

『世説新語』には『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙の用例は、総計 42 語見られる。<sup>44</sup>

本節においては、これらの語彙を分析し、中古漢語と『和名類聚抄』採録語彙との意味的一致、もしくはずれを考究する。『世説新語』見られる『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙 40 語の中、和訳が見られない語彙は計 7 語あり。また、初歩的分析により、「乳母」や「楼」などの語義に変化が見られない固有名詞などの計 18 語を除き、本小節では特徴的な語彙 15 語を採取し、分析を施す。

下記『和名類聚抄』に於ける逸文は、寺村政男所蔵の二十卷本系元和三年序刊本『和名類聚抄』より採取し、『世説新語』に於ける原文及び現代語訳は大系本を参照する。また、a.で『和名類聚抄』における逸文を提示し、b.で『世説新語』における用例を提示して分析を施す。

#### 1) 暴雨

a. 楊氏漢語鈔云白雨和名無  
良左女

< 『和名類聚抄』・卷一・天部・雲雨類／三葉ウ >

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語鈔』において「白雨」と表記されている。また、『楊氏漢語鈔』では、「むらさめ」と読まれている。「むらさめ」は「叢雨・村雨」であり、「強く降ってすぐ止む雨」を指す。

b. 時夏月、暴雨卒至、舫至狹小、而又大漏、殆無復坐處。

< 『世説新語』・上・德行第一／p.47 >

上記『世説新語』における用例は、「おりしも夏のことで突然夕立に襲われた。船はいたって手狭で、その上ひどく雨漏りがしたので、ほとんど座れる場所がなかった」という意味である。この場合、「暴雨」は「強く降っ

<sup>44</sup> 資料編 p.30~31 を参照。

た雨」を意味する。

また、『太平廣記』第一百三十九、徵應五「周靖帝」という項目では、「西北有黒龍。亦乘雲而至。風雷相擊。乍合乍離。暴雨大注。自午至申。」という用例が見られる。これは、「大雨が降りはじめ、昼から夕方まで降っていた。」という意味で、この場合、「暴雨」は「強く降る大雨」を意味する。

一方、『楊氏漢語鈔』における表記「白雨」は、『太平廣記』卷二百五「樂三」「宋璟」という項目でも、「頭如青山峯。手如白雨點。按此即羯鼓之能事。山峯取不動。雨點取其急。」という用例が見られる。これは「頭は山のように微動もしなく、手は大雨のように強くて早い。」という意味であり、この場合、「白雨」は「強く降る雨」を指す。

よって、「暴雨」や『楊氏漢語鈔』における「白雨」の漢語としての意味は、「強く降った雨」である。一方、「むらさめ」はその上に「すぐ止む」という意味が含まれているため、「強く降る」という語義は共通するが、時間的には短時間であるという面では一致しない。

## 2) 培塿

a. 風俗通云培塿田中小高也音上部下力拘反漢鈔云<sup>豆牟禮</sup>

＜『和名類聚抄』・卷一・地部・田園類／十一葉オ＞

上記の『和名類聚抄』における記述によると、「培塿」は『漢鈔』において「豆牟禮」（つむれ）と和訳されている。この意味に関しては、不明だが、「むれ」は恐らく古代朝鮮語経由で「山や丘」の意味であろう。

b. 王丞相初在江左。欲結援吳人。請婚陸太尉。對曰。培塿無松柏。薰蕕不同器。玩雖不才。義不為亂倫之始。

＜『世説新語』・中・方正第五／p.389＞

上記『世説新語』における用例は、陸太尉は「小さな丘には松柏は生えません。香草と臭草は同じ器には入れられません。私はつまらぬものですが、秩序を乱すきっかけになるような縁組みは断じてできません。」といい、この場合「培塿」は「小さな丘」を意味する。

また、『太平廣記』卷三百四十八、鬼三十三「李全質」という項目においても、「其人每以其前路物導之。或曰樹。或曰椿。或曰險。或曰培塿。或曰窮。全質皆得免咎。」という用例が見られる。この場合、「培塿」は道印に

なる物をさし、「小高い丘」である。

よって、「培塿」の漢語としての意味は、「小さな丘」であるが、『漢鈔』による「つむれ」という和訳についてはまだ検討する余地がある。

### 3) 田舎人

a. 楊氏漢語云田舎兒和名井奈  
加比止

＜『和名類聚抄』・卷二・人倫部・微賤類／九葉ウ＞

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』（楊氏漢語）において「田舎兒」と表記されている。

b. 殷去後、乃云、田舎兒、強學人作爾馨語。

＜『世説新語』・上・文學第四／p.273＞

上記『世説新語』における用例は、「殷浩が帰ったあとで、劉惔は言った。『田舎者め、むりに人のまねをして、あんなことを言いおるわ』」という意味である。この場合、「田舎兒」は「田舎者」を意味し、口頭語として人を見下げるニュアンスが含まれている。

一方、『楊氏漢語抄』（楊氏漢語）における表記「田舎兒」は、唐代王梵志の白話詩に用例が見られる。それは、「富饒田舎兒、論情實好事。廣種如屯田、宅舎青煙起。横上飼肥馬、仍更買奴婢。牛羊共成群、滿圈豢肥子。窖内多埋谷、尋常願米貴。」であり、「お金持の田舎者、情理から見れば実にいい事です。」という意味である。その場合、「田舎兒」は「田舎に住む人、地主」を指す。

また、『楊氏漢語抄』（楊氏漢語）では、「いなかひと」と読まれている。「いなかひと」は「田舎人」であり、「田舎に住む人」を指す。寺村政男はその和名について、「偉那加、井奈加は鄙方（ひなかた）から由来している。<sup>45</sup>」と述べられている。また、「田舎人」は人倫部微賤類に分類され、現代漢語においても、現代日本語においても、貶詞として使われている場合がある。

よって、「田舎人」や『楊氏漢語抄』（楊氏漢語）における「田舎兒」の

---

<sup>45</sup> 寺村政男 「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 一『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」（『水門』 第21号 勉誠出版 2009.04.18） p.13



漢語としての意味は、「田舎に住む人」であり、人を蔑視するニュアンスが含まれている。また、「地主」或は「悪行をするお金持ち」を指す場合もある。和訳の「いなかひと」の意味も同じである。

そして、当時「ひと」と表す漢字「人」と「兒」は混用されていることが見られる。この点について、寺村政男は論述で「名詞の後に付く接尾辞として『～子』『～兒』が付くものと、名詞の『～人』『～奴』『～漢』が付いたものがあるが、同じ意味である。」<sup>46</sup>と述べている。

#### 4) 舸

a. 四聲字苑云舸古我反漢語抄云波夜布衲高尾舟一云戰士可乘之輕舟也

<『和名類聚抄』・卷十一・船部・船類／二葉オ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「舸」と表記し、「波夜布衲」(はやふね)と読まれている。これは恐らく「早船」であろう。字面から「早い船」という意味である。記述によると「舸」は「高尾舟」であり、「戰士可乘之輕舟也」即ち、戰士が乗れる軽い舟である。

b. 脩載走投水、舸上人接取、得免。

<『世説新語』・下・仇第三十六／p.1185>

上記『世説新語』における用例は、「脩載は水中にとびこんで逃れ、船に乗っていた人に救いあげられて、難をまぬがれることが出来た。」という意味である。この場合、「舸」は「船」を意味し、その大きさや速度は特定されていない。

また、西漢楊雄が著した『方言』第九では「南楚江湘凡船大者謂之舸，小舸謂之舫」という記述が見られる。それは、「南楚江湘地域では、大きい船を『舸』と呼び、小さい舸を『舫』と呼ぶ」という意味で、「舸」は「大きい船」を指す。

そして、『太平廣記』第二百三十二、器玩四「符載」という項目においても、「客游至淮浙。遇巨商舟艦。遭蛟作梗。不克前進。擲劍一揮。血灑如雨。舟舸安流而逝。」という用例が見られる。文脈によれば、「巨商舟艦」と「舟

<sup>46</sup> 寺村政男 「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 一『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」 (『水門』 第21号 勉誠出版 2009.04.18) p.13

舸」は同じものを指し、「大きい船」という意味である

よって、「舸」の漢語としての意味は、「船」或は、「大きい船」であり、速度に関しては限定されていないが、和訳の「はやふね」の意味と若干ズレが見られるのであろう。

#### 5) 駑馬<sup>駑附</sup>

a.唐韻云駑<sup>音臺</sup>駑馬也野王曰駑<sup>音奴</sup>漢語抄云<sup>於曾岐宇萬</sup>馬之最下也郭知玄曰駑<sup>唐佐反</sup>負物馬也

<『和名類聚抄』・卷十一・牛馬部・牛馬類／八葉ウ>

上記の『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「駑」と表記し、「於曾岐宇萬」（おそきうま）と和訳されている。これは、「遅き馬」という意味である。記述によると、「駑馬」は「馬之最下也」、ランクが一番下の馬である。

b.陸子所謂駑馬有逸足之用。

<『世説新語』・中・品藻第九・2／p.629>

上記『世説新語』における用例は、「陸子はいわゆる駑馬だが、足が速いという取り柄がある。」という意味である。この場合、「駑馬」には「足が速い」という取り柄があると記述されている。

また、『太平廣記』第六、神仙六「東方朔」という項目においても、「朔曰。因事為名。名步景駒。朔曰。自馭之如駑馬蹇驢耳。」という用例が見られる。「東方朔は步景駒に乗って、まるでよくない馬や脚の良くない劣等なロバに乗ったような気分だと言った。」という意味で、「駑馬」は「蹇驢」のような、劣等な馬だということが分かる。

よって、「駑馬」の漢語としての意味は、恐らく馬のスピードだけでなく、馬形や馬の性格などの特徴から「良くない馬」と判断される。和訳の「遅き馬」の意味と若干ズレが見られると判断出来る。逸文によれば、駑馬は「負物馬」であり、物を負う馬という意味である。よって、「遅き馬」は駑馬が重たい物を負い、動きが遅くなる様子から由来したと考えられる。

#### 6) 轡

a.兼名苑云轡<sup>音秘訓久豆和都</sup>一名鞦<sup>鞦字列</sup>楊氏漢語抄云鞦<sup>鞦音二音</sup>一云馬鞦<sup>和名同上</sup>

<『和名類聚抄』・卷十五・調度部・鞍馬具／三葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「鞦

鞅」と表記し、「久豆和都良」（くつわつら）と和訳されている。「久豆和都良」（くつわつら）は、恐らく「口輪（くちわ）」と「面（つら）」を合成したことばであろう。その意味は「馬の口に取り付け、馬を制御する馬具」である。

b. 登車攬轡，有澄清天下之志。

<『世説新語』・上・德行第一／p.15>

上記『世説新語』における用例によれば、「かねて官途に乗り出して、天下を肅清しよう」と志していた。」という意味である。この場合、「登車攬轡」は「官途に乗り出す」という意味で、その元の意味は「車に登って、手綱を手に握る」であり、「轡」は「手綱」という意味である。

よって、「轡」の漢語としての意味は、「手綱」であり、「馬を制御する綱」であるが、和訳の「くつわつら」は「馬を制御為に馬の口に付けた馬具」である。故に、多少のズレが見られると判断出来る。また、『楊氏漢語抄』における表記「鞅鞅」の「鞅」は手綱を意味し、「鞅」は馬の口、及び頭につける馬具を指す。

## 7) 魚梁

a. 毛詩注云梁音良和名夜奈魚梁也唐韻云籍土角反漢語抄云夜奈須取魚箔也

<『和名類聚抄』・卷十五・調度部・漁釣具／六葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「夜奈須」（やなす）と和訳されている。これは、恐らく「梁（やな）」と「簣（す）」を合成した言葉であろう。その意味は「川の流れを塞き止めるために仕掛ける、割り竹などを粗く編んだもの」である。

b. 陶公少時、作魚梁吏。

<『世説新語』・下・賢媛第十九／p.867>

上記『世説新語』における用例は、「陶公は若いころ魚梁係の役人となった。」という意味である。この場合、「魚梁係」は「漁業を管理する役人」という意味で、「魚梁」は「漁業」を指す。

また、『太平廣記』卷二百五、水族三の「赤嶺溪」という項目に「歙州赤嶺下有大溪、俗傳昔有人造橫溪魚梁、魚不得下、半夜飛從此嶺過、其人遂於嶺上張網以捕之。」という用例が見られる。それは、「歙州赤嶺の下には

大きな溪谷があります。昔、誰か溪を渡る魚梁を作って、魚が通り抜けず夜中この嶺上を通りぬくしかないから、その人が嶺の上で網を張って魚を捕っていたという昔話があった。」という意味であり、「魚梁」は「川や溪など、水を途切らせ、魚を捕る仕掛け」を指す。

よって、「魚梁」の漢語としての意味は、「川や溪など、水を途切らせ、魚を捕る仕掛け」であり、『漢語抄』における和訳の「やなす」の意味と一致する。

また、漢語として、「魚梁」は『世説新語』における用例で示されたように範囲大きく「漁業」という意味でも使用されている。一方、「籊」という表記は、漢語として「やなす」という意味で捉える用例が管見の限り見つからないため、その点についてはまだ検討する余地が見られる。

#### 8) 甗甗帶附

a. 蔣鮎切韻云甗音與勝同和名古之岐和良辨色炊飯器也本草云甗帶立成云炊單和名同上

<『和名類聚抄』・卷十六・器皿部・木器類／五葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『辨色立成』において「炊單」と表記し、「古之岐和良」（こしきわら）と和訳されている。これは恐らく「甗（こしき）」と「藁（わら）」を合成したことばであろう。その意味は「甗につける藁製の縄」である。

b. 鄧曰。有愧於叔達。不能不恨於破甗。

<『世説新語』・下・黜免二十八／p.1098>

上記『世説新語』における用例によれば、「鄧はいった、叔達に対してはずかしく思います。壊れた甗に未練をのこだずにいられません。」という意味である。この場合、「甗」は「米などを蒸すための器」という意味である。

また、『太平廣記』第六十四、女仙九の「楊正見」という項目においても、「女冠見而識之。乃茯苓也。命潔甗以蒸之。」という用例が見られる。「甗を洗って茯苓を蒸すように命じた」という意味で、「甗」は「蒸すための器」ということが明らかである。

一方、「炊單」の用例は見当たらない。しかし、「炊單布」は、清代康熙三十四年（1695）年、医家である張璐が著した『本經逢原』卷三「藏器部」において以下のように説明されている。「炊單布受甗熱氣最多，故用以治湯

火熏蒸，面目浮腫。燒末敷之即消，以類相感也。」要するに、「炊單布は甑から一番熱気を受けているから、それを持って顔の浮腫とかを治療するにはとってもいい」という意味である。

よって、「甑」の漢語としての意味は、「米などを蒸すための器」であり、「甑帶」はそれを固定する縄を指す。『辨色立成』における「炊單」という表記に関してはまだ用例を見出す必要があるが、和訳の「こしきわら」の意味は、「甑帶」の意味と一致する。

## 9) 埴

a. 楊氏漢語抄云埴古甘反和名都保今按木謂之壺瓦謂之埴壺也垂拱留司格云瓷埴二十口一斗一下五升以上故知埴者壺也

<『和名類聚抄』・卷十六・器皿部・瓦器類／六葉オ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「埴」と表記し、「都保」（つほ）と和訳されている。この意味は「容器」である。又、『和名類聚抄』においては瓦器類に分類されているため、瓦製の容器に限定されているのであろう。

b. 嘗以埴鮓餉母、母封鮓付使、反書責侃曰...

<『世説新語』・下・賢媛第十九／p.867>

上記『世説新語』における用例は、「ある時一壺の鮓を母に贈ったところ、母はその鮓に封して使いの者に持たせて返し、返書して侃を責めた。」という意味である。この場合、「埴」は「鮓を入れて保存出来る容器」で、「胴がふくらみ、口が狭くなった形の容器」である。

よって、「埴」の漢語としての意味は、「ものを入れられる容器」であり、和訳の「つぼ」という意味と一致する。

## 10) 罐

a. 唐韻云罐音貴楊氏漢語抄云都流閉汲水器也

<『和名類聚抄』・卷十六・器皿部・瓦器類／六葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「罐」と表記し、「都流閉」（つるべ）と和訳されている言葉は、『和名類聚抄』において、見出し語「罐」という項目に入っている。『楊氏漢語抄』における和訳、「都流閉」（つるべ）は「吊る（つる）」と「瓶（べ）」で、「井戸に

吊って水を汲み上げる瓶」を意味する。

b.太后索水救之、帝預敕左右毀餅罐、太后徒跣趨井、無以汲。

<『世説新語』・下・尤悔第三十三／p.1138>

上記『世説新語』における用例によれば、「太后は水を求めて彼を救おうとしたが、帝はあらかじめ左右に命じてつるべを壊しておいたから、太后は裸足で井戸まで駆けつけて行ったが、つるべが無いため水を汲むことはできなかった。」<sup>47</sup>という意味である。この場合、「罐」は「井戸水をくみ上げる容器」である。

また、『太平廣記』第四百六十二、禽鳥三「南人捕鴈」という項目においても、「南人有採捕者。俟其天色陰暗。或無月時。於瓦罐中藏燭。持棒者數人。屏氣潛行。」という用例が見られる。「月が見えない時には、瓦罐の中に蠟燭を隠した。」という意味で、「罐」は「蠟燭が入れられる中空な容器」ということが明らかである。

よって、「罐」の漢語としての意味は、「井戸水をくみ上げることが出来る容器」であり、用途は別に決められてはいないが、和訳の「つるべ」の意味と一致する。

## 11) 醪

a.玉篇云醪カ刀反漢語抄  
云濁醪毛呂美汁滓酒也

<『和名類聚抄』・卷十六・飲食部・酒醴類／八葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「濁醪」と表記し、「毛呂美」(もろみ)と和訳されている言葉は、『和名類聚抄』において、見出し語同じく「醪」という項目に入っている。『楊氏漢語抄』における和訳「毛呂美」(もろみ)は「もろもろな味(み)を混ぜた物」で、「酒や醤油などを製造するために水に麦芽などを混合したもの」を指す。

b.豈忘烝嘗於糗糧。絕觴爵於醪醴哉。

<『世説新語』・上・文學第四／p.273>

上記『世説新語』における用例は、「どうしてりっぱなごちそうの味を粗末なほしいにかえて忘れ。上等な酒の味をどぶ酒にかえて忘れてよかろう

<sup>47</sup> この訳は大系本を参考に、筆者が訳したものである。

か。」という意味である。この場合、「醪醴」は「觴爵」の対義語で、「よくない酒、どぶ酒」を意味する。

また、『太平廣記』第一百四十五、徵應十一「劉知俊」という項目においても、「源聞酒能忘憂。請奠以醇醪。或可消釋耳。」という用例が見られる。「私は『人はお酒で鬱陶しいことを忘れられる』と聞いたことがあるから、良いお酒で供えて祭れば、消えていくかも知れない。」という意味で、「醇醪」は「いい酒」であり、「芳醇なお酒の元」である。

一方、『楊氏漢語抄』における「濁醪」という表記は、清代彭定求等が康熙帝の勅命を受けて編纂した『全唐詩』卷二百一十三に収録されている、唐代詩人高適が書いた、「同河南李少尹畢員外宅夜飲時洛陽告捷遂作春酒歌」という詩に用例が見られる。それは、「故人美酒勝濁醪、故人清詞合風騷。長歌滿酌惟吾曹、高談正可揮塵毛。半醉忽然持蟹螯、洛陽告捷傾前後。」であり、「濁醪より美酒」という記述から、「濁醪」は「美酒」の反対語であり、「よくない酒、どぶ酒」であり、「濁っているお酒の元」と判断できる。

「醪」は所謂酒の前段階で、お酒を造るために混合した原料である爲、発行した澄んでいないお酒を指している。一方、「醇醪」を持って「いい酒」を表し、「濁醪」を持って「どぶ酒」を指すことが出来る。

よって、「醪」という言葉自体は酒の良悪を限定していない。よって、「醪」または『楊氏漢語抄』による「濁醪」の漢語としての意味は、和訳の「もろみ」の意味と一致する。

## 12) 鵠

a. 野王按鵠胡篤反漢語抄云古布日本紀私記云久久比大鳥也

<『和名類聚抄』・卷十八・羽族部・羽族名／九葉オ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「鵠」と表記し、「古布」（こふ）と和訳されている言葉は、『和名類聚抄』において、見出し語同じく「鵠」という項目に入っている。

b. 陸士龍、鴻鵠之裴回，懸鼓之待槌。

<『世説新語』・中・賞譽第八／p.537>

上記『世説新語』における用例は、「陸士龍は大空を徘徊する鴻鵠、ばち

を待つ懸け太鼓です。」という意味である。この場合、「鵠」は「大きい鳥」である。

また、『太平廣記』第四百六十、禽鳥一「鵠」という項目においても、「鵠生百年而紅。五百年而黃。又五百年而蒼。又五百年為白。壽三千歲矣。」という用例が見られる。「鵠は百年生きれば赤くなり、五百年生きれば黄色くなる。また五百年経てば青く也、また五百年経てば白くなる。寿命が三千歳あります。」という意味である。

一方、『楊氏漢語抄』における「こふ」という和訳は、恐らく「こう」であり、漢語音である可能性が見られる。

### 13) 麋

a. 四聲字苑云麋音眉漢語抄云於保之加似鹿而大毛不斑以冬至解角者也

<『和名類聚抄』・卷十八・毛群部・毛群名／十五葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「麋」と表記し、「於保之加」（おほしか）と和訳されている言葉は、『和名類聚抄』において、見出し語同じく「麋」という項目に入っている。『漢語抄』における「麋」という表記は、『和名類聚抄』における記述によれば、鹿に似ているが、大きくて毛に斑点がなく、冬至の次候になると角が抜ける動物である。また、『漢語抄』では「於保之加」（おほしか）と和訳され、「大きい鹿」という意味であろう。

b. 荀答曰、本謂雲龍駢駢、定是山鹿野麋。

<『世説新語』・下・排調第二十五／p.992>

上記『世説新語』における用例は、「荀が答えて言った。「これまで雲間の龍は強くさかんなものと思っていたのに、きっと山野の麋鹿であった。」という意味である。この場合、「麋」は「大きい鹿」を意味する。

また、『太平廣記』第二百五十三、嘲諷一「陸士龍」という項目においても、「荀曰。本謂雲龍駢駢。乃是山鹿野麋。獸微而弩彊。是以發遲。張撫掌大笑而已。」という用例が見られる。「山鹿野麋」は「山に生息している鹿と野生の麋」という意味で、普通の鹿と区別されている。よって、「麋」の漢語としての意味は、和訳の「おほしか」の意味と一致する。

### 14) 龜



a.大戴禮云甲虫三百六十四神龜居追反和名加米為之長也兼名苑云龜一名鼈音敷漢語抄云字美加米

<『和名類聚抄』・卷十九・鱗介部・龜貝類／九葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「鼈」と表記し、「字美加米」（うみかめ）と和訳されている。漢字に改めると「海亀」である。

b.三秦記曰。龍門。一名河津。去長安九百里。水懸絕。龜魚之屬莫能上。上則化為龍矣。

<『世説新語』・上・德行第一／p.20>

上記『世説新語』における用例は、『三秦記』にいう。『龍門、一名河津。長安から九百里の所にある。水は滝をなして流れ落ち。亀魚の類もここを遡ることはできない。もし遡ることができれば。化して龍となる。』』という意味である。この場合、「龜」は「水に住む生物で、龍門を越えると龍になる」という言い伝えがある。

また、『太平廣記』第一百三十一、報應三十殺生「益州人」という項目においても、「忽見一龜。大如車輪。四足各躡一小龜而行。又有百餘黃龜從其後。三人叩頭。請示出路。龜乃伸頸。若有意焉。因共隨逐。即得出路。」という用例が見られる。

よって、「龜」の漢語としての意味は和訳の「かめ」と一致する。

一方、『漢語抄』における表記の「鼈」は「説文解字」によると、「海中大鱉也。」海に生息する大きいすっぽんであり、伝説の大きい海亀である。よって、「鼈」の漢語としての意味は和訳の「うみがめ」と一致する。

## 15) 薄

a.爾雅云草聚生曰薄新撰萬葉集和歌云花薄波奈須須木今案即厚薄之薄字也見玉篇辨色立成云苧和名上同今案苧音千草盛也見唐韻

<『和名類聚抄』・卷廿・草木部・草類／二葉ウ>

上記の『和名類聚抄』における記述によると、『辨色立成』において「苧」と表記し、「波奈須須木」（はなすすき）と和訳されている。これは、「穂の出たすすき」という意味である。

b.郭象者、為人薄行、有俊才。

<『世説新語』・上・文學／p.253>

上記『世説新語』における用例は、「郭象という者はその性格が軽薄ではあったが、またすぐれた才能を持ち合わせていた。」という意味である。この場合、「薄」は「少ない」という意味である。

よって、「薄」の『世説新語』における意味は、和訳の「はなすすき」の意味と一致せず、まだ検討する余地がある。

#### 4.まとめ

前述した分析より、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義と『世説新語』における用例の比較から、以下『和名類聚抄』所収中古漢語の特徴が明らかである。

①和訳が中古漢語としての語義と一致する語彙は、例 3) 田舎人、例 7) 魚梁、例 8) 甌、例 9) 坩、例 10) 罐、例 11) 醪、例 13) 麩と例 14) 龜、計 8 例が見られる。

②和訳が中古漢語語彙と語義上のズレが見られる語彙は、例 1) 暴雨、例 4) 舸、例 5) 駑馬と例 6) 轡、計 4 例が見られる。

③その他、例 2) 培塿と例 15) 薄のような、和訳の語義が不明であるため、まだ検討する余地がある語彙が、計 2 例が見られる。

④最後に、例 12) 鵠のような、和訳はおそらく漢字の音読みである言葉も一例見られる。

以上のことより、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義と『世説新語』における用例の比較から、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の多くは中古漢語としての語意と一致すると考えられる。

しかし日本においては全く同じ語義の物が存在しない、もしくはすでに似ている大和言葉が存在する故、多少意味上のズレが生じる場合も見られる。又、『和名類聚抄』における和訳は多く大和言葉として見なされてきたが、例 12) 鵠のような漢字音だと考えられる例も間々見られる。

また、今後の課題としては、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義を『世説新語』だけでなく、他の中古漢語文献と照らし合わせて検討する必要があると考える。

### 第三節 『和名類聚抄』と『太平廣記』の比較を中心に

#### 1. 『太平廣記』について

『太平廣記』は北宋の時代に、漢から五代までの小説や野史、伝記などを収録し編纂した叢書である。全 500 巻、目録 10 巻。巻首には引用書目があり、計 343 種の書籍を列挙している。しかし、その他にも引用書籍があり、総計 475 種の書籍を引用したとも言われている。

『中国文化史大事典』によると、『太平廣記』は、「977（太平興国 2）年 3 月、太宗の勅命によって編纂が開始された。李昉の他に、呂文仲・吳淑・陳鄂・趙隣幾・董淳・王克貞・張洎・宋白・徐鉉・湯悦・李穆・扈蒙の 12 人が編纂に携っている。早くも翌年 978 年 8 月には完成し、981（太平興国 6）年に刊刻されたが、流伝は少なく、今宋代の完本を見ることはできない。明代に至り、1566（嘉靖 45）年に談愷が抄本に拠って重刻すると、はじめて広く流通するようになった。」<sup>48</sup>という。『太平廣記』における上代の書物からの引用が多いゆえ、その意味も価値も高い。内容は神怪から名賢、貢挙、豪俠、儒行、書画、医学など全 92 類であり、『太平御覧』、『文苑英華』、『冊府元龜』とあわせて四大叢書と称せられる。

『太平廣記』の諸本に関する研究は、富永一登による「『太平広記』の諸本について」<sup>49</sup>がある。富永一登によると、現行の『太平廣記』は以下の 8 種類の版本が存在している。①談愷本②許自昌本（許刻本）③明鈔本④明嘉靖常州府刻本⑤明隆慶活字本⑥黃氏巾箱本⑦掃葉山房石印本⑧点校本。その中でも、談愷本が一番広く流布され、使用されている。

本稿で主として使用しているのは、談愷本を底本とし、他の諸本を用いて校勘した、中華書局が 1961 年に出版した新版点校本と同様の古新書局が刊行した『太平廣記』<sup>50</sup>である。全 1 冊、500 巻である。

本節では、まず、所謂中古漢語語彙を日本人が吸収していく過程で、漢語語彙が持つすべての語義を取り入れて行ったわけではない事、そしてそ

<sup>48</sup> 尾崎雄二郎、笠沙雅章、戸川芳郎等編集 『中国文化史大事典』（大修館書店 2013.05.10）

<sup>49</sup> 富永一登 「『太平広記』の諸本について」（『広島大学文学部紀要』第 59 号 広島大学文学部 1999.12）

<sup>50</sup> 李昉等編 『太平廣記』（古新書局 1976.01）

れ故に語義の面で両者の間には、語義に少し差異が認められるであろうと言う事を前提条件とする。中古漢語語彙の宝庫とも言える『太平廣記』における用例を収集し、『和名類聚抄』に現れる漢和辞書から引用した語彙と中古漢語語彙の語義の相違点を検討する。

それによって、平安期『和名類聚抄』に見られる日本語への伝入した中古漢語語彙、特に『太平廣記』に用例が見られる語彙の性格を明らかにすることが出来る。

## 2. 先行研究

『太平廣記』と『和名類聚抄』との関連性を検討した論述は、管見の限り極めて少ない。

寺村政男は「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 —『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」<sup>51</sup>において、和名類聚抄所収『楊氏漢語抄』、『弁色立成』、『漢語抄』に表れる白話語彙の分析に、『太平廣記』における用例を用いた。

また、『太平廣記』が近世日本における流布や受容事情に関する先行研究としては、周以量による「近世日本における中国小説の流布と受容：「太平広記」と「夷堅志」を中心に」<sup>52</sup>という論文が見られる。周以量は論述で日本に現存する『太平広記』諸本を検討し、鎌倉時代に成立された『医家千字文注』における引用状況を考察することにより、日本における『太平広記』の流布と受容実態を検討した。

一方、本節は『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義と『太平廣記』に見られる用例の語義と比較し、中古漢語と『和名類聚抄』採録語彙との意味的一致とずれを考究することを目的とする。

## 3. 『和名類聚抄』における漢語語彙と『太平廣記』

『太平廣記』における『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙の用例が見られるのは、総計 154 語ある。本節で検討

<sup>51</sup> 寺村政男 「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 —『楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」 (『水門』 第 21 号 勉誠出版 2009.04.18)

<sup>52</sup> 周以量 「近世日本における中国小説の流布と受容：「太平広記」と「夷堅志」を中心に」 博士論文 (東京都立大学 2001.03.25)

する、『太平廣記』に見られる『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙、全 154 語の中から典型例を 15 語挙げて分析を施す。

下記『和名類聚抄』における逸文は寺村政男が所蔵する二十卷本系元和三年序刊本『和名類聚抄』より採取し、『太平廣記』に於ける原文は 1961 年に中華書局より出版した新版点校本と同様の古新書局が刊行した『太平廣記』より採取する。現代語訳は全て筆者訳で、a.で『和名類聚抄』における逸文を提示し、b.で『太平廣記』における用例を提示して分析を施す。

#### 1) 市郭兒

a. 辨色立成云市郭兒<sup>和名伊知比止</sup>一云市人

<『和名類聚抄』・卷二・人倫部・工商類／八葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『辨色立成』において「市郭兒」と表記され、「伊知比止」（いちひと）と和訳されている。「市」は交易をする所を指し、「市郭兒」は語構成から見て「市郭」は市を開くための囲われた領域であり、「兒」は語尾詞とも取れるし、或いはそこで活動する人間と考えても良い。「市で交易をする人」を指している。

b. 與公羅師。羅師者、市郭兒語、無交渉也。

<『太平廣記』・卷二百五十九・嗤鄙二・袁守一／p.537>

上記『太平廣記』における用例は、「あなたとは『羅師』。『羅師』というのは、市で商売をやっている人の言葉で、関わりがないということだ。」という意味である。この場合、「市郭兒」は「市で商売をする人」という意味としても捉えられるし、「兒」を接尾辞と見做し、「市郭兒語」を「商売言葉」としても捉えられる。

また、初唐の王梵志による白話詩「興生市郭兒」では、「興生市郭兒、從頭市内坐。例有百餘千、火下三五箇。行行皆有鋪、鋪裏有雜貨。」という用例が見られる。「生業に励む市人は、ずっと市場に座りっぱなし。例に元手は百余貫、同業の三、五人それぞれの生業に、店の中には百貨有り。」という意味で、「市郭兒」という語彙は当時の口頭語であると考えられる。しかし、平安期に流入していた「市郭兒」も、その後の日本側の文献に視られない所から、言葉が定着しなかったと考えて良い。

よって、「市郭兒」の漢語としての意味は、「市で商売をする人」であり、和訳の「いちひと」の意味と一致する。

## 2) 白水郎

a. 辨色立成云白水郎和名阿萬今按云日本紀云用漁人二字一云用海人二字

＜『和名類聚抄』・卷二・人倫部・漁獵類／九葉オ＞

上記『和名類聚抄』における記述によると、『辨色立成』において「白水郎」と表記され、「阿萬」（あま）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語同じく「白水郎」という項目に入っている。

『辨色立成』では、「阿萬」（あま）と和訓がつけられている。「あま」は「海人」とも書かれ、海で魚や貝をとり、塩を作ることを仕事とする人、若しくは海にもぐって貝や海藻を採る女性を指している。日本においては、かつて海士と海女がいて、後、生理的な理由から、しだいに海女の活躍が著しくなったとも言われている。よって、現代日本語においては、「あま」を一般的に「海女」と表記するようになったと考えられる。

b. 尋聞家仇庾毗羅、自鄧縣白水郎、棄官解印、欲承命請行、陰懷不道。因使得入龍宮、假以求貨、覆吾宗嗣、頼杰公敏鑒、知渠挾私請行、欲肆無辜之害、慮其反貽伊戚、辱君之命。

＜『太平廣記』・卷四百九十二・雜傳記九・靈應傳／p.1042＞

上記『太平廣記』における用例によれば、「白水郎」は龍宮にまで潜って行けるから、「水に潜ることが上手な人」という意味である。

よって、「あま」という和訳は、「潜ることが上手い人」や「漁師」を指し、和訳の「あま」の意味と一致する。「郎」を使用している所から、漢語では生業の性別が主として男性であったのであろう。

## 3) 屠兒

a. 楊氏漢語鈔云屠居徒訓保布屠兒和名惠止利屠牛馬肉取鷹雞餌之義也殺生及屠牛馬肉取賣者也

＜『和名類聚抄』・卷二・人倫部・漁獵類／九葉ウ＞

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語鈔』において「屠」、「屠兒」と表記され、「惠止利」（えとり）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語同じく「屠兒」という項目に入っている。和

訳の「えとり」は「餌取」であり、鷹や猟犬などの餌にするために牛馬などを屠殺する人、または牛馬の皮革や肉を売ること業とした人を指す。また、訓は「保布流」であり、「屠る」の意味である。

b.唐顯慶三年。徐玉為晉州刺史。有屠兒在市東巷。殺一猪命斷。湯燻皮毛並落。死經半日。

<『太平廣記』・卷四百三十九・畜獸六・晉州屠兒／p.927>

上記『太平廣記』における用例は、「市の東にある巷ではある肉屋さんがいた。一匹の豚を殺した。」という意味である。この場合、「屠兒」は「肉屋さん、食肉処理業者」という意味である。

よって、「屠兒」の漢語としての意味は、和訳の「えとり」の意味と一致する。

#### 4) 遊女<sup>夜發附</sup>

a.楊氏漢語鈔云遊行女兒<sup>和名宇加禮女又云阿曾比</sup>一云晝遊行謂之遊女待夜而發其淫奔者謂之夜發<sup>今按夜發俗云夜保知本文未詳</sup>

<『和名類聚抄』・卷二・人倫部・乞盜類／十葉ウ>

上記の『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語鈔』において「遊行女兒」と表記され、「宇加禮女」（うかれめ）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語「遊女」という項目に入っている。和訳の「うかれめ」は「浮かれ女」であり、「歌舞で人を楽しませたり、売春をしたりする女」という意味である。「浮かれ」は遊女の定所なく漂泊する状態を指している。「遊女」の「遊」も同じ意味である。

b.又云。夜行遊女。一曰天帝女。一名釣星。夜飛晝隱。如鬼神。衣毛為飛鳥。脫毛為婦人。無子。喜取人子。

<『太平廣記』・第四百六十二・禽鳥三・夜行游女／p.982>

上記『太平廣記』における用例は、「夜行游女は天帝女や釣星とも呼ばれ、夜に飛び出し日中は隠れ、鬼神のようである。毛を身につけると鳥となり、毛を脱ぐと婦人となる。子供はいなくて他人の子供を奪うのに好む。」という意味である。この場合、「游女」は伝説の妖怪である。

また、清代成立した『全唐詩』巻二十に収録されている孟郊の「相和歌辭：雜怨三首」という詩に「天桃花清晨、遊女紅粉新。天桃花薄暮、遊女

紅粉故。」という用例が見られる。「鮮やかな桃の花の早い朝は、遊女の新しい化粧に等しく。鮮やかな桃の花の夕暮れは、遊女の色褪せた化粧に等しい。」という意味で、「遊女」は「遊里で客を喜ばせる女」を指す。

よって、「遊女」の漢語としての「遊里で客を喜ばせる女」意味は、和訳の「うかれめ」の意味と一致する。

## 5) 乞兒

- a. 列子云齊有貧者常乞於城市乞兒曰天下之辱莫過於是楊氏漢語鈔云乞索兒保加比々止今按乞索兒即乞兒是也和

名加  
多井

<『和名類聚抄』・卷二・人倫部・乞盜類／十葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語鈔』において「乞索兒」と表記され、「保加比々止」（ほかひひと）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語「乞兒」という項目に入っている。和訳の「ほかひひと」は「祝ひ人」であり、「人の門前に立ち、祝いの言葉を唱えて物を乞う人」という意味である。

b. 大曆中。東都天津橋有乞兒。無兩手。以右足夾筆。寫經乞錢。欲書時。先用擲筆高尺餘。以足接之。未嘗失落。書跡官楷書不如也。

<『太平廣記』・卷四百三十九・書四・東都乞兒／p.927>

『太平廣記』における用例は、「大歴年間、東都の天津橋という所に一人の乞兒がいる。」という意味である。この場合、「乞兒」は路上などで物乞いをする人を指す。

また、「乞索兒」という言葉は五代十国時代に王定保による『唐摭言』巻九、「好知己惡及第」という物語においては、「未幾、沆以普恩還京、命隱偕行。隱稟性越趨、沆之門吏家仆靡不惡之、往往呼為『乞索兒』、沆待之如一。」という用例が見られる。「鄭隱は性格が弱々しくて優柔不断だから、沆の家の下僕は皆彼のことを嫌悪し、いつも「乞索兒」と呼んでいた。」という意味で、「乞索兒」は見下すニュアンスを含み、「他人に物を乞うことで生きる人」を指す。

よって、「乞兒」または「乞索兒」の漢語としての「他人に物を乞うことで生きる人」意味は、和訳の「人の門前に立ち、祝いの言葉を唱えて物を乞う人」の意味と多少ズレが生じる。しかし、『太平廣記』における用例か



ら見れば、「乞兒」は特技を持つのが多い。よって、祝いの言葉を唱えることができるとも考えられる。

## 6) 棧<sup>盧葦附</sup>

a. 楊氏漢語抄云棧<sup>瓦乃衣都利初限反</sup>日本紀私記云蘆葦<sup>和名同上今案唐韻葦胡官反葦也然則以蘆葦為棧非也</sup>

＜『和名類聚抄』・卷十・局處部・居宅具／八葉オ＞

上記『和名類聚抄』における記述によると、『辨色立成』において「棧」と表記され、「瓦乃衣都利」（瓦のえつり）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語同じく「棧」という項目に入っている。

「棧」は『説文』によれば「棚」、『廣韻』によれば「閣」となるが、後世「棧道」などの熟語に見られる「板などを架けて作った道」を指すように変化していった。和訳の「がのえつり」の「えつり」は「かや葦（ぶ）き・わら葦き屋根や土蔵の壁の下地材。ヨシや細い竹・板を縄で簀（す）のように編んだもの。」という意味である。

b. 試詣卜肆筮之、得乾卦九五、道流曰、此龍馬也、宜善寶之。泊登蜀道危棧、棲巖與馬。俱墜岸下。積葉承之、幸無所損。

＜『太平廣記』・卷四十七・神仙四十七・許棲巖／p.106＞

上記『太平廣記』における用例は、「棧」は「険しい崖（がけ）などを通行するために、板などをかけ渡して作った道。」という意味である。

よって、「棧」の『太平廣記』における用例の意味は、『楊氏漢語抄』における「瓦のえつり」の意味と多少ズレがあると考えられる。

## 7) 舶

a. 唐韻云舶<sup>傍陌反楊氏漢語抄云都具能布祢</sup>海中大船也

＜『和名類聚抄』・卷十一・船部・船類／一葉ウ＞

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「舶」と表記され、「都具能布祢」（つくのふね）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語同じく「舶」という項目に入っている。「つくのふね」は、恐らく「着くの船」を指し、港に停泊している船を意味するのであろう。

b. 近世有波斯。常云、乘舶泛海、往天竺國者已六七度。其最後、舶漂入大海、不知幾千里、至一海島。

<『太平廣記』・卷四百六十四・水族一・南海大蟹／p.987>

上記『太平廣記』における用例は、「近世に波斯という国があり、よく船に乗って海を渡る。天竺国にはもうすでに六、七回行っている。」という意味である。「舶」は「船」という意味である。

また、漢語では唐代に置かれた「市舶司」、「海上交易をつかさどる役所」からわかるように、「舶」は大型の交易船を指す。すなわち、『和名類聚抄』の逸文と同じく、「海にある大きい船」を指している。

## 8) 食單

### a. 唐式日鐵鍋食單各一 漢語抄云食單須古毛

<『和名類聚抄』・卷十四・調度部・廚膳具／七葉ウ>

上記『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「食單」と表記し、「須古毛」（すごも）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語同じく「食單」という項目に入っている。

「食單」は『和名類聚抄』における記述によれば、廚膳具に属す。その和訳「須古毛」（すごも）は「食薦」と書かれ、神膳や食卓の下に敷いた下敷きである。そのもとは、「す」即ち「竹を編んだ、簀子」で出来た「こもむしろ」のような物である。多くは裏に白い生絹を張るといふ。

### b. 范尼指坐上紫絲布食單曰。顔郎衫色如此。

<『太平廣記』・第二百二十四・相四・范氏尼／p.463>

一方、上記『太平廣記』における用例によれば、「范尼は卓上の紫色の生糸と麻で編んだ食單を指して、『顔郎の洋服に色はこれと同じだ』と言った。」という意味である。この場合、「食單」は食事する時に卓上敷く物を指し、その素材は生糸と麻で編んだ布であることが明らかである。

また、宋代鄭望之による『膳夫録』においては、「韋僕射巨源有燒尾宴食單。」という記述が見られる。この場合、「僕射という官職を持つ韋巨源のところには燒尾宴のメニューがある。」よって、「筥」は「メニュー、献立表」という意味である。

よって、「食單」の『太平廣記』における用例の意味は、『漢語抄』における「すごも」の意味と一致する。また、漢語として「食單」は他にも「メニュー」という意味を持っている。

## 9) 捻頭

### a. 楊氏漢語抄云捻頭無木加太捻音奴 協反一云麥子

＜『和名類聚抄』・卷十六・飲食部・飯餅類／十二葉オ＞

上記『和名類聚抄』における記述によると、『楊氏漢語抄』において「捻頭」と表記し、「無木加太」（むぎかた）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語同じく「捻頭」という項目に入っている。和訳の「無木加太」（むぎかた）は「麦形」とも書かれ、「小麦粉を練って、頭をねじった形に作ったお菓子」である。

b. 其地成井，深不可測。以絲篋縋石以測之。數十丈乃及底。黏一新捻頭而上。與人間常食者。無少異也。

＜『太平廣記』・第三百九十九・水・金華令／p.835＞

一方、上記『太平廣記』における用例によれば、「その場所は大雨のせい  
で井戸のようになってしまい、その深さは目分量で測ることさえできな  
かった。石に糸を結んで図ってみたら、数十丈で底につき、一個の新しい捻  
頭がくっついてきた。その形は皆普段食べている物と変わらない。」という  
意味である。この場合、「捻頭」は当時一般的に食べている物だと言うこと  
が明らかである。

また、作り方について清代李時珍による『本草綱目』「寒具」の項目では、  
「林洪『清供』云、寒具、捻頭也。以糯粉和面、麻油煎成、以糖  
食之。可留月余、宜禁煙用。觀此、則寒具即今餛子也。以糯粉和面，入少  
鹽，牽索紐捻成環釧之形，油煎食之。」という記述が見られる。要するに、  
「捻頭」は寒食節に食べるお菓子であり、もち米で作ったものである。頭  
を捻った形で、ごま油で焼いて食べる物である。

よって、「捻頭」の『太平廣記』における用例の意味は、『楊氏漢語抄』  
における「むぎかた」の意味と若干ズレが生じる。「捻頭」は一般的に食べ  
られている物であるという性質は同じだが、食材や作り方は一致しないと  
ころが見られる。

## 10) 臍

### a. 唐韻云臍章倫反與奉同漢 語抄云無無木鳥藏也

＜『和名類聚抄』・卷十八・羽族部・羽族體／十二葉ウ＞

上記の『和名類聚抄』における記述によると、『漢語抄』において「無無木」（むむき）と和訳されている言葉は『和名類聚抄』において、見出し語「肫」という項目に入っている。

b.元理曰。俎上蒸肫一頭。廚中荔枝一盤。皆可以為設。廣漢再拜謝罪。入取。盡日為歡。

＜『太平廣記』・第二百一十五・算術・曹元理／p.444＞

『太平廣記』における用例の文脈によれば、「まな板には蒸した肫が一頭あって、棚にはライチ一皿ある。」という意味である。この場合、「肫」は「祭祀の儀式で供養する家畜」である。また、南宋時代朱熹による『四書章句集注』に収録されている「中庸章句」では、「肫肫其仁！淵淵其淵！浩浩其天！」という用例が見られる。この場合、「肫」は「心がこもった様子」である。

よって、「肫」は漢語としては、「全部」という意味や「鳥の内臓」、「頬」等の意味が含まれているため、『漢語抄』における「むむき」の意味は、「肫」の漢語としての意味と一部合致する。

#### 4.まとめ

前述した分析より、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義と『太平廣記』における用例の比較から、以下『和名類聚抄』所収中古漢語の特徴を明らかにする事が出来た。

①和訳が漢語としての語義と一致する語彙は、例 1) 市郭兒、例 2) 白水郎、例 3) 屠兒、例 4) 遊女、例 7) 舶、例 8) 食單と例 10) 肫、計 7 例が見られる。

②和訳が漢語としての語義と多少ズレが見られる語彙は、例 5) 乞兒、例 6) 棧と例 9) 捻頭、計 3 例が見られる。

よって、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義と『太平廣記』における用例の比較から、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙は多く、中古漢語としての語意をそのまま日本に流入すると同時に、言語の接触と言う現象から、語義に多少ズレが生じる語例も間々見られる。それは、漢語語彙が熟語化される場合、文脈によって語義やニュアンスが影響

を受け多少異なる語義に変容した為であろう。

また、『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』は口頭語を収容した漢和辞書であるため、収録語彙の多くは以前に日本語に流入された経典や仏典等の漢籍において用例が見られず、注疏等に解説がされていない語彙が多い。例えば当時の口頭語での特徴的な言い換え（「人」と「兒」、「郎」）などが見られる。

また、本稿で挙げた 10 例の中、多くは和訓と中古漢語語意と一致することから、室町平安期の漢学者が中国正統漢籍である古典書籍から得られた知識を用いて、中古漢語語彙を読み解く能力はとても高かった、ということを一明らかにする事が出来た。

しかし、本稿においては、『太平廣記』における『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙の用例が見られる 137 例の語彙から、僅か 10 例をサンプルとして分析を施したのみである。今後の課題としては、まず『太平廣記』における『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』の漢語語彙の用例が見られる 137 例の語彙を分類し、個々に分析を施す必要があると考えられる。また、『和名類聚抄』所引『漢語抄』、『楊氏漢語抄』、『辨色立成』における漢語語彙の和訓や音義を『太平廣記』だけでなく、他の中古漢語文献と照らし合わせて検討する必要があると考える。

## 第二章 日本漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入

本章の研究対象とする日本漢文小説は、日本人が中国口頭語で書いた小説であり、具体的には日本人が中国文学を参考に、日本人独自の意識を持ちながら日本社会に基づく物語を漢文で書いた作品を指す。『日本漢文小説叢刊』第一輯における、王三慶による序文では、日本漢文小説は、輸入された中国本土の文化にも、中国学にも、日本の国学の領域にも属さない極めて特殊な部類であると述べられている<sup>53</sup>。

日本漢文小説に関する研究は、さほど研究者の興味を引かなかったのだが、近年次第に多くの研究者が現れている。長澤規矩也、麻生磯次、石崎又造、徳田武、大庭修、寺村政男、中野三敏、奥村佳代子、王佳璐、于増輝などが挙げられ、日本漢文小説や唐話学の様々な角度から近世日本における漢文学に関して論考されてきた。

著作としては、主に麻生磯次による『江戸文学と支那文学：近世文学の支那的原據と読本の研究』<sup>54</sup>と石崎又造による『近世日本における支那俗語文学史』<sup>55</sup>、徳田武による『日本近世小説と中国小説』<sup>56</sup>などがあげられる。

石崎又造は『近世日本における支那俗語文学史』において、日本漢文学の「三大隆昌期」について「遣隋唐使時代を背景とする近江奈良朝から延暦・弘仁を経て宇多天皇の寛平に至る二百数年間を第一期とすれば、京鎌倉五山の禅僧等の入宋元明時代は第二期で、長崎の貿易港を通じて交通した鎖国時代徳川三百年間は第三期である。<sup>57</sup>」と述べている。第一期は中国大陸文化を吸収し、謳歌していた時代であり、第二期は禅僧による五山文学を中心とした時代であり、第三期になって幕府の政策のもと、長崎を通して第一期や第二期に注目されていた詩賦や経典の他、小説戯曲も多く

<sup>53</sup> 王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也主編 『日本漢文小説叢刊』 第一輯「筆記叢談類一」 (台湾学生書局 2003) p.28

<sup>54</sup> 麻生磯次 『江戸文学と支那文学：近世文学の支那的原據と読本の研究』 (三省堂 1946.5)

<sup>55</sup> 石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』 (光明社 1967.09.15)

<sup>56</sup> 徳田武 『日本近世小説と中国小説』 (青裳堂書店 1987.5)

<sup>57</sup> 石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』 (光明社 1967.09.15) p.5

舶来し、所謂俗文学が伝来した。よって、石崎又造は第三期に対して、「日本における一千数百年に互る漢文學史は、近世に於て空前にして又絶後と思はれるその黄金時代を現出したのである。<sup>58</sup>」と述べている。

論文としては、王佳璐による博士論文『江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―』や「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介<sup>59</sup>」などが見られる。

王佳璐は「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」<sup>60</sup>で、江戸期以前の漢文学を簡略に述べたあと、日本漢文小説の誕生及び分類を述べた。王佳璐は日本漢文小説を「漢文翻訳物」、「漢文洒落物・戯作物」、「教科書・参考書」に分類した。

その他、まず、長澤規矩也によって編纂された『唐話辞書類集』<sup>61</sup>が見られる。全20集で収録作品数63件である。各作品に長澤規矩也による解題が付されている。唐話研究、日本漢文小説研究にとって貴重な作品である。

また、日本漢文小説を収集し、影印本を集合出版した作品も見られる。王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也が主編した、『日本漢文小説叢刊』全5輯が見られる。『日本漢文小説叢刊』<sup>62</sup>全5輯は、筆記叢談類三輯、神怪伝説類一輯、世情類一輯と分類され、『大東世語』や『浦島子伝』、『太平記演義』、『唐話纂要』等、日本漢文小説36作を収録している。各作品に解題が付されている。また、第一輯では主編者である王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也による序文が書かれている。

上記の論述を踏まえ、本研究では、日本漢文小説を「翻案作品」、「翻訳作品」と「創作作品」に分類する。

日本漢文小説における翻案作品は、二種類あると考える。一つは中国白

---

<sup>58</sup> 石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』（光明社 1967.09.15）p.6

<sup>59</sup> 王佳璐 「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」『外国語学会誌』第40号（大東文化大学外国語学会 2011.3.15）

<sup>60</sup> 王佳璐 「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」『外国語学会誌』第40号（大東文化大学外国語学会 2011.3.15）

<sup>61</sup> 長澤規矩也編 『唐話辞書類集』（古典研究会編輯 汲古書院 1969～1976）

<sup>62</sup> 王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也主編 『日本漢文小説叢刊』第一輯「筆記叢談類一」（台湾学生書局 2003）

話小説を模倣し、内容やあらすじは似ているが、風俗や地名、人名や時代等は日本に合わせた作品を指す。即ち、中国白話小説から翻案した作品である。典型例としては『雨月物語』や『牡丹灯籠』等が挙げられる。もう一つは、白話小説の形式や言葉使いを模倣し、日本伝統戯曲などを翻案した作品。典型例としては、人形浄瑠璃の演目である『仮名手本忠臣蔵』を翻案した『海外奇談』や岡島冠山による『太平記演義』などが見られる。

日本漢文小説における翻訳作品は、中国白話小説を翻訳した作品を指す。特に『水滸伝』や三言二拍を翻訳した作品が多く見られる。典型例としては、岡島冠山による『通俗忠義水滸伝』や西田維則による『通俗赤繩奇縁』などが見られる。

最後に、日本漢文小説における創作作品が見られる。これは、漢文を熟読し、十分理解した上で漢学者が自ら創作した作品であり、形式は文言調より白話にかわり、物語の内容も世情や生活に密接した作品が多く見られる。また、唐話学のテキストとして創作された作品も多く見られる。開祖と見られるのは『唐話纂要』第六巻である、版心書名『和漢奇談』とされている作品である。

本章では、日本漢文小説における翻訳作品と創作作品を通して、日本漢文学の黄金時代とも言われている幕末明治期における近世漢語語彙の日本語への受容実態を解明する。第一節では、日本漢文小説における翻訳小説を研究対象とし、西田維則による『通俗赤繩奇縁』と服部誠一による『勸懲繡像奇談』を取り上げる。第二節では、日本漢文小説における創作作品を研究対象とし、『唐話纂要』巻六を用いる。『唐話纂要』巻六だけ漢文小説の部分が版心書名『和漢奇談』が用いられ、各物語の後に付されている訳文のほうは版心書名『奇談通俗』が用いられている。『唐話纂要』巻六は前五巻とは性質が全く異なるため、本研究では、版心書名『和漢奇談』を用い、『唐話纂要』前五巻と区別する。



## 第一節 幕末明治期漢文小説における創作作品

日本における漢語学習は主に『論語』や『詩経』などの文語主体の所謂、正統漢籍を中心としてきたが、その後鎌倉期の禅語録や、江戸時代から明治時代初期における漢学及び漢語口頭語主体とした唐話学が盛んであった。

江戸時代、幕府の政策下、幕府の鎖国と言う海禁政策により、日本における対外貿易は全て幕府が制限下におかれ、管理されていた。長崎を通してオランダと中国（明、清）との貿易を除き、他国との貿易や国交を全て断絶させた（対馬藩を仲介にした朝鮮半島との貿易や、薩摩藩を通しての琉球王国との貿易は維持している）。それが故に、長崎は多くの清人と清からの輸入品を受け入れる窓口になった。

長崎は当時日清貿易の中枢であり、文化的輸入の中枢でもあった。そこで、貿易船の船員との言語接触の最前線に立つ唐通事と言う職業が成立した。江戸時代日本に来航した中国人のことは「唐人」と呼ばれ、中国船のことは「唐船」と呼ばれている。業務上語られていた「唐話」（主として江南、福建あたりの口頭語）が、長崎と言う地方都市から、上方や江戸と言う中心都市に、滲みだすように伝わり始めると、次第に、古くから漢学の伝統を持っていた、漢学者たちの興味を引くようになっていった。彼らが伝統的に継承してきた、荻生徂徠のように、唐音を介さない字義のみを利用した「訓読法」と言う、文献解読法に疑問を持つ漢学者も出てくるようになった。このような学習はよく「唐話学」と呼ばれている。唐話学とは漢学及び漢語口頭語を主体とした学問であり、唐話学を中心となったのは「唐通事」と呼ばれる、長崎において清国との貿易実務に従事した人であった。

唐通事は「事に通じる」役割を持ち、今日の「総合商社」としての役割を担ってもいた。唐通事の他にオランダ「通詞」（こちらは詞に通じると書き、事に通じると書く「通事」と区別されていた）もあり、それぞれの役割は専著に譲るが、厳重な海禁政策の下にあっても、江戸時代は漢語口頭語、オランダ語、朝鮮語が学習されていた。幕末になるとさらに、英語、フランス語、ロシア語、満洲語等、多様な言語を学習する事ができた。この事象が明治維新の西洋文明の吸収の土台となった事は言うまでもない。

当時の唐話学習者にとって一番難しかったのは、地域方言を習得することだった。その方言は、南方方言であり、北京音は殆ど含まれていなかった。

また、唐話学習に欠かせない通俗小説・白話小説に対する需要は強くあり、当時明末から清の時代にかけて出版・作成された白話小説も日本に大量に流入し、大きな影響をもたらした。

## 1. 研究対象

本節の研究対象となるのは『唐話纂要』巻六所収、版心書名『和漢奇談』二作品、「孫八救人得福」と「徳容行善有報」という漢文小説及び各物語の篇末に付く版心書名『奇談通俗』とされている訳文である。本節で用いる『唐話纂要』は長澤規矩也により編輯された『唐話辞書類集』第六集に収録されている享保三年版『唐話纂要』である。

『唐話纂要』とは、江戸期唐話学習に用いた唐話教科書の一例であり、当時最も一般的に使用されていた教科書でもある。長澤規矩也による解題によると、『唐話纂要』は全六巻ある。巻一から巻三の前半までは、二字至六字の語句に、江南音を旁注し、和訳を下に加えた。巻三後半には常言（通行の格言）を収録し、巻四は会話の発音及び訳文である。巻五は類書の如き内容分類の語彙を羅列し、そして時調（流行歌）に江南音を旁注し、最後に又、織物に関する語彙に発音訳語を収録した。この形で享保元年秋、江戸須原屋久右衛門初刊した。後、巻六として、和漢奇談（版心）一冊を補い、「白話短篇小説二篇」に、発音・四聲を施し、各篇末に文語の訳文を添へて、享保三年、出雲寺和泉掾が印行した。<sup>63</sup>

奥村佳代子によると、『唐話纂要』は「唐話」と名のつく書物の第一作<sup>64</sup>であり、唐話教科書が唐通事の唐話学習には欠かせないものである。当時唐通事が唐話学習で用いた教科書について、石崎又造は『近世日本に於ける支那俗語文学史』で、「其の教科書は何んなものであったかと言へば最初、三字經・大學・論語・孟子・詩經等で發音を學び、次に、二字話・三字話・長短話等で常用の語彙を覚え、更に譯家必備・養兒子・三折肱醫家摘要・

<sup>63</sup> 長澤規矩也編著 『唐話辞書類集 第六集』 (古典研究會 1972)

<sup>64</sup> 奥村佳代子 「近世日本における中国語受容の一端 一岡島冠山によって紹介された「唐話」一」 『中国語学』第248号 (関西大学 2001)

二才子・瓊浦佳話・兩國譯通など唐通事編輯の冊子を卒業すると、今古奇観・三國志演義・水滸傳・西廂記・などを學習し、更に進んでは福惠全書・資治新書等の實用的な方面を學習した。其の他の教科書としては、「俗語彙編」五卷・「譯官雜字簿」・「華語詳解」・及び岡島冠山の「唐話纂要」・「唐話使用」等が入門の必讀書であった。<sup>65</sup>と述べている。

よって、唐通事の唐話學習は經史子集などの經典からはじめ、最終的には実用的な俗語や白話を習得する。また、「唐話纂要」は唐話入門の「必讀書」であることも明白である。

『唐話纂要』卷六には、版心に「和漢奇談」と書かれ、本稿においては『唐話纂要』前五巻と区別するために『和漢奇談』という版心書名を用いる。『唐話纂要』は日本唐話史における画期的な作品であり、その巻六に収録されている『和漢奇談』も、「日本における破天荒の漢文白話小説」<sup>66</sup>だと言われている。また、王佳璐による博士論文「江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―」によると、『和漢奇談』は漢文学史において、江戸期白話体漢文小説の開祖と見做している。<sup>67</sup>また、「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」では、「白話漢文小説を言えば、その開祖は岡島冠山の『唐話纂要』の巻六、唐話教科書のテキストとして創作された『和漢奇談』の「孫八救人得福」と「徳容行善有報」二話である。この二話は文言の基調にもかかわらず、部分的には白話を用いている。やや硬い白話文であるが、日本漢文史において白話文の開祖と見做している。だから、十分重視されるべきである。<sup>68</sup>と述べている。

編者は長崎での通事経験があり、唐話講師も務めた岡島冠山である。名は明敬で、後、璞に変えた。字は玉成、援之。通称弥太夫、長左衛門。はじめは荻藩において通訳を務め、長崎で通辞を務めていた。後、林鳳岡に

<sup>65</sup> 石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』（光明社 1967.09.15）

<sup>66</sup> 王佳璐 「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」 『外国語学会誌』第40号（大東文化大学外国語学会 2011.3.15）p.302

<sup>67</sup> 王佳璐 「江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―」 大東文化大学 博士論文（日本語文化学）

<sup>68</sup> 王佳璐 「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」 『外国語学会誌』第40号（大東文化大学外国語学会 2011.3.15）p.305

て朱子学を学び、江戸（東京）で下野足利藩主戸田忠圀に仕えた。荻生徂徠の護園学派の人々が開いた唐話学・中国語学の講習会「訳社」の講師となり、江戸における唐話学の普及に努めた。唐話学の大家として活躍し、日本古典を漢文小説に翻案した『太平記演義』や、日本で最初の『水滸伝』を翻訳し、『通俗忠義水滸伝』を題に出版させ、当時唐話学習に用いられた教本『唐話纂要』や『唐音使用』などを作成した。よって、『唐話纂要』は「恐らく出版させられた唐話入門書の嚆矢であり、而もそれ以後の追隨を許さぬほどのものである『唐話纂要』が、必ずや譯社における数年教授の経験の結果に違いない<sup>69</sup>」とも言われている。

## 2. 先行研究及び問題点

『唐話纂要』に関する先行研究はさほど多く見られない。しかし、当時最も多く使用されている唐話教科書として重要視されているため、長澤規矩也によって編纂された『唐話辞書類集』<sup>70</sup>にも収録され、中国においては「域外漢文小説」研究にも重要な役割を果たしているため、王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也が主編した、『日本漢文小説叢刊』<sup>71</sup>にも収録されている。

先行研究としては、奥村佳代子による論述、「『唐話纂要』の「三字話」」<sup>72</sup>や、「唐話資料史における『唐韻三字話』：『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較」<sup>73</sup>、そして「岡島冠山『唐話纂要』考」<sup>74</sup>や「『唐話纂要』編纂の意図」<sup>75</sup>などが見られる。しかし、『唐話纂要』巻六に収録されている「和漢奇談」に関する先行研究は管見の限り極めて少ない。

---

<sup>69</sup> 石崎又造 『近世日本における支那俗語文学史』（光明社 1967.09.15）

<sup>70</sup> 長澤規矩也編 『唐話辞書類集』（古典研究会編輯 汲古書院 1969～1976）

<sup>71</sup> 王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也主編 『日本漢文小説叢刊』 第一輯「筆記叢談類一」（台湾学生書局 2003）

<sup>72</sup> 奥村佳代子 「『唐話纂要』の「三字話」」 『関西大学東西学術研究所紀要』第50号（関西大学東西学術研究所 2017-04-01）

<sup>73</sup> 奥村佳代子 「唐話資料史における『唐韻三字話』：『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較」 『関西大学東西学術研究所紀要』第47号（関西大学東西学術研究所 2014.04）

<sup>74</sup> 奥村佳代子 「岡島冠山『唐話纂要』考」 『関西大学中国文学会紀要』第17号（関西大学中国文学会 1996.03）

<sup>75</sup> 奥村佳代子 「『唐話纂要』編纂の意図」 『中国語学』第244号（『日本中国語学会』 1997.10）

「和漢奇談」については、王佳璐による「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格―「太平記演義」と「唐話纂要」巻六との比較を中心に―」<sup>76</sup>が見られる。王佳璐は論考で『太平記演義』と『唐話纂要』巻六（『和漢奇談』二篇）に於ける白話語彙の特徴を品詞分類法によって分類し、分析を施した。しかし、王佳璐の論述は主に『和漢奇談』二篇に於ける漢文小説原文を研究対象とし、各篇末に書かれている訳文に関してはさほど取り上げていなかった。また、「特殊用語」に分類されている「干隔滂漢」などの白話語彙については、「『太平記演義』の語彙は『水滸伝』から受ける影響が大きく、『唐話纂要』巻六の語彙は『三言二拍』から受ける影響が顕著である」と述べている。それは、『太平記演義』は講史類小説であり、『唐話纂要』は世情類小説であることに原因があると考えられるが、その点についてはまた検討する余地があると判断する。

また、王佳璐による博士論文「江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―」<sup>77</sup>が見られる。王佳璐は博論の第二章第二節「日本漢文小説『唐話纂要』巻六をめぐって―語学・文学の考察を中心に―」<sup>78</sup>において、『和漢奇談』を語学の面では『太平記演義』と比較し、文学の面では中国志怪伝奇小説と比較して『和漢奇談』の白話語彙の性格や物語に現れる典型的な志怪小説の要素（風水や妖怪など）を検討した。王佳璐によると、語学の面においては「『唐話纂要』巻六は明らかに『唐話纂要』巻から巻五の唐話実用的な口頭語資料と違って、文白混合体が顕著であり、独立な性格を持って、文言体小説に近い特徴を備えている。」<sup>79</sup>と結論付けた。

しかし、王佳璐の研究は主に『和漢奇談』の漢文原文に注目し、各説話末に附される漢字片仮名混じりの和文訳文にはさほど目を向けていない。

---

<sup>76</sup> 王佳璐 「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格―「太平記演義」と「唐話纂要」巻六との比較を中心に―」 『指向』第6号（大東文化大学大学院 2009）

<sup>77</sup> 王佳璐 「江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―」 大東文化大学 博士論文（日本語文化学）

<sup>78</sup> 王佳璐 「江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―」 大東文化大学 博士論文（日本語文化学）

<sup>79</sup> 王佳璐 「江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 ―文学・語学から出発して―」 大東文化大学 博士論文（日本語文化学）p.69

よって、『和漢奇談』本文における白話語彙の使用が特徴的で、その訳文との間にも細かな差が見られるため、本節では、『和漢奇談』訳文に於ける振り仮名を傍注音と傍注訳・傍訳に分けて検討する。傍注音のほうは中国南京、杭州、寧波三地域の方言と比較し、白話語彙に振られている傍訳はその漢語としての語義と比較検討し、『和漢奇談』に於ける白話語彙の特徴を更に見出すことが出来ると考える。

## 1. 『唐話纂要』巻六、『和漢奇談』における傍音について

### 1.1 『和漢奇談』における傍音に関する先行研究

唐音とは古くから平安中期に北宋商人によって伝えられて漢字音であり、元明清期中国における漢語口頭語音である。その中、鎌倉時代には禅僧によって伝えられた江南浙江地方の漢字音、南京官話系語音や福建語音などを包含した漢字音である。

享保七年（1722年）朝岡春睡が著した『四書唐音弁』においては、「南京音」と「浙江音」を区別している。また、奥村佳代子（2014）による「唐話資料史における『唐韻三字話』－『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較－」<sup>80</sup>においては、『唐韻三字話』において「杭州話」という項目が見られる。

江戸後期の儒学者である亀井南冥による『我昔詩集』では、「同ジ南京音ノ中ニテモ蘇州、杭州、松江、寧波等ノ處々ノ郷音亦少々ツツ相違セリ。<sup>81</sup>」という記述が見られる。よって、江戸後期の研究によると、当時所謂「南京音」では「杭州音、寧波音、松江音」等の「浙江音」も含まれている。

有坂秀世（1938）では、「官話者読書音此之用。其官話亦有二。一立四声唯更全濁為清音者是。一不立入声不立濁声唯平上去唯清音者。謂之中州韻用歌曲音。二種通称中原雅音支那人以為正音。其俗話者杭州音也。亦曰浙江音。<sup>82</sup>」という記述が見られる。よって、有坂秀世（1938）の説によれば、「杭州音」と「浙江音」は同じである。

中田喜勝（1978）では、亀井南冥による『我昔詩集』における記述を引用し、「要するに所謂南京音とは杭州を中心とした当時の浙江省地方の音を指しているものであり、むしろ今にして之を呼べば「江南音」とでも称する方が妥当である。<sup>83</sup>」という記述が見られる。よって、中田喜勝（1978）の説によれば、

<sup>80</sup> 奥村佳代子 「唐話資料史における『唐韻三字話』：『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較」『関西大学東西学術研究所紀要』第47号（関西大学東西学術研究所 2014.04）

<sup>81</sup> 亀井南冥 『我昔詩集』

<sup>82</sup> 有坂秀世 「江戸時代中頃に於けるハの頭音について－唐音資料に反映した」『国語と国文学』15—10（東京帝国大学国文学研究室 1938）

<sup>83</sup> 中田喜勝 「日本における華音の声母「ツ」・「キ」について」『長崎大学教養部紀要人文科学』第18巻（長崎大学教養部 1978）

「南京音」を「江南音」と呼んだほうが適切であろう。

『唐話纂要』に関する先行研究は、奥村佳代子による「『唐話纂要』の「三字話」」<sup>84</sup>や、「唐話資料史における『唐韻三字話』：『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較」<sup>85</sup>などが見られる。また、『唐話纂要』巻六に収録されている「和漢奇談」に関しては、王佳璐による「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格—「太平記演義」と「唐話纂要」巻六との比較を中心に—」<sup>86</sup>が見られる。しかし、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音に関しては触れていない。

『唐話纂要』における傍音に関しては、「江南音」と称する説が見られる。

i有坂秀世（1938）による「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」では、「心越所傳の唐音や四書唐音弁の浙江音もこれである。その他、唐音和解・唐話纂要・唐詩選唐音・南山俗語考等の音は、いずれも之に属する。<sup>87</sup>」という記述が見られる。よって、有坂秀世の説によれば、『唐話纂要』は浙江音文献に属する。

ii長澤規矩也（1972）は『唐話辭書類集』第六集の解題では、「巻一から巻三の前半までは、二字至六字の語句に、江南音を旁注し、和譯を下に加へ…<sup>88</sup>」と記し、「巻五は類書の如き内容分類の語彙を列し、末に時調（流行歌）に江南音を旁注して納め…<sup>89</sup>」と述べている。一方、『唐話纂要』巻六に収録されている「和漢奇談」の傍音に関しては、記述が見られない。

そして、『唐話纂要』における傍音を「杭州音系」と称する説が見られる。

張照旭（2014）による「『大清文典』の中国語カナ表記について」におい

---

<sup>84</sup> 奥村佳代子 「『唐話纂要』の「三字話」」 『関西大学東西学術研究所紀要』第50号（関西大学東西学術研究所 2017-04-01）

<sup>85</sup> 奥村佳代子 「唐話資料史における『唐韻三字話』：『唐話纂要』及び『南山俗語考』の三字話との比較」 『関西大学東西学術研究所紀要』第47号（関西大学東西学術研究所 2014.04）

<sup>86</sup> 王佳璐 「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格—「太平記演義」と「唐話纂要」巻六との比較を中心に—」 『指向』第6号（大東文化大学大学院 2009）

<sup>87</sup> 有坂秀世 「江戸時代中頃に於けるハの頭音について—唐音資料に反映した」 『国語と国文学』15—10（東京帝国大学国文学研究室 1938）

<sup>88</sup> 長澤規矩也 『唐話辭書類集』第六集（古典研究会 汲古書院 1972.1）  
解題

<sup>89</sup> 長澤規矩也 『唐話辭書類集』第六集（古典研究会 汲古書院 1972.1）  
解題



では、『唐話纂要』を杭州音系に分類した。

また、『唐話纂要』における傍音を「杭州音」と特定した説が見られる。

i 『新潮日本人名辞典』の「岡島冠山」の項目では、「唐話に通じ、杭州音の『唐話纂要』や南京音の「唐話使用」を著す<sup>90</sup>」という記述が見られる。

ii 中村雅之による「唐話纂要の仮名音注について」では、「…発音は濁音声母と入声を有しており、杭州音であるというのが通説である。<sup>91</sup>」という記述が見られる。

iii 中村雅之による「唐話使用の南京官話音」では、「岡島冠山は『唐話纂要』など中国語会話テキストを数種刊行したが、最初の『唐話纂要』では片仮名で杭州音を記し、それ以後のテキストでは南京官話音を記した。<sup>92</sup>」という記述が見られる。

よって、先行研究によると、『唐話纂要』における傍音は一般的に「江南音」と言われていたが、時代を下すと「杭州音系」や「杭州音」であるという説も見られる。この点については、また検討する余地が見られる。

また、『唐話纂要』巻六、『和漢奇談』における傍音を研究対象とした基礎研究が見られなかった。且つ、「和漢奇談」は『唐話纂要』前五巻が刊行された二年後に刊行された作品であり、その傍音の性格は前五巻と異なる可能性も見られるのであろう。

本節では、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音を研究の対象とし、白話原文における傍音を、『唐通事會所日録』による唐船貿易事情を参考にして、『唐話纂要』巻六所収「和漢奇談」で用いられる傍音の所属方言地域を試論することを目的とする。

## 1.2 『唐通事會所日録』による唐船貿易と言語接触の可能性

『唐通事會所日録』は長崎における唐通事が執務上に書かれた日記であ

<sup>90</sup> 尾崎秀樹主編 『新潮日本人名辞典』 (新潮社 1991.3)

<sup>91</sup> 中村雅之 「唐話纂要の仮名音注について」 『KOTONOHA』第156号 (古代文字資料館 2015.11)

<sup>92</sup> 中村雅之 「唐話使用の南京官話音」 『KOTONOHA』第157号 (古代文字資料館 2015.12)

る。本稿で用いる『唐通事會所日録』は、東京大学史料編纂所所編、『大日本近世史料』に収録されているものである。『大日本近世史料』における解題によると、原題は「日録」のみ記されている。唐通事會所が設立されるまでは年年番に当たった大通事の自宅を役所として執務していたため、「唐通事會所日録」という書名は不適當だと言う説も現れた。が、『大日本近世史料』では敢えて『唐通事會所日録』という書名を襲用した<sup>93</sup>。本稿は『大日本近世史料』に従って、『唐通事會所日録』という書名を用いる。

『唐通事會所日録』の底本に関しては、長崎市立長崎博物館に所蔵されている「唐通事會所日録」（博物館本）及び同館所蔵の「正徳二辰日録」、「日録拾」（向井本）を用いた<sup>94</sup>という。

『唐通事會所日録』では、唐通事の主要任務である唐船貿易から、在崎唐人の動向、オランダ通詞のことなど、長崎に関する一般情報を述べている。『唐通事會所日録』では、寛文三年（1663年）から正徳五年（1715年）までの貿易船事情が記録されている。

本稿では、各地方の貿易船数を統計し、降順に並べ、『唐通事會所日録』に記録されている貿易期間を附し、貿易当地の現在地域を調べ、『現代漢語方言大辞典』による語系統を調べた。その結果を、表3で示す。

[表3：『唐通事會所日録』に記録されている各地方からの貿易事情]

	貿易船	数	所在地	語系統	貿易期間
1	南京船	323	江蘇省	江淮官話・呉語	1667年～1715年
2	寧波船	214	浙江省	呉語	1689年～1713年
3	臺灣船	82	台湾省	閩語	1664年～1715年
4	福州船	50	福建省	閩語	1666年～1715年
5	厦門船	45	福建省	閩語	1663年～1714年
6	暹羅船	42	タイ		1663年～1712年
7	廣南船	39	ベトナム		1664年～1710年

<sup>93</sup> 東京大学史料編纂所 『唐通事會所日録』七 「大日本近世史料」（東京大学出版会 1968.3.25） p.109

<sup>94</sup> 東京大学史料編纂所 『唐通事會所日録』七 「大日本近世史料」（東京大学出版会 1968.3.25） p.109

8	廣東船	31	広東省	閩語	1684年～1714年
9	普陀山船	31	浙江省	吳語	1669年～1712年
10	咬吧啣船	26	インドネシア		1667年～1713年
11	柬埔寨船	20	カンボジア		1663年～1713年
12	泉州船	17	福建省	閩語	1664年～1705年
13	東寧船	14	台湾省	閩語	1666年～1670年
14	東京船	13	ベトナム		1667年～1712年
15	潮州船	12	広東省	閩語	1666年～1696年
16	温州船	11	浙江省	閩語	1688年～1710年
17	高州船	9	広東省	閩語	1692年～1701年
18	沙埕船	7	福建省	閩語	1687年～1702年
19	海南船	6	海南省	閩語	1688年～1711年

即ち、1663年から1715年までの間には、南京からの貿易船が一番多く、その次は寧波からの貿易船だった。一方、言語系統から見ると、一番多いのは呉語地域からの568艘で、その次は閩語地方からの284艘であった。よって、唐船貿易数からみれば、江戸期唐音は、呉語系方言か閩語系方言である可能性が見られる。

### 1.3 『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音について

上記先行研究及び『唐通事會所日録』による唐船貿易事情を踏まえ、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音を検討する。比較としては、南京音、寧波音、杭州音の三方音を取り上げる。

筆者の整理によると、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音が振られているのは、延べ字数4214字であり<sup>95</sup>、実字数1017字である。使用回数順によって降順に並べると、10回以上使用されていた文字は99字である。

比較用の方言語音を調査するために用いたのは、下記『現代漢語方言大

<sup>95</sup> 『唐話纂要』所収「和漢奇談」漢文原文では、総計4271文字である。その中、傍音が振られていないのは、241ページ（『和漢奇談卷』・四才）「孫八救人得福」文中割注の25文字と、274ページ（『和漢奇談卷』・廿一ウ）「徳容行善有報」文中割中の32文字である。

詞典』シリーズである。

①南京音調査に用いたのは『南京方言詞典』<sup>96</sup>である。南京方言においては、旧南京音と新南京音と分けられている。旧南京音は入声が残っている、呉語に近い南京音で、新南京音は明清時代において北方方言から影響された、現在一般的に使用して言う南京音である。『南京方言詞典』に収録されているのは、旧南京音で、ほぼ北方方言に影響されていなかった、55歳以上（『南京方言詞典』は1995年初版）城南在住者を中心に使用されている方言語音である。

②寧波音調査に用いたのは『寧波方言詞典』<sup>97</sup>である。収録されているのは、50歳以上（『寧波方言詞典』は1997年初版）寧波人が使用している旧寧波音である。

③杭州音調査に用いたのは『杭州方言詞典』<sup>98</sup>である。収録されているのは、杭州方言語音の中の旧杭州語音である。

『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音が振られている文字から、使用回数10回以上の99字を採取し、南京音、寧波音と杭州音を調査した所、三辞典共に発音を収録されている文字は、全20文字であった。その結果を表4で示す。

[表4: 「和漢奇談」における傍音と南京音、寧波音、杭州音との比較表]

	回数	初出	字	傍音	南京音	寧波音	杭州音
1	104	p.236	之	ツウ	•tʂɿ	tsɿ	tsɿ
2	62	p.235	人	ジン	zən	ŋiŋ	zen
3	61	p.235	有	ユウ	iəu	hiy	hiø
4	58	p.238	不	プ	pu?	pɐ?	pə?
5	47	p.235	八	パ	pa?	pɐ?	pa?
6	46	p.235	孫	ソラン	sun	səŋ	sɿen
7	39	p.236	一	イ	i?	ir?	?iə?
8	36	p.237	大	ダア	ta	da/dəu	da/do

<sup>96</sup> 李栄主編 『南京方言詞典』 (江蘇教育出版社 1995.12)

<sup>97</sup> 李栄主編 『寧波方言詞典』 (江蘇教育出版社 1997.12)

<sup>98</sup> 李栄主編 『杭州方言詞典』 (江蘇教育出版社 1998.12)

	回数	初出	字	傍音	南京音	寧波音	杭州音
9	24	p.236	下	ヒヤア	ɕia	ho	hia
10	19	p.236	年	ネン	lien	hiy	niẽ
11	18	p.242	娘	ニヤン	lianŋ	ŋiã	nianŋ
12	16	p.235	三	サン	saŋ	sɛ	sẽ
13	15	p.235	小	ヅヤウ	siɔo	ɕio	ɕio
14	13	p.235	十	シ	ʃɿ?	zɿœ	zə?
15	13	p.236	二	ルウ	er	ŋi	əl
16	12	p.235	五	ウ	u	hŋ	?u
17	10	p.235	在	ヅアイ	tsae	dze	dze
18	10	p.235	夜	エ	ie	hia	hi
19	10	p.245	兩	リヤン	lianŋ	liã	lianŋ
20	10	p.266	公	コン	koŋ	koŋ	koŋ

上記の表を踏まえて、分析を施す。

#### 1) 之（ツウ）

「和漢奇談」における「之」の傍音「ツウ」は、南京音では「**tʃɿ**」と読み、寧波音においても、杭州音においても「**tsɿ**」と読んで、発音がほぼ一致する。

#### 2) 人（ジン）

「和漢奇談」における「人」の傍音「ジン」は、南京音における「**zən**」、杭州音における「**zen**」と一致しないが、寧波音における「**ŋiŋ**」と部分的に一致する。

#### 3) 有（ユウ）

「和漢奇談」における「有」の傍音「ユウ」は、寧波音における「**hiy**」や杭州音における「**hiø**」とは一致しないが、南京音においては「**iəu**」と部分的に一致する。

#### 4) 不（プ）

「和漢奇談」における「不」の傍音「プ」は、寧波音における「**pɛ?**」や杭州音における「**pə?**」とは部分的に一致するが、南京音における「**pu?**」

とは一致する。

5) 八 (パ)

「和漢奇談」における「八」の傍音「パ」は、寧波音における「peʔ」とは部分的に一致し、南京音と杭州音における「paʔ」とは一致する。

6) 孫 (ソロン)

「和漢奇談」における「孫」に傍音「ソロン」は、寧波音では「sɛŋ」と読み、南京音では「sun」と読み、杭州音においては「sɥen」と読む。どちらも「和漢奇談」における傍音と部分的に一致する。

7) 一 (イ)

「和漢奇談」における「不」の傍音「イ」は寧波音における「iʔ」や杭州音における「?iəʔ」とは部分的に一致するが、南京音における「iʔ」とは一致する。

8) 大 (ダア)

「和漢奇談」における「大」の傍音「ダア」は、寧波音と杭州音における「da」の発音とは一致するが、南京音においては「ta」とは部分的に一致する。

9) 下 (ヒヤア)

「和漢奇談」における「下」の傍音「ヒヤア」は、寧波音における「ho」と一致しないが、南京音における「cia」や杭州音における「hia」とは部分的に一致する。

10) 年 (ネン)

「和漢奇談」における「年」の傍音「ネン」は、南京音における「lien」と一致しないが、寧波音における「hiy」や杭州音における「niɛ」とは部分的に一致する。

11) 娘 (ニヤン)

「和漢奇談」における「娘」の傍音「ニヤン」は、南京音における「lian」や寧波音における「ŋiã」とは部分的に一致するが、杭州音における「nian」とは一致する。

12) 三 (サン)

「和漢奇談」における「三」の傍音「サン」は、寧波音における「se」

や杭州音における「sɛ̃」とは部分的に一致するが、南京音における「saŋ」とは一致する。

### 13) 小（ ज्याウ ）

「和漢奇談」における「小」の傍音「 ज्याウ」は、寧波音における「ɕio」や杭州音における「ɕio」、南京音における「sioo」と部分的に一致する。

### 14) 十（ シ ）

「和漢奇談」における「十」の傍音「シ」は、寧波音における「zɥœ」や杭州音における「zəʔ」とは一致しないが、南京音における「ʂɿʔ」とは部分的に一致する。

### 15) 二（ ルウ ）

「和漢奇談」における「二」の傍音「ルウ」は、寧波音において「ŋi」と一致しないが、南京音においては「er」と読み、杭州音においては「əl」と読んでいるから、部分的に一致するところが見られる。

### 16) 五（ ウ ）

「和漢奇談」における「五」の傍音「ウ」は、寧波音における「hŋ」とは一致しないが、南京音における「u」と杭州音における「ʔu」とは一致する。

### 17) 在（ ズアイ ）

「和漢奇談」における「在」の傍音「ズアイ」は、寧波音における「dze」や杭州音における「dze」南京音における「tsae」とは部分的に一致する。

### 18) 夜（ エ ）

「和漢奇談」における「夜」の傍音「エ」は、寧波音における「hi」や杭州音における「hia」とは一致しないが、南京音における「ie」とは部分的に一致する。

### 19) 兩（ リヤン ）

「和漢奇談」における「兩」の傍音「リヤン」は、寧波音における「liã」とは部分的に一致するが、南京音や杭州音における「lianŋ」とは一致する。

### 20) 公（ コン ）

「和漢奇談」における「公」の傍音「コン」は、南京音も寧波音や杭州音においても「koŋ」と読み、字音が一致する。

#### 1.4 終わりに

上記の比較から、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音について、以下のことが明らかにできた。

①南京音との比較から、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音と一致するのは 8 字で、部分的に一致したのは 9 語で、一致しないのは 3 字であった。

②寧波音との比較から、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音と一致するのは 3 字で、部分的に一致したのは 11 語で、一致しないのは 6 字であった。

③杭州音との比較から、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音と一致するのは 7 字で、部分的に一致したのは 10 語で、一致しないのは 3 字であった。

よって、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音は南京音と杭州音を含めた「江南音」と、字音的に部分的に一致する部分もあり、一致しない部分も見られる。また、例 14) 十のように、一つの方言音と一致するが、他に方言音に全く類似しない場合も見られ、『唐話纂要』所収「和漢奇談」における傍音は限られた一地域の方言音を使用しているのではなく、恐らく南京音(北方方言に影響される前の、蘇州方言や浙江方言に近い旧南京音)と浙江音が融合した「江南音」と言ったほうが適切だと判断できる。



## 2. 「孫八救人得福」から見る近世漢語語彙の受容

### 2.1 「孫八救人得福」について

本小節では、『唐話纂要』巻六である『和漢奇談』に収録されている、「孫八救人得福」と言う漢文小説の訳文に現れる白話語彙に振られる傍訳を研究対象とする。

「孫八救人得福」は世情類漢文小説であり、その漢文で書かれている原文もその後ろに付く日本語訳文も、岡島冠山による作品である。「孫八救人得福」は、「孫八」という長崎出身の落魄れた人が、天神からある少年を助けることを頼まれた夢を見て、お金持ちの息子を救い、義兄弟の契約を結んだ。その後、お化け屋敷にいた妖怪を退治し、最終的に「福を得て」金持ちになった物語である。

### 2.2 「孫八救人得福」における傍訳と近世漢語語彙

「孫八救人得福」の訳文より採取した左ルビが振られている延べ 901 語のうち、傍注訳だと判断できるのは 152 語である。

[表 5: 「孫八救人得福」訳文における傍訳]

	所在	語彙	振り仮名
1	六 9a	咎在	ソノカミ
2	六 9a	膂力	チカラ
3	六 9a	遊俠	ヲトコダテ
4	六 9a	自得	タノシミ
5	六 9a	干隔滂漢	ヒカゲモノ
6	六 9a	流落	ヲチブレ
7	六 9a	烟	タバコ
8	六 9a	少許	スコシバカリ
9	六 9a	顧	ミ
10	六 9a	窺	ミ／ヲヲ 六 9b
11	六 9a	戲文	ヲドリ
12	六 9a	惟	ヒト
13	六 9a	寂寞	サビシク

	所在	語彙	振り仮名
14	六 9a	瞌睡	ネムリ
15	六 9a	端嚴	ヲゴソカ
16	六 9a	整齊	タタシ
17	六 9a	徑ニ	タタチ
18	六 9a	煩	タノミ
19	六 9a	特	ワザト
20	六 9b	祐ル	マモ
21	六 9b	光搦	イタヅラモノ / イタツラ 六 10b
22	六 9b	困テ	クルシミ
23	六 9b	綽テ	トリ / トツ 六 11a
24	六 9b	抵リ	イタ
25	六 9b	左側	コロオヒ
26	六 9b	燈光	トホシビカカヤ
27	六 9b	夥	ムレ
28	六 9b	從漢	ケライ / ジウボク
29	六 9b	幾害	ホトント
30	六 9b	幾多	アマタ
31	六 9b	簇擁テ	ムラカツ
32	六 9b	兇	アラキ
33	六 9b	怕レテ	ヲソ (レテ)
34	六 9b	勸解	トリサエル
35	六 9b	塊タル	ツカネ
36	六 9b	面貌	カオハセ
37	六 9b	砌タル	ソミ
38	六 9b	身軀	ミフリン
39	六 9b	粧扮	ヨソオヒ・シヤウソク
40	六 10a	欺負	アザムク

	所在	語彙	振り仮名
41	六 10a	圍定	トリカコン
42	六 10a	背	ムネ
43	六 10a	倍	マスマス
44	六 10a	盡皆	コトコトクミナ
45	六 10a	帶歸	ツレカヘリ
46	六 10a	尊寓	ヲンヤド
47	六 10b	伊	イヅレ
48	六 10b	逼迫	セハメ
49	六 10b	戲	ヲトリ
50	六 10b	小人	ソレカシ
51	六 10b	誘テ	イナサク
52	六 10b	酌ン	ウマ
53	六 10b	斷然	フツト
54	六 10b	發ル	ヲコ
55	六 10b	累	ワンラヒ
56	六 10b	備細	ツフサ
57	六 10b	性命神	マモリ・ウヂガミ
58	六 10b	怠慢	ヲコタル
59	六 11a	然ハ	ミカラ
60	六 11a	相双ンテ	アヒナラ
61	六 11a	慌忙	アハテテ
62	六 11a	奔出	ハシリイテ
63	六 11a	許多	アマタ
64	六 11a	足下	ゴヘン
65	六 11a	救命	イクメイ
66	六 11a	心	キモ
67	六 11b	所為	シワザ

	所在	語彙	振り仮名
68	六 11b	小兒	セカレ
69	六 11b	尋覓	タヅネ
70	六 11b	救メ	モト
71	六 11b	愈黍	イヨクカタシケ
72	六 11b	情愿	ネガツテ
73	六 11b	慢線	タラリ
74	六 11b	後堂	ウラノヤシキ・コウタウ
75	六 11b	欸持	モテナシ
76	六 12a	累代	ルイタイ
77	六 12a	豪富	ブンケン
78	六 12a	等閑	トフサリ
79	六 12a	幾個	アマタ
80	六 12a	險然	スンテニ・ホトンド
81	六 12a	非命	イヌ
82	六 12a	容貌	カタチ
83	六 12a	甚リ	アマ
84	六 12a	大タル	タケ
85	六 12a	不驢不羸	フラチ
86	六 12a	通誠	モフサク
87	六 12a	災殃	ワサハイ
88	六 12a	保佑	マモリ
89	六 12a	向キ	サ
90	六 12b	托	タノマ
91	六 12b	承允	シヤウイン
92	六 12b	假使	タトヒ
93	六 12b	踏ミ	フト
94	六 12b	駟馬	シメ

	所在	語彙	振り仮名
95	六 12b	靠	ヨラ
96	六 12b	計較	アイホツ
97	六 12b	通紅	モミヂ
98	六 12b	眾	モロモロ
99	六 12b	管家	テダイ
100	六 12b	關	タケナヲ
101	六 13a	客中	タビ
102	六 13a	穽	サゾ
103	六 13a	時常	ヲリヲリ
104	六 13a	拜候	ヲミマヒ
105	六 13a	見教	シメシ
106	六 13b	合	カナ
107	六 13b	遍	アマネク
108	六 13b	房屋	ヤシキ
109	六 13b	占棲	シメフマ
110	六 13b	妖屋	ハケモノヤシキ・ヤウヲク
111	六 13b	經	トヲ
112	六 13b	相識	チカヅキ
113	六 13b	探聽	キキタテ
114	六 13b	冷笑	アサワラツ
115	六 13b	妖怪	バケモノ・ヤウクハイ
116	六 13b	衢	マチ
117	六 14a	縱然	タトヒ
118	六 14a	驚恐	ヲドロキ
119	六 14a	退悔	クヒ
120	六 14a	咲話	ワラヒグサ
121	六 14a	彼	カンコ

	所在	語彙	振り仮名
122	六 14a	疎失	アヤマチ
123	六 14a	怎生	イカカ
124	六 14a	意	ココロ
125	六 14a	燈火	トホシビ
126	六 14a	捱至	ヲシイタ
127	六 14a	竈後	ヘツツイノウシロ
128	六 14a	地下	ニハ
129	六 14a	迸出	ハナツ／ワキイテ 六 14a
130	六 14b	照耀	テリカヤキ
131	六 14b	廻施	メグリ
132	六 14b	跟定	ツキマトウ
133	六 14b	火原	ヒモト
134	六 14b	忽然	ゴツガシン
135	六 14b	眼	ニナコ
136	六 14b	天	ヨ
137	六 14b	纒	ワヅカ
138	六 15a	刻付	トリフケ
139	六 15a	留置	トトメヲイ
140	六 15a	遮莫	サモアラバアレ
141	六 15a	太夕	ハナハ
142	六 15a	拘束	ヘンクツ
143	六 15a	權且	カリニカツ
144	六 15a	執意	カタク
145	六 15a	氣キ	セ
146	六 15a	扭戻	サカラフコト
147	六 15a	叫テ	コハワツ
148	六 15a	哭シ	ニク

	所在	語彙	振り仮名
149	六 15b	衆	モロモロ
150	六 15b	缸	ツボ
151	六 15b	交シテ	ワタ
152	六 15b	大生理	ヲフアキナヒ

本小節では、上記表 5 から 10 例を取り上げて分析を施す。

### 1) 遊俠（ヲトコダテ）

a. 管在長崎有孫八者。膂力過人、遊俠自得。

＜『唐話纂要』・卷六・一葉オ＞

b. 管在長崎ニ孫八ト云フ者アリ。膂力人ニ過キテ。遊俠ヲ自得ケル。

＜『唐話纂要』・卷六・九葉オ＞

上記の原文は「昔、長崎に孫八という人がいた。彼は人より力持ちで、遊俠の生活を楽しんでいた。」という意味である。岡島冠山はこの場合「遊俠」を「ヲトコダテ」と注釈している。漢字に改めると「男伊達」である。

漢語として、「遊俠」は「男伊達」と「いたずら者」や「遊び人」という意味を包含している。以下用例を 2 つ取り上げて分析を施す。

i 漢代司馬遷による『史記』、卷第一百二十四、「游俠列傳第六十四」では、「今游俠、其行雖不軌於正義、然其言必信、其行必果、已諾必誠、不愛其軀、赴士之阨困、既已存亡死生矣、而不矜其能、羞伐其德、蓋亦有足多者焉。」という用例が見られる。これは、「今言う遊俠とは、その行為が世の正義と一致しないことはあるが、言ったことは絶対に守り、やろうと決めたことは絶対やり遂げ、一旦引き受けたことは絶対に実行し、他人の苦難のために身を投げて奔走し、危急存亡の境目を越えたとしても自分の能力を驕らず、自分の徳行を自慢することを恥とし、そう言った重んずべき処を全て有するものである。」という意味である。よって、この場合「遊俠」はその行為が世の正義と一致しないことはあるが、立派な男伊達である事が明らかである。

ii 南北朝、宋代劉義慶が編纂した『世説新語』、「自新第十五」では、「戴淵少時、遊俠不治行檢。嘗在江淮間攻掠商旅。陸機赴假還洛、輜重甚盛。」

という用例が見られる。これは、「戴淵は、若い時、遊俠にふけり、行いが治まらなかった。」という意味である。この場合、「遊俠」は「いたずら者」あるいは、「まともな職を持たずにブラブラする人」を意味する。

よって、「孫八救人得福」の文脈を辿ると、岡島冠山は傍訳によって「遊俠」を「他人の苦難のために奔走する男伊達」と意味づけた。それは、作者が読者に孫八の人柄を分かるように振られた適訳だと判断できる。

## 2) 干隔滌漢（ヒカゲモノ）

a.後有事故而被官逐放、遂爲干隔滌漢、而流落京師。

＜『唐話纂要』・卷六・一葉オ＞

b.後事有テ逐放セラレ。遂ニ干隔滌漢トナリテ。京都ニ流落。

＜『唐話纂要』・卷六・九葉オ＞

上記の例文は、「後、事情があって追放され、遂にヒカゲモノになり、京都に落魄れた。」という意味である。岡島冠山は「干隔滌漢」を「ヒカゲモノ」と注釈している。漢字に改めると「日陰者」であり、表立って世の中には出られない人を指している。文脈によれば、孫八は事情があって追放された身分である爲、正に世には堂々と出られない人である。一方、『小説字彙』にも「干隔滌漢」という言葉が収録され、逸文は同じく「ヒカゲモノ」である。現代日本語で言えば、「訳ありな人物」であろう。

漢語として、「隔滌」は本来「疥癬」を意味し、「漢」は「男性」を意味する。よって、「干隔滌漢」は元々「疥癬にかかった人」を指していたが、後、「汚い人」から「まともな仕事を持たない人」を意味する口頭語となった。

以下、用例を一例取り上げ、分析を施す。

明代施耐庵による『水滸傳』明容興堂刻本第一回では、「他平生專好惜客養閒人、招納四方干隔滌漢子。」という用例が見られる。これは、「彼は平素客好きで、遊び人を養うことを好んで、あらゆる所から訳ありの人物を招いた。」という意味で、この場合、「干隔滌漢子」は「汚い人、訳あり人物」という意味である。

「干隔滌漢」は元来疥癬にかかった人を指しているが、漢文小説においては「汚い人物」、「訳あり人物」という意味で使用されるのが一般的であ



る。よって、「孫八救人得福」訳文の「干隔滂漢」に対する「日陰者」という傍訳は、孫八の境遇を考えた上の適訳と言える。

### 3) 粧扮（ヨソオヒ・シャウソク）

a.孫八在人叢中視此少年約年十六七、花塊面貌、玉砌身軀、氣色和順、粧扮風流、真男中美人也。

＜『唐話纂要』・卷六・二葉オ＞

b.孫八其少年ヲ視ルニ。年十六七バカリニテ。花ヲ塊タル面貌。玉ヲ砌タル身軀。氣色和順。粧扮風流真ノ男中ノ美人ナリ。

＜『唐話纂要』・卷六・九葉ウ＞

上記の文例は「孫八はその少年を見た。彼は歳およそ十六、十七歳で、顔は花のように美しく、体つきは玉のように玲瓏として、心は和やかで、身だしなみはとても風流で誠に男の中の美形である。」という意味である。岡島冠山は「粧扮」を「ヨソオイ」と「シャウソク」と注釈した。左注の「ヨソオヒ」は漢字に改めると「装い」であり、右注の「シャウソク」は漢字に改めると「装束」である。

「装束」という傍訳は、『和名類聚抄』にすでに「装束部」とあるように、平安時代よりも早い時期にすでに日本語に定着したと考えられる。その意味は衣冠・束帯など身につける物である。

一方、「装い」は身なりを整えることや衣服を身につけることを指し、他にも、「偽装する」という意味も含まれる。が、右注の「装束」は衣服を身につけるという意味しか含まれていないから、語彙の意味が特定された。文脈によれば、少年は美人で、風流に偽装したとは考えられなく、風流な服を身に着けたと判断したほうが適切である。

漢語として、「粧扮」は「仮装する」、「身だしなみ」や「演じる」等の意味を包含している。以下、用例を3つ取り上げて分析を施す。

i 元代高明による『琵琶記』第二十七出では、「恰纔小鬼是我粧扮的。」という用例が見られる。これは、「さきの鬼は、私が仮装したものだ」という意味であり、この場合、「粧扮」は「仮装する、ふりをする」という意味である。

ii 明代施耐庵による『水滸傳』明容與堂刻本第八十二回では、「粧扮的是

太平年萬國來朝、雍熙世八仙慶壽。」という用例が見られる。この場合は、「演目を演じる」という意味で、「粧扮」は「演じる」という意味である。

iii 清代吳敬梓による『儒林外史』のにおいては「這姑娘有個兄弟，小他一歲若是粧扮起來，淮清橋有十班的小旦，也沒有一個賽的過他。」という記述が見られる。これは、「この娘には一歳年下の兄弟がいて、彼が身だしなみを整えると淮清橋の小旦が何人居ても敵わない」という意味であり、この場合、「粧扮」は「身だしなみ、または身だしなみを整える動作」を意味する。

よって、上記の各用例から、「孫八救人得福」における「粧扮」を「ヨソオイ」や「シャウソク」と訳したのは極めて適切なもので、数多くの意味から原典を充分理解した上で振られた適訳だと判断できる。また、すでに日本語に定着した漢語語彙「装束」を用い、新しく伝来した中古漢語語彙を解釈する一例でもある。

#### 4) 慢線（タラリ）

a. 時間建仁寺三更鐘慢線之聲建仁寺三更鐘撞得太慢因俗取放慢線之義而稱曰慢線鐘聲既至其家。

＜『唐話纂要』・卷六・四葉ウ＞

b. 此時建仁寺ノ三更ノ鐘慢線ノ声ヲソ聞ニケレ。已ニ家ニ至リシカハ。

＜『唐話纂要』・卷六・十一葉ウ＞

上記の用例は「その時、建仁寺三更の鐘の音は余韻を響かせていた。その音を聞いてすでに家に到着した。」という意味である。「慢線」という言葉も他の白話小説においても用例が見当たらない。一方、漢文原文においては、「建仁寺三更鐘撞得太慢因俗取放慢線之義而稱曰慢線鐘聲」という割注が振られている。これは、「建仁寺三更の鐘はとくにゆっくりとしているため、皆に『慢線鐘聲』と言われている」という意味であり、「慢線」は当時かなり限られている地域の俗語であることが明らかである。

よって、「慢線」は恐らく限られた地域に使用されていた俗語だと考えられる。また、「タラリ」という傍訳は文脈を通した適訳だと判断出来る。

#### 5) 險然（スンテニ・ホトンド）

a. 凡事隨其性以自在之故不告父母而遠遊、險然死於非命也。

＜『唐話纂要』・卷六・四葉ウ＞

b.自由ヲ致サセ候フニ因リ今夜父母ニモ告ズシテ遠ク遊ビ險然非命死ヲ致ントシタリ。

＜『唐話纂要』・卷六・十二葉オ＞

上記の原文は「性格が自由であるため、親に内緒で遠く遊びに行った。結局危うく命を落とすところだった。」という意味である。岡島冠山は「險然」の左に「スンテニ」と傍注し、右に「ホトンド」と注釈している。「スンテニ」は漢字に改めると「既に」であり、「ホトンド」は漢字に改めると「殆ど」である。

漢語として、「險」は「困難」や「危険」という意味であり、「然」はこの場合、状態を表している。よって、「險然」は「危ない様子」という意味である。しかし、「險然」の漢文小説における用例が管見の限り見当たらなかった。

一方、左注の「既に」は「もう少しで」、「危うく」という意味であり、極めて適切な訳だと判断できる。また、右注の「殆ど」は副詞として「全てに近い程度」という意味と、「もう少しのところまで」という意味も包含している。よって、「殆ど」という傍訳も適訳だと判断できる。

上記を踏まえて、「險然」は岡島冠山が経史子集などの古典漢文学で得られた知識を用いて作られた言葉であろうと考えられる。また、その漢語としての意味も文脈によれば極めて適切であり、言葉の両側に振られている注釈も適訳だと判断できる。

#### 6) 不醜 不尠 (フラチ)

a.况彼容貌不甚醜、年紀未爲大、因屢有是非、不醜 不尠、教爹娘竟放心不下。

＜『唐話纂要』・卷六・四葉ウ＞

b.且小兒カ容貌甚リ醜モ候ハズ。年モ未タ大タルニモアラザルエヘ。毎度何ヤラ是非ガマシキ。不醜 不尠ノ事ドモ之アリテ。父母ヲシメ放心致サシメス。

＜『唐話纂要』・卷六・十二葉オ＞

上記の例文は「そして彼はそんなに醜くないし、また若いから、度々厄介なことを招いて都合の良くないことに遭ったりして、親としてはとって

も放っておけないのです。」という意味である。岡島冠山は「不羸不尪」において「フラチ」と傍訳を振っている。漢字に改めると「不埒」であり、「道理はずれなこと」若しくは「要領を得ないこと」を意味する。

文脈によれば、亀松の父親は自分の息子を、見た目はそこまでも醜くないし、年齢もそんなに取ってないから、時々よくないことに遭ってしまうと言ひ、心配しているから正に「道理はずれで、よくないこと」だと判断出来る。

岡島冠山が翻案した漢文小説『太平記演義』においても、「不羸不尪」の用例が見られる。それは、『太平記演義』第十二回に、「比及走過長崎四郎判官高貞馬槽前、被守槽門軍士等攔住正成、而盤問到：「爾是甚人？不羸不尪、來得蹺蹊」<sup>99</sup>である。これは、「軍士が正成を停めて、『あなたは何者だ！怪しいし、今ここに來るなんて疑わしいぞ！』と聞いた」という意味である。この場合、「不羸不尪」は「蹺蹊」と連用し、意味は同じであると推測出来る。「蹺蹊」は「怪しい。道理外れ」という意味で。「不羸不尪」も同じく「怪しい。道理外れ」という意味である。

「羸」と「尪」は異体字であり、「尪」と「尪」は異体字である。漢語として、「不羸不尪」は「嫌らしい」や「対処しにくい」、「使えない」などの意味を包含している。以下、用例を9つ取り上げて分析を施す。

i 明代蘭陵笑笑生による『金瓶梅詞話』では、「那薛姑子就有些不羸不尪、專一與那些寺裡的和尚行童調嘴弄舌眉來眼去」という用例が見られる。これは、「あの薛氏はちょっといやらしくて、いつもお寺のお坊さんや修行中の僧とイチャイチャしている。」という意味であり、この場合、「不羸不尪」は「いかがわしい、嫌らしい」という意味である。

ii 明代劉東生による『嬌紅記』第三十八出、「榮晤」では、「似這等不羸不尪、沒底相思、害的我蕭蕭頭白。」という用例が見られる。これは、「このような、どうしようもなく限りのない思いで、私は白髪まで生えた。」という意味であり、この場合、「不羸不尪」は「どう処理すれば分からない、対処しにくい」という意味である。

---

<sup>99</sup> 王三慶、莊雅州、陳慶浩、内山知也主編 『日本漢文小説叢刊』第一輯 神怪傳説類・講史類第四冊（臺灣學生書局 2003）p.269

iii 明代末期凌濛初による『初刻拍案驚奇』第二十五卷では、「雖是寄了一兩番信、又差了一兩次人、多是不尷不尬、要能不夠的。」という用例が見られる。これは、「何回手紙を出して、また人を遣って見たが、多くは上手くいかず、全く使いものにならなかった。」という意味であり、この場合、「不尷不尬」は「問題解決にならない、使えない」という意味である。

iv 清代馮夢龍による『醒世恒言』第三十四卷では、「看了那樣光景，方懊悔前日逼勒老婆，做了這樁拙事。如今又弄得不尷不尬，心下煩惱」という用例が見られる。これは、「後悔した上に、今も窮地に陥ってしまい、イライラする。」という意味であり、この場合、「不尷不尬」は窮地に陥る様子を指している。

v 清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本、第九十回では、「及見了寶蟾這種鬼鬼祟祟、不尷不尬的光景、也覺了幾分。」という用例が見られる。これは、「寶蟾の怪しくて疑わしい様子を見てから、ますますこう思ってきた。」という意味であり、「不尷不尬」は「怪しい、疑わしい」という意味である。

vi 清代吳敬梓が著した『儒林外史』第二十二回では、「外甥女少不的是我們養著、牛姑爺也該自己做出一個主意來。只管不尷不尬住著、也不是事。」という用例が見られる。この場合は、「姪っ子はいつも私たちが養っていますが、あなたもいい加減決断をしてください。このままはっきりせずにここに住んでも良くないです。」という意味であり、「不尷不尬」は「はっきりしない」という意味である。

vii 清代李漁による『鳳求鳳』第二十六出では、「真是個疑心生暗鬼、為甚麼他去了半晌、覺得我身子裡面、有些不尷不尬起來。」という用例が見られる。これは、「本当に疑心暗鬼を生ずという通り、どうして彼がちょっと離れただけなのに、あたしはもうイライラして気持が悪くなった？」という意味であり、この場合、「不尷不尬」は「気分が悪くなる、くつろげない」という意味である。

viii 清代李漁による『玉騷頭』第二十出では、「如今要與劉公公商議、作樁不尷不尬的事兒。」という用例が見られる。これは、「今は劉公公と相談して、公にはなれないことを計画する。」という意味であり、「不尷不尬」は

「秘密なこと」という意味である。

ix 清代李漁による『十二楼』第十二回、「歸正樓第二」では、「我看你進京一次也費好些盤纏、有心置貨、索性多置幾箱、為什麼不尷不尬、只帶這些。」という用例が見られる。これは、「あなた都に一回来て、かなり旅費がかかるでしょう？仕入れようと言う気があるなら、何故けち臭くこれぐらいしか買わないの？」という意味であり、この場合、「不尷不尬」は「けち、吝嗇」という意味である。

よって、上記の各用例から、「孫八救人得福」における「不尷不尬」を「フラチ」と訳したのは極めて適切なもので、数多くの意味から選択した物語に最も相応しい適訳だと判断できる。

また、「不尷不尬」の「不」はただ音節を補い、語気を強まる役割を果たすだけで、否定する意味は含まれてない。従って、語義的には「尷尬」や「不尷尬」と同じである。明代施耐庵による『水滸傳』明容與堂刻本卷十四では、「李小二應了、自來門首叫老婆道、『大姐、這兩箇人來得不尷尬。』老婆道、『怎麼的不尷尬。』小二道、『這兩箇人語言聲音是東京人初時又不認得管營』」という用例が見られる。この場合、「不尷尬」は前述した「不尷不尬」の意味vと同じく、「怪しい」という意味である。

#### 7) 通誠（モフサク）

a. 以故常通誠于天滿天神、以禱其保佑小兒身上永無災殃。

＜『唐話纂要』・卷六・四葉ウ＞

b. 此故ニ常ニ天滿天神ニ通誠シテ。小兒ガ身ノ上ニ。永ク災殃ナカラシヤウニ。保佑タマハンコトヲ禱ル。

＜『唐話纂要』・卷六・十二葉オ＞

上記の例文は、「故に、常に天滿天神を供養し、我が子の身には永遠に災いがないように祈っている。」という意味である。岡島冠山は「通誠」を「モウサク」と注釈している。漢字に改めると「申さく」であり、申し上げのことを指している。文脈によれば、親である三木治平が息子の無事を天滿天神に祈り、願いを申し上げるとも考えられる。

漢語として、「通誠」は本来「誠意を表す」という意味で、神仏に誠意を表すことで、「祈る」や「願いする」という意味も、皇帝や目上のひとに誠

意を表すことで、「申し上げる」という意味も包含する。

以下、用例を2つ取り上げ、分析を施す。

i 唐代房玄齡等によって編纂された『晋書』（『武英殿二十四史』本）卷八十七、列傳第五十六では、「寡君所以遣下臣冒險通誠、不遠萬里者、以陛下義聲遠播、必能愍寡君勤王之志。」という用例が見られる。この場合、「通誠」は「（目上の人に）誠意を表す」という意味である。

ii 清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本、第六十九回では、「於是天地前燒香禮拜、自己通誠禱告說、我情願有病、只求尤氏妹子身體大愈、再得懷胎生一男子、我願吃常齋念佛。」という用例が見られる。この場合、「通誠」は「（仏様に）祈る」という意味である。

よって、「孫八救人得福」訳文の「通誠」における「申さく」という傍訳は、文脈を考えた上で振られた適訳と判断できる。

#### 8) 通紅（モミヂ）

a.孫八事出意外、慌失計較、只得滿面通紅。

＜『唐話纂要』・卷六・五葉オ＞

b.孫八ハ案ノ外ナル事ナレハ。慌テ計較ヲ失ヒ。只滿面ニ通紅シヌ。

＜『唐話纂要』・卷六・十二葉ウ＞

上記の例文は、「孫八は思いもよらなかったことに会い、慌てて何をすれば良いかも分からなくなり、顔が真っ赤になった。」という意味である。岡島冠山は「通紅」を「モミジ」と注釈している。漢字に改めると「紅葉」である。恥ずかしさや怒りなどで顔を赤くすることを、「紅葉を散らす」と言われるよう、「紅葉」で赤くすることを意味することも考えられる。

漢語として、「通紅」は「真っ赤」という意味である。

以下、用例を一例取り上げ、分析を施す。

明代末期凌濛初による『初刻拍案驚奇』第一卷では、「王老強納在金老袖中、金老欲待摸出還了、一時摸個不著、面兒通紅。又被王老央不過、只得作揖別了。」という用例が見られる。これは、「王老は無理やりお金を金老の袖に入れて、金老は探り出して返そうと思ったが、すぐには取り出せなくて顔が真っ赤になった。」という意味であり、この場合、「通紅」は恥ずかしくて、顔が「真っ赤」になったという意味である。

よって、「孫八救人得福」訳文の「通紅」における「紅葉」という傍訳は、文脈を考えた上で振られた適訳と判断できる。また、辞書的な単純語釈を越えた、文学的で優雅な翻訳でもある。これより、岡島冠山は漢語語彙に対する理解がとても優れていることが明白であり、江戸期知識人の洒落た文風の表われとも考えられる。

#### 9) 拜候 (ヲミマヒ)

a. 雖不敢移搬貴府、亦敢時常來拜候。

＜『唐話纂要』・卷六・六葉オ＞

b. 某縦ヒ貴宅ニ移ズト云フトモ。時常拜候申スベシ。

＜『唐話纂要』・卷六・十三葉オ＞

上記の例文は、「私はお宅に住み着くことができないが、必ず時々お訪ねします。」という意味である。岡島冠山は「拜候」を「オミマヒ」と注釈している。漢字に改めると「お見舞い」であり、本来は他人を訪問することを意味するが、現代日本語では、一般的に怪我を負ったひとや患者に訪れ、慰める事を指す。文脈によれば、孫八は三木家に住み着く事を断り、時々訪問することを約束した。故に、「孫八救人得福」における傍注の「お見舞い」は「訪問する」という意味で捉えていると考えられる。

漢語として、「拜候」は「訪問する」という意味である。

以下、用例を一例取り上げ、分析を施す。

明代凌濛初による『二刻拍案驚奇』卷十五では、「顧主事領命、果然給假衣錦回郷。郷人無不稱羨。因往江家拜候、就傳女兒消息。江家喜從天降。」という用例が見られる。この場合、「拜候」は「訪問する」、「訪れる」という意味である。

よって、「孫八救人得福」訳文の「拜候」における「お見舞い」という傍訳は、漢語語義から見ても、文脈を考えた上で振られた適訳と判断できる。また、現代日本語との比較から、語義の一部が欠落した現象も見られる。

#### 10) 拘束 (ヘンクツ)

a. 足下何太拘。萬望權且收之。

＜『唐話纂要』・卷六・八葉オ＞

b. 足下何故太タ拘束ナルゾ。我存念ニ任セテ。權且此金ヲ收メ候ヘト。



上記の例文は「あなた何故こんなに頭が堅いの？私の心根を察して、このお金を一応受け止めてください。」という意味である。岡島冠山は「拘束」を「ヘンクツ」と注釈した。漢字に改めると「偏屈」であり、「すなおでなく、ねじけていること」という意味である。

漢語として、「拘束」は元来「捕らえて縛られる」という意味であり、熟語化して「堅苦しい」等の意味を包含するようになった。以下、用例を2つ取り上げて分析を施す。

i 晉代葛洪による『神仙伝』卷九、「介象」では、「書生知象非凡人、密表奏象於主、象知之欲去曰、恐官事拘束我耳。」という記述が見られる。これは、「書生は象が凡人じゃないことを知り、密かに主に象のことを報告した。象はこれを知って去ろうとして『綴じ込まれることを恐れているのだ』と言った。」という意味であり、この場合、「拘束」は「自由を制限される」、「束縛」という意味である。

ii 清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本第二十二回では、大觀園の皆が集まった席に賈政が現れ、誰もが口数を減らした場面に、「寶釵原不妄言輕動、便此時亦是坦然自若。故此一席、雖是家常取樂、反見拘束。」という記述が見えられる。これは、「寶釵は元々軽率な行動をとらない人だから、たとえこんな時にでも、余裕で落ち着いている。故に、この一席は一家団らんの場合なのに、皆がとっても不自然であった。」という意味であり、この場合、「拘束」は「不自然、堅苦しい」という意味である。

また、傍訳の「偏屈」は素直でなく、拗けていることを指している。よって、「偏屈」は「拘束」の意味と若干ズレが見られる。しかし、文脈によれば、孫八はどうしてもお金を受け取らないから、「頭が固い、堅苦しい」と言われている。よって、「拘束」は漢語としての意味iiと同じく、性格がすなおでないことを表現しているから、傍訳である「偏屈」は文脈を考えた上に振られた適訳だと判断出来る。

### 2.3 まとめ

『唐話纂要』所収「孫八救人得福」は上記の分析から近世漢語受容の特徴は以下のようにまとめる事が出来る。

①例 1) 遊俠 (ヲトコダテ)、例 2) 干隔滂漢 (ヒカゲモノ) のような、言葉に対する語釈だけでなく、読者を考えて、物語をより分かりやすくするために加えた傍訳が見られる。

②例 3) 粧扮 (ヨソオヒ・シャウソク) のような他の漢語を用いて近世漢語語彙を訳す場合も見られる。

③例 4) 慢線 (タラリ) のような当時限られた地域に使用されていた俗語、口頭語であろうと判断できる傍訳も見られる。

④例 5) 險然 (スンテニ・ホトンド) のような傍訳は適訳であるが、漢語語彙自体が作者である岡島冠山によって作られたことばだと推測できる例もられる。この点については、まだ検討する余地を残す。

⑤例 6) 不羸不魁 (フラチ)、例 7) 通誠 (モフサク)、例 9) 拜候 (ヲミマヒ)、例 10) 拘束 (ヘンクツ) のように、近世漢語語義を充分理解した上に、文脈に相応しい意味を選択した傍訳も見られる。

⑥例 8) 通紅 (モミヂ) のような、江戸期知識人特徴的な洒落た表現を使った傍訳も見られる。

全てが著者・訳者である岡島冠山が近世漢語としての意味を十分理解した上で文章に用いた語彙であり、翻譯に際しては更に江戸期当時の慣用的な言葉や物語をよりわかりやすくするための工夫を凝らしている。

このように、江戸期の唐話学者は中国經典の勉強から得た経験や知識を用いて、新たに流入してきた近世漢語語彙を読み解く能力がかなり優れていたと言えよう。

### 3. 「徳容行善有報」から見る近世漢語語彙の受容

#### 3.1 「徳容行善有報」について

本小節の基礎資料となるのは、『唐話纂要』巻六所収、『和漢奇談』に収録されている「徳容行善有報」という漢文小説及びその訳文である。

「徳容行善有報」は文体から見れば話本小説に該当し、内容から見れば世情類小説に当たる。「徳容行善有報」は主人公である李徳容という長崎で貿易をする商人が友人に、ある落魄れ武士の家の美人の娘を紹介され、この女の子が自分の妹と凄く似ていることに気付き、結局彼女を義理の妹と見做し、お金持ちの家にお嫁に行かせた。このような善事をしたため、帰り道に船が暴風に遭ったが、媽祖という船の神様が現れ、李徳容一同を助けたという物語である。

#### 3.2 「徳容行善有報」における傍訳と近世漢語語彙

「徳容行善有報」の訳文より採取した左サビが振られている延べ 845 語のうち、訳注だと判断できるのは 68 語である。

[表 6: 「徳容行善有報」訳文における傍訳]

	所在	語彙	振り仮名
1	六 22b	嫡子	チヤクシ
2	六 22b	販テ	ハコビ
3	六 22b	寓	ヤド
4	六 22b	消遣	ナグサミ
5	六 22b	荆棘林	クルワ
6	六 22b	名妓	ナトリ・メイキ
7	六 23a	寂殘	イトノコリ
8	六 23a	倡伴	トギ
9	六 23a	寂寞	ツレツレ
10	六 23b	等閑	ナヲザリ
11	六 23b	市上	マチ
12	六 23b	處女	ムスメ
13	六 23b	吾子	ゴヘン／ナンヂ 六 23b

	所在	語彙	振り仮名
14	六23b	勸	イサタ
15	六24a	氷人	ナカダチ
16	六24a	床	ロコ
17	六24a	來由	ユクタテ
18	六24b	宿資蓄貨	タクハエ
19	六24b	加之	シカノミナラス
20	六24b	拙荆	ニヤウバア・セツケイ
21	六25a	落魄	チチブレ
22	六25a	須臾	シバラク
23	六25a	喚出シテ	ヨヒイダ
24	六25a	見エシム	マミ
25	六25a	蓮歩	アシ・レンホ
26	六25a	徐	シブカニ・ユルク
27	六25a	肩下	カタハラ
28	六25a	風鬢霧鬢	カゼノモトトリキリノビンヅラ
29	六25a	綽約多姿	タヲヤカナルスガタ
30	六25a	神魂飄蕩テ	タマシイウカレ
31	六25a	青春	トシ
32	六25a	髻髻	ソノママ／ハウハウ 六25b
33	六25b	悽慘	カナシミ
34	六25b	低テ	タレ
35	六25b	良久	ヤヤヒサシ
36	六25b	嘖テ	シカツ
37	六25b	幾何	イクバク
38	六25b	甲子	トシ
39	六25b	容貌	カタチ
40	六25b	差ハズ	タガ

	所在	語彙	振り仮名
41	六25b	孰	イツレカ
42	六26a	幾ト	ホトン
43	六26a	時常	ヲリヲリ
44	六26a	一應	イツシキ・イチヲ
45	六26a	破褥	コギフトン
46	六26a	櫃箱	ジツハコ
47	六26a	首飾	テグサ
48	六26a	家伙	ダウグ
49	六26b	貨物	ニモツ
50	六26b	客廳	ザシキ
51	六26b	衆皆	ミナミナ
52	六26b	歩頭	ハト・ガシ
53	六26b	順風相送	ジュングウアヒヲク
54	六27a	顛翻ズ	ヒルガエサ
55	六27a	船主	フナヌシ・センシユ
56	六27a	才副	モノカキ・ザイフ
57	六27a	總管	モトジメ・ソウクハン
58	六27a	香公	フナカミノヤク・コウコウ
59	六27b	還ン	ホトカ
60	六27b	悲聲齊起テ	カナシナコエヒトシクヲコツ
61	六27b	泪水相濕ス	ナンタアヒウルヲ
62	六27b	舵公	カヂトリ
63	六27b	舵牙	カヂヅカ
64	六27b	更換	アラタメ
65	六27b	斯ル	カカ
66	六28a	爾等	ナンチラ
67	六28a	諭ス	シメ

	所在	語彙	振り仮名
68	六28a	言訖	イヒヲハ

本小節では、上記表 6 から 10 例を取り上げて分析を施す。

### 1) 消遣 (ナグサミ)

a. 無日不來往於稻山大浦等處以消遣。

＜『唐話纂要』・卷六・十六葉オ＞

b. 毎日稻山大浦等ノ所ニ來往シテ消遣ケル。

＜『唐話纂要』・卷六・廿二葉ウ＞

上記の例文は「毎日稲山や大浦などの所を行き来きして遊んでいた。」という意味である。岡島冠山は「消遣」を「ナグサミ」と注釈している。漢字に改めると「慰み」である。文脈によれば、李徳容は毎日稲山大浦などの処に行き来して時間を費やしたという意味である。

漢語として、「消遣」は「時間をつぶす」という意味であり、「暇つぶしをする」や「いたづらをする」という意味も包含している。以下、用例を 3 つ取り上げ、分析を施す。

i 明代馮夢龍による『警世通言』第六卷では、「既在暇日、了無一事、因獨步東階。天氣乍暄、無可消遣、遂呼蒼頭前導、閒遊園中。」という用例が見られる。これは、「天氣が丁度突然暖かくなり、暇つぶしできないことがないから、下僕を呼んで案内してもらった。」という意味であり、この場合、「消遣」は「暇つぶしする」という意味である。

ii 明代施耐庵による『水滸傳』（明容與堂刻本）第二十一回では、「那漢氣將起來、把宋江劈胸揪住大喝道、你是甚麼鳥人、敢來消遣我。」という用例が見られる。これは、「あの男は怒り、宋江の襟を掴みんで言った。『あなたはなにものだ！よくも俺をからかう勇気があるね！』」という意味である。この場合、「消遣」には「からかう」の意味も包含している。

よって、「徳容行善有報」の訳文における「消遣」に対する「慰み」という傍訳は若干ズレが感じられる。一方、文脈によれば、李徳容の寂しさを慰めるという意味で捉え、「暇つぶし」でもあり「慰み」でもあるとも考えられる。

### 2) 荆棘林 (クルワ)

a.既至荆棘林。遍見當時名妓數十人。

＜『唐話纂要』・卷六・十六葉オ＞

b.又既ニ荆棘林ニ至テ。當代ノ名妓數十人見ケレトモ。

＜『唐話纂要』・卷六・廿二葉ウ＞

上記の例文は「すでに遊廓に入り、当時名妓十数人を全部見た。」という意味である。岡島冠山は「荆棘林」を「クルワ」と注釈した。漢字に改めると「廓」や「郭」であり、元々はお城の周囲で土や石などで築いたもので、後、周囲を塀などで囲まれた地域を指し、遊女屋が集まった地域を指している。文脈によると、原文における「荆棘林」は「名妓と会える所」を指す。

漢語として、「荆棘林」は「いばらの林」であり、熟語化された場合、「煩惱」や「執着」、「危ない立場」等の意味を包含している。

以下用例を2つ取り上げて分析を施す。

i宋代園悟克勤によって編纂された『碧巖録』第六十九則では、「透荆棘林。衲僧家。如紅爐上一點雪。」という記述が見られる。これは、「煩惱や執着の象徴であるいばらの林を通り抜けて来た禅の僧ならば、まるで真っ赤に燃えている鉢炉の上に舞い落ちた一枚の雪のように、あっという間に消えてしまうのだ」という意味であり、この場合、「荆棘林」は禅宗における「煩惱や執着、俗世の欲望」などを意味する。

ii宋の時代、朱子がその門弟たちと交わした言葉を黎靖徳によって編纂された『朱子語類』卷第一百三十五、歴代二では、「張良一生成在荆棘林中過、只是殺他不得。任他流血成川、横屍萬里、他都不知。」という用例が見られる。これは、「張良は一生、いばらの林に囲まれような危ない立場に生きている。」という意味で、「荆棘林」は「いばらの林のような危ない立場や状況」という意味である。

よって、「徳容行善有報」における「荆棘林」はおそらく禅語から由来した、煩惱や執着、そして俗世の欲望の塊を象徴し、遊廓を比喩していると考えられる。

### 3) 寂寞（ツレツレ）

a.若納之而與處、必足以慰其寂寞。

＜『唐話纂要』・卷六・十六葉ウ＞

b.若此美人ヲカカエテ。一所ニ居タマハハ。御寂寞ヲモ慰メ候フヘシ。

＜『唐話纂要』・卷六・廿三葉オ＞

上記の例文は「もし彼女を収めたら、必ず李様の寂しさを慰めることができる。」という意味である。岡島冠山は「寂寞」を「ツレツレ」と注釈している。漢字に改めると「徒然」であり、「退屈なこと」を指している。

漢語として、「寂寞」は本来「静寂で侘しい」という意味で、「ひとりぼっちで寂しい」、「つまらない」や「心細い」などの意味も包含している。

以下、用例を一例取り上げ、分析を施す。

ii 清代馮夢龍による『喻世明言』第一巻では、「三巧兒一日不見他來便覺寂寞、叫老家人認了薛婆家裏、早晚常去請他、所以一發來得勤了。」という用例が見られる。これは、「三巧兒は一日会わないだけでとても寂しく感じた。」という意味である。この場合、「寂寞」は「寂しい」という意味である。

よって、「徳容行善有報」訳文の「寂寞」における「ツレツレ」という傍訳は、文脈を考えた上で振られた適訳だと判断できる。

#### 4) 等閑（ナヲザリ）

a.市郎曰。李公視名妓尚且爲等閑。況市上處女乎。

＜『唐話纂要』・卷六・十六葉ウ＞

b.市郎久助ニ對シテ云ヤウ。李公ハ名妓ドモヲ。見玉ヒテサヘスラ。尚等閑イコトニ思ヒ玉フ。況ヤ市上ノ處女ヲヤ。

＜『唐話纂要』・卷六・廿三葉ウ＞

上記の例文は「市郎は久助に対して言った、『李様は名妓共に対しても普通だと思っているから、まして町の娘にはなおさらだ。』」という意味である。岡島冠山は「等閑」を「ナヲザリ」と訳した。文脈によると、原文における「等閑」は「普通」の意味であり、傍訳の「ナヲザリ」は「あまり注意を向けずに、いい加減にする様子」である。「なお」はこの前の状態を引き継いでいることを表す副詞であり、「ぞり」は係動詞の「そ」に動詞を付けた「ぞあり」ということであろう。よって、「ナヲザリ」の原義は「気にしない、気にとめない」ということで、後「本気でなく、疎



かにする」という意味に変化したという。

漢語として、「等閑」は「安々と」や「一般に等しい」、「いつも通り」などの意味を包含している。以下、用例を4つ取り上げ、分析を施す。

i 金代董解元が編纂した『董解元西廂記』では、「魚水似夫妻正美滿、被功名等閑離拆。然終須相見、奈何時下難捱。」という用例が見られる。これは、「夫婦二人はちょうど円満で幸せな時に、功名出世にやすやすと離散させられた。最終的にはまた会えるが、今はとっても辛いものだ。」という意味であり、この場合、「等閑」は「わけもなく、安々と」という意味である。

ii 宋代彭乘による『墨客揮犀』巻二では、「云太原人喜食棗，無貴賤老少，常置棗於懷袖間，等閑採取食之。」という用例が見られる。これは、「太原人は棗が好きだと言われている。貴賤老少を問わず、いつも棗を持ち、取って食べる。」という意味であり、この場合、「等閑」は「いつも」と意味する。

iii 清代初期西周生による『醒世姻縁傳』第八十九回では、「訟師本等不敢與他寫這大狀。只圖他那許的一兩銀子。不是等閑賺的。大了膽與他寫道。」という用例が見られる。これは、「訟師（弁護士）は元々彼にこのような文書を書きたくなくて、ただ彼が承諾した一両のお金が欲しかったが、そのお金も簡単には稼げないから、勇気を出して彼にこう書いた。」という意味であり、この場合、「等閑」は「簡単に」という意味である。

iv 清代吳敬梓による『儒林外史』では、「莊紹光道。我這舍姪。亦非等閑之人。」という記述が見られる。この場合は「莊紹光は言った。私のこの姪子も、一般人じゃない。」という意味で、この場合、「等閑」は「一般や普通であること」を意味する。

よって、上記の各用例から、「徳容行善有報」における「等閑」を「ナヲザリ」と訳したのは、李徳容が名妓を普通に見ているよりも、全く注意を振らないという態度を強調し、語釈としては若干ズレが見られるが、漢語としての数多くの意味から原典を充分理解した上で振られた適訳だと判断できる。

また、「孫八救人得福」においても、以下の用例が見られる。

a.元來治平累世豪富、田庄甚多、非等閑所能比也。

＜『唐話纂要』・卷六・四葉ウ＞

b.元來治平ハ累代ノ富豪ニテ。田庄甚多シ。等閑ノ人ノ能ク及所ニアラズ。

＜『唐話纂要』・卷六・十二葉オ＞

上記の用例は「もとより、治平は累代の富豪であり、田地や屋敷いっぱい持っていて、一般人と比べ物にならないほど、とてつもないお金持ちである。」という意味である。文脈によると、「孫八救人得福」における「等閑」は「徳容行善有報」における用例と同じく、「普通な人、一般人」の意味である。

傍訳の「トフサリ」における「トフ」は「等」を音読みしたもので、「さり」は「去り・避り」で、「トフサリ」は手を打たずに避け放っておく意味で捉え、その意味は「本気でなく、疎かにする」である。

よって、「孫八救人得福」における「等閑」の傍訳は、漢語としての意味と若干ズレが見られる。

#### 5) 氷人（ナカダチ）

a.吾令公試之果如所言、吾爲氷人、宜與其父面議。

＜『唐話纂要』・卷六・十七葉オ＞

b.若我云シ如クナララ。我氷人ト成テ相談致スヘシトテ。

＜『唐話纂要』・卷六・廿四葉オ＞

上記の例文は「もし本当に私が言ったようであれば、私は仲人をして、彼女のお父様と相談する。」という意味である。岡島冠山は「氷人」を「ナカダチ」と注釈している。漢字に改めると「仲立ち」、「媒」である。

漢語として、「氷人」は「男女の仲を取り持つ人」という意味で、その語源については以下『晉書』における記述が見られる。

唐代房玄齡等によって編纂された『晉書』（『武英殿二十四史』本）巻九十五、列傳第六十五「藝術」では、「氷上為陽、氷下為陰、陰陽事也。士如歸妻、迨氷未泮、婚姻事也。君在氷上與氷下人語、為陽語陰、媒介事也。」という記述が見られる。これは、「氷の上は陽に当たり、下は陰に当たるから、（この夢は）陰陽に関する事である。もし妻がほしいなら、氷が溶ける

前に結婚したほうがいい。貴方は氷の上に立ち氷の下にいる人と話しをしている事は、陽に立ち陰と話をすることであり、男女因縁を取り持つ事である。」という意味で、故に后世は仲立ちのことを「氷人」と呼ぶようになった。

以下、用例を一例取り上げ、分析を施す。

明末馮夢龍による『醒世恆言』巻七では、「這做媒乃是氷人、撮合一天好事。除非他女兒不要嫁人便罷休、不然少不得男媒女灼。隨他古恠然須知媒人不可怠慢。」という用例が見られる。この場合、「氷人」は「媒」、「仲を取り持つ人」という意味である。

よって、「徳容行善有報」訳文の「氷人」における「なかだち」という傍訳は、文脈を考えた上で振られた適訳と判断できる。

#### 6) 蓮歩 (アシ・レンホ)

a. 見豊娘左手携其弟、右手携其妹而輕移蓮歩徐行而出、坐於父翁肩下。

＜『唐話纂要』・卷六・十八葉ウ＞

b. 豊娘左ノ手ニ其弟ヲ携ヘ。右ノ手ニ其妹ヲ携ヘ。輕ク蓮歩ヲ移シ徐行テ出來リ出、父ガ肩下ニ坐ヲナシケリ。

＜『唐話纂要』・卷六・廿五葉オ＞

上記の例文は「豊娘は左手に弟を携え、右手に妹を携え、軽く足を運び、ゆっくり出て来て、父の右下に坐った。」という意味である。岡島冠山は「蓮歩」を「アシ」と傍訳し、「レンホ」と傍注音を付けた。文脈によると、原文における「蓮歩」は「脚」の意味であり、傍訳の「アシ」と一致する。

漢語として、「蓮歩」は「脚・足」、特に女性の纏足した足という意味である。以下、用例を一例取り上げ、分析を施す。

明末凌濛初による『初刻拍案驚奇』第十七巻では、「兩女道。多謝法師。正輕移蓮歩進門來。」という記述が見られる。これは、「二人の女性が『法師、ありがとうございます。』といい、軽く歩いて入って来た。」という意味であり、この場合、「蓮歩」は「脚・足」を意味し、特に女性の纏足した小さな足を意味する。

よって、「徳容行善有報」における「蓮歩」を「アシ」と訳したのは、適訳だと判断できる。また、原文で豊娘の足や歩く姿を描写する時に「蓮歩」を用いるのは、岡島冠山が「蓮歩」という近世漢語語彙の意味を充分理解した上で、豊娘という美人を描写する時に選択した、適切な表現・語彙だと判断できる。

#### 7) 髣髴（ソノママ）

a. 卻與己妹玉蘭女青春相等、容貌髣髴宛然一樣無二。

＜『唐話纂要』・卷六・十九葉オ＞

b. 却テ己カ妹玉蘭ト其青春相等ク。其容貌髣髴ニテ。宛然トシテ一樣ナリ。

＜『唐話纂要』・卷六・廿五葉オ＞

上記の例文は「なんと自分の妹である玉蘭と年齢も大体一緒で、容貌もまるでそっくりである。」という意味である。岡島冠山は「髣髴」を「ソノママ」と注釈している。

漢語として、「髣髴」は「およそ」や「真似をする」という意味も包含する。以下、用例を2つ取り上げ、分析を施す。

i 宋代楊時による『龜山集』卷十一では、「故某嘗謂說易須髣髴聖人之意、然後可以下筆。此其所以未敢苟也」という用例が見られる。この場合、「髣髴」は「模倣する」、「継承する」という意味である。

ii 唐代敦煌変文作品を整理校注した『敦煌変文校注』卷三、「燕子賦」其一、「脊上縫歌服子、髣髴亦（欲）高尺五。」という用例が見られる。この場合、「髣髴」は「総計およそ」という意味である。

「徳容行善有報」の文脈によれば、李徳容は豊娘と自分の妹と似ているという意味であり、「髣髴宛然一樣無二」は「まるで同じような感じがする。」という意味である。よって、訳文の「髣髴」における「そのまま」という傍訳は、文脈上は考えられるが、若干ズレが見られる訳だと判断できる。

#### 8) 時常（ヲリヲリ）

a. 自此徳容時常有餽錢米。

＜『唐話纂要』・卷六・十九葉ウ＞

b.此ヨリ徳容時常錢米ヲ送ル。

＜『唐話纂要』・卷六・廿六葉オ＞

上記の例文は「これより、徳容は時々お金やお米を送ってきた。」という意味である。岡島冠山は「時常」を「ヲリヲリ」と注釈している。漢字に改めると「折々」であり、という意味である。

漢語として、「時常」は「時々」という意味であり、「普段」という意味も包含している。以下、用例を2つ取り上げ、分析を施す。

i 唐代段成式による『酉陽雜俎』續集卷六では、「寺中柿樹、白牡丹是法力上人手植。上人時常執爐循諸屋壁、有變相處輒獻虔祝、年無虛月。」という用例が見られる。この場合、「時常」は「時々」という意味である。

ii 清代李海観による『岐路燈』卷十一では、「若是棺木已漚損了須用新棺啟遷。就是時常人家說的乾骨匣兒」という用例が見られる。この場合、「時常」は「普段」という意味である。

よって、「徳容行善有報」訳文の「時常」における「折々」という傍訳は文脈を考えた上で振られた適訳と判断できる。

## 9) 家伙 (ダウグ)

a.其一應使用徳容認之衣裳被褥櫃箱首飾及粗細家伙。至于桶鍋碗碟。

＜『唐話纂要』・卷六・二十葉オ＞

b.其一應ノ雜用徳容コレヲ認テ。衣裳被褥櫃箱首飾。及ヒ粗細ノ諸家伙桶鍋碗碟等ニ至ル迄。

＜『唐話纂要』・卷六・廿六葉オ＞

上記の例文は「徳容は（結婚用の）道具を全て確認した。服や布団、たんす、箱、アクセサリなど大きいものから細かいものまで確認し、桶や鍋、食器などまでも確認した。」という意味である。岡島冠山は「家伙」を「ダウグ」と注釈している。漢字に改めると「道具」である。

漢語として、「家伙」は「日用品」や「道具」、「武器」という意味であり、「生計」、「出費」という意味も包含している。

以下、用例を4つ取り上げ、分析を施す。

i 明代高濂による『遵生八牋』卷十三では、「黒沫去盡白花見、方好用淨綿布濾過入瓶。凡家伙俱要潔淨、怕油膩不潔。」という用例が見られる。

この場合、「家伙」は「(料理) 道具」という意味である。

ii 明代陸人龍による『型世言』第七回では、「況且管庫時是個好缺、與人爭奪、官已貼肉、還要外邊討個分上遮飾耳目。兼之兩邊家伙、一旦接管官來、逐封兌過。缺了一千八百餘兩、說他監守自盜、將來打了三十板。」という用例が見られる。この場合、「家伙」は「(内外の) 出費」という意味である。

iii 明代陸人龍による『型世言』第十五回では、「就是他母親黎氏、平日被沈闖制住、也有些不像意。如今要做個家主婆腔、卻不知家伙艱難、亂使亂用。」という用例が見られる。これは、「今は女将ぶった様子をするが、生活の難しさをわからず、無駄使いをする。」という意味である。この場合、「家伙」は「生計」、「生活」という意味である。

iv 明代陸人龍による『型世言』第三十一回では、「衣服、首飾、酒器、動用家伙也得三。餘下一千、開個小小當兒。」という用例が見られる。この場合、「家伙」は「(家具などの) 日用品」という意味である。

よって、「徳容行善有報」訳文の「家伙」における「道具」という傍訳は、文脈を考えた上で振られた適訳と判断できる。

#### 10) 步頭 (ハト・ガシ)

a. 内記引婿直送於江戸町大步頭連叫順風相送、洒淚而別。

<『唐話纂要』・卷六・十八葉ウ>

b. 内記ハ婿ト共ニ江戸町ノ大步頭マデ送り來リ。再三順風相送ルト叫テ。泪ヲ流シテ別レケル。

<『唐話纂要』・卷六・二十葉ウ>

上記の例文は「内記は婿と一緒に江戸町の大埠頭まで送りに来て、何回も「万事順調」と叫び、涙流しながら別れを告げた。」という意味である。岡島冠山は「步頭」を「ハト」と「ガシ」と注釈している。文脈によれば、「步頭」は「埠頭」であると判断したほうが適切である。また、「ハト」は「波止」または「波戸」と書き、海岸から海に突き出されている石造の建築物であり、「波止場」ともいい、「埠頭」とも言う。一方、「ガシ」は漢字に改めると「河岸」である。

漢語として、「歩頭」は元来「足元」という意味であり、「歩」は「埠」と発音が同じであるため、「埠頭」や「埠頭で働いている人」などの意味を包含している。以下用例を3つ取り上げて、分析を施す。

i 宋陳淳による『北溪大全集』卷二十八、「與陳伯澡論李公晦往復書」においては「知是如是而行不去、便就歩頭思所以窒礙。」という記述が見られる。これは、「理由は分かるが、うまくいかないから、止まって考えているからもっと進まなくなった。」という意味であり、この場合、「歩頭」は「足元、もとの場所」を意味する。

ii 宋代范成大による詩、『虎牙灘』では「牛眠草色裏、犬吠竹林罅。歩頭可憐船、安穩睡殘夜。」という用例が見られる。これは、「牛は草むらに眠り、犬は竹の林の中で吠えている。埠頭には船を泊めることができ、安らかに眠れる。」という意味であり、この場合、「歩頭」は「埠頭」という意味である。

iii 元代完顔納丹による『通制條格』卷第十八では、「近年都下諸物價騰、蓋因各處所設船行歩頭刁蹬客旅、把柄船戶、以致舟船澀滯、貨物不通。」という用例が見られる。これは、「近年都の物価が高騰した。それは各所に設置されている埠頭に勤める人が客に難癖をつけ、船頭を脅迫するため、船が渋滞し、貨物が流通できなかつたから。」という意味であり、この場合、「歩頭」は「埠頭で仕事をする人」という意味である。

よって、上記の各用例から、「徳容行善有報」における「歩頭」を「ハト」と訳したのは極めて適切なものである。

### 2.3 まとめ

上記の分析から『唐話纂要』所収「徳容行善有報」における近世漢語受容の特徴を以下のようにまとめてみる。

①例1) 消遣(ナグサミ)、例7) 髻髻(ソノママ)のような言葉単位から見れば若干語義のズレが見られるが、文脈から考えれば、その場面に適応した適切な訳だど判断できる例が見られる。

②例2) 荆棘林(クルワ)のような、江戸期知識人特徴的な洒落た比喩的な言葉遣いも見られる。

②例3) 寂寞(ツレツレ)、例4) 等閑(ナヲザリ)、例5) 氷人(ナカ

ダチ)、例 6) 蓮歩 (アシ・レンホ)、例 8) 時常 (ヲリヲリ)、例 9) 家  
伙 (ダウグ) のような、近世漢語語彙を充分理解した上に、文脈に相応し  
い意味を選択した傍訳が多く見られる。

④例 10) 歩頭 (ハト・ガシ) のような、江戸期当時の慣用的な言葉を用  
いて、新しく伝来した近世漢語語彙を訳す場合も見られる。

上記の用例全てが著者でありながらも、訳者である岡島冠山が経史子集  
などの中国古典文献を学習して積み重ねてきた知識を持ち、新たに輸入し  
てきた白話語彙や近世漢語語彙を読み解く能力がかなり優れていた証拠で  
ある。



## 第二節 幕末明治期漢文小説における翻訳作品

### 1. 『通俗赤縄奇縁』に見られる近世漢語語彙の受容

#### 1.1 『通俗赤縄奇縁』について

『通俗赤縄奇縁』は『醒世恒言』第3巻に所収されている白話小説「売油郎独占花魁」を翻訳した作品の一作であり、そのほかにも『通俗古今奇観』に収録される淡齋主人訳「売油郎独占花魁」と睡雲菴主訳「通俗新編新裁奇史」の二種類が見られる。

内容は岡田袈裟男によると、「売油郎独占花魁」は宋代、女真族の国家金に敗走した第8代徽宗皇帝の時の戦乱期を舞台とした物語である。1127年に起きた靖康の変で、金の侵攻を防ぎきれなかった宋朝はいったん滅びた。詩文に浸り、酒色に耽り、政治を疎かにしたことが因をなしたとするのが定説である。<sup>100</sup>

石崎又造は『近世日本に於ける支那俗語文學史』において、西田維則について、「著述は奚疑齋風月堂の跋文によれば、巻頭に「口木子」とあるが、本名は西田維則といひ、近江の人、奚疑齋の友人で明和二年歿したと云ふ。按ずるに白駒の門人ではあるまいか。『近江の贅世子』と云ふのも彼のことである。<sup>101</sup>」と述べている。

西田維則は近江（滋賀県）の人で、岡白駒の弟子で、江戸中期の儒者であることが明白である。西田維則は『通俗赤縄奇縁』の他、「豔史」より『通俗隋煬帝外史』を編訳し、『西遊記』を翻訳し『通俗西遊記』や、『金雲翹傳』を翻訳し『通俗金翹伝』等を著した。

本小節で扱う『通俗赤縄奇縁』は宝暦11年4月に出版されたもので、全4巻4冊あり、外題は「赤縄奇縁」であり、見返しに「風流快史 赤縄奇縁 友松軒蔵」と書かれ、「宝暦辛巳之春 無愧散人書」と書かれている序が付いている。原文は漢字片仮名混じりで、漢語に字音を振られる上、補足説明として、多くの漢語語彙に傍訳が付されている。

本小節は『通俗赤縄奇縁』における傍訳が振られている漢語語彙を研究

<sup>100</sup> 岡田袈裟男 「翻刻 西田維則訳『通俗赤縄奇縁』」（『立正大学大学院紀要』32号 立正大学大学院文学研究科 2016）

<sup>101</sup> 石崎又造 『近世日本に於ける支那俗語文學史』（光明社 1840.09.15） p.152

対象とし、漢語語彙の近世漢語としての語義と傍訳の対応関係を探求し、その間の語義的「ずれ」があるかどうかを検討する事を目的とする。更に、他のすでに定着していた漢語語彙を傍訳として付される可能性も視野に入れて語彙を採取し、分析を加える。これによって、『通俗赤繩奇縁』が作成された宝暦 11 年、江戸中期頃における近世漢語の日本語に影響を与えている実態を明らかにすることを目的とする。

## 1.2 先行研究及び問題点

『通俗赤繩奇縁』に関する先行研究はまず、荒尾禎秀による「『通俗赤繩奇縁』の熟字(承前)：原典によらない熟字の性格」<sup>102</sup>と「『通俗赤繩奇縁』の熟字(承前)：原典によらない熟字の性格」<sup>103</sup>が見られる。

荒尾禎秀は論述で『通俗赤繩奇縁』に於ける「熟字」を原典と照らし合わせ、原典との一致性を検討しながら大きく 4 類に分類し、細かく 7 類に分類して一覧表にした。一方、荒尾禎秀が研究対象としている「熟字」は『通俗赤繩奇縁』に現れる漢語語彙全般であり、その漢字語彙と近世漢語としての語意との比較はなされていないため、本小節に於いては、荒尾禎秀の論述に於ける原典との比較結果を参考しながら、検討していくつもりである。

また、荒木典子による「江戸期の文献における漢語語彙の段階的定着：『通俗赤繩奇縁』の例」<sup>104</sup>と「『通俗赤繩奇縁』について」<sup>105</sup>が見られる。

荒木典子は論述で、『通俗赤繩奇縁』に於ける漢語語彙と原典との差異を検討し、荒尾禎秀が述べられた漢語語彙の不一致の原因の他、「物語細部に変化を与える操作」という翻訳者が意図的に漢語語彙の不一致を起こした実例を取り上げて検討した。

その他、中村綾による、「『通俗赤繩奇縁』と『今古奇観』：「和刻三言」

<sup>102</sup> 荒尾禎秀 「『通俗赤繩奇縁』の熟字：原典との比較を通して」(『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』44号 東京学芸大学 1993)

<sup>103</sup> 荒尾禎秀 「『通俗赤繩奇縁』の熟字(承前)：原典によらない熟字の性格」(『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』45号 東京学芸大学 1994)

<sup>104</sup> 荒木典子 「江戸期の文献における漢語語彙の段階的定着：『通俗赤繩奇縁』の例」(『開篇：中国語学研究』30号 好文出版 2011.09)

<sup>105</sup> 荒木典子 「『通俗赤繩奇縁』について」(『水門一言語と歴史』25号 勉誠出版 2013.11.08)

との関係から」<sup>106</sup>が見られる。

一方、本小節においては『通俗赤縄奇縁』に現れる左に振り仮名（左サビ）が振られている漢字語彙を研究対象とし、上記『通俗赤縄奇縁』における漢字語彙をその原典と照らし合わせて研究された論述を踏まえて、漢字語彙の近世漢語としての語意とその左に振られる「傍訳」の間、ずれがあるかどうかを検討する。これにより、江戸中期頃における近世漢語の日本語に影響を与えている実態を詮索することができると思う。

### 1.3 『通俗赤縄奇縁』における漢字受容の実態

『小説字彙』は『畫引小説字彙』の略称であり、天明四年（1784年）序刊、秋水園主人輯。編集者の秋水園主人については未詳である。日本最初の白話小説や通俗小説などから言葉や文書などを集めた唐話辞書として出版された。『小説字彙』の「援引書目」では『今古奇観』と、『醒世恒言』が見られる。よって、『今古奇観』や『醒世恒言』に於ける白話字彙が収録されているかと考えられる。

『通俗赤縄奇縁』の本文より採取した傍注が振られている495語彙のうち、『小説字彙』で検索出来たのは総計73語である。

[表7:『通俗赤縄奇縁』における傍訳と『小説字彙』における解釈の対照表]

	所在	語彙	左サビ・傍訳	小説字彙
1	一1ウ	針線	ヌヒハリ	【針線筐】ハリハコ
2	一3オ	本分	モチマヘ	リチキ
3	一5オ	過活	スギハイ	スギワヒ
4	一5オ	長成	セイジン	【長成了】ヲホキフナツタ
5	一6オ	財主	カネモチ	ブゲンシヤ
6	一6ウ	行戸	チャヤ	【行戸家】トイヤ 【行戸中】トイヤナカマ
7	一7オ	不是	ワルイ	イヤイヤ
8	一8オ	伶俐	リコン	リハツモノ
9	一8ウ	恭喜	メデタイ	メダタシメデタシ

<sup>106</sup> 中村綾 「『通俗赤縄奇縁』と『今古奇観』：「和刻三言」との関係から」（『和漢語文研究』14号 京都府立大学国中文学会 2016.11）

	所在	語彙	左サビ・傍訳	小説字彙
10	一10オ	要緊	ダイジ	大事ノコト
11	一10ウ	只是	シカシ	バカリ
12	一11オ	表子	アイカタ	遊女ノタグヒ
13	一11ウ	故意	ワザト	ワザト
14	一11ウ	偷漢	マヲトコ	マヲトコ
15	一12オ	官司	コウギ クジノ四9オ	【官司完結】公ギノスム
16	一12ウ	孤老	ダイジン	ダイジン
17	一12ウ	高興	キゲン ヨイキゲンノ二12オ	オモシロイ
18	一13オ	臭 嘴 臭 臉	クソカラヒキダシタ ヨウナモノ	ミグルシイ男
19	一13ウ	受用	シヤウクハン	エヨウスキ
20	一13ウ	私房	ヘンクカネ	内證ノコト
21	一14オ	感激	カタジケナガル カタジケナイノ二6 オ	【感激不尽】タダジケナイ
22	二1オ	老婆	ニヤウボウ	女房ノコト
23	二1ウ	夥計	ナカマ	ナカマ又店ノ支配人
24	二1ウ	小官人	ワカダンナ	ワタクシ
	二12オ	小官	ワカタンナ	小姓ヲ云フ
25	二1ウ	老實	ジツテイ ヲトナシクノ三11ウ	【老實頭兒】リチギナアイテ
26	二3オ	親兒	ウミノコ	ホンマノ子
27	二3ウ	家火	ドウグ	【家火】セタイダウグ
28	二4オ	另外	カクヘツ	シングワイ
29	二4オ	便宜	カツテ	【便宜東西】チヤウトヨロシ キモノ

	所在	語彙	左サビ・傍訳	小説字彙
30	二4ウ	衙門	ヤンキ	【衙門中散了】役所ヨリカヘル
31	二5ウ	請了	サラバ	フルマフ
32	二5ウ	丫髻	ゲジヨ	兒女頭上作兩髻也コシモトナリ
33	二6オ	油瓶	アブラツホ	ツレコ
34	二6オ	小可	ソレガシ	ワタクシ
35	二7オ	碟	サラ	【碟子】皿シ
36	二7ウ	適間	イマガタ	サキホド
37	二9オ	扣除	ヒイテトリ	サン用シテ引クトコ
38	二9オ	打點	コシラヘ	トトノヘルコト
39	二11オ	等子	ハカリ	ハカリ
40	二11ウ	法馬	フンドウ	フンドウ
41	二11ウ	剛々	チャウト	チャウト
42	二11ウ	齊整	リツハ	リツハ
43	二12オ	愧心	ハヅカシン	キミワルキココロ
44	二12ウ	丫頭	メロ	吳中呼女子賤者為丫頭也コシモト又コモノナド婢ヲ云
45	二12ウ	闕	カフ	茶屋ノ帳面ナリ
46	二12ウ	探望	ミマヒ	オミマイ申ス
47	二13ウ	歇錢	アケセン	遊女ヤノトマリ代
48	二14ウ	東道	サカダイ	テイジユ
49	二15オ	作成	トリモツ	オトリモチ
50	二15オ	典舗	シチャ	シチャ
51	二15オ	見成	テキアイ	デキアイ
52	二15オ	斯文	ヨイシウ	学者ノコト
53	二15ウ	府裏	ヤシキ	【府裡】ヤシキ
54	二16オ	下次	ツギノタヒ	カサネテ又ツギトモ

	所在	語彙	左サビ・傍訳	小説字彙
55	三1ウ	凜風酒	カゼノセギ	寒気ヲシノグサケ
56	三1ウ	慢々	ユルユル ユクリトノ三11ウ	ユルユルナリ
57	三2ウ	行燈	チャウチン	ボンホリ
58	三3オ	夾七夾八	トリツキヒツツキ	イロイロサマサマ
59	三3オ	風話	ヲドケバナシ	テンガウグチ
60	三3オ	熱鬧	ニキヤカ	ニギヤカ
61	三6ウ	腌臢的	キタナイモノ	【腌臢】ムサイコト
62	三7ウ	唐突	リヨグハイ	ツツカケテヒヨツト出ル
63	三8オ	市井	イチマチ	學ノコト
64	三9ウ	席卷	ヒツサラヘ	【席卷】ヒンマロメル
65	三10ウ	中人	キモイリ	キモイリノコト
66	四5ウ	奉承	チソウ	チソウブリ
67	四5ウ	推托	ジタイ	【推托不過】 ジタイスルニセラレヌナリ
68	四7ウ	年紀	トシバイ	【年紀後生】トシワカシ
69	四9オ	幫間	タイコモチ	タイコモチ
70	四16オ	管理	シハイ	シハイスルコト
71	四16オ	一套	ヒトククリ	同上（狂言ノ段ヲ云）
72	四17オ	活計	スギハイ	スギワイ
73	四17オ	過繼	ヤウシ	養子スルコト

本小節では、その傍訳を漢語としての意味と照らし合わせて分析を行う。『醒世恒言』における原文は、楊家駱編『珍本宋明話本叢刊』<sup>107</sup>に収録されている『醒世恒言』印影本より採取する。序文によると、底本としたのは内閣文庫所蔵明天啓丁卯葉敬池刊本である。

<sup>107</sup> 馮夢龍撰 楊家駱編 （珍本宋明話本叢刊）『醒世恒言』（世界書局1983.01）

1) 行戸（チャヤ）

a.行戸中都テ來リテ稱慶シ。數日喜ノ酒宴ヲナシ。

＜『通俗赤繩奇縁』・卷一・六葉ウ＞

b.行戸中都來稱賀、還要吃幾日喜酒。

＜『醒世恆言』・卷三・九葉オ＞

上記の用例は「妓院の仲間たちはみんなお祝いに来た。数日間楽しい酒宴を開いた。」という意味である。『赤繩奇縁』では「行戸」において「チャヤ」と傍注が振られており、漢字に改めると「茶屋」である。

漢語として、「行戸」は「商売」や「生計」、「商家」などの意味を包含している。また、「妓楼で営む商売」という意味としても使用している。以下、用例を4つ提示し、分析を施す。

i宋代陳亮による『龍川集』（浙江大学図書館所蔵『欽定四庫全書』本）卷二十では、「今年不免聚二三十小秀才、以教書為行戸。一面治小圃多種竹木、起數處小亭子、後年隨衆赴一省試、或可僥倖一名目遮蔽其身、而後徜徉於園亭之間、以待盡矣。」という用例が見られる。これは、「今年は仕方なく、二三十人の秀才を集め、授業をすることで生計を立てる。」という意味である。この場合、「行戸」は「生計」という意味である。

ii『大元聖政国朝典章』禮部卷一、「典章二十八」では、「聖節正旦拜賀行禮毎毎不同、大概勾集諸色社直、行戸。妝扮預先月余、整點逮及、拜賀行禮。」という用例が見られる。これは、「聖節の日に行われる、拝賀やお辞儀する作法が毎回異なる。その多くは、色々な社直（演劇を担当する役員）や行戸（臨時派遣された役員）を集める。拵えは一ヶ月余りも前に整え、拝賀やお辞儀をする。」という意味である。この場合、「行戸」は「（祭りの時に）臨時派遣された職員」を指す。

iii明代馮夢龍による『警世通言』第五卷、「呂大郎還金完骨肉」という物語では、「呂玉少年久曠、也不免行戸中走了一兩遍、走出一身風流瘡。服藥調治、無面回家。」という用例が見られる。これは、「呂玉は若い頃、長い間怠けな生活を送ってきた。妓院にも何回か入った事があった。」という意味である。この場合、「行戸」は「妓院」を指す。

iv『明史』（『武英殿二十四史』本）志第五十四、「食貨二」では、「民所

患苦，莫如差役。錢糧有收戶、解戶、驛遞有馬戶，供應有行戶，皆僉有力之家充之，名曰大戶。」という用例が見られる。この場合、「行戶」は「商家、商売」という意味である。

一方、傍訳の「茶屋」は、漢語として「お茶を飲み、一休みする処」という意味である。以下用例を一例取り上げて分析を施す。

故宮博物院所蔵清代嘉慶年間に編纂された『嘉興県志』巻八では、「屠兼善茶屋、兼善嗜茶建以爲遊息之所。」という用例が見られる。これは、「『屠兼善茶屋』というのは、屠兼善はお茶が好きで、遊びや休憩をする為に建てた処である。」という意味である。

また、日本語として江戸時代における「茶屋」は、「旅人などに茶を出して休息させる茶店」という意味を持ちながらも、「旅館」や「各種の飲食遊興店」を意味し、即ち「遊里で、芸者・遊女を呼んで遊ばせる家」という意味も含まれている。「出会茶屋」、「陰間茶屋」の類である。

明治期福沢諭吉による『福翁自伝』では、「遂ぞ茶屋遊びをするとか云うような事は決してない。」というようれいが見られる。この場合、「茶屋遊び」とは、「遊廓等で、芸者や遊女と酒を飲みながら遊ぶこと。」という意味である。江戸時代から明治時代にかけてまた、

よって、『赤縄奇縁』における「茶屋」という傍訳は文脈を考えた適訳であり、江戸期から明治期にかけて一般的に使用している俗語を用いた傍訳でもある。

## 2) 要緊 (ダイジ・ヨウキン)

a. 凡ソ事ハ起頭カ要緊ナリ。

< 『通俗赤縄奇縁』・巻一・十葉オ >

b. 凡事只怕個起頭。

< 『醒世恆言』・巻三・十二葉オ >

上記の用例は「何事も始めが一番大切である。」という意味である。『赤縄奇縁』では「要緊」において、左に「ダイジ」と傍注が振られてあり、漢字に改めると「大事」である。右には漢字音の「ヨウキン」が振られている。

漢語として、「要緊」には「重要」や「大切」、「緊急」、「急ぎ」という意



味も包含するようになった。以下、用例を2つ提示し、分析を施す。

i 明代凌濛初による『二刻拍案驚奇』巻十一では、「那哥哥見他不說了、叫些隨來的家人、把他的要緊箱籠、不由他分說、只一搬竟自搬到船上去了。」という用例が見られる。これは、「彼の重要名箱を全部船に運んだ」という意味であるこの場合、「要緊」は「大切」を意味する。

ii 明代凌濛初による『二刻拍案驚奇』巻二十では、「陳定面前說了一百兩取到了手、實與得鄉里四十兩。鄉里是要緊歸去之人、挑得籃裡便是菜、一個信送將進去、登時把陳定放了出來。」という用例が見られる。これは、「あの同郷は帰りを急いでいる人で、お金が多かれ少なかれ構わないから、一通の手紙を中におくり、直ぐ陳定を助け出した。」という意味である。この場合、「要緊」は「緊急」、「急ぎ」という意味である。

よって、『赤繩奇縁』における傍訳は文脈を考えた適訳だと判断出来る。一方、『小説字彙』においては同じく「大事ノコト」と訳され、同じく適訳だと判断できる。

一方、現代日本語において、「要緊」もしくは「緊要」という言葉は、「極めて大切」という意味で使用されている。よって、漢語としての「急ぎ」などの意味合いがその後欠落したと推察できる。このような現象は「緊張」という言葉にも見られる。日本語では「明日は試験で緊張する」のような心理的な面がとらわれているが、漢語の「這幾天很緊張」の「忙しい」という意味合いや「手頭很緊張」の「(お金に)余裕がない」という意味が欠落した。

### 3) 只是 (シカシ・タタコレ)

a. 四媽曰。從良ハ客ヲ接テ後ノ事ナリ。怎ンゾ你ガ詞ノ慙ナルヤ。只是從良モ也幾個ノ同ジカラザルアリ。

<『通俗赤繩奇縁』・巻一・十葉ウ>

b. 劉四媽道、我兒從良是個有志氣的事怎麼說道不該、只是從良也有幾等不同。

<『醒世恆言』・巻三・十二葉オ>

上記の例文は、「劉四媽は言った。從良とはお客を接することである。あなたは何でこんなに頭が固いの？しかし、從良にはまた、何種類かがある。」

という意味である。西田維則は「只是」を「ただ（只）これ（是）」と訓読し、「しかし」と傍訳し、逆接だと判断している。

漢語として、「只是」は「ただ」や「しかし」、「いつも」、「つまり」などの意味を包含するしている。以下、用例を8つ提示し、分析を施す。

i唐代劉肅が著した『大唐新語』（『欽定四庫全書』子部十二小説家類）巻七、容恕第十五では、「天下本自無事，只是愚人擾之，始為煩耳。」という記述が見られる。これは、「天下は元々事情がなく、ただ愚か者がから騒ぎをするが故に、初めて煩悩が現れた。」という意味である。この場合、「只是」は「ただ」という意味の上に、原因を指している。

ii元代高明による『琵琶記』第四出において、「爹爹、孩兒去則不妨、只是爹媽年老、教誰看管。」という記述が見られる。これは、「お父、私は行っても大丈夫だが、両親はもう年を取ったから、誰が面倒を見てくれる。」という意味である。この場合、「只是」は逆接の役割を果たし、「しかし」の意味を持つ。

iii明代施耐庵による『水滸傳』明容興堂刻本第三十五回では、「客人休怪説。我這裡嶺上賣酒、只是先交了錢、方酒。」という記述が見られる。これは、「私はこの嶺で酒を売り、いつもお金をもらってから、お酒をわたすの」という意味で、「只是」は「通常、いつも」という意味である。

iv明代施耐庵による『水滸傳』明容興堂刻本第六十二回においては、「只是節級嫌少、小人再添五十兩。」という記述が見られる。これは、「もし貴方が少ないと思っていらっしゃるのなら、私はもう五十両を出します。」という意味である。この場合、「只是」は「もしかして」などの仮定する意味で使われている。

v明代王守仁による『傳習録』では、「聖人述六經、只是要正人心。只是要存天理、去人欲。」という記述が見られる。これは、「聖人が六經を述べたのは、人の心を正し、天理の残し、人の欲望をなくすことだ」という意味である。この場合、「只是」は「つまり、確定する」意味で使われている。

vi明代馮夢龍による『醒世恆言』巻二十二では、「緣何只度得弟子一人。只是俺道門中不肯慈悲。度脱眾生。」という記述が見られる。これは、「どうして私一人を導いて頂いたの？或いは、我が仏門では眾生に慈悲を与え

ず、救えないの？」という意味である。この場合、「只是」は「或いは」、「若しくは」という意味である。

vii 清代吳雯撰『蓮洋詩鈔』卷七に収録されている詩、『題禹尚基鴻臚卜居圖三首』では、「年來百藥瘦峻嶒也似仙儒也似僧只是魚鰕都愛惜」<sup>108</sup>という記述が見られる。これは、「魚や海老までも大切にしている」という意味である。この場合、「只是」は後記の範囲全部を表している。

viii 清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本、第十三回では、「襲人見他如此，心中雖放不下，又不敢攔阻，只是由他罷了。」という記述が見られる。これは、「襲人が彼の様子を見て、心配しているが、架け止めることをおそれ、仕方なくそのままにさせた。」という意味である。この場合、「只是」は仕方なく、やむを得ないという意味である。

『通俗赤繩奇縁』における原文から見ると、四媽はまず従良する（受け取られる）ことはいい事だと言い、その後、受け取られることも何種類かがあると説明した。

よって、「只是」を「しかし」と訳したのは文脈で考えると適切なもので、数多くの意味から原典を充分理解した上で振られた適訳だと判断できる。一方、『小説字彙』においては「バカリ」と記されている。この点については、まだ検討する余地が見られる。

#### 4) 表子（アイカタ）

a. 又一等ノ子弟アリ。ソノ表子ヲ愛スレトモ。表子ハ卻テ那子弟ヲ愛セズ。

＜『通俗赤繩奇縁』・卷一・十一葉オ＞

b. 有等子弟愛著小娘、小娘卻不愛那子弟。

＜『醒世恆言』・卷三・十二葉ウ＞

上記の用例は「またある種の若旦那がいて、彼は妓女を愛しているが、妓女は彼を愛していない。」という意味である。『赤繩奇縁』では「表子」において、左に「アイカタ」と傍注が振られてあり、漢字に改めると「相方」である。

<sup>108</sup> 吳雯撰 『蓮洋詩鈔』卷七 十一葉裏（『欽定四庫全書』集部『蓮洋詩鈔』卷八至十）

漢語として、「表子」は女を見下す呼称であり、「女芸者」や「愛人」、「妓女」等の意味を包含している。以下、用例を2つ提示し、分析を施す。

ii 明代施耐庵による『水滸傳』明容與堂刻本第五十一回においては、「朱全自央人去知縣處打關節上下替他使用人情。那知縣雖然愛朱全、只是恨這雷橫打死了他表子白秀英、也答不得他說了。」という意味である。これは、「あの知県（知事）は朱全を大切に思っているが、ただ、雷横（朱全の親友）に愛人である白秀英を殺されたことを憎んでいるから、彼の話に応えない。」という意味である。この場合、「表子」は「愛人」を意味する。

iii 清代孔尚任によって編纂された『桃花扇傳奇』第七出では、「今日早起又要刷馬桶倒溺壺、忙個不了。那些孤老、表子還不知搗到幾時哩。」という用例が見られる。この場合、「表子」は「妓女」という意味である。

一方、『赤繩奇縁』における傍訳である「相方」は漢語における用例が見当たらなかったが、日本語においては「あいて」、特に遊里で遊客を相手にする遊女のことを指す。よって、『赤繩奇縁』における傍訳は文脈を考えた適訳だと判断出来る。また、『小説字彙』における「遊女ノタグヒ」という語釈は同じく適訳だと判断できる。

#### 5) 偷漢（マヲトコ）

a. 万事我ママヲナシ。或ハ公然トシテ偷漢シ、ソノ家終ニコテヲ堪カ子、一年半年ノ中ニ又逐出シテ舊ノ娼トナス。

<『通俗赤繩奇縁』・卷一・十一葉ウ>

b. 小則撒潑放肆大則公然偷漢。人家容留不得。多則一年少則半載。依舊放他出來爲娼接客。

<『醒世恆言』・卷三・十三葉オ>

上記の例文は「万事わがままで、公然と間男を作ったりして、嫁ぐ家は遂に耐えられなく、一年か半年も持たずに、また追い出されてしまい、妓女になる。」という意味である。西田維則は「偷漢」において、「マヲトコ」と傍訳を振り、漢字に改めると、「間男」である。「間男」は江戸期からの俗語で、夫がある女性が他の男性と男女関係を持つこと、または、その浮気相手のことを指す。

『元禄歌舞伎傑作集』上巻、江戸之部に収録されている「薄雪今中将姫」

という作品では、「主ある女にかかる振舞下々にてハ間男といふ者ぢや」という記述が見られる。よって、浮気又は浮気相手を指す「間男」は江戸時代の俗語であることが明らかである。

また、『小説字彙』においても、「偷漢」を「マヲトコ」と解釈されている。よって、江戸期に於いては、「偷漢」は「マヲトコ」であることが一般的な理解であることが考えられる。

一方、漢語として「偷漢」は「間男をする」、「浮気する」という意味である。以下、用例を一例提示し、分析を施す。

明代蘭陵笑笑生が著した『金瓶梅詞話』第四回では、「好呀好呀。我請你来做衣裳。不曾交你偷漢子。」という用例が見られる。これは、「いんじゃないですか！あなたを雇って服を作らせるのだ、間男をさせるわけでもないのよ！」という意味である。この場合、「偷漢」は「間男をする」ことを意味です。

よって、「偷漢」の場合は、江戸時代当時一般的に使用している口頭語、俗語を用いて白話通俗小説に現れる語彙を翻訳した適訳である。

#### 6) 孤老 (ダイジン)

a. 偶老成ノ孤老ニ遇ヒ。他ハ我ヲ憐ミ。我ハ他ヲ愛シ。

< 『通俗赤縄奇縁』・巻一・十二葉ウ >

b. 剛好遇個老成的孤老。兩下志同道合。

< 『醒世恆言』・巻三・十四葉オ >

上記の例文は、「丁度しっかりしている遊客に出逢い、彼が我を憐れみ、我が彼を愛し、互い気持ちが通じ合う。」という意味である。『赤縄奇縁』において、西田維則は「孤老」を「ダイジン」と注釈している。漢字に改めると「大臣」であり、江戸期における俗語では、「遊里で多く散財する人」を指す。

江戸時代田舎老人多田爺が著した短編遊里小説であり、江戸洒落本の第一傑作でも言われている『遊子方言』では、「山本は。まだおれを大臣とおもつてゐる舟宿がある。」という記述が見られる。よって、江戸時代の俗語では、「大臣」を「遊里で大金を費やす人」と意味で使用されていることが明らかである。

また、『小説字彙』においても、「孤老」を「ダイジン」と解釈されている。よって、江戸期において、遊里における「孤老」は「ダイジン」、即ち、「遊び客」や「遊里で多く散財する遊び客」だと理解することが一般的であると考えられる。

漢語として、「孤老」は「身寄りのない、孤独な老人」という意味を持ちながらも、「女が私通する相手」や「遊里で遊ぶ客」、「常連客」等の意味を包含している。以下用例を4つ提示し、分析を施す。

i 戦国から漢代にかけて完成された法家の著作、『管子』、「幼官」の巻では、「再會諸侯。令曰。養孤老。食常疾。收孤寡。」という記述が見られ、「又諸侯に会い、孤老を養い、長患いをしている人を食べさせ、孤児や寡婦を収容せよう、と命じた。」という意味である。この場合、「孤老」は「身寄りのない、孤独な老人」という意味である。

ii 明代施耐庵による『水滸傳』明容與堂刻本第四回においては「就與老漢女兒做媒。結交此間一個大財主趙員外。養做外宅。衣食豐足。皆出於恩人。我女兒常常對他孤老說提轄大恩。那個員外也愛刺鎗使棒。常說道。怎地得恩人相會一面也好。」という記述が見られる。この場合、「孤老」は「趙員外」を指し、「妻以外の女性と密かに情を通じる男」を指す。また、清代朱駿声による古音辞書『説文通訓定声』、「豫部第九」の「姻」という項目では、「按今俗謂女所私之人曰孤老。其遺語也。」という語釈が見られ、「今、俗に女が私通する相手を孤老と呼ぶ。」という意味である。

iii 明代施耐庵による『水滸傳』明容與堂刻本第二十一回では、「唐牛兒道、我喉急了要尋孤老、一地裡不見他。眾人道、你的孤老是誰。唐牛兒道、便是縣裏宋押司。」という用例が見られる。この場合、「孤老」は「商売のお得意様」を指している。

iv 清代吳敬梓が著した『儒林外史』第五十三回では、「那些妓女們相與的孤老多了。卻也要幾個名士來往。覺得破破俗」という用例が見られる。この場合、「孤老」は「嫖客、妓楼の遊び客」という意味である。

更に、現代日本語において「孤老」は一般的「孤独な老人」を指し、「身寄りのない老人」という意味で使用される。現代中国語においても、一般的に「孤寡老人」の略で「孤独な老人」を意味する。よって、「孤老」の場

合、意味が時代によって変化し、現在に至って語義の一部だけが残されたことが明らかである。

よって、『赤縄奇縁』における傍訳もは文脈を考えた、江戸期に使用されていた口頭語を用いた適訳だと判断出来る。

7) 臭嘴臭臉 (クソカラヒキダシタヨウナモノ)

a. 臭嘴臭臉的ハ。難道一生ヲ任スニ好ランヤ。

＜『通俗赤縄奇縁』・卷一・十三葉オ＞

b. 這些臭嘴臭臉的、難道就跟他不成。

＜『醒世恆言』・卷三・十四葉ウ＞

上記の用例は、「この人たちは嫌らしくて、いい人だとは思えないけど、もしかして一生を託すつもりなの？」という意味である。『赤縄奇縁』では、「臭嘴臭臉」において「クソカラヒキダシタヨウナモノ」と傍訳が振られている。漢字に改めると、「糞から引き出したような者」である。

「臭嘴臭臉」の漢語における用例は、管見の限り見当たらなかったが、「臭嘴臭臉」の言葉構成から見れば、「臭」と「嘴臉」に分けられる。漢語として、「嘴臉」は「顔つき」であり、「面目」や「態度」等の意味を包含している。

以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i 明代吳承恩による『西遊記』第六回では、「這大聖也使神通、變得與二郎身軀一樣嘴臉一般、舉一條如意金箍棒、卻就是崑崙頂上擎天之柱、抵住二郎神。」という用例が見られる。これは、「孫悟空も神通を使い、二郎神と体つきも顔つきも同じ様に変化した。」という意味であり、この場合、「嘴臉」は「様子」、「顔つき」という意味である。

ii 明代吳承恩による『西遊記』第三十一回では、「那怪道、你好不丈夫啊、既受了師父趕逐、卻有甚麼嘴臉又來見人。」という用例が見られる。これは、「あの妖かしが言った、あなたは本当に男気ない！師匠に追い出された以上、どの面下げてまた会いに来るの？」という意味であり、この場合、「嘴臉」は「面目」という意味である。

iii 清末李宝嘉による『官場現形記』では、「但是他自從到省以來、署院一直沒有給他好嘴臉、差使更不消說得。」という用例が見られる。これは、「で

も、彼がこの職場に来てから、差使は言うまでもなく、署院からもいい態度取られてはいない。」という意味である。この場合、「嘴臉」は「態度」という意味である。

また、「臭」即ち「臭い」、「よくない」という形容詞を加われば、「醜い面目」か「よくない態度」という意味が考えられる。『赤縄奇縁』において「臭嘴臭臉」は、文脈によれば「醜い様子」という意味であることが明らかである。よって、『赤縄奇縁』における傍訳は極めて俗語的な意識だと判断できる。また、『小説字彙』における「ミグルシイ男」という語釈は、漢字に改めると「見苦しい男」であり、同じく適訳だと判断できる。

#### 8) 受用 (シヤウクハン・シユヨウ)

a. ツニハ風花雪月ノ事。年少ノ寸ニ受用シ。

＜『通俗赤縄奇縁』・巻一・十三葉ウ＞

b. 一來風花雪月、趣着年少受用。

＜『醒世恆言』・巻三・十五葉オ＞

上記の例文は、「一つには、花鳥風月の事が若いうちには使える。」という意味である。西田維則は「受用」を「シヤウクハン」と傍訳し、「シユヨウ」と読んでいる。「シヤウクハン」は漢字に改めると「賞翫」か「賞玩」であり、物の美しさや良さを味わい、楽しむこと、若しくは尊重し、大切にすることを指している。

漢語として、「受用」は「従う」や「得する」、「使う」、「楽しむ」などの意味を包含している。以下、用例を5つ提示し、分析を施す。

i 宋の詩人である陳著による七言律詩、『似鄭宗平』においては「宦遊受用家庭訓、公退尋盟湖海吟。」という記述が見られる。これは、「官吏となって故郷を遠く離れたとしても、家訓を従う」という意味であり、この場合「受用」は「従う」という意味である。

ii 宋代黎靖徳により編纂された『朱子語類』（『欽定四庫全書』子部）巻九では、「今只是要理會道理。若理會得一分、便有一分受用。理會得二分、便有二分受用。」という記述が見られる。これは「一つ理解できれば一つ得する」という意味であり、この場合、「受用」は「利を得る、得する」という意味である。



iii 宋代黎靖徳によって編纂された『朱子語類』（『欽定四庫全書』子部）巻十一においては、「不活，則受用不得。須是玩味反覆，到得熟後，方始會活，方始會動，方有得受用處。」という記述が見られる。これは「（言葉を）生かさないと使えない。何回も吟味し、充分理解してから初めて生かせ、使えるようになる。」という意味であり、この場合、「受用」は「使う、活用する」という意味である。

iv 宋の書画家である葛長庚による詞、『水調歌頭』では「隻把隨身風月、便做自家受用、此外復何求。」という記述が見られる。これは「この身につけている風月を自分だけで楽しむ以外、何が必要？」という意味であり、この場合、「受用」は『通俗赤繩奇縁』に現れた用例のように「享受、楽しむ」という意味である。

v 清代西周生による『醒世姻縁傳』第九十一回では、「大奶奶當時沉下臉來，就不受用。」という記述が見られる。これは、「お祖母様はすぐ顔色を変え、気持ちよくなかった。」という意味であり、この場合、「受用」は「気持ち良い」という意味である。

よって、『赤繩奇縁』における「受用」を「賞玩」と訳したのは極めて適切なもので、数多くの意味から原典を充分理解した上で振られた適訳だと判断できる。また、この場合は、「賞玩」という別の漢語語彙を用いて、新しく伝来してきた「受用」を解釈している。一方、『小説字彙』では、「エヨウスキ」と訳している。漢字に改めると「榮耀ずき」であり、「贅沢好き」を意味する。

#### 9) 小官（ワカタンナ）

a. 秦小官我ヲ探望シ玉フハ。必好事アルナラン。

<『通俗赤繩奇縁』・巻二・十二葉オ>

b. 秦小官拜望老身、必有好處。

<『醒世恆言』・巻三・二十六オ>

上記の用例は、「秦の若旦那が私に訪ねるには、きっといい事がある。」という意味であり、「小官」において「ワカタンナ」という傍訳が振られている。漢字に改めると、「若旦那」である。

漢語として、「小官」は「低い官職」や「若い男性に対する敬称」や、「官

吏の自分に対する謙称」などの意味を包含している。以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i 元代托克托・脱脱等によって編纂された『宋史』（武英殿本）卷三百五十二では、「太宰余深曰、輔小官何敢論大事。輔對曰、大官不言、故小官言之。官有大小、愛君之心則一也。」という用例が見られる。これは、「太宰である余深は、『曹輔は官職が低いから、どこからの勇気でこんなに重要な件を論じるの？』と言った。曹輔は答えた、『官職が高い人は言わないから、官職が低い人に言わせていただきます。官職は高低があるが、君主を愛する心は同じです。』」という意味である。この場合「小官」は「低い官職」という意味である。

ii 明代洪楨によって編纂された『清平山堂話本』、「風月瑞仙亭」という物語では、「天子大喜、特差小官來徵。走馬臨朝、不許遲延。先生收拾行裝、即時同行。」という用例が見られる。この場合「小官」は官吏の自分に対する謙称である。

iii 明代馮夢龍による『醒世恆言』第十卷では、「方小官、死者不可復生、哭之無益。你且將息自己身子。」という用例が見られる。この場合、「小官」は若い男性に対する敬称である。

また、『通俗赤繩奇縁』卷二では、「小官人」という用例が見られる。

a. 那小官人ヲ看上シ。幾回鉤子ヲ投下シ、勾搭セントシケレトモ。

<『通俗赤繩奇縁』・卷二・一葉ウ>

b. 存心看上了朱小官人、幾遍的倒下鉤子去勾搭他。

<『醒世恆言』・卷三・十六葉ウ>

上記の用例は、「(蘭花が)朱の若旦那を気に入れ、何回も彼を誘惑した。」という意味であり、「小官人」において「ワカダンナ」という傍訳が振られている。漢字に改めると、同じく「若旦那」である。

しかし、漢語として「小官人」は「小官」の語義iと一致する「若い男性」という意味としか使われていない。以下用例を一例提示し、分析を施す。

明代馮夢龍による『醒世恆言』第一卷では、「王家若男若女、若大若小、哪一個不欣羨潘小官人美貌、如潘安再出。」という用例が見られる。この場合「小官人」は若い男性に対する敬称である。

よって、『赤繩奇縁』における「小官人」も「小官」も文脈を考えた適切な訳だと判断できる。

一方、『小説字彙』では、「小官」を「小姓ヲ云フ」と訳し、「小官人」を「ワタクシ」と訳している。両方とも謙称であり、「小生」という意味である。

#### 10) 便宜（カツテ）

a. 朱重ハコノ便宜ヲ得。我ガ人ニ賣與ルモ。

＜『通俗赤繩奇縁』・卷二・四葉オ＞

b. 朱重得了這些便宜、自己轉賣與人。

＜『醒世恆言』・卷三・十八葉ウ＞

上記の例文は、「朱重はこのような便宜を得て、自ら他人に（油を）転売する。」という意味である。西田維則は「便宜」を「カツテ」と傍訳し、漢字に改めると「勝手」であり、この場合は「便宜」、「便利」を指している。

漢語として、「便宜」は「優勢」や「得する」、「割に合う」、「安い」などの意味を包含している。以下、用例を5つ提示し、分析を施す。

i 唐代寒山による白話詩では、「低頭不用問、問得復何為。有人來罵我、分明了了知。雖然不應對、卻是得便宜。」という用例が見られる。これは、「頭を下げて聞く必要がない、例え答えを聞き出したとしても何をするつもり？誰かに罵られた場合、自分は分かっているが対応しないが、これこそ得する対処法である。」という意味であり、この場合、「便宜」は「利益」、「得」という意味である。

ii 明末余邵魚、馮夢龍によって編纂された『東周列國志』第八十二回では、「吳王在高阜處看得親切、見齊兵十分奮勇、吳兵漸漸失了便宜、乃命伯嚭引兵一萬、先去接應。」という用例が見られる。この場合「便宜」は「優勢」という意味である。

iii 清代初期西周生による『醒世姻縁傳』第十九回では、「且先殺了淫婦、把這個禽獸叫他醒來殺他、莫要叫他不知不覺的便宜了。」という用例が見られる。これは、「知らぬ間に彼に得をさせるな」という意味であり、この場合、「便宜」は「得をする」という意味である。

iv 清代李海観による『歧路燈』第四回では、「一路上這譚孝移誇道、一個

好姑娘、安詳従容。不知便宜了誰家有福公婆。」という用例が見られる。この場合、「便宜」は「得をさせる」という意味である。

v 明代末期凌濛初による『初刻拍案驚奇』第六卷では、「此只討得一半價錢、極是便宜的。但我家相公不在、一時湊不出許多來怎麼處。」という用例が見られる。これは、「これは今、元の値段より半分しかかからなくて、とても安い。」という意味であり、この場合、「便宜」は「安い」という意味である。

よって、『赤縄奇縁』における「便宜」の傍訳「カツテ」は漢語としての「得をする」などの意味を包含しているため、文脈を考えた適訳と考えられる。

一方、『小説字彙』では、「便宜東西」という言葉が収録され、「チャウトヨロシキモノ」と解釈されている。漢字に改めると「丁度宜しき物」であり、「便宜」は「丁度宜しい」と解釈されている。

#### 11) 風話 (ヲドケバナシ)

a. 九媽ガ夾七夾八ニ風話ヲ云テ、酒ヲ勸ムルニマギレ覺ヘズ、又一更バカリヲ過ケル寸。

<『通俗赤縄奇縁』・卷三・三葉オ>

b. 卻被鴛兒夾七夾八、説些風話勸酒、不覺又過了一更天氣。

<『醒世恆言』・卷三・三十一葉オ>

上記の例文は、「九媽に色々嫌らしい話を言い、お酒を進められ、知らず知らずのうちに、また一更の時間が過ぎて行く。」という意味である。西田維則は「風話」を「ヲドケバナシ」と傍訳し、漢字に改めると「戯け話」であり、滑稽な話、ふざけた話を指している。

漢語として、「風話」は「嫌らしい話」や「ふざけた話」などの意味を包含している。以下、用例を2つ提示し、分析を施す。

i 元代編纂された『漢鍾離度脱藍采和』(明脈望館鈔校古今雜劇本)では、「(末)為甚么勾闌里看的十分少則你那話不投機一句多。(浄)你說風話里。」という用例が見られる。この場合、「風話」は「ふざけた話」という意味である。

ii 清代馮夢龍による『喻世明言』第十三卷、「次日那女子又推脚痛、故意

不肯行走、撒嬌撒癡的要茶要飯。趙昇只得管顧他。那女子到說些風話、引誘趙昇。」という用例が見られる。これは、「あの女の子は嫌らしい話をして、趙昇を誘惑する。」という意味である。この場合、「風話」は「嫌らしい話」という意味である。

よって、『赤繩奇縁』における「風話」を「戯け話」と訳したのは文脈を考えた適訳だと判断できる。一方、『小説字彙』では、「テンガウグチ」と解釈されている。漢字に改めると「てんがう愚痴」であり、「ふざけた話」という意味である。

## 12) 腌臢的 (キタナイモノ)

a. 王美コレヲ聞テ驚テ曰、ソノ腌臢的ハ那里ニ吐タルヤ。

＜『通俗赤繩奇縁』・卷三・六葉ウ＞

b. 美娘大驚道、臟巴巴的、吐在哪裡。

＜『醒世恆言』・卷三・三十五葉オ＞

上記の例文は、「美娘はとっても驚いた。『あんなに汚いもの、どこに吐いたか?』と言った。」という意味である。西田維則は「腌臢的」を「キタナイモノ」と傍訳し、漢字に改めると「汚い物」である。

漢語として、「腌臢」は元来「汚い」といういみであり、「汚す」という動詞としても使用することができる。また、「卑劣」や「悩ましい」などの意味も包含されている。以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i 清代曹雪芹による『紅樓夢』、程乙本桐花鳳閣批校本第四十一回では、「寶玉會意、知為劉姥姥吃了他嫌腌臢、不要了。」という用例が見られる。この場合、「腌臢」は「汚い」という意味である。

ii 清代曹雪芹による『紅樓夢』、程乙本桐花鳳閣批校本第九回では、「依我的话、你竟玩你的去是正經。看仔細站腌臢了我這個地、靠腌臢了我這個門。」という用例が見られる。これは、「私から言わせれば、あなたは自分で何処かに遊びに行けば良い。ここに立てば私の床を汚し、寄り掛かれば私のドアを汚してしまう。」という意味である。この場合、「腌臢」は「汚す」を指す。

iii 元代秦簡夫によって編纂された『東堂老勸破家子弟』では、「有人家謊後生、不似你箇腌臢潑短命。」という用例が見られる。この場合、「腌臢」

は卑罵語として使用され、「汚い、卑劣」などを意味する。

『赤繩奇縁』に現れる「腌臢的」は「腌臢」を名詞化した言葉であり、「汚い物」か「卑劣な人」、「悩ましい事」などの意味が考えられる。よって、「腌臢的」における「キタナイモノ」は極めて適切な訳だと判断できる。一方、『小説字彙』では、「腌臢」を「ムサイコト」と解釈している。漢字に改めると「無さい事」であり、「汚らしいこと」や「下品な事」を意味する。同じく適訳だと判断できる。

また、上記 12 例の他、『小説字彙』には収録されていないが、特徴的な一語を取り上げる。

### 13) 亡八 (テイシュ・ボウ)

① a. 劉四媽ソノ寸。亡八ヲ叫。一張ノ婚書ヲ寫セ。王美ヲ叫デ與フレバ。

＜『通俗赤繩奇縁』・卷四・十四葉ウ＞

b. 劉四媽見王九媽收了這主東西，便叫亡八寫了婚書，交付與美兒。

＜『醒世恆言』・卷三・五十葉ウ＞

② a. 先亡八ト九媽ヲ拜シ。又姊妹行中ニ。子ンゴロニ告別シ。

＜『通俗赤繩奇縁』・卷四・十五葉オ＞

b. 收拾已完、隨著四媽出房、拜別了假爹假媽和那姨娘行中、都相叫了。

＜『醒世恆言』・卷三・五十一葉ウ＞

上記①は原典と同じ言葉を使い、「亡八」に「テイシュ」(亭主)と振っていたが、②は翻訳者が自らの理解で原典における「假爹」を、「亡八」に訳した。漢語として、「亡八」は罵語であり、「妻に浮気された男」や「妓女のご主人」等の意味を包含し、逆に親しい人に対する呼称としても使用されている。以下用例を 4 つ提示し、分析を施す。

i 清代初期袁於令による『西樓記』第十三、「疑謎」では、「畜生狗亡八強盜賊烏龜。交絶不出惡聲。你欺我是個秀才。只管亂罵麼。我拉些朋友。打得你家片瓦無存。」という記述が見られる。この場合、「亡八」は卑罵語である。

ii 清代中期華廣生によって編纂した俗曲集、『白雪遺音』卷一「馬頭調」の「偷情」「其二」では、「情人不必你害怕。有的是奴家。外邊叫門。原是俺家的他。是個老亡八。」という用例が見られる。この場合、「亡八」は「妻

に浮気された男」を指す。

その原因に関して、明代謝肇淛による随筆、『五雜俎』巻八では、「今人以妻之外淫者，目其夫為烏龜。蓋龜不能交，而縱牝者與蛇交也。隸於官者為樂戶，又為水戶。國初之制，綠其巾以示辱。蓋古赭衣之意，而今亡矣。然裏尚以綠頭巾相戲也。」という記述が見られる。遊女の夫を亀と呼び、緑の頭巾を冠せる制度があった。今になってこの制度が無くなったが、人々はまだ裏に「緑頭巾」と呼びかけているという。また、『七修類稿』では、「吳人稱人妻又有淫者為綠頭巾」<sup>109</sup>という記述が見られる。その由来については、「春秋是有貨妻女求食者。謂之娼夫。以綠巾裹頭。皆此意從來。」<sup>110</sup>と述べている。

iii 同じく華廣生によって編纂した、『白雪遺音』巻二「馬頭調」における「豈有此理」という曲では、「豈有此理那裡話、也不疼你也不疼他、疼只疼、疼俺那亡八。」という用例が見られる。この場合、「亡八」は「親しい身内に対する呼称」のことを指している。

iv 同じく華廣生が編纂した俗曲集、『白雪遺音』巻二「銀鈕絲」における「婆媳頂嘴」という曲では、「臉上合那挖了棗的窩窩是的、身子像個二梭子、罐裡養亡八、越養越抽抽。」という用例が見られる。この場合、「亡八」は亀の俗称である。

従って、『通俗赤繩奇縁』の場合、遊女である王美の仮の父親、四媽か九媽の夫である人を「亡八」に訳し、「亭主」と訳されるのは極めて適切な訳である。

#### 1.4 まとめ

上記の分析から、『通俗赤繩奇縁』における傍訳と近世漢語語義との比較を通して、以下の特徴を明らかにする事が出来た。

①分析により、挙げられている全13例は全て文脈を十分理解した上で振られた当時の江戸語として適訳であると判断する事が出来た。

②例1) 行戸(チャヤ)や例5) 偷漢(マヲトコ)のような江戸時代当

<sup>109</sup> 郎瑛著 楊家駱編 「七修類稿(上)」巻二十八 (『讀書劄記叢刊第二集』第十冊 世界書局 1963.04 p.430)

<sup>110</sup> 郎瑛著 楊家駱編 「七修類稿(上)」巻二十八 (『讀書劄記叢刊第二集』第十冊 世界書局 1963.04 p.431)

時の口頭語、俗語としての意味で捉える漢語語彙を用いて白話通俗小説に現れる語彙を注釈している。

③例 2) 要緊 (ダイジ・ヨウキン) のように、近世漢語としての語義や日本にておいては江戸期慣用的な俗語としての語義の一部が脱落し、一部だけ現代日本語に残されたような例も見られる。

④例 7) 臭嘴臭臉 (クソカラヒキダシタヨウナモノ) のような江戸語として通用した、俗語的なしやれた「意識」も見られる。

⑤例 13) 亡八 (テイシュ・ボウ) のような、文脈を十分理解した上で、原典とは違う多少相違するが語義を把握し適切に翻訳した場合が見られる。またその傍訳も極めて適切な訳だと判断出来る。

上記の用例全て、西田維則が中国古典文献で習得した知識及び、新たに伝来してきた通俗白話小説に現れる近世漢語語彙を読み解く能力がかなり優れている証拠であると言える。また、漢語語彙を用いて白話語彙の傍訳と成す場合が間々見られる。その中にも江戸期ならではの意味を用いた、即ち、当時の口頭語あるいは俗語としての意味を縦横に用いた例も見られる。

上記を踏まえて、『通俗赤繩奇縁』における傍訳は西田維則が近世漢語語彙を充分理解した上で、読者に分かりやすくする為に振られたものであると考えられる。また、江戸期の世情を踏まえた口頭語や俗語に訳したものも含まれていることが明らかである。



## 2. 『勸懲繡像奇談』に見られる近世漢語語彙の受容

本小節で扱う『勸懲繡像奇談』は明治16年10月九春社により出版されたもので、第一編のみあり、明治16年初秋、服部撫松（誠一）による序が付いている。漢語の原文提示、伝統的漢文訓点が施され、補足説明として多くの言葉に日本語の振り仮名がふされている。

本小節は傍訳が振られている漢語語彙を研究対象とし、漢語語彙の近世漢語としての語義と傍訳の対応関係を探求し、その間の適否ないしや語義の「ずれ」があるかどうかを検討する事を目的とする。

更に、他のすでに定着していた漢語語彙を傍訳として付される可能性も視野に入れ、語彙を採取し、分析を加え、『勸懲繡像奇談』が作成された明治16年頃における近世漢語の日本語に影響を与えている実態を明らかにする。

### 2.1 『勸懲繡像奇談』について

本小節では、服部誠一により明の口語章回小説集から4つの物語を収録し、纂評された作品である『勸懲繡像奇談』を対象とする。

本小節で扱う『勸懲繡像奇談』は、明治十六年(1883年)序刊本であり、全一編二冊、袋綴じで、外題は「勸懲繡像奇談第一編 上(下)」である。巻頭の書名は「勸懲繡像奇談第一編」となり、版心の書名は「繡像奇談第一編」となる。見返しに「服部撫松先生 纂評」「勸懲繡像奇談 一編」「明治十六年第六月版權免許」「九春社印行」と書いてある。巻頭に「撫松居士先生 纂評」とあり、本文は仮名訓点付き漢文で書かれてある。内容から見ると、『勸懲繡像奇談』には『醒世恒言』から第二巻の「三孝廉讓産立高名」と第三十巻の「李汧公窮邸遇侠客」、『警世通言』から第三十二巻の「杜十娘怒沉百宝箱」と第三十四巻の「王嬌鸞百年長恨」が収録されている。

[表8: 『勸懲繡像奇談』と『三言二拍』の対照表]

	『勸懲繡像奇談』	『醒世恒言』	『警世通言』
1	「三孝廉讓産立高名」	第2巻	
2	「杜十娘怒沉百宝箱」		第32巻

	『勸懲繡像奇談』	『醒世恆言』	『警世通言』
3	「李汧公窮邸遇俠客」	第 30 卷	
4	「王嬌鸞百年長恨」		第 34 卷

服部誠一は明治時代の文学者、ジャーナリストであり、号は撫松である。天保 12 年福島生まれ、漢文に長じ、明治初年以來『東京新誌』、『吾妻新誌』などを発行し、『勸懲繡像奇談』や『東京新繁昌記』などを著した。

『醒世恆言』は中国明代の口語章回小説集であり、馮夢龍により編集された。馮夢龍が家に蔵していた話本、擬話本のテキストを校訂増補し、各巻 1 編、計 40 編をまとめて出版したものである。楊家駱が編著した『景印珍本宋明話本叢刊 醒世恆言』<sup>111</sup>により、李田意著『日本所見中國短篇小説略記』から以下の版本が確認できる。

①天啓丁卯（1627 年）葉敬池本、内閣文庫所蔵。

②葉敬溪本、日本吉川幸次郎及び大連図書館に各一部所蔵。実は葉敬池の同板後刷本である。

③天啓丁卯（1627 年）序刊、衍慶堂四十巻足本。

④天啓丁卯（1627 年）序刊、衍慶堂三十九巻本。23 巻の「金海陵縦慾亡身」が削除され、原本 20 巻の「張廷秀逃生救父」は上下二篇に分けていたが、三十九巻本においては巻 20 と巻 21 に収録され、そのかわりに「張淑兒巧智脱楊生」を第 23 巻に補った。今多く見られるのはこの三十九巻本である。

⑤民国二十五（1936 年）『世界文庫』は葉敬池本に基づき、排印した。が、目次及び本文から見ると葉敬池本とは大きく差があり、とても葉敬池本に基づいたとは言い難い。

『警世通言』は中国明代の口語章回小説集であり、馮夢龍により編集された。馮夢龍が家に蔵していた話本、擬話本のテキストを校訂増補し、各巻 1 編、計 40 編をまとめて出版したものである。楊家駱が編著した『景印

<sup>111</sup> 馮夢龍編 李田意編校 『醒世恆言』 （世界文庫 景印珍本宋明話本叢刊之一）（世界書局 1983）

珍本宋明話本叢刊『警世通言』<sup>112</sup>により、李田意著『日本所見中國短篇小説略記』から以下の版本が確認できる。

①兼善堂刊本。天啓四年（1624年）序刊、四十卷四十篇本で、蓬左文庫及び倉石武四郎所蔵。

②衍慶堂印本。二十四卷二十四篇本で、天理大学附属図書館鹽谷文庫所蔵。長沢規矩也が『三言書名板本續考』でこの版本を『削本通言』と呼ぶ。

③三桂堂刊本。三十六卷三十六篇本で、尾上八郎所蔵。『舶載書目』によると元々は全四十篇あったが、原本が存在しているかどうかはまだ確認出来ない。現在熟知されて原本が確定できる三桂堂刊本は翻刻本であり、実際には三十六卷三十六篇しかない。『舶載書目』著録本の目次から見ると、第37巻の「萬秀娘仇報山亭兒」、第38巻の「蔣淑貞刎頸鴛鴦會」、第39巻の「福祿壽三星度世」と第40巻の「葉法師符石鎮妖」が削除されていた。

『勸懲繡像奇談』版本の所蔵機関はさほど多くないため、『勸懲繡像奇談』はこれまであまり研究対象として取り上げられなかった。ただ研究者にとって幸いな事に、東京大学東洋研究所が雙紅堂文庫全文影像資料庫でデジタル公開されている（以下東洋研本と略称する）。筆者は寺村政男教授所蔵、東洋研本と同種の物を底本として使用した。

編訳者の服部誠一（1841年～1908年）は、江戸末期から明治年間と言う日本の大変革期を生きた人物である。二本松藩儒者の長男として生まれ藩校で学んだあと、選ばれて江戸の湯島聖堂で学び漢学の才を高めた。維新を迎え廃藩置県後は著述を生業として過ごした。『東京新誌』（1876年）、『吾妻新誌』（1883年）を発刊、とりわけ『東京新繁昌記』（1874年）は大いに好評を博した。彼は『勸懲繡像奇談』以外にも、『春窓綺話』や時事を扱った『二十三年国会未来記』等を著している。唐話に通じた漢学者にして、且つ現代流に言えばジャーナリストでもあった。晩年は中学で漢文教師として招聘され、旧制中学の教師として過ごしたという。

### 2.3 『勸懲繡像奇談』における漢字受容の実態

『小説字彙』とは『畫引小説字彙』の略称であり、天明四年（1784年）

---

<sup>112</sup> 馮夢龍編 李田意編校 『警世通言』（世界文庫 景印珍本宋明話本叢刊之一）（世界書局 1983）

序刊、秋水園主人輯。編集者の秋水園主人については未詳である。日本最初の白話小説や通俗小説などから言葉や文書などを集めた唐話辞書として出版された。

『繡像奇談』の本文より採取した傍注が振られている 304 語彙のうち、『小説字彙』で検索出来た 33 語を表 9 の通りにまとめた。

[表 9:『勸懲繡像奇談』における傍訳と『小説字彙』における解釈の対照表]

	掲載箇所	語彙	傍訳	『小説字彙』による釈
1	一上三孝廉 1 オ	間言	イサカヘ	【間言帳話】 ヤクニ立ヌ帳面ナリ
2	一上三孝廉 1 ウ	央	タノミ	ヤトフ
3	一上三孝廉 1 ウ	撥開	ワケル	【撥】 トツテモケル
4	一上三孝廉 4 オ	薦書	カキツケ	ヒキツケ状ナリ
5	一上三孝廉 4 ウ	幫助	タスケル	テツタフコト
6	一上三孝廉 5 オ	鋪陳一副	ヤタイチマイ	【鋪陳】 ザシキカザリ
7	一上杜十娘 3 オ	不統口	シカトヘンジゼヌ	云フコトヲキキイレヌ
8	一上杜十娘 3 オ	行戸人家吃客 穿客	ワガセウバイハギ ロクヨリトルニア リ	【行戸家】 トイヤ
9	一上杜十娘 3 ウ	白々	シラシラシク	【白々地】 シラシラト
10	一上杜十娘 4 オ	討	ミツケ	トツテキテ
11	一上杜十娘 4 オ	那光棍	ナマシロヒカラタ	【光棍】 ワルモノ
12	一上杜十娘 5 オ	起身	イトマゴヒ	タビダチホツソク
13	一上杜十娘 5 オ	下處	イツケスルトコロ	ヤドモト
14	一上杜十娘 6 オ	搭救	スクツテクレル	スクフ
15	一上杜十娘 7 オ	倘得玉成	ジヨウジュシタナ	【倘】 ヒヨツト

	掲載箇所	語彙	傍訳	『小説字彙』による釈
			ラ	
16	一上杜十娘 7 オ	湊足	アツメテ	アツメタス
17	一上杜十娘 9 ウ	描金文具	キンマキエノテハ コ	【描金】マキエ
18	一上杜十娘 10 オ	解庫	クラヲヒラク	シチャ
19	一下李汧公 1 ウ	説嘴不響	イツデモトホラヌ	云ゴタヘガセヌ人
20	一下李汧公 2 ウ	有恁様空腦子 人	コンナバカナモノ モアル	【恁様】コノヤウナ
21	一下李汧公 6 オ	利市	モウケクチ	何ニヨラズ事ヲナスハ ジメニ祝フコトナリ
22	一下李汧公 7 オ	儘力奔脱	チカラノカギリニ ゲル	【儘力】チカラハイ ゲル
23	一下李汧公 8 オ	告貸	カネヲカ Ril	カ子カリニユク
24	一下李汧公 8 オ	一夥	ヒトツナカマ	仲間人ノ多ヲ云
25	一下李汧公 8 ウ	申文	トトケブミ	【申文各憲】處々ノ役 所へ書付ヲ出スコト。
26	一下李汧公 16 オ	焦燥	イラタツ	イラツ
27	一下李汧公 16 ウ	怎生	ドウシヨウゾ	ドウシテ
28	一下李汧公 17 ウ	可可的	ツガフガヨイト	カギル意
29	一下李汧公 18 オ	忒殺	ウタガフ	【忒煞】ハナハダ
30	一下李汧公 18 ウ	下額子	タカガスクナイ	モモ何ニテモ例ニナル コト
31	一下李汧公 21 ウ	少停便來呼喚	シバラクスルトヨ	【少停】ノチホド

	掲載箇所	語彙	傍訳	『小説字彙』による訳
			ヒニクル	
32	一下李汧公 22 オ	巴不得	イナミカネル	イソイデナリ
33	一下李汧公 29 ウ	做公的	ヤクシヨノテツキ	公キノヤク人

『勸懲繡像奇談』における漢語語彙の傍訳と『小説字彙』の訳と全く同じ記述を使用されているものは、33例の中に一例もなかった。

『小説字彙』の訳語を直接に使用する場合は少ない事より、当時の文人たちにとって、見知らぬ漢文言葉を訳すときには、辞書を引いてその意味をよく理解し、説明を濾過して訳語を振るという考えもあったのであろう。又、当時の文人は中国古典文献における知識を持ち、白話語彙などの近世漢語を訳すときに、漢語古典文献からの意味も考慮にしたという考えもある。

また、『小説字彙』の訳と部分的に一致するのは、16番の「湊足」の一例のみである。16番の「湊足」は『勸懲繡像奇談』において「アツメテ」あるいは「タス」と傍注が附され、『小説字彙』においては「アツメタス」と解釈されている。よって、同じ「集め足す」という言葉を使用している。

本稿では、『勸懲繡像奇談』における、『小説字彙』における解釈が見られる語彙から典型例20例を取り上げ、『勸懲繡像奇談』における漢字受容の実態を解明する。下記の分析においては、a.で『勸懲繡像奇談』における記述を提示し、b.で『醒世恆言』原文における記述を提示する。

#### 1) 間言（イサカへ）

a. 姉嫂和睦、並無間言。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・上・三孝廉・一葉オ＞

b. 姉嫂和睦、並無閒言。

＜『醒世恆言』・第二卷・一葉オ＞

上記用例は共に「嫁同士仲が良くて、争い事は全くない。」という意味である。『勸懲繡像奇談』<sup>113</sup>では「間言」において「イサカへ」と傍注が付

<sup>113</sup> 以下『繡像奇談』と略称する。

されており、漢字に改めると「諍え」となる。

「間」は「聞」や「閑」とも書かれて、「物と物の間」若しくは「間を裂く」という意味である。よって、「間言」（「聞言」、「閑言」とも書く）は「間の話し、公にならない話」という意味になる。一方、熟語化した場合、「間言」の語義は文章の前後関係によってニュアンスが若干異なる。

以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i 西漢司馬遷による『史記』、「孝文本紀」では、「太尉勃進曰、願請聞言。宋昌曰、所言公、公言之。所言私、王者不受私。」という用例が見られる。これは、「太尉である勃は言った、『何とかしてひそかに話し合いたい。』」という意味であり、この場合、「間言」は「謀略など、公には話せない話」という意味である。

ii 宋代司馬光による『傳家集』卷七十七に収録されている「故処士贈尚書都官郎中司馬君行狀」では、「夫人為人，慈柔勤儉，中外宗族，咸慕仰之，始終一無間（聞）言。」という記述が見られる。これは、「奥様の人柄は慈悲深くて優しく、勤勉で儉約家である。内外の宗族は皆彼女を敬慕し、始終、非難する言葉は一つもない。」という意味であり、この場合、「間言」は「非難する言葉」という意味である。

iii 清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本第八回では、「聞言少述、且說寶玉來至梨香院中、先入薛姨媽室中來、正見薛姨媽打點針黹與丫鬟們呢。」という記述が見られる。これは、「つまらない話はさておき、宝玉は梨香院にきて、まず薛のおばさんの部屋に入った。」という意味であり、この場合、「間言」は「役たたぬつまらない話」という意味である。

『勸懲繡像奇談』においては、嫁仲間に関する話であり、「間言」は「ひそかに仲を裂かせる陰口」であり、「諍え話」と理解したのは適切である。よって、『繡像奇談』における傍訳である「諍え」は文脈を考えた適訳だと判断できる。また、『小説字彙』における訳は用例iiiに使用されている、「役たたぬつまらない話」という語義に該当する。

## 2) 薦書（スイキヨスルカキツケ）

a. 若依今日事勢、州縣考諸童生還有幾千封薦書、若是舉孝廉時不知多少。

<『勸懲繡像奇談』・第一編・上・三孝廉・四葉オ>

b.若依了今日的事勢、州縣考個童生還有幾千封薦書、若是舉孝廉時不知多少。

＜『醒世恆言』・第二卷・三葉ウ＞

上記の用例は共に「今日の時勢であれば、各州県の試験で合格した諸童生にはまた、何千通もの推薦書があり、もし孝行で清廉な人物を推薦させるとしたら大勢になる。」という意味である。『繡像奇談』では「薦書」において「スイキヨスルカキツケ」と傍訳が付されており、「推挙する書付」となり、「推薦書」という意味を表す。また、『小説字彙』においては「ヒキツケ状ナリ」と訳し、「引きつけ状」を意味する。

「薦書」の漢語としての意味を辿ると、清代曹雪芹による『紅樓夢』第九二回にも「還有一封薦書托我吹嘘吹嘘。」という用例が見られる。これは、「又一通の推薦書を頼まれた。」という意味であり、この場合、「薦書」は同じく「推薦書」を指していると推察できる。

よって、「薦書」という言葉は当時ある程度定着し、『繡像奇談』における傍訳も『小説字彙』における解釈も適訳であると判断できる。

### 3) 幫助（タスケル）

a.十五歳上父母雙亡、雖然遺些田産童僕、奈門戶卑微、無人幫助。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・上・三孝廉・四葉ウ＞

b.十五歳上父母雙亡、雖然遺下些田産童僕、奈門戶卑微、無人幫助。

＜『醒世恆言』・第二卷・四葉オ＞

上記の用例はともに「十五歳の時両親が亡くなり、多少土地や財産、下人が残されたが、家柄は良くないから、助けてくれる人がいない。」という意味である。『繡像奇談』では「幫助」において「タスケル」と傍注が付されており、「推薦する書付」となる。また、『小説字彙』においては「テツタフコト」と訳し、「手伝うこと」と意味付ける。

「幫助」の漢語としての意味を辿ると、清代蔡元放による『東周列國志』では、「我與你拼個死活，要人幫助的，不為好漢。」という用例が見られる。これは、「私達は命をかけて勝負をする。他人に助けを求めるのは、立派な男ではない。」という意味であり、「幫助」は同じく「助ける」という意味であると推察できる。



よって、「幫助」という言葉は当時ある程度定着し、『繡像奇談』における傍訳も、『小説字彙』における解釈も適切であると判断できる。

#### 4) 鋪陳一副（ヤタイチマイ）

a. 室中只用鋪陳一副、兄弟三人同睡、如此數年。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・上・三孝廉・五葉オ＞

b. 室中只用鋪陳一副、兄弟三人同睡、如此數年。

＜『醒世恆言』・第二卷・四葉ウ＞

上記の用例は同じく「部屋の中にはただ寝具一式のみがあり、兄弟三人で一緒に寝て、数年にわたってこのままである。」という意味である。『繡像奇談』では「鋪陳」において「ヤタ」と傍注が付されており、その意味はおそらく「まぐさ」を指す「乾秣（やた）」であろうと考える。

「鋪」も「陳」も元来、「並ぶ」か「布」という意味であったが、のちに「鋪」の語義は「席を敷く」などの意味に発散し、「陳」の語義は「陳列、置く」などの意味に発散した。時代につれて、「鋪陳」の語義は変化し、実際に使用される場合、文章の前後関係によってニュアンスが若干異なる。以下、用例を5つ提示し、分析を施す。

i 唐代張九齡『唐六典』卷二十六では、「典設郎掌湯沐灑掃鋪陳之事。」という用例が見られる。これは、「典設郎は湯浴みと、宮殿の清掃や飾り付けることを管理する。」という意味であり、この場合、「鋪陳」は「設える、飾り付ける」という意味である。

ii 唐代易靜による『兵要望江南』第二十、「占獸」では、「狼與虎、號泣又傷人。五日七朝兵起至、臨時勝負預鋪陳、方許敗來軍。」という用例が見られる。この場合、「鋪陳」は「予測する」という意味である。

iii 『全唐文』卷四百九十三に収録されている、唐代權德輿による『唐贈兵部尚書宣公陸贄翰苑集序』では、「嗜讀賈誼書。觀其經制人文、鋪陳帝業、術亦至矣。待之宣室、恨得後時、遇亦深矣。」という用例が見られる。これは、「かつて賈誼が書いた本を読んだことがある。そこに書かれた人事を管轄することや帝王の功績を述べたものを読み、とっても優れたものである。」という意味であり、この場合、「鋪陳」は「述べる」という意味である。

iv 明代末期臧懋循によって編纂された『元曲選』第三折では、「俺也説不

盡菓品多般。略鋪陳眼前數種。」という用例が見られる。これは、「私もお菓子の全種類を言い述べることができなくて、ちょっとお目の前のこの何種類かを並べてみただけです。」という意味であり、この場合、「鋪陳」は「並べる」という意味である。

v明代初期施惠による『幽閨記』第二十六出、「皇華悲遇」では、「昨日參到得晚了、驛丞不曾準備得鋪陳、把自睡的鋪臥拿出來了。」という用例が見られる。これは、「昨日、ご到着が遅かったので、宿駅の責任者は寝具を準備出来ず、自分用の寝具を取り出した。」という意味で、この場合「鋪陳」は「寝具」という意味である。

よって、『繡像奇談』における傍訳はまだ検討する余地がある。一方、『小説字彙』においては「ザシキカザリ」と訳し、「座敷飾り」という意味である。従って、『小説字彙』における語釈は用例iのように「設える、飾り付ける」という意味に該当すると判断できる。

#### 5) 不統口（シカトヘンジゼヌ）

a.見女兒不統口、又幾遍將言語觸突李公子、要激怒他起身。

<『勸懲繡像奇談』・第一編・上・杜十娘・三葉オ>

b.見女兒不統口、又幾遍將言語觸突李公子、要激怒他起身。

<『警世通言』・第三十二卷・三葉ウ>

上記の用例は「娘が返事しない様子を見て、また何回も李様に対して失礼な発言をし、怒らせようとする。」という意味である。『繡像奇談』では「不統口」において「シカトヘンジゼヌ」と傍注が振られてあり、その意味はおそらく「しかとうして返事せぬ」であり、「無視して返事しない」という意味であろう。

漢語として、「統」は元来、「糸口」という意味であり、のちに「連続関係」か「総括する」などの語義も含まれた。よって、「統口」は「口を開く」という意味である。

以下、用例を一例提示し、分析を施す。

明代馮夢龍による『古今小説』では、「常何深信袁天罡之語、吩咐蒼頭、只以買鮓為名、每日到他店中間話、說發王媪嫁人、欲娶為妾。王媪只是乾笑、全不統口。」という用例が見られる。この場合は、王媪が口説かれ、

「ひたすら苦笑いし、全く返事しない。」という意味であり、「不統口」は「口を開かず、返事しない、無視する」という意味である。

一方、『小説字彙』では、「云フコトヲキキイレヌ」と解釈されている。それは、「言うこと聞き入れない」であり、返事しないため、聞き入れていないという意味だとも考えられる。

よって、『繡像奇談』における「シカトヘンジゼヌ」という傍訳は文脈を考えた適訳であり、『小説字彙』における訳文も適切であるということが明らかである。

#### 6) 行戸人家吃客穿客（ワガセウバイハギロクヨリトルニアリ）

a. 媽々沒奈何、只逐日將十娘叱罵道、我們行戸人家吃客穿客、前門送舊、後門迎新、門庭鬧如火、錢帛堆如塚。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・上・杜十娘・三葉オ＞

b. 媽媽沒奈何、日逐只將十娘叱罵道、我們行戸人家吃客穿客、前門送舊、後門迎新、門庭鬧如火、錢帛堆成塚。

＜『警世通言』・第三十二卷・三葉ウ＞

上記の用例は「ママさんは仕方なく、ただ十娘をこう叱った。『私たちの商売をしている人は、前門で旧い客をお送りし、後門で新しい客をお迎え入り、これで門前がいつも賑やかで、お金いっぱい稼げる。』」という意味である。『繡像奇談』では「行戸人家吃客穿客」において「ワガセウバイハギロクヨリトルニアリ」と傍注が振られてあり、漢字に改めると「我が商売は妓楼よりとるにあり」であり、「行戸」は「商売」と傍注されている。

漢語として、「行戸」は元来、「商売」という意味であり、広義的では「生計」や「仕事」、「仕事に就く人」を指した。また、時代に連れて特定の商売を暗示し、「妓楼で営む商売」という意味としても使用されている。

以下、用例を4つ提示し、分析を施す。

i 宋代陳亮による『龍川集』（浙江大学図書館所蔵『欽定四庫全書』本）巻二十では、「今年不免聚二三十小秀才、以教書為行戸。一面治小圃多種竹木、起數處小亭子、後年隨衆赴一省試、或可僥倖一名目遮蔽其身、而後徜徉於園亭之間、以待盡矣。」という用例が見られる。これは、「今年は仕方なく、二三十人の秀才を集め、授業をすることで生計を立てる。」という意

味である。この場合、「行戸」は「生計、職業」という意味である。

ii南宋馬端臨による『文獻通考』（浙江大学図書館所蔵『摛藻堂四庫全書薈要』本）巻二十、「市糶考一」では、「熙寧六年、詳定行戸利害所言。『乞約諸行利入厚薄納免行錢、以祿吏與免行戸祇應。自今禁中買賣、並下雜賣場、雜買務、仍置市易估市物之低昂、凡内外官司欲占物價、則取辦焉。』皆從之。」という用例が見られる。これは、熙寧六年に商家の利害を詳しく定めたことを述べている。この場合、「行戸」は「商家、商売」という意味である。

iii明代沈榜による『宛署雜記』では、「遇各衙門有大典禮、則按籍給值役使、而互易之、其名曰行戸。」という用例が見られる。これは、「各官衙に大祭があった場合、籍に応じて値役使を派遣し、お互いに役員交換する事もできる。このような役員のことを「行戸」と言う。」という意味であり、この場合、「行戸」は「臨時の派遣職員」を指す。

iv明代馮夢龍による『警世通言』第五巻、「呂大郎還金完骨肉」という物語では、「呂玉少年久曠、也不免行戸中走了一兩遍、走出一身風流瘡。服藥調治、無面回家。」という用例が見られる。これは、「呂玉は若い頃、長い間怠けな生活を送ってきた。妓院にも何回か入った事があった。」という意味である。この場合、「行戸」は「妓院」を指す。

一方、『小説字彙』では、「トイヤ」と解釈されている。漢字に改めると「問屋」であり、「商家」或は「卸売業者」を指す。

よって、『繡像奇談』における「ワガセウバイハギロクヨリトルニアリ」という傍訳は適訳であり、文脈を考えた意識である。また、『小説字彙』における訳文も適切であるということが明らかである。

## 7) 白々（シラシラシク）

a.到替這小錢人白々養窮漢、叫我衣食從何處來。

<『勸懲繡像奇談』・第一編・上・杜十娘・三葉ウ>

b.到替你這小賤人白白養著窮漢、教我衣食從何處來。

<『警世通言』・第三十二卷・四葉オ>

上記の用例は同じく「かえってあなたの為に、無駄に貧乏人を養って、私の衣食費用は何処から稼いだら良いのよ。」という意味である。『繡像奇

談』では「白々」において「シラシラシク」と傍注が付されており、漢字に改めると「白々しく」である。また、『小説字彙』においては同じく「シラシラト」と訳している。

漢語として、「白」は元来、「白色」または「無地」、「明るい」を意味し、広義的に「無」という意味も包含するようになった。「白白」は「無い」という意味で、「気にすることなく」や「無駄に」、「仕方なく」、などの意味を包含している。

以下、用例を2つ提示し、分析を施す。

i明代末期凌濛初による『初刻拍案驚奇』第二十卷では、「那蕭秀才因一时无心失誤，白白送了一个状元，世人做事不可不檢點！」という用例が見られる。これは「あの蕭氏という秀才は一時の不注意で過ちを犯し、無駄に状元の名誉を棒に振った。この世における人々は皆、事を処理する時にはふしだらなことをしてはいけない。」という意味で、この場合、「白白」は「無駄に」という意味である。

ii清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本、第四回においては、「雨村聽了大怒道、那有這等事、打死人竟白白的走了、拿不來的。便發籤差公人立刻將凶犯家屬拿來拷問。」という用例が見られる。この場合、「白白」は「何事もなように、気にすることなく」という意味である。

一方、現代日本語において、「白々」もしくは「白々しい」という言葉は、「見え透いた様」や「知らないふりをする様」、そして「白く見える」などの意味で使用されている。よって、漢語としての「無駄」などの意味合いがその後欠落したと推察できる。

#### 8) 光棍（ナマシロヒカラタ）

a.若三日沒有來時、老身也不管三七二十一、公子不公子、一頓孤拐打那光棍出去。

<『勸懲繡像奇談』・第一編・上・杜十娘・四葉オ>

b.若三日沒有銀時、老身也不管三七二十一、公子不公子、一頓孤拐打那光棍出去。

<『警世通言』・第三十二卷・四葉ウ>

上記『繡像奇談』における用例は「もし三日経っても来ないなら、私は

一切構わない、身分には関わらずあの青白い若者を追い出す。」という意味であるが、『警世通言』においては「もし三日経ってもお金がないなら（以下同様）」という意味である。『繡像奇談』では「光棍」において「ナマシロヒカラタ」と傍注が付されており、漢字に改めると、「生白い体」である。これは女性を描写する場合は「美人」という意味を表し、男性を描写する場合はよく自分では働かずに女の稼ぎで生活する男などの意味を表す。

漢語として、「光棍」は元来、「丸裸な棒」という意味であり、時代に連れて「妻や子供がいない独身者」や「いたずら者」、「悪者」等の意味を包含するようになった。また、逆に「度胸や見識のある人、気が利く人」を意味する場合も見られる。

以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i明代馮惟敏によって編纂した『僧尼共犯傳奇』明脈望館鈔校本、第一折では、「佛公佛母輩輩相傳、生長佛子。哄俺弟子都作光棍、一世没箇老婆。怎生度日。」という用例が見られる。これは、「我々弟子達をあやして独身者にさせ、一生お嫁を娶らない。」という意味である。この場合、「光棍」は「独身者」という意味である。

ii清代馮夢龍による『初刻拍案惊奇』第二十七卷では「原來臨安的棍、欺王公遠方人。是夜聽得了說話、即起謀心、拐他賣到官船上。」という用例が見られる。それは、「元々臨安に住んでいたごろつきは王さんをよそ者だといじめた。」という意味であり、この場合、「光棍」は「ごろつき、ならずもの」という意味である。

iii清代李海観による『歧路燈』第二十四回では、「到午飯時紹聞又贏了七八千。午飯後又贏了千餘。都說譚兄聰明出眾、才學會賭、就把人贏了。真正天生光棍兒、那得不叫人欽敬。」という用例が見られる。この場合、「光棍」は「(ギャンブル)能力が優れている人」という意味である。

「杜十娘怒沉百宝箱」の場合、風月機關を背景とし、妓楼のママさんが追いだそうとする「ごろつき」は正に「自分で働かず女性にばかり頼る男」という意味である。よって、『繡像奇談』における傍注のは物語の背景に沿い、当時の口頭語を用いたピッタリする訳だと考えられる。一方、『小説字彙』にける「ワルモノ」(悪者)という語釈も適訳だと判断できる。

9) 下處（イツケスルトコロ）

a. 平日間有杜家、連下處也沒有、今日就無處投宿。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・上・杜十娘・五葉オ＞

b. 平日間有了杜家、連下處也沒有了、今日就無處投宿。

＜『警世通言』・第三十二卷・六葉ウ＞

上記の用例は、「普段は杜家泊まる為、宿が無いから、今日はもう泊まるどころすらなかった。」という意味である。『繡像奇談』では「下處」において「イツケスルトコロ」と傍注が振られてあり、漢字に改めると「居付けするところ」である。

漢語として、「下處」は「宿、住むところ」という意味である。

以下、用例を一例提示し、分析を施す。

明代末期凌濛初が著した『初刻拍案驚奇』第六卷では、「滕生便道好了好了。連忙跑到下處、將銀十兩封好了、急急趕到靜樂院來、問道、院主在否。慧澄出來、見是一個少年官人、請進奉茶。」という用例が見られる。これは、「滕生は速く泊まるところに戻って、十兩のお金をまとめ、慌てて靜樂院に駆けつけてきた。」という意味である。この場合、「下處」は「泊まるどころ、住むところ」を指す。

よって、『繡像奇談』における「イツケスルトコロ」という傍訳は文脈を考えた適訳である。一方、『小説字彙』では、「ヤドモト」と解釈されている。漢字に改めると「宿元」であり、同じく適訳であるということが明らかである。

10) 解庫（クラヲヒラク）

a. 銀子到手、未免在解庫中贖幾件穿着。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・上・杜十娘・十二葉オ＞

b. 銀子到手、未免在解庫中取贖幾件穿著。

＜『警世通言』・第三十二卷・十一葉ウ＞

上記の用例は「お金が手に入ったら、どうしても質屋から衣服を何枚も受けだすだろう。」という意味である。『繡像奇談』において、「解庫」には「クラヲヒラク」と傍訳が振られてあり、漢字に改めると「庫を開く」である。一方、『小説字彙』においては「質屋」と解釈されている。

漢語として、「解庫」は「質屋」という意味である。以下、用例を一例提示し、分析を施す。

宋代吳曾によって編纂された『能改齋漫録』巻二では、「江北人謂以物質錢爲解庫、江南人謂爲質庫、然自南朝已如此。」という記述が見られる。これは、「江北人は物を持ってお金を借りる所を『解庫』と呼び、江南人は『質庫』と呼ぶ。それは南朝の時代から言われていたことだ。」という意味である。「解庫」や「質庫」は「物を以ってお金を借りる処」を指し、「質屋」を指していることが明らかである。

よって、『繡像奇談』における「庫を開く」という傍訳はおそらく直訳であり、『小説字彙』における訳文は適切であることが明らかである。

#### 11) 説嘴不響（イツデモトホラヌ）

a.房徳因不遇時、説嘴不響、毎事只讓他、漸々有幾分懼内。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・下・李汧公・一葉ウ＞

b.房徳因不遇時、説嘴不響、毎事只得讓他、漸漸的有幾分懼内。

＜『醒世恆言』・第三十卷・一葉オ＞

上記『繡像奇談』における用例は「房徳は時代に乗れず出世できなく、話しもあんまり聴いてもらえないから、何事でもひたすら退いて、どんどん家内が怖がるようになった。」という意味である。『繡像奇談』では「説嘴」において「イツデモトホラヌ」と傍注が付されており、漢字に改めると「言っても通らぬ」である。

漢語として、「説嘴」は元来、「話す」という意味であり、熟語化されると「責める」や「屁理屈を言う」、「ホラを吹く」、「嘘を付く」等の意味を包含する。

以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i明代蘭陵笑笑生による『金瓶梅詞話』第二十五回では、「賊淫婦！還説嘴哩！有人親看見，你和那沒人倫的豬狗有首尾。」という用例が見られる。この場合、「説嘴」は「弁解する、屁理屈を言う」という意味である。

ii明代蘭陵笑笑生による『金瓶梅詞話』第三十三回では、「那小伙兒吃他奈何不過說道。死不了人等我唱、我肚子裡使心柱肝、要一百個也有。金蓮罵道。説嘴的短命。」というようれいが見られる。これは、「金蓮は言った、



『嘘つきは若死にするよ。』』という意味であり、この場合、「説嘴」は「嘘を付く、ホラを吹く」という意味である。

iii明代蘭陵笑笑生による『金瓶梅詞話』第八十五回では、「不想金蓮房簷籠内、馴養得個鸚哥兒會説嘴、高聲叫、大娘來了。春梅正在房中、聽見迎出來。」という用例が見られる。これは、「鸚哥が話すことができ、大声で叫んでいた。」という意味で、この場合、「説嘴」は「話す」という意味である。

一方、「響」は『玉篇』で「應聲也」と解釈されているように、「答える声」という意味を包含している事が明らかである。よって、「説嘴不響」は「話したが、答えてくれない」という意味である。

よって、『繡像奇談』における傍訳は文脈を考えた適訳だと考えられる。一方、『小説字彙』にける「云ゴタヘガセヌ人」という語釈は漢字に改めると「言い答えがせぬ人」であり、適訳だと判断できる。

## 12) 有恁様空腦子人 (コンナバカナモノモアル)

a.天下有恁様空腦子人、自己饑寒尚且難顧、有何心腸卻評這畫鳥來。

<『勸懲繡像奇談』・第一編・下・李汧公・二葉ウ>

b.天下有恁様空腦子的人、自己饑寒尚且難顧、有甚心腸卻評品這畫的鳥來。

<『醒世恆言』・第三十卷・二葉ウ>

上記『繡像奇談』における用例は「この世にはこんなにバカな人がいるのか！自分もまだ飢えと寒さに困っているのに、なんでこの絵に描かれている鳥を鑑賞する余裕を持っているの？」という意味である。『繡像奇談』では「有恁様空腦子人」において「コンナバカナモノモアル」と傍注が付されており、漢字に改めると「こんなバカな者もある」である。

漢語として、「恁」は「こんな、あんな」という意味で、「恁様」はこのような、あのよう、どのような」という意味である。以下、用例を2つ提示し、分析を施す。

i明代凌濛初による『二刻拍案驚奇』巻九では、「鳳生道、強將之下無弱兵。恁樣的姐姐、須得恁樣的梅香姐方爲厮稱。小生有緣昨日得瞥見了姐姐、今日又得遇著龍香姐、真是天大的福分。」という用例が見られる。この場

合、「恁様」は「このような、あのような、どのような様子」という意味である。

ii清代李海观による『歧路燈』巻三、第十七回では、「嗔道、掌班的恁様口硬。到明日、我就叫在舍下、請三位看戲。不許一个不到。」という用例が見られる。これは、「座長は何でこんなに口が固いの？」という意味で、この場合、「恁様」は強調する役割を果たしている。

よって、『繡像奇談』における傍訳は文脈を考えた適訳だと考えられる。一方、『小説字彙』にける「コノヤウナ」という語釈は「このような」であり、同じく適訳だと判断できる。

### 13) 利市（モウケクチ）

a. 今日大哥初聚、何不就發利市。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・下・李汧公・六葉オ＞

b. 今日大哥初聚、何不就發個利市。

＜『醒世恆言』・第三十卷・六葉オ＞

上記『繡像奇談』における用例は「今日兄貴と初めてお会いできた。皆でいっそいい商売をしたらいいいじゃないか。」という意味である。『繡像奇談』では「利市」において「モウケクチ」と傍注が付されており、漢字に改めると「儲け口」であり、「いい商売」という意味を表す。

漢語として、「利市」は元来、「良い市」、「いい商売」という意味である。後、時代に連れ、熟語化されると、「商売で得た利益」や「縁起が良い」、「縁起が良い物」、「福を招くもの」などの意味も包含するようになった。

以下、用例を4つ提示し、分析を施す。

i晋代杜預による『春秋經傳集解』（『四部叢刊初編』本）巻第二十三では、「爾無我叛、我無強賈、毋或勾奪。爾有利市寶賄、我勿與知、恃此質誓。故能相保、以至于今。」という用例が見られる。この場合、「利市」は「商売で得た利益、お金」という意味である。

ii明代蘭陵笑笑生による『金瓶梅詞話』第十二回では、「若人家買賣不順溜、田宅不興旺者、常與人開財門發利市。治病灑掃、禳星告門都會。」という用例が見られる。この場合、「利市」は「お年玉」のような縁起ものとして他人に配るお金であり、よく目上の人から目下の人に與える。

iii明代凌濛初による『拍案驚奇』巻八では、「行李包裹多收拾停當、別了楊氏、起身到船。燒了神福利市、就便開船。一路無話。」という用例が見られる。これは、「『神福利市』を焼いてから直ぐ出発した。」という意味で、「利市」は「利市紙」を指す。赤い紙に金色の模様を描いた紙であり、普段は神壇の両側に貼るが、お正月の時には色々な器物にも貼り、福や財運を招くために燃やす紙である。

iv清代吳敬梓が著した『儒林外史』第五回では、「去年三月内嚴貢生家一口纔過下來的小豬、走到他家去。他慌送回嚴家。嚴家說、豬到人家再尋回來最不利市、押著出了八錢銀子、把小豬就賣與他。」という用例が見られる。この場合、「利市」は「商売にいい、縁起がいい」という意味である。

よって、『繡像奇談』における傍訳は文脈を考えた適訳だと判断できる。一方、『小説字彙』にける「何ニヨラズ事ヲナスハジメニ祝フコトナリ」という語釈は「何によらず事を成す始めに祝うことなり」であり、この訳についてはまだ検討する余地が見られる。

#### 14) 一夥（ヒトツナカマ）

a.李勉已惜其才貌、又見他說得情詞可憫、便有意釋放他。却又想一夥同罪、獨放一人公論難泯。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・下・李汧公・八葉オ＞

b.李勉已惜其材貌、又見他說得情詞可憫、便有意釋放。又想一夥同罪、獨放一人公論難泯。

＜『醒世恆言』・第三十卷・八葉オ＞

上記の用例は、「李勉はその才能を惜しんで、又彼の説明で多少憐憫するべき処があると見て、釈放しようと思った。しかし、彼らは皆同じ罪に問われているので、一人だけ釈放するとおそらく公論に問われるだろう。」という意味である。『繡像奇談』では「一夥」において「ヒトツナカマ」と傍注が付されており、漢字に改めると「一つ仲間」となる。

漢語として、「夥」は元来、「多い様」という意味である。「一夥」は後、時代に連れ、熟語化されると「人の群れ」や「全部」、「一斉に」などの意味も包含するようになった。

以下、用例を3つ提示し、分析を施す。

i明代馮夢龍による『喻世明言』では、「話畢、慌忙分付莊客、推個車兒、牽個馬兒、帶個驢兒、一伙子將細軟家私搬去。其余家常動使家火、都留與沈公日用。」という用例が見られる。これは、「慌てて莊客を指示し、車を推し、馬やロバを連れ、荷物や家具を全部持って行った。」という意味であり、この場合、「一夥」は「全部、一斉に」という意味である。

ii明代施耐庵による『水滸傳』明容與堂刻本第三十三回では、「只見前面燈火螢煌、一夥人圍住在一个大牆院門首熱鬧。(中略)宋江看時、却是一夥舞鮑老的。」という用例が見られる。これは、「宋江がちゃんと見てみたら、あのグループは「鮑老」の舞いを舞う人たちだけだった。」という意味であり、この場合、「一夥」は「人の群れ」という意味である。

iii清代曹雪芹による『紅樓夢』程乙本桐花鳳閣批校本、第五十七回では、「你知道我並不是林家的人、我也和襲人鴛鴦是一夥的、偏把我給了林姑娘使。」という用例が見られる。これは、「私は襲人や鴛鴦達とは仲間だよ。」という意味であり、この場合、「一夥」は「一つ仲間」という意味である。

よって、『繡像奇談』における傍訳は文脈を考えた適訳だと判断できる。一方、『小説字彙』にける「仲間人ノ多ヲ云」という語釈は「仲間が多いこと」であり、同じく適訳だと判断できる。

#### 15) 申文 (トトケブミ)

a.李勉曰、你放他去後引妻小躲入我衙中、將申文俱做於汝名下、衆人自然無事。

<『勸懲繡像奇談』・第一編・下・李汧公・八葉ウ>

b.李勉道、你放他去後即引妻小躲入我衙中、將申文俱做于你的名下、衆人自然無事。

<『醒世恆言』・第三十卷・八葉ウ>

上記の用例は「李勉は言った、「あなたは彼を行かせた後、妻と子供を連れて私の役所に隠れ、申文を全部あなたの名義で作ったら、みんなはもちろん無事でいられる。」という意味である。『繡像奇談』では「申文」において「トトケブミ」と傍注が付されており、「届け文」となり、「前方に送り届ける手紙」という意味を表す。

漢語として、「申文」は「届け文」あるいは「届け文を送る」という意味

も包含している。

以下、用例を2つ提示し、分析を施す。

i清代馮夢龍による『警世通言』、「況太守断死孩兒」では「况爺將此事申文上司，無不夸獎大才，萬民傳頌，以爲包龍圖復出，不是過也。」という用例が見られる。それは、「又、主人がこの事を申文に書いて上司に報告したら、皆貴方様の才能をほめ、万民が頌徳して、包拯の生まれ変わりだと思う、と言っても過言ではない。」という意味である。この場合、「申文」は「届け文を提出すること」を意味する。

ii明代末期臧懋循によって編纂された『元曲選』第四折では、「老夫昨日見鄭州申文。說一婦人喚做張海棠。因奸藥死丈夫。強奪正妻所生之子。混賴家私。此系十惡大罪。決不待時的。」という用例が見られる。これは、「私は昨日、鄭州からの届け文を読んだ。」という意味で、この場合、「申文」は「届け文」という意味である。

よって、「申文」という言葉は当時ある程度定着し、『繡像奇談』における傍訳も、『小説字彙』における解釈も適切であると判断できる。一方、『小説字彙』においては「書付」と訳し、「上からの命令や申し渡しを記した公文書」と意味付ける。同じく適訳だと判断できる。

#### 16) 忒殺（ウタガフ）

a. 貝氏曰、你也忒殺懵懂。

＜『勸懲繡像奇談』・第一編・下・李汧公・十八葉オ＞

b. 貝氏道、你也忒殺懵懂。

＜『醒世恆言』・第三十卷・十七葉オ＞

上記の用例は「貝氏は、『あなたはあまりにも愚か者じゃないですか』と言った。」という意味である。『繡像奇談』では「忒殺」において「ウタガフ」と傍注が付されており、「疑う」という意味を表す。一方、『小説字彙』においては「忒煞」（『忒殺』と同じ）が収録され、「ハナハダ」と訳し、「甚だしい」と意味つける。

漢語として、「忒殺」は「あまりにも、とても」という意味である。また「忒煞」、「忒甚」とも書く。以下、用例を一例提示し、分析を施す。

清代馮夢龍による『喻世明言』第十卷、「滕大尹鬼斷家私」では、「梅氏

又哭道、雖然如此、自古道『子無嫡庶』、忒殺厚簿不均、被人笑話。」という用例が見られる。それは、「梅氏は泣きながらまた言った。その通りだが、古くから『子供は嫡庶の分別無し』という言い伝えがある。あまりにもえこひいきをやるなら、皆に笑われるよ。」という意味であり、この場合、「忒殺」は「あまりにも、とても」という意味である。

原文全体から見ると、「你也忒殺懵懂」は「あなたはあまりにも愚か者じゃないですか」と訳せる。ここの「忒殺」は言語的強調として捉え、「あなたはバカじゃないかと疑う」という意味で、「忒殺」には「疑う」と、傍注が振られるのも考えられなくもない。よって、ずれている範疇でなく、むしろ当時の口頭語にピッタリする意識だと判断する。

## 2.4 まとめ

上記の分析から、『勸懲繡像奇談』における傍訳と近世漢語語義との比較を通して、以下の特徴を明らかにすることができた。

①分析より、挙げられている16例のなか、まだ検討する余地が見られる例4) 鋪陳一副(ヤタイチマイ)と、恐らく直訳だと判断できた例10) 解庫(クラヲヒラク)を除き、全て文脈を十分理解した上で振られた語彙は江戸語として適訳だと判断する事が出来た。

②例6) 行戸人家吃客穿客(ワガセウバイハギロクヨリトルニアリ)や例16) 忒殺(ウタガフ)のような、一見若干の語義的ずれとも考えられるが、文脈を見てみると、語義を十分理解した上で振られた「意識」が見られる。

③例7) 白々(シラシラシク)のように、近世漢語としての語義や日本にておいては江戸期慣用的な俗語としての語義の一部が脱落し、一部だけ現代日本語に残されたような例が見られる。

④例8) 光棍(ナマシロヒカラタ)のような江戸時代当時の江戸っ子のしゃれに近い口頭語訳も見られる。

まとめてみると、傍注を振る際には文脈を考えて、当時の口頭語としてこなれた訳語を選んでいる。服部誠一は新たに伝来してきた通俗白話小説に現れる近世漢語語彙を読み解く能力が優れているという事は明白である。また、『小説字彙』との比較によって、当時の文人は辞書を引いてから一度

自分なりに再構築し、更に傍訳として定着されたものが見られる。

また、日本に伝来当初の語義が一部欠落し、現代日本に残された場合が見られ、これにより、現代日中両言語の間、同形異義語の形成にも繋がると考えられる。

## 終章

本研究は日本における漢字受容の歴史より、中古漢語語彙が日本語に流入した奈良平安期及び近世漢語語彙が日本語に流入した江戸期から明治初期の期間を背景として取り上げた。また、二章にわたり、各時期における漢語語彙を扱っている主要な文献を選択し、各時期における漢語学者の漢語理解力、運用力を推察し検証した上で、日中両言語の間、漢字及び語彙の共通性と漢字が日本に流入後の変化を年代別に解明した。

具体的には、第一章では『和名類聚抄』における漢語語彙から、中古漢語語彙との繋がりを検討し、地域風俗や言語環境による漢語語彙が日本に転入する際に現れる語彙の変化や語義の脱落などの現象を再検証した。第二章では、幕末明治期漢文小説における漢語語彙から、傍注訳を中心に近世漢語語彙との繋がりを検討し、当時漢学者が古典籍を熟読し習得した知識を持ち、新たに伝来した近世漢語語彙を受容する際に現れる、漢字及び漢語語彙の継承と変容を再検証した。

今後の課題としては、まず本研究で取り上げた奈良平安期及び幕末明治期における漢字受容の実態を、他の漢語文献で更に追求するつもりである。また、本研究に詳しく取り上げられなかった、江戸期漢文翻案小説に見られる近世漢語語彙の受容実態についても探究していくつもりである。更に、日本における漢字受容の流れを解明するためには、本研究で取り上げなかった、鎌倉室町期禅語録に関する日中比較より見られる、早期白話語彙の日本語への流入実態を探究していくつもりである。最終的には中古漢語語彙が日本へ流入し始めた奈良・平安期から、漢語の日本語への受容する過程を沿って、禅語録による早期白話語彙が影響を及ぼした鎌倉・室町期、そして漢文小説や唐話課本から見られる近世漢語語彙の輸入した江戸期及び明治初期、更に漢文で外国からの新しい知識を表す明治・大正期までの流れを整理した上で、日中両言語における漢字及び語彙の相違と日本における漢字受容の歴史を解明し、日本における漢字表記の様相を明らかにすることを目標とする。



## 付論 林文月による『源氏物語』の漢訳について

### 1.はじめに

「日本文学史上最高傑作」とも言われる『源氏物語』は、筆者の調査によると、現在すでに漢語、英語、韓国語、フランス語、ドイツ語、オランダ語、ロシア語、スウェーデン語、イタリア語、スペイン語、セルビア語、ヒンディー語、パンジャビ語、テルグ語、ハンガリー語、タミル語、マラヤラム語、スロヴェニア語、ウルドゥー語、ヘブライ語、フィンランド語、アッサム語、オリヤー語、ベトナム語を含め、24言語に訳され、世界中の人々に読まれている。漢語に訳されたものだけで9種類もある。その中でも、豊子愷（1898～1975）<sup>114</sup>訳（人民文学出版社・1980年初版〈簡体字〉1993年再版〈簡体字〉）と林文月（1933～）<sup>115</sup>訳（中外文学月刊社・1974年～1978年初版〈繁体字〉1982年修訂版〈繁体字〉1985年修訂再版〈繁体字〉2000年修訂版〈繁体字〉譯林出版社・2011年大陸版〈簡体字〉）は白眉とされ、中国の読者をひきつけ、愛読され続けている。

豊子愷による『源氏物語』の完訳は漢訳の嚆矢というべき作品であり、1980年初版本は三分冊である。豊子愷は1961年12月から1965年9月までに翻訳作業を完成していたが、当時の中国では「文化大革命」が始まりつつあった時期で、出版することは不可能であった。結局1980年になってからようやく出版することが出来たという。一方、林文月は1973年4月から1978年12月まで五年半の歳月を掛けて翻訳作業を完成させ、台湾大学外国語学部が刊行している『中外文学』に連載された。

『源氏物語』の翻訳はすべて直接原典によったのではなく、日本語訳を底本として翻訳されているようである。訳者はもちろん原作を精読し、充

---

<sup>114</sup> 豊子愷（1898～1975） 中国の漫画家、翻訳家。浙江省出身。光緒24年11月9日生まれ。大正10年日本に留学し、絵画と音楽を学び、竹久夢二の影響を受ける、帰国後簡潔な描線で叙情味にあふれた漫画を発表して注目された。漫画やエッセーのほか、英、露、日3ヵ国語からの大量の翻訳があるが、その中には《源氏物語》の全訳(60年代)がある。上海中国画院院長などを歴任。1975年9月15日死去。

<sup>115</sup> 林文月（1933～） 台湾の学者、作家。原籍は台湾彰化県で、1933年9月5日に上海市の日本租界に生まれた。林文月は幼少期から日本の教育を受け入れて育てて来た。1952年に国立台湾大学中国文学学部に入學し、1958年に修士課程在學しながらも台湾大学で教師として働き始めた。1993年に国立台湾大学中国文学学部で榮譽教授の称号を授与された。

分原典を理解したうえで、数多くの訳本を参考して訳したものである。よって、訳者による原作から「二次創作」した作品とも言ってもよいかもしれない。内容を詳細に見てみると各訳本は訳者独自の色に染められ、「風格」も違うが、その注釈からは参考にした訳本や、「底本とした訳本」を検証することが出来ると考えられる。姚継中（2015）<sup>116</sup>によると、豊子愷は日本に留学し、十ヶ月ほどの滞在期間中に日本語を独学で学んだと言う。『源氏物語』を翻訳するさいに用いた訳本は、与謝野晶子や谷崎潤一郎の現代口語訳だったという。一方、林文月の母語は日本語であるため、豊子愷より日本語の理解力が格段に優れているという。

本稿では林文月訳『源氏物語』における「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の三巻をサンプルとして、注釈を手掛かりにし、その出典や訳出状況を検討する。

## 2. 先行研究

現在、『源氏物語』の各漢訳における研究はさほど多くない。

日本側においては、豊子愷訳『源氏物語』に関する研究として、山田利博による「豊子愷による『源氏物語』中国語訳について」<sup>117</sup>、又、笹生美貴子による「豊子愷訳『源氏物語』における明石像——明石入道の見た夢の訳出方法を起点として——」<sup>118</sup>、『『源氏物語』の翻訳により開かれる世界——豊子愷译『源氏物語』を中心に——」<sup>119</sup>がある。一方、林文月訳における研究は、橋内武道による『『源氏物語』の中国語訳と林文月教授』<sup>120</sup>しか見いだせない。また、和歌における対訳状況を中心とした長谷川ゆかり

---

<sup>116</sup> 姚継中 「『源氏物語』に関する翻訳検証研究の必要性：豊子愷、林文月、姚継中の翻訳した『源氏物語』和歌を例として（2014年山口大学東アジア研究科客員教員研究報告）」（『東アジア研究』13 山口大学大学院東アジア研究科 2015.03）

<sup>117</sup> 山田利博 「豊子愷による『源氏物語』中国語訳について」（『平安文学の交響 享受・摂取・翻訳』 勉誠出版 2012.05）

<sup>118</sup> 笹生美貴子 「豊子愷訳『源氏物語』における明石像——明石入道の見た夢の訳出方法を起点として——」（『夢見る日本文化のパラダイム』 法蔵館 2015.05）

<sup>119</sup> 笹生美貴子 「『源氏物語』の翻訳により開かれる世界——豊子愷译『源氏物語』を中心に——」（『物語研究』7 2007）

<sup>120</sup> 橋内武道 「『源氏物語』の中国語訳と林文月教授」（『明星大学研究紀要（人文学部）』20 明星大学人文学部 1984）

による「『源氏物語』における和歌の対訳研究——「桐壺」の中国語訳を中心に」<sup>121</sup>がある。

一方、中国側においては、比較研究としては田中幹子、鄭寅瓏による「豊子愷訳『源氏物語』の問題点について：「桐壺巻」における林文月訳、銭稻孫訳との比較」<sup>122</sup>があり、和歌を中心とした翻訳における比較研究は姚継中による「『源氏物語』に関する翻訳検証研究の必要性：豊子愷、林文月、姚継中の翻訳した『源氏物語』和歌を例として」<sup>123</sup>や呉川による「『源氏物語』における和歌の対訳研究——「桐壺」の中国語訳を中心に——」<sup>124</sup>、また、張龍妹による「豊子愷と林文月の中国語訳について」<sup>125</sup>などがある。豊子愷訳『源氏物語』における研究は、呉衛峰による「『源氏物語』の中国語訳 豊子愷訳の成立を中心に」<sup>126</sup>などと。林文月による「源氏物語の中国語訳について」<sup>127</sup>がある。

その他に、張龍妹による「中国における源氏物語の翻訳と研究——翻訳テキストによる研究の可能性——」<sup>128</sup>や笹生美貴子による「中国語訳『源氏物語』の訳出方法——新しい出版状況を踏まえて」<sup>129</sup>がある。

---

<sup>121</sup> 長谷川ゆかり 「『源氏物語』における和歌の対訳研究——「桐壺」の中国語訳を中心に」(『国文目白』48 日本女子大学 2009)

<sup>122</sup> 田中幹子、鄭寅瓏 「豊子愷訳『源氏物語』の問題点について：「桐壺巻」における林文月訳、銭稻孫訳との比較」(『東アジア比較文化研究』11 東アジア比較文化国際会議日本支部 2012.06)

<sup>123</sup> 姚継中 「『源氏物語』に関する翻訳検証研究の必要性：豊子愷、林文月、姚継中の翻訳した『源氏物語』和歌を例として(2014年山口大学東アジア研究科客員教員研究報告)」(『東アジア研究』13 山口大学大学院東アジア研究科 2015.03)

<sup>124</sup> 呉川 「『源氏物語』における和歌の対訳研究——「桐壺」の中国語訳を中心に——」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』9 日本大学大学院総合社会情報研究科 2009.02)

<sup>125</sup> 張龍妹 「豊子愷と林文月の中国語訳について」(『講座源氏物語研究』12 『源氏物語の現代語訳と翻訳』 おうふう 2008.06)

<sup>126</sup> 呉衛峰 「『源氏物語』の中国語訳 豊子愷訳の成立を中心に」(『越境する言葉——世界と出会う日本文学』(日本比較文学学会学会創立六〇周年記念論集) 日本比較文学学会 2011.06)

<sup>127</sup> 林文月 「源氏物語の中国語訳について」(『源氏物語の探求』7 笠間書院 1982)

<sup>128</sup> 張龍妹 「中国における源氏物語の翻訳と研究——翻訳テキストによる研究の可能性——」(『海外における源氏物語の世界——翻訳と研究』 風間書房 2004)

<sup>129</sup> 笹生美貴子 「中国語訳『源氏物語』の訳出方法——新しい出版状況を踏まえて」(『日本大学大学院国文学専攻論集』5 日本大学大学院文学研究科国文

笹生美貴子（2015）は子愷訳『源氏物語』で使用されていた参考テキストについて、まず豊子愷が訳した『源氏物語』「訳後記」に詳しく書かれている部分を提示し、以下のように述べている。

「だが、実際のところ、豊子愷が主に参考したテキスト類は、現代語訳である谷崎潤一郎『旧訳』、与謝野晶子『新新訳源氏物語』、佐成謙太郎『対訳源氏物語』、古語原文として金子元臣『定本源氏物語新解』であったことが近年の研究により明らかにされている。」<sup>130</sup>

よって、訳者が後記で書かれた内容は事実と合致しない場合もあることが明らかである。

従って、林文月訳における序文検証も充分必要があると判断し、本稿は林文月訳『源氏物語』を研究対象とし、「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の三巻をサンプルとして、注釈を手掛かりに参考テキストや訳出状況を検討することを目的とする。

### 3.資料

本稿で使用する林文月訳『源氏物語』は譯林出版社が出版された 2011 年版の『源氏物語』である。<sup>131</sup>序文においては、林文月が『源氏物語』の翻訳する過程を詳細に述べている。

序文によると、林文月はまず台湾大学総図書館に所蔵された、平凡社が 1940 年出版した吉澤義則訳注『源氏物語』を参考とした。後、小学館が 1970 年に刊行した日本古典文学全集に収録された『源氏物語』を入手し、底本として用いた。

また、林文月は作家による訳注を三種類手元に置き、参考として用いたという。それは角川文庫が 1972 年に出版した与謝野晶子訳『全譯源氏物語』と、中央公論社 1969 年に刊行した谷崎潤一郎訳『新新譯源氏物語』と、新潮社 1972 年に出版した円地文子訳『源氏物語』である。それ以外に、林文月は二種類の英訳を参考にしたという。それは Arthur Waley による“The

---

学専攻（2008）

<sup>130</sup> 笹生美貴子 「豊子愷訳『源氏物語』における明石像 —明石入道の見た夢の訳出方法を起点として—」（『夢見る日本文化のパラダイム』 法蔵館 2015.05） p.424

<sup>131</sup> 林文月譯 『源氏物語』（譯林出版社 2011.06）

Tale of Genji”( London George Allen & Unwin LTD. Prees 1925)と Edward G. Seidensticker による“The Tale of Genji”( Alfred A. Knopf, INC New York 1976) である。しかし、序文によると林文月は、Arthur Waley による訳文が訳者自らの加工が多く、内容を省略している場合もあるだと判断し、漢訳作業においては参考とはしなかったという。また、Edward G. Seidensticker による訳が刊行された時には、林文月の漢訳作業がすでに半分まで進んでいたため、後半の翻訳や最後の校訂にだけ参考として用いたという。又、序文によると、林文月は前述した六種類の訳本を参考とし、小学館によって刊行された『源氏物語』の古文を底本として、各訳注を参考しながら作業したという。

以上の点より林文月訳『源氏物語』における「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の三巻をサンプルとして、注釈の出典を検証し、訳出状況を検討するために、吉澤義則訳注『校對源氏物語新釋 卷一』<sup>132</sup> (以下、「吉澤訳」と略す)、小学館刊行『源氏物語 (1)』<sup>133</sup> (以下、「小学館本」と略す)、谷崎潤一郎訳『谷崎潤一郎 新々訳源氏物語 卷一』<sup>134</sup> (以下、「谷崎訳」と略す) を使用することとする。

#### 4. 林文月訳「桐壺」、「帚木」、「空蟬」における注釈について

林文月訳『源氏物語』より、「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の注釈を抜き出し、「吉澤訳」、「小学館本」、「谷崎訳」における注釈と照らしあわせて分析を加える。「桐壺」、「帚木」、「空蟬」における注釈は全 77 個であり、数的に分析すると以下のことが分かる。

①「桐壺」、「帚木」、「空蟬」における 77 つの注釈の中で、「吉澤訳」、「小学館本」、「谷崎訳」で記載されていない注釈が 7 つある。

②上記の 7 つを省いて、吉澤訳で注釈が見られる語が 54 つあり、小学館本で見られる語は 66 つあり、谷崎訳に於いて記載が見られる語が 46 つある。

③吉澤訳、小学館本、谷崎訳ともに現れる注釈は 38.5<sup>135</sup>語ある。

<sup>132</sup> 吉澤義則 訳注 『校對源氏物語新釋 卷一』(平凡社 1937.06)

<sup>133</sup> 阿部秋生、秋山虔、今井源衛 訳注 『源氏物語 (1)』(小学館 1970.11)

<sup>134</sup> 谷崎潤一郎訳 『谷崎潤一郎 新々訳源氏物語 卷一』(中央公論社 1964.11)

<sup>135</sup> 林文月訳においては、「内蔵寮和谷倉院」における注釈が一つにまとめて

④注釈がその二部だけにあらわれている語が全 19 語ある。その中、吉澤訳と小学館本にのみ現れる注釈は 13 語あり、小学館本と谷崎訳にのみ現れる注釈は 6 語あり、吉澤訳と谷崎訳にのみ現れる注釈は一つもない。一部にしか記述が見つからない語が全 12.5 語ある。その中、吉澤訳にのみ現れる語が 2.5 語あり、小学館本にのみ現れる注釈は 9 語あり、谷崎訳にのみ現れる語が 1 つしかなかった。

上記の数値を踏まえ、林文月訳『源氏物語』における各章最後に振る尾注を検証することにより、林文月が『源氏物語』を翻訳に際してどの本を参考としたかを明らかにする。

本稿においては、「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の三巻から典型例を 8 つか取り上げて分析を加える。

#### 1) 女御和更衣

桐壺の巻の冒頭にはこう書かれてある。

a.不知是哪一朝帝王的时代，在后宫众多女御和更衣之中

＜林文月訳 p.3＞

b.いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に

＜小学館本 p.93＞

下線部に対しては、次のように注釈している。

＜林訳＞女御和更衣皆平安时代宫廷女官。女御属三位，往往可晋为皇后；更衣属四，五位之间，侍候皇帝左右。

（「女御」と「更衣」は皆平安時代宮中の女官である。「女御」は三位に属し、よく皇后に昇進できる。一方、「更衣」は四位から五位の間に属し、皇帝の側に奉仕する。）

＜吉澤訳＞女御：后に次ぐ天子の御妃。

更衣：女御に次ぐ御妃。

＜小学館本＞女御：中宮に次ぐ天皇の夫人。摂関大臣以下公卿の娘となる。

更衣：女御に次ぐ夫人。大納言以下殿上人の娘となる。

---

あるが、吉澤訳においては個々に注釈をふされてあり、小学館本や谷崎訳においては「穀倉院」にのみ注釈がふされてあるため、0.5 として数える。

<谷崎訳>女御：皇后、中宮に次ぐ妃

更衣：女御に次ぐ妃

よって、「女御」や「更衣」に対する解釈は他の注釈本を参考にしたものか、若しくは訳者自らの知識や古語辞典における解釈を参考にしてから施したのであろう。

また、内容から見ると、林文月は中国人読者に物語の歴史的背景を理解させるために、吉澤訳、小学館本、谷崎訳において全く記載されていないが、位階を表示したと考えられる。

## 2) 着袴儀式

桐壺の巻では、源氏が三歳になった時に着袴儀式が行われた場面がある。

a. 这位皇子三岁那一年，照例举行了着袴仪式

<林文月訳 p.4>

b. この皇子三つになりたまふ年、御袴着のこと...

<小学館本 p.96>

下線部に対しては、次のように注釈している。

<林訳>幼童三至五岁间所举行之仪式。朝廷选择吉日良辰，由专司者为皇子穿上一种宽大的古代日式裙裤。为平安中期后普及之仪式。

(子供が三歳から五歳の間に行われる儀式である。朝廷が吉日を選び、専門の司が皇子に袴を着させる。それは平安時代後期から普及した儀式である。)

<吉澤訳>大凡三四歳から七八歳までに行はれる。著袴親がかつて、親戚中尊貴で徳望ある者が任じ袴の腰を結ぶ。

<小学館本>着袴とも。三、四歳～六、七歳の間に行ない、以後少年として扱う。皇子の場合、天皇自ら腰結の役に当たることが多い。

よって、各訳本における「御袴着」をする年齢帯に関する記述は多少ずれがあることにより、「御袴着」に対する解釈は他の注釈本を参考にしたものか、若しくは訳者自らの知識や他の文献における解釈を参考にしてから施したのであろう。

## 3) 羞見高砂松

桐壺の巻において、更衣の母親は手紙を読んで泣きながらも、宮中に訪れることを断った場面がある。

a.虽然早知长寿徒有增加痛苦，却没有料到自己竟也活到今天，真个是应了‘羞见高砂松’那首歌所讲的了。

＜林文月訳 p.7＞

b.命長さの、いとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はむことだに、恥づかしう思ひたまへはべれば...

＜小学館本 p.105＞

下線部に対しては、次のように注釈している。

＜林訳＞取《古今六帖》诗句。高砂之松象征长寿。此处更衣老母谓己马齿徒长，羞见长寿之高砂松。

(『古今六帖』から取った和歌である。高砂の松は長寿の喩えである。更衣の母親は自分がまだ生きていると、長寿の松に思はれるのが恥かしい。)

＜吉澤訳＞六帖五「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむ事も恥かし」まだ生きて居るかと松に思はれるのが恥かしい。

＜小学館本＞「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむこともはづかし」(古今六帖五)

＜谷崎訳＞いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はんことも恥かし(古今六帖)

従って、「高砂の松は長寿の喩えである。」という情報は全く記載されていない。よって、この情報は訳者自らの知識或いは他の文献を参考にしたと考えられる。

また、構成から見ると、林文月はまず、三種の訳本共に現れた出典情報と内容情報を提示した。そして、読者に和歌の意味を上手く理解させるために、「高砂の松は長寿の喩えである」という、吉澤訳、小学館本、谷崎訳において全く記載されていない情報を取り入れた。最後に、内容を理解し、分かりやすく説明し、注釈を完成させたと考えられる。

#### 4) 交野少将

帯木の巻の始めの所に、「交野の少将」という人物を振れた。



a.假如被物语中的交野少将知道了，这岂不是要笑掉他大牙吗？

＜林文月訳 p.21＞

b....交野の少将には、笑はれたまひけむかし...

＜小学館本 p.129＞

下線部に対しては、次のように注釈している。

＜林訳＞当系当時所流行物中风流好色的主人公。此物語后世失传。

（当時流行っていた物語の女好きな主人公を指す。此の物語は后世に伝わらなかった。）

＜吉澤訳＞古物語の主人公の名で枕草子や落窪物語にも見えてゐるか今傳はらない。

＜小学館本＞散逸古物語の主人公。当時、有名な好色男であった。

＜谷崎訳＞当時世に行われていた物語の主人公の名であるが、この物語は今伝わらない。

従って、「交野の少将」に対する「女好き」という描写は小学館本にのみ現れ、この注釈は小学館本によって施したものだと考えられる。

また、構成から見ると、林文月はまず、三種類の訳本における「高野の少将」に対する描写をまとめ、小学館本における「有名な好色男」という情報が正確で、物語を理解するためには必要だと判断したため、小学館本にしか現れなかったこの情報を入れた。そして、三種の訳本共に現れた「此の物語は后世に伝わらなかった」という情報を提示し、注釈を完成させた。

## 5) 文章生

帯木の巻では光源氏、頭中将、左馬頭と藤式部丞の4人が過去の女性体験を語る場面がある。そこで、藤式部丞は文章生であった頃に出会った「かしこき女」と呼ばれる女性との経験を語った。

a.当我还在大学里做文章生的时代，见到过一位聪明的女子。

＜林文月訳 p.33＞

b.まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなん見たまへし。

＜小学館本 p.161＞

下線部に対しては、次のように注釈している。

＜林訳＞平安时代于律令制大学中，学习诗文历史，而通过式部省考试及

格者，称为文章生。

(平安時代の律令制大学寮で、詩文や歴史を学んでいる。式部省の試験に合格した者を文章生と呼ぶ。) <sup>136</sup>

<吉澤訳>文人とも進士ともいふ。大学頭の試験に通過して擬文章生となり、それが省試を受けて及第したものを文章生といふ。

<小学館本>当時の学制では、大学寮の教官として、博士(一人)・助教(二人)・音博士・書博士・算博士(各二人)。学生定員四百人。諸学科中、平安時代には文章道が最も重んぜられ、その階梯は、学生→擬文章生→文章生→文章得業生→文章博士(従五位下)と、試験を受けて上ってゆく。

従って、「式部省の試験に合格した者を文章生と呼ぶ。」という情報は吉澤訳にその記載されてあるため、この注釈は吉澤訳によって施したものと考えられる。

また、内容から見ると、林文月は中国人読者に物語の歴史的背景を理解させるために、吉澤訳、小学館本、谷崎訳において全く記載されていなかった「詩文や歴史を学んでいる」という情報を入れて、文章生の上昇過程だけでなく、一体何をやっていたかも理解に必要だと判断し、注釈をしたと考えられる。

## 6) 中神

帯木の巻では光源氏が左大臣の家に夕方までいて、宮中から中神が通るからといって、他の所に行かないといけないという場面がある。

a. 今晚宮中正当中神之路，恐怕不便在此过夜吧

<林文月訳 p.35>

b. 今宵、中神、内裏よりは塞がりてはべりけり

<小学館本 p.168>

下線部に対しては、次のように注釈している。

<林訳> 阴阳道家所称天神，谓出行方向若正对神所游行方向，必逢凶事，故须避讳改方向。

(陰陽道家がいう天神とのことである。神が遊行する方向に向か

<sup>136</sup> 翻訳は筆者によるものである。

って出かけると、必ず凶事があるので、それを避けて方向を変わるべきだという。)

<吉澤訳>天一神。この神が天上の中央にある十六日間を天一天上といつて四方に塞がりがないが己酉の日から以後四方に五日ずつ、四隅に六日ずつ都合四十四日間巡行する。其間此神のある方を塞がりとして、其方に出あるきする場合は方違をせねばならぬ。

<小学館本>中神（天一神）は陰陽道の祭神。吉凶禍福をつかさどり、悪い方角を防ぎ守る神ともいう。六十日を周期として、四方を一巡する。すなわち、癸巳の日より十六日間は、仏とともに天上中央にあり、この間は、人はどこにへ行ってもよいが、己酉の日に天より降り、以後五日ないし六日間ずつ八方に順次巡行する。その間、この神のいる方角を「塞がり」と称して忌み、「方違え」をする。

<谷崎訳>陰陽道の方でいう天一神のこと。この神が遊行する方角に向つて外出すると凶事があるので、「塞がり」と称してそれを避け、方違えをするのである。

従って、注釈の語順や情報の提示から明らかに谷崎訳によって施したものと判断できる。

また、吉澤訳と小学館本における注釈は複雑過ぎて、参考として用い、中国人読者むけの訳本であるため、できる限りわかりやすく説明するために、簡潔な谷崎訳をそのまま引用し、翻訳したと考えられる。

#### 7) 小余綾之砦

帯木の巻では、源氏が紀伊守の家に宿泊する時に皆が忙しく準備をする様子を見ながら景色を楽しんでいた場面がある。

a. 趁主人忙着准备菜肴，奔走于所谓“小余綾之砦”的当儿，源氏从容地欣赏着四周的景物。

<林文月訳 p.36>

b. あるじも肴求むと、こゆるぎのいそ歩くほど、君はのどやかにながめたまひて...

下線部に対しては、次のように注釈している。

< 林訳 > 此为“枕词”，典出于风俗歌《玉垂》。谓主人款待宾客，上下奔走，忙于选取小余綾（地名）海滨的海带作为酒肴。

（『古今六帖』から取った和歌である。高砂の松は長寿の喩えである。更衣の母親は自分がまだ生きていと、長寿の松に思はれるのが恥かしい。）

< 吉澤訳 > あるじも肴もとむと、こゆるぎのいそぎ歩くほど」を「亭主の紀伊守も御馳走調達の爲に奔走して居る折。風俗玉垂「玉だれの小がめを中にすゑて、主はもや、肴まぎに、肴とりに、こゆるぎの磯の和布刈りあげに」こゆるぎの磯は相模國中郡餘綾郷。

< 小学館本 > 「玉垂の小瓶を中に据ゑて、あるじはもや、肴まぎに、肴とりに、こゆるぎの磯の、わかめ刈りあげに」（風俗歌・玉垂）による。『馬内侍集』などにも、これを用いた和歌がある。当時人々の愛唱した歌謡らしい。「肴」は当時「酒菜」で酒に添える副食物。「こゆるぎ」は愛模国余綾。現在の神奈川県大磯・小磯のあたり。「こゆるぎ」に「ゆるぎ」をかける。「ゆるぎ」は肩をゆする形容。「急ぎ」に「磯」をかける。

< 谷崎訳 > 玉だれの、こがめを中にすゑて、あるじはもや、さかんあまぎに、さかなとりに、こゆるぎの磯のわかめ刈りあげに（風俗歌「玉垂」）

よって、「こゆるぎのいそぎ」という句は風俗歌の『玉垂』から引用したものだということは三種の訳本共に現れたから明らかである。が、「枕詞である」という情報は、全く記載されていない。よって、この情報は訳者自ら中国人読者にとっては必要な情報と考えて、自らの知識に基づいて付注したのであろう。

従って、林文月は順次に、小学館本と谷崎訳に現れた出典情報と三種の訳本共に現れた内容情報を提示し、吉澤訳と小学館本を参考にし、「こゆる

ぎ」は地名であるという情報が必要だと判断した上で、注釈を完成させたと考えられる。

8) 露痕濡兮空蟬翅，身隠樹間人不知，忍声吞泣兮袿有泪

林文月は「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の注釈において谷崎訳から引用したと明らかに述べたのは1つしかない。それは空蟬の巻の最後に、空蟬が光源氏のことを思い、源氏に渡された、詩が書かれている懐紙に返しの詩を書いたという場面がある。

a. 露痕濡兮空蟬翅，身隠樹間人不知，忍声吞泣兮袿有泪

＜林文月訳 p.55＞

b. 空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびぬるる袖かな

＜小学館本 p.205＞

下線部に対しては、次のように注釈している。

＜林訳＞谷崎译注谓此和歌非空蟬所作，乃《伊勢集》所载。空蟬此歌寄托，谓己如隐身山岬之蟬，露痕虽沾濡其翅翼而无人知晓；私恋之情无处可诉，唯有忍声吞泣，泪湿衣袖也。

(谷崎訳注では、この和歌が空蟬作ではなく『伊勢集』に載っていると述べている。空蟬はこの歌を引用して、自分が正に山に隠れている蟬のように、翼に露がついているが、人には知られない。この愛情は誰にも告げなくただ声を忍んでみただけである。)

＜吉澤訳＞私はあなたを避けて隠れては居りますが、あなたの御情を思つて人知れず泣いてをります。

＜小学館本＞『伊勢集』の群書類従本、西本願寺本などに見える伊勢御の歌。空蟬が、その心境を、この古歌を思いつくままに書きつけたもの。古歌に現在の思いを託すことは、当時の日常生活では珍しいことではないが、物語の表現に用いた例はこれが最初か。ただし、手法としては、引歌表現の極限的な場合とみるべきだろう。作者の大胆な試みを思わせる一例である。＊空蟬は、いま、憂悶の情を、名高い貴婦人伊勢御の歌に託し、自らをその人になぞらえる。空蟬物語

の主題は、この一首に集約される。物語はその高潮点において打ち切られ、余情は尽きない。

＜谷崎訳＞蟬の羽におく露が木の中に隠れて人に見えないように、自分も人に隠れて忍び忍びに涙に袖を濡らすことよ。この歌は空蟬の作ではなく、伊勢集にある伊勢の歌で、それを空蟬が思い起して記したのである。

よって、吉澤訳においては、歌の意味だけを解釈し、小学館本においては、出典を提示した上で歌の意味を解釈した。一方、「この和歌は空蟬作ではなく『伊勢集』に載っている」という情報は、小学館本と谷崎訳両方ともにかかれてあるが、林文月は「谷崎訳注」だけを取り上げている。この注釈が吉澤訳によって施したものだということは明白であるが、この注釈については小学館本を参照しなかった可能性も考えられる。

## 5.終わりに

林文月による『源氏物語』の漢訳の「桐壺」、「帚木」、「空蟬」では総計77件の注釈が付けられている。その中で、吉澤訳、小学館本、谷崎訳においても注釈が見られるのは70件ある。

林文月は序文で「小学館本古文を底本とした」と述べ、小学館本における注釈は三種類の訳本の中一番詳細であったが、小学館から引用したと明らかにできるのは8例しかなかったから、注釈の場合は小学館本を中心としなかったことが明らかである。また、林文月は「桐壺」、「帚木」、「空蟬」における注釈のなか、「谷崎訳から引用した」と明記しているのは1例しかなかったが、内容から見ると、谷崎訳から引用した注釈は12例もあった。よって、林文月は注釈をつけるのに際して谷崎訳を多く用いたと判断する事が可能である。

また、林文月は理解しやすく、且つ正確で十分な情報を、簡潔にまとめた注釈を作るために、色々な工夫を凝らしている。まずは各訳本における注釈をまとめ、それ以外に必要と考える情報があると、取り入れて構成している。そして、「交野少将」における注釈のような、三種の訳本を参考にした上で、一種にのみ提示した情報でも、正確で必要だと判断したものは、取り入れる。また、仮に三種類の訳本に簡潔で正確、且つ十分な情報が含

まれている注釈が現れた場合、そのまま引用し翻訳する場合もある。最後に、もし情報がバラバラで参考には至らないという場合、たとえ三種類の訳本ににおける注釈があるとしても、その情報をあえて取り入れない場合もある。

しかし、本稿においては林文月訳を吉澤訳、小学館本、谷崎訳の三種類としか比較ができず、内容から見ると「桐壺」、「帚木」、「空蟬」の注釈しか取り上げなかった。

今後の課題としては『源氏物語』全 54 巻における注釈を全部採取し、林文月が序文に書かれた吉澤訳、小学館本、谷崎訳の他、与謝野晶子訳版と円地文子訳版も含めて比較整理する。それにより林文月訳『源氏物語』の注釈における出典や引用の検証はより全面的であり、林文月が『源氏物語』を翻訳する時に用いた注釈本の使用状況を把握することができるのであろう。

## 謝辞

本研究を進めるに当たり、多くの知識や示唆をいただき、丁寧で熱心にご指導を頂いた博士論文指導教授である、大東文化大学寺村政男教授に心より感謝申し上げます。また、論文執筆にご指摘やご指導を頂いた同じく大東文化大学蔵中しのぶ教授、青木淳子准教授、及び、群馬県立女子大学の安保博史教授、首都大学東京の荒木典子准教授に深くお礼申し上げます。また、いつも励ましていただいた大東文化大学英語学科北林光教授、及び寺村政男ゼミの皆様、院生研究室の皆様にも心より感謝の気持ちとお礼を申し上げます。

最後に、本論文の作成に当たり、常に応援してくれる家族にも感謝の気持ちを伝えたく、謝辞にかえさせていただきます。



## 資料編

## 目次

1.第一章	奈良平安期における中古漢語語彙の日本語への流入	161
1.1	『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』	162
1.1.1	『和名類聚抄』における『楊氏漢語抄』の逸文	162
1.1.2	『和名類聚抄』における『漢語抄』の逸文	172
1.1.3	『和名類聚抄』における『辨色立成』の逸文	183
1.2	『和名類聚抄』所引漢和辞書と『世説新語』	190
1.3	『和名類聚抄』所引漢和辞書と『太平廣記』	192
2.第二章	江戸期漢文小説に見られる近世漢語語彙の日本語への流入	204
2.1	江戸期漢文小説における創作作品	204
2.1.1	『唐話纂要』所収「奇談通俗」における傍注音	205
2.1.2	『唐話纂要』所収「孫八救人得福」訳文における傍注	209
2.1.3	『唐話纂要』所収「徳容行善有報」訳文における傍注	233
2.2	江戸期漢文小説における翻訳作品	256
2.2.1	『通俗赤縄奇縁』における傍訳と『小説字彙』の比較	256
2.2.2	『勸懲繡像奇談』における傍訳と『小説字彙』の比較	276
3.附論	林文月による『源氏物語』の漢訳における注釈について	290

## 1.第一章 奈良平安期における中古漢語語彙の日本語への流入

### 『和名類聚鈔』の書誌情報

題簽	和名類聚鈔
卷次	二十卷十冊
書名	和名類聚鈔（外題） 倭名類聚鈔（内題） 和名（版心書名）
見返し	なし
序	「元和三年丁巳冬十一月」、「羅浮散人」による序がある。
（編）著者名	源順

### 参考文献：

1. 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『弁色立成』考」 『東洋研究』第141号  
（大東文化大学東洋研究所 2001.11）
2. 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』考」 『東洋研究』第145号  
（大東文化大学東洋研究所 2002.11）
3. 蔵中進 「『和名類聚抄』所引『漢語抄』考」 『東洋研究』第150号（大東文化大学東洋研究所 2003.12）

1.1 『和名類聚抄』所引『楊氏漢語抄』、『漢語抄』、『辨色立成』

1.1.1 『和名類聚抄』における『楊氏漢語抄』の逸文

1) 「楊氏漢語抄」と記している逸文

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
1	一3ウ	天部	暴雨	楊氏漢語抄云白雨 <small>和名無 良左女</small>
2	二8ウ	人倫部	客作兒	楊氏漢語抄云客作兒 <small>和名豆久 乃比比止</small>
3	二9ウ	人倫部	屠兒	楊氏漢語抄云屠 <small>屠後訓 反流</small> 屠兒 <small>和名惠 止利</small> 屠牛馬肉取鷹雞 餌之義也殺生及屠牛馬肉取賣者也
4	二9ウ	人倫部	田舎人	楊氏漢語抄云田舎兒 <small>和名井奈 加比止</small>
5	二10ウ	人倫部	遊女 <small>夜發 附</small>	楊氏漢語抄云遊行女兒 <small>和名字加禮女 又云阿曾比</small> 一云晝遊行謂之 遊女待夜而發其淫奔者謂之夜發 <small>今按夜發俗云夜 保知本文未詳</small>
6	二10ウ	人倫部	乞兒	列子云齊有貧者常乞於城市乞兒曰天下之辱莫 過於是 <small>楊氏漢語抄云乞索兒保加比々止今 按乞索兒即乞兒是也和名加多井</small>
7	三11才	形體部	食指	左傳云食指 <small>楊氏漢語抄云頭 指比止佐之乃指</small> 第二指也
8	三13才	形體部	玉莖	房內經云玉莖 <small>男陰 名也</small> 楊氏漢語抄云 <small>破前一云麻前良今案 醫骨也音譌可為玉莖之義不見</small>
9	三13ウ	形體部	玉門	房內經云玉門 <small>女陰 名也</small> 楊氏漢語抄云尿 <small>通鼻今案俗人或 云朱門並未詳</small>
10	三13ウ	形體部	吉舌	楊氏漢語抄云吉舌 <small>和名比 奈佐岐</small>
11	三14才	形體部	屁	四聲字苑云屁糞 <small>匹鼻反三字通也楊氏漢 語抄云放屁和名倍比流</small> 下部出氣也
12	三16才	形體部	噦噎	唐韻云噦噎 <small>上於越反下乙劣反楊氏 漢語抄云噦噎佐久利</small> 逆氣也
13	四1才	術藝部	騎射	漢書云甘延壽以良家子善騎射楊氏漢語抄云馬 射 <small>和名字末由美今 案馬射即騎射也</small>
14	四1ウ	術藝部	遠射	淮南子云越人學遠射參天而發楊氏漢語抄云射 遠 <small>和名止保奈介今按 云遠射即射遠也</small>
15	四2ウ	術藝部	鞞	蔣魴切韻云鞞音早和名止毛楊氏漢語抄日本紀 等 <small>用鞞字俗亦用 之本文未詳</small>
16	四3才	術藝部	射塚	唐韻云 <small>他果反字亦作塚楊氏漢語抄云射塚以久淡 止古路世間云阿無豆和今按又用璠字音朋</small> 射塚也四聲字苑云 塚塚也
17	四5ウ	術藝部	弄槍	楊氏漢語抄云弄槍 <small>和名保古斗 利槍音倉</small>

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
18	四5ウ	術藝部	弄丸	梁武帝千字文注云宜遼者楚人也能弄丸 <small>世間云多未斗利 人在空中一在手</small> 中今人之弄鈴是也楊氏漢語抄云弄鈴須ケ止利
19	四6才	術藝部	相掬	唐韻云掬 <small>子佳反內典云相 掬和名多加閉之</small> 以拳加人也楊氏漢語抄云拗腕 拗音於絞 反訓同上
20	四6才	術藝部	擲倒	楊氏漢語抄云擲倒 <small>和名賀倍 利字都</small>
21	四6ウ	術藝部	雙六采	楊氏漢語抄云頭子 <small>雙六乃佐以今案 見雜題雙六詩</small>
22	四7ウ	術藝部	插頭花	楊氏漢語抄云鈔頭花 <small>賀佐之俗 用插頭花</small>
23	四10ウ	音樂部	箏篴	唐韻云箏篴 <small>空侯二音俗云如江胡二音楊氏漢語抄 云篴篴首濟國琴也和名久太良古止</small> 樂器也兼名苑注 云箏篴漢武時人依琴製之
24	十8才	局處部	棧 <small>盧崔附</small>	楊氏漢語抄云棧 <small>瓦乃衣都 利初限反</small> 日本私記云蘆葦 <small>和名同上今案唐韻崔 胡官反葦也然則以蘆</small> 葦為棧 非也
25	十8才	局處部	棉栲	文選云鏤檻文櫬 <small>音楚一音禮師說文櫬 賀佐禮留乃岐乃須介</small> 菴麻楊氏漢語抄云棉 栲 <small>棉呂二音 和名同上</small>
26	十8ウ	局處部	樽風	辨色立成云樽風板 <small>上音布意反和名如 字楊氏漢語抄說同</small>
27	十8ウ	局處部	櫬	釋名云櫬 <small>音襄和名太流岐楊氏漢語抄云波閉岐</small> 在穩旁下垂也兼名苑云一名 椽 <small>音老一名椽 傳</small> 間杙 <small>唐韻云音人漢語 抄云間杙太留木</small>
28	十10才	局處部	稅	爾雅云梁上楹謂之稅 <small>音拙和名字太知楊氏漢語抄云蜀柱</small> 孫炎曰梁上柱侏 儒也
29	十10才	局處部	杈首	楊氏漢語抄云杈首 <small>佐須杈音 初牙反</small>
30	十11ウ	局處部	助枝	楊氏漢語抄云助枝 <small>之太知功程 式云志達</small>
31	十13ウ	局處部	戶鑠	唐韻云鑠 <small>式涉反與葉同楊氏漢語抄云戶乃帖木</small> 銅鑠也
32	十14才	局處部	鑰	四聲字苑云鑰 <small>音樂字亦作今案俗人印鑰之 處用鑰字非也鑰字音溢見唐韻</small> 關具也楊氏漢語抄 云鑰匙 <small>門乃 加岐</small>
33	十14才	局處部	鉤匙	楊氏漢語抄云鉤匙 <small>戶乃加岐一云加良 加岐鉤音古候反</small>
34	十14才	局處部	鑰子	唐韻云鎖 <small>蕪果反俗 作鑰子</small> 鑰鑰也楊氏漢語抄云鑰子 <small>藏乃賀岐辨色 立成云藏鑰</small>
35	十16才	局處部	橋 <small>葱臺附</small>	說文云橋 <small>音垂和 名波之</small> 水上橫木所以渡也爾雅注云梁 <small>音良</small> 即 水橋也楊氏漢語抄云葱臺 <small>比良岐 波之良</small> 橋兩端所豎之柱其 頭似蔥花故云

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
36	十一1ウ	船部	舶	唐韻云舶 <small>傍陌反楊氏漢語抄云都其能布祿</small> 海中大船也
37	十一2才	船部	水脉船	楊氏漢語抄云水脉船 <small>美乎比較能布祿</small>
38	十一3才	船部	帆竿	楊氏漢語抄云帆竿 <small>保偶多下古寒反</small>
39	十一4才	船部	舳	唐韻云舳 <small>徒可反上聲之重字亦作舳</small> 正舳木也楊氏漢語抄云舳 <small>舳尾也或作舳和語多伊之今案舟人呼舳抄為舳師是</small>
40	十一4ウ	船部		楊氏漢語抄云 <small>布奈迄書證反</small>
41	十一9才	牛馬部	烏牛	辨色立成云烏牛 <small>楊氏漢語抄云麻伊</small> 黑牛也
42	十一11才	牛馬部	落星馬	楊氏漢語抄云落星馬 <small>保之豆岐乃字萬</small>
43	十一12才	燈火部	燈械	楊氏漢語抄云燈械 <small>音戒</small> 所以居燈盞也
44	十一12才	燈火部	火爐	聲類云爐 <small>音盧楊氏漢語抄云火爐此多岐</small> 火爐火所居也
45	十一16ウ	裝束部	袍	楊氏漢語抄云袍 <small>薄交反和名字倍乃岐一云朝服</small> 著襪之袷衣也
46	十一17才	裝束部	缺掖	楊氏漢語抄云蜀衫 <small>和岐阿介乃古路毛</small> 本朝式云缺掖 <small>一云開掖</small>
47	十一17才	裝束部	襪衫	楊氏漢語抄云襪衫 <small>須會豆介乃古路毛一云奈保之能古呂毛</small>
48	十一17ウ	裝束部	背子 <small>領巾附</small>	辨色立成云背子 <small>和名加良岐沼</small> 形如半臂無腰襪之袷衣也楊氏漢語抄云背子婦人表衣以錦爲之領巾 <small>日本紀私記云比禮</small> 婦人項上飾也
49	十一19才	裝束部	奴袴	楊氏漢語抄云奴袴 <small>佐師奴杖乃波賀萬漢語抄云納狩袴或云岐奴乃加利八加萬</small>
50	十一19才	裝束部	褌	方言注云袴面無跨謂之褌 <small>音昆名須萬之毛能一云知比佐岐毛乃</small> 史記云司馬相如著犢鼻韋昭曰今三尺布作之形如牛鼻者也唐韻云褌 <small>職容反與鍾同楊氏漢語抄云褌子毛乃之太乃太不佐岐一云水子</small> 小褌也
51	十一19ウ	裝束部	紐子	說文云紐 <small>女久反楊氏漢語抄云紐子比毛</small> 結而可解者也
52	十一21ウ	裝束部	勒肚巾	楊氏漢語抄云勒肚巾 <small>波良萬岐一云腹帶</small>
53	十一21ウ	裝束部	鞆	唐韻云鞆 <small>他丁反字亦作鞆和名於比加波</small> 楊氏漢語抄云腰帶之革末著鉸具爲鞆也
54	十二21ウ	裝束部	鉸具	楊氏漢語抄云鉸具 <small>上音古巧反下音教鉸具此開云賀古今按唐令所謂玉鉸是也巳見上文</small> 腰帶及鞍具以銅屬革也
55	十二22才	裝束部	鉉子	楊氏漢語抄云鉉子 <small>上音胡大反上聲之重</small> 著鞆錢也
56	十二23才	裝束部	鼻高履	楊氏漢語抄云突子 <small>突音他骨反今僧侶所著鼻廣履是歟</small> 鼻高履也

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
57	十二23才	裝束部	線鞋	辨色立成云線鞋 <small>上仙戰反字亦作綫下戶佳反又戶皆反楊氏漢語抄云線鞋于開乃久都</small> 純線兼用男女通著
58	十二23ウ	裝束部	木履	續漢書云袁宏著木屐楊氏漢語抄云木履 <small>記具部</small>
59	十二24才	裝束部	草履	楊氏漢語抄云草履 <small>和名與屬同俗云佐宇利</small>
60	十二24才	裝束部	履屨	野王曰屨 <small>思協反和名久都和良一云久都乃之岐</small> 履中薦也楊氏漢語抄云履屨一名履 <small>七余反又苞之見廚膳具</small>
61	十二24才	裝束部	靴氈	唐令云諸給時服春秋各給靴一兩並氈 <small>諸延反楊氏漢語抄云靴氈靴裏氈也</small>
62	十二24ウ	裝束部	靴帶	楊氏漢語抄云靴條 <small>吐刀反與韜同</small> 所以繫靴跟也或以革為之喚云靴帶
63	十三6ウ	調度部	龍眼木	楊氏漢語抄云龍眼木 <small>佐加岐</small> 今按龍眼者其子名也見本草日本紀私記云坂樹刺立為祭神之木今按本朝式用賢木二字漢語鈔榘字並未詳
64	十三13ウ	調度部	角	兼名苑注云角本出胡中或云出吳越以象龍吟也楊氏漢語鈔云大角 <small>波良乃布江</small> 小角 <small>久太能布江</small>
65	十四2才	調度部	鈴	陸詞切韻云鈴 <small>音靈</small> 似鐘而小楊氏漢語抄云鈴子 <small>須須</small> 三禮圖云鐸 <small>音澤</small> 今之鈴其匡以銅為也
66	十四3才	調度部	權衡	廣雅云鍾 <small>音垂</small> 謂之權 <small>和名波加利乃於毛之</small> 兼名苑云銓 <small>音全</small> 一名衡稱也楊氏漢語抄云權衡 <small>加良波利可</small>
67	十四5才	調度部	鑷子	釋名云鑷 <small>尼輻反</small> 攝也拔取毛髮也楊氏漢語抄云 <small>波奈介俗</small> 云 <small>計沼岐</small>
68	十四6才	調度部	盥	說文云盥 <small>音管一音貫</small> 澡手也字從白水臨皿也楊氏漢語鈔云澡盥 <small>多良比</small> 俗用手洗二字
69	十四6ウ	調度部	浴斛	楊氏漢語抄云浴斛 <small>由布祿下音胡谷反</small>
70	十四8才	調度部	剪刀	楊氏漢語抄云剪刀 <small>剪音即</small>
71	十四9ウ	調度部	鴨頭草	楊氏漢語鈔云鴨頭草 <small>都岐久佐</small> 辨色立成云 <small>押赤草</small>

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
72	十四10ウ	調度部	機	國語注云織設經緯以機 <small>居衣反</small> 成繪布也楊氏漢語抄云高機 <small>多加波太</small> 今按機巧之處 <small>和加豆利</small> 說文云緯 <small>音尉和名沼岐</small> 織橫絲也謂緯則經可知
73	十四10ウ	調度部	膝	四聲字苑云膝 <small>音勝</small> 織機卷經之木也楊氏漢語抄云織膝 <small>知利</small>
74	十四11才	調度部	卧機	楊氏漢語抄云卧機 <small>久豆比較</small> 辨色立成說同
75	十四11ウ	調度部	卷子	楊氏漢語抄云卷子 <small>閉蘇</small> 今按本文未詳但閭巷所傳續麻圓巷名也
76	十四13才	調度部	絡塚	楊氏漢語抄云 <small>多多理下他果反</small>
77	十四14ウ	調度部	牙床	遊仙窟云六尺象牙床 <small>楊氏漢語抄云牙床久禮度古</small>
78	十四16ウ	調度部	麓	說文云 <small>音鹿楊氏漢語抄云麓子須利</small> 竹篋也
79	十四17ウ	調度部	吧幘	通俗文云帛三幅曰吧 <small>普賀反去聲之輕</small> 吧衣曰幘 <small>音幘</small> 楊氏漢語抄云衣幘 <small>古路毛都都美</small>
80	十五1才	調度部	鞍 <small>鞍鞍附</small>	說文云鞍 <small>音安字或作業和名久良俗有唐鞍移鞍結鞍等名</small> 馬鞍也蔣鮐切韻云鞍 <small>音鞍楊氏漢語抄云鞍鞍</small> 久良 <small>於玖</small> 以鞍駕馬也卸 <small>司夜反楊氏漢語抄云卸鞍久良於呂須</small> 除鞍也
81	十五1ウ	調度部	鞍橋	楊氏漢語抄云鞍橋 <small>久良保祿</small> 一云鞍瓦
82	十五1ウ	調度部	鞍褥	楊氏漢語抄云鞍褥 <small>久良之岐俗云宇波之岐</small>
83	十五2才	調度部	當胷	後漢書云拔佩刀截馬當胸 <small>楊氏漢語抄云班胷無奈加岐</small>
84	十五2才	調度部	鞞	唐韻云鞞 <small>音吹</small> 鞍鞞也楊氏漢語抄云 <small>賀禮比都氣</small>
85	十五2ウ	調度部	鐙靽	楊氏漢語抄云鐙靽 <small>美豆乎下音祖</small> 一云鐙斬 <small>音斤去聲</small>
86	十五2ウ	調度部	逆靽	楊氏漢語抄云逆靽 <small>知賀良加波</small> 一云逆斬
87	十五3才	調度部	鞍吧	楊氏漢語抄云鞍吧 <small>久良於保比下芳霸反</small>
88	十五3ウ	調度部	轡	兼名苑云轡 <small>音秘調久豆和都良俗云久都和</small> 一名𨔵 <small>爭列反</small> 楊氏漢語抄云韁鞿 <small>兼頁二音和名同上</small> 一云馬鞿
89	十五7ウ	調度部	鋤	兼名苑云鋤 <small>七通反字亦作鏟和名久波</small> 一名鏟 <small>音華</small> 說文云鏟 <small>補各反楊氏漢語抄云鏟和名上同</small> 大鋤也
90	十六3ウ	器皿部	疊子	唐式云飯碗羹碗疊子各一 <small>楊氏漢語抄云疊子字流之沼利乃佐良</small> 遊仙窟云麟脯豹胎紛綸於玉疊 <small>今案以玉為疊子也</small>





	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
111	十七7ウ	菓蓏部	松子	脚氣論獨活酒方云獨活一斤五葉松五兩 <small>合藥七種之內也餘不具載</small> 楊氏漢語抄云五粒松 <small>五松子和名萬豆乃莢</small>
112	十七8才	菓蓏部	桃子	漢武內傳云西王母桃三千年一生實 <small>西王母者仙人也桃音陶和名毛夕楊氏漢語抄云鐘桃</small>
113	十七13ウ	菜蔬部	蒜 <small>蒜類附</small>	唐韻云蒜 <small>音筭和名比流</small> 葷菜也楊氏漢語抄云蒜顆 <small>比流佐木今案顆小頭也音果見玉篇</small>
114	十七14才	菜蔬部	島蒜	楊氏漢語抄云島蒜 <small>阿佐豆木本朝式文用之</small>
115	十七15才	菜蔬部	海松	崔禹錫食經云水松狀如松而無葉 <small>和名英流</small> 楊氏漢語抄云海松 <small>和名上同俗用之</small>
116	十七15ウ	菜蔬部	雞冠菜	楊氏漢語抄云雞冠菜 <small>土里佐加乃里式文用島坂苔</small>
117	十七16才	菜蔬部	大凝菜	本朝式云凝海藻 <small>古留毛波俗用心太二字云古ケ呂布止</small> 楊氏漢語抄云大凝菜
118	十七16才	菜蔬部	鹿尾菜	辨色立成云六味菜 <small>比須木毛</small> 楊氏漢語抄云鹿尾菜
119	十七16ウ	菜蔬部	水葱	唐韻云藪 <small>胡古反</small> 楊氏漢語抄云水葱 <small>奈一云薺菜</small> <small>藪音與藪同今按藪宜作藪解者石藪他草名也</small>
120	十七20ウ	菜蔬部	鬼升莢	楊氏漢語抄云鬼升皂莢 <small>久ヶ散造一云鬱茂草</small> <small>辨色立成云鬱莢今按本文未詳</small>
121	十八2ウ	羽族部	鶴	四聲字苑云鶴 <small>何各反和名豆流</small> 似鵠長喙高腳者也唐韻云鶴 <small>音零楊氏漢語抄云多豆今按倭俗謂鶴為萐鶴是也</small> 鶴別名也。
122	十八5ウ	羽族部	獺子鳥	辨色立成云臙觜鳥 <small>阿止里一云胡雀</small> 楊氏漢語抄云獺子鳥 <small>和名上同今按</small> 兩說所出未詳但本朝國史用獺子鳥又或說云此鳥群飛如列卒之滿山林故名獺子鳥也
123	十八6才	羽族部	胡鷺	兼名苑注云鷺有胡越二種 <small>楊氏漢語抄云胡鷺子阿萬止里</small>
124	十八6才	羽族部	鷓鴣	兼名苑云鷓一名鷓 <small>上音覓下音頰</small> 楊氏漢語抄云伯勞也日本私記云百舌鳥
125	十八7才	羽族部	鷺	陸詞切韻云鷺 <small>烏莖反</small> 楊氏漢語抄云春鳥也
126	十八7ウ	羽族部	雲雀	崔禹錫食經云雲雀似雀而大 <small>和名比波里</small> 楊氏漢語抄云鷓 <small>會庚二音和名上同</small>
127	十八7ウ	羽族部	鷓鴣鳥	唐韻云鷓鴣 <small>澤虞二音</small> 楊氏漢語抄云護田也爾雅集注云鷓 <small>音一</small> 名澤虞即護田鳥也常在澤中見人輒鳴有似主守官故以名之

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
128	十八8ウ	羽族部	鴨	爾雅集注云鴨 <small>音押</small> 野名曰鳧 <small>音扶</small> 家名曰鶩 <small>音木</small> 楊氏漢語抄 云鳧 <small>加毛下音</small> 鶩 <small>鳥 替 反</small>
129	十八9ウ	羽族部	鴈	玉篇云鴈 <small>音囀和</small> 赤喙自呼之鳥也楊氏漢語抄云紅鶴 <small>和名上同俗用鴈 字今按所出未詳</small>
130	十八16才	毛群部	猿	風土記云 <small>音園字亦作</small> 善負子乘危而投至倒而還者也兼 名苑云一名獼猴 <small>彌侯二音</small> 文選云猿狽 <small>音友</small> 失木唐韻云猴獼 <small>音孫楊氏漢語抄云胡孫</small>
131	十八18才	毛群部	鼯鼠	爾雅集注云鼯鼠 <small>上音西</small> 狀如鼠赤黃而大尾能食鼠今 江東呼為鼯 <small>音性和名以太知楊氏漢語抄云鼠狼</small>
132	十八20才	毛群部	觥	說文云觥 <small>丁禮反楊氏漢語抄云</small> 以角觸物也 <small>牛相觥豆木之良比</small>
133	十九6ウ	鱗介部	鮠	爾雅集注云鮠 <small>胡木反上声之重字</small> 似鱒者也楊氏漢語抄云 水鮠 <small>亦作鱒和名阿米</small> <small>一云江鮠今案本文未詳</small>
134	十九7ウ	鱗介部	鮎	本草云鮎魚 <small>上音夷</small> 蘇敬注云一名鮎魚 <small>上音奴兼反和名安由楊氏漢語抄云銀口魚又云細鱗魚</small> 崔禹錫食經云貌似鱒而小有白皮無鱗春生夏長 秋衰冬死故名年魚也
135	十九9ウ	鱗介部	甲贏子	本草云甲贏子 <small>今按贏即螺子也音羅</small> 貌似似辛螺而中有角盖 者也 <small>楊氏漢語抄海蠃豆比</small>
136	十九10才	鱗介部	小贏子	崔禹錫食經云小贏子 <small>楊氏漢語抄云</small> 貌似甲贏而細小口 有白玉之盖者也 <small>細螺之太太美</small>
137	十九10ウ	鱗介部	大辛螺	七卷食經云大辛螺 <small>和名阿木</small> 楊氏漢語抄云蓼螺一云赤 口螺 <small>和名上同辨色 立成說亦同</small>
138	十九11才	鱗介部	小辛螺	七卷食經云小辛螺 <small>和名仁之</small> 楊氏漢語抄云蓼螺子
139	十九13ウ	鱗介部	蟛蜞	楊氏漢語抄云蟛蜞 <small>彭其二音海濱 稻春蟹之類也</small>
140	十九13ウ	鱗介部	蟛蛄	兼名苑云蟛蛄 <small>彭越二音楊氏漢語抄云</small> 形似蟹而小也 <small>羣原蟹</small>
141	二十2ウ	草木部	鹿鳴草	爾雅集注云荻一名蕭 <small>荻音秋一音焦蕭音宵和名波木今按牧名用荻字荻倉 是也辨色立成新撰萬葉集等用等字唐韻等音胡蛄反</small> <small>草名也國史用芳荻草三字楊氏漢語抄又用鹿鳴草三字並本文未詳</small>
142	二十14才	草木部	莎草	唐韻云莎草 <small>禾反楊氏漢語抄云</small> 草名也 <small>語抄云其具</small>
143	二十17ウ	草木部	筍竹	文字集略云筍 <small>音甘楊氏漢語抄云</small> 似篁而節茂 滋者也 <small>竹也和語云久禮大介</small>

	所在	部	語彙	楊氏漢語抄
144	二十17ウ	草木部	篔竹	唐韻云篔竹 <small>徒敢反上声之重</small> 楊氏漢語抄云 <small>淡竹於保多介今按淡宜作篔</small> 竹名也
145	二十19才	草木部	黑柘	楊氏漢語抄云柘心 <small>久呂加木俗用黑柘或說是柘木心黑處名也為近於俗別以置之</small>
146	二十21ウ	草木部	厚朴 <small>重皮附</small>	本草云厚朴一名厚皮 <small>楊漢語抄云厚木保</small> 釋藥性云重皮 <small>氏保加之波乃木</small> 和名保保厚朴皮名也 <small>乃加波</small>
147	二十24才	草木部	雞冠木	楊氏漢語抄云雞冠木 <small>賀倍天乃木辨色立成云雞頭樹加比留提乃木今案是一木名也</small>
148	二十24ウ	草木部	金漆樹	楊氏漢語抄云金漆樹 <small>許師阿夫良能紀</small>
149	二十24ウ	草木部	烏草樹	楊氏漢語抄云烏草樹 <small>佐之夫乃紀辨色立成說同</small>
150	二十24ウ	草木部	女貞	拾遺本草云女貞一名冬青 <small>和名太豆乃木楊氏漢語抄云比女都波木</small> 冬月青翠故以名之
151	二十24ウ	草木部	黃芩	本草云黃芩 <small>音琴和名比比良木</small> 楊氏漢語抄云扛谷樹 <small>扛音江和一名上同</small> 一云巴戟天
152	二十25才	草木部	椿	唐韻云椿 <small>物倫反和名豆波木</small> 木名也楊氏漢語抄云海石榴 <small>和名上同本朝式等用之</small>

2) 「楊氏說...」と記されている逸文

	所在	部	語彙	楊氏說
1	三5才	形體部	板齒	辨色立成云板齒 <small>和名奴加波楊氏說同之</small>
2	三20ウ	形體部	擇食	辨色立成云擇食 <small>和名豆波利又楊氏說同</small>
3	十12ウ	局處部	雞栖	考聲切韻云 <small>毛報反</small> 今之門雞栖也辨色立成云雞栖 <small>鳥居也楊氏說同</small>
4	十13ウ	局處部	鑿釵	辨色立成云鑿釵 <small>斗乃比較天門鈎也楊氏說同</small>
5	十九10ウ	鱗介部	石炎螺	辨色立成云石炎螺 <small>萬與和楊氏說同</small>

3) 「楊氏曰...」と記されている逸文

	所在	部	語彙	楊氏曰
1	十一2ウ	船部	艫	兼名苑注云船後頭謂之艫 <small>音盧楊氏曰舟後刺僅處也和語云度毛</small>

4) 「楊氏抄云...」と記されている逸文

	所在	部	語彙	楊氏抄云
1	十四5才	調度部	鉸刀	楊氏抄云鉸刀 <small>波佐美上音巧反</small>
2	十七20才	菜蔬部	馬莧	陶隱居本草注云今馬莧別有一種布地而生葉至細微俗呼為馬齒莧 <small>楊氏抄云馬齒草字萬比由</small>

3	十八 7 才	羽族部	鷺	玉篇云鷺 <small>音龍楊氏抄云之木一云田鳥</small> 野鳥也
4	十八 8 ウ	羽族部	鴛鴦	崔豹古今注云鴛鴦 <small>鴛鴦二音和名乎之楊氏抄云溪鳥鷺其音溪勅</small> 雌雄未嘗相離人 得其一則其一思而死故名匹鳥也

5) 「楊氏漢鈔云…」と記されている逸文

	所在	部	語彙	楊氏漢鈔云
1	十三 5 才	調度部	漉水囊	涅槃經云漉水囊 <small>和名美豆漉音盧楊氏漢鈔云漉須久比布流比漉谷反</small>

### 1.1.2 『和名類聚抄』における『漢語抄』の逸文

#### 1) 「漢語抄…」と記されている逸文

	所在	部	語彙	「漢語抄」
1	十 8 ウ	局處部	櫂	釋名云櫂 <small>音襄和名太流岐楊氏漢語抄云波閉岐</small> 在穩旁下垂也兼名苑云一名 棹 <small>音老一名椽音傳</small> 間杓 <small>唐韻云音人漢語抄云間杓太留木</small>
2	十 9 ウ	局處部	枅	唐韻云枅 <small>音雞漢語抄云比知岐功程式云肢木</small>
3	十 10 オ	局處部	軒檻	漢書注云軒檻上板也 <small>檻音監文選檻讀師說於波之萬</small> 殿上欄也唐韻云 欄 <small>音蘭漢語抄云欄檻</small>
4	十 13 オ	局處部	楫	四聲字苑云楫 <small>莫到反又莫代反漢語抄云度加美功程式云鼠走</small> 門樞橫梁也
5	十 15 ウ	局處部	磴道	文字集略云磴道 <small>土聲反上聲之重漢語抄云夜末乃加介知</small> 山路閣道也
6	十 16 ウ	局處部	遠邏	唐韻云遠邏 <small>上凶鄭反</small> 漢語抄云遠邏 <small>知毛利</small>
7	十一 1 ウ	船部	艇 <small>遊艇附</small>	唐韻云艇 <small>徒鼎反上聲之重漢語抄云艇乎夫祿遊艇波之布祿</small> 小舩也釋名云一二人所 乘也
8	十一 2 オ	船部	舸	四聲字苑云舸 <small>古我反漢語抄云波夜布祿</small> 高尾舟一云戰士可乘之輕 舟也
9	十一 2 オ	船部	艨艟	四聲字苑云艨艟 <small>蒙衝二音又並去聲漢語抄云以久佐乃不祿</small> 戰舩也
10	十一 2 ウ	船部	舳	兼名苑注云舳前頭謂之舳 <small>漢語抄云舟頭制水處也和語云閉</small>
11	十一 3 ウ	船部	棹	釋名云在旁撥水曰棹 <small>直教反字亦作棹漢語抄云加伊</small> 擢於水中且進擢 也
12	十一 4 オ	船部	戕舸	唐韻云戕舸 <small>臧柯二音漢語抄云加之</small> 所以繫舟
13	十一 4 ウ	船部	屨 <small>塗附</small>	蔣魴切韻云屨 <small>音故和名由土利</small> 洩舟中水之斗也唐韻云洩 <small>故紺反漢語抄云屨布奈由一云客水</small> 水和物也
14	十一 6 オ	車部	輶	唐韻云輶 <small>音俳</small> 車箱也漢語抄云車箱 <small>車乃度古</small> 一云車輿
15	十一 6 ウ	車部	輪 <small>輜附</small>	野王案輪 <small>音倫和名</small> 和車脚所以轉進也四聲字苑云輞 <small>文兩反漢語抄云於保加一云輪牙</small> 車輪郭曲木也
16	十一 6 ウ	車部	輶	說文云輶 <small>古祿反漢語抄云車乃古之輶俗云輶</small> 幅所湊也
17	十一 7 オ	車部	輶	唐韻云輶 <small>胡果反上聲之重又音果漢語抄云車乃阿不良都乃</small> 車脂角也
18	十一 7 オ	車部	乘泥	漢語抄云乘泥 <small>車乃都知波良非</small>
19	十一 7 ウ	車部	鞅	毛詩注云鞅 <small>音引</small> 所以引車也四聲字苑云鞅 <small>於兩反漢語抄云無奈加岐</small>

	所在	部	語彙	「漢語抄」
				軛下絆頸繩也
20	十一 7 ウ	車部	牛縻	蒼頡篇云縻 <small>音與縻同和名波奈都良</small> 牛韁也字書云衆 <small>音眷漢語抄云衆牛乃波奈岐</small> 牛鼻環也
21	十一 8 ウ	牛馬部	駿馬	穆天子傳云駿 <small>音俊漢語抄云土岐字萬日本紀私記云須久禮留字萬</small> 馬之美稱也
22	十一 8 ウ	牛馬部	駑馬 <small>駑附</small>	唐韻云駑 <small>音台駑馬也</small> 野王曰駑 <small>音奴漢語抄云駑馬之最下也</small> 郭知玄曰駑 <small>唐佐反</small> 負物馬也
23	十一 9 ウ	牛馬部	驄馬	說文云驄 <small>音聰漢語抄云驄青馬也黃驄馬蓋花毛馬也日本紀私云美太良乎乃字萬</small> 青白雜毛馬也
24	十一 9 ウ	牛馬部	青驪馬	唐韻云驪 <small>火玄反漢語抄云伏驪馬久路美度利能字麻</small> 青驪馬今之鍊驪馬也
25	十一 9 ウ	牛馬部	連錢驄	爾雅注云色有深淺斑駁謂之連錢驄 <small>漢語抄云連錢驄虎毛馬也一云驄馬驄音余又云薄漢馬今案俗云連錢蓋毛是</small>
26	十一 9 ウ	牛馬部	驪馬 <small>赤驪附</small>	說文云驪 <small>昆召反漢語抄云驪馬白鹿毛也赤驪馬赤鹿毛也黃馬同上</small> 黃白色馬也
27	十一 10 才	牛馬部	騮馬	爾雅注云騮 <small>音花漢語抄云騮馬鹿毛馬也</small> 淺黃色馬也
28	十一 10 才	牛馬部	騮馬 <small>紫馬附</small>	毛詩注云騮 <small>音留漢語抄云騮馬鹿毛也烏騮黑鹿毛也黃騮赤栗毛也紫騮黑栗毛也</small> 赤身黑鬣馬也唐韻云騮 <small>羊朱反辨色立成云紫毛栗毛也</small> 紫馬也
29	十一 10 才	牛馬部	驪馬	毛詩注云驪 <small>音離漢語抄云驪馬黑毛馬也</small> 純黑馬也
30	十一 10 才	牛馬部	騮 <small>莢附</small>	毛詩注云騮 <small>音離漢語抄云騮馬鼠毛也</small> 蒼白雜毛馬也爾雅注云云莢 <small>今按莢者蘆初生也吐散反俗云莢毛是</small> 青白如莢色也
31	十一 10 ウ	牛馬部	赭白馬	毛詩注云駟 <small>音遐漢語抄云赭白馬駟毛也駟黃馬赤駟毛也今按駟字未詳</small> 彤白雜毛馬也爾雅注云駟今之赭白馬也
32	十一 10 ウ	牛馬部	駱馬	毛詩注云駱 <small>音落漢語抄云駱馬川原毛也沙駱馬黑川原毛也</small> 白馬黑鬣之馬也
33	十一 10 ウ	牛馬部	騂馬 <small>赤騂附</small>	唐韻云騂 <small>音征漢語抄云騂馬赤毛馬也赤騂山鳥赤毛馬也騂音華</small> 馬赤色也
34	十一 11 才	牛馬部	駟馬	唐韻云駟 <small>音狼漢語抄云平之路能字麻</small> 馬尾白也
35	十一 12 才	牛馬部	夜眼	辨色立成云夜眼 <small>與米漢語抄說同</small>
36	十二 10 才	燈火部	燂煨	唐韻云燂 <small>昌志反漢語抄云於歧比</small> 猛火也又盛也四聲字苑云燂煨 <small>唐限二音和名上同</small> 熱灰新火也
37	十二 12 才	燈火部	絀 <small>絀字附</small>	唐韻云絀 <small>式支反與施同和名阿之岐沼</small> 繪似布也絀 <small>匹夷反漢語抄云萬與布一云與流</small> 繪欲壞也
38	十二 14 ウ	燈火部	質布	唐韻云帑 <small>音與質同</small> 布名也唐式云質布 <small>漢語抄云佐與美乃沼能今按質布宜作帑布乎</small>
39	十二 15 才	布帛部	冠 <small>幘頭附</small>	兼名苑注云冠 <small>音管</small> 黃帝造也辨色立成云幘頭 <small>加字布利幘音僕今按漢</small>

	所在	部	語彙	「漢語抄」
				語抄說同唐 令等亦用之
40	十二 18 才	裝束部	袷	唐韻云袷 <small>人質反又尼質反漢語抄云古女岐沼</small> 女人近身衣也
41	十二 18 才	裝束部	袿	漢書音義云諸于 <small>今按于宜作托見玉篇</small> 大袿衣婦人袿衣也釋名云袿 <small>音圭漢語抄作掛云字知岐</small> 婦人上衣也
42	十二 19 才	裝束部	奴袴	楊氏漢語抄云奴袴 <small>佐師奴枳乃波賀萬漢語抄云紉狩袴或云岐奴乃加利八加萬</small>
43	十二 23 ウ	裝束部	屣履	史記注云屣 <small>所綺反與徒同漢語抄云屣履久都都計乃阿之太一云履子</small> 履之屬也
44	十三 1 ウ	調度部	火珠	漢語抄云火珠 <small>塔乃比散久加太</small>
45	十三 6 ウ	調度部	龍眼木	楊氏漢語抄云龍眼木 <small>佐加岐</small> 今按龍眼者其子名也見本草日本紀私記云坂樹刺立為祭神之木今按本朝式用賢木二字漢語鈔榘字並未詳
46	十三 7 ウ	調度部	葉手	漢語抄云葉手 <small>比良天</small>
47	十三 7 ウ	調度部	粢餅	陸詞切韻云粢 <small>音姿又疾册反</small> 漢語鈔云粢 <small>之度岐</small> 祭餅也
48	十三 7 ウ	調度部	粿米	唐韻云粿米 <small>音果</small> 漢語鈔云粿米 <small>加之與祿</small> 淨米也
49	十三 8 才	調度部	寶倉	漢語抄云寶倉 <small>保久良</small> 一云神殿
50	十三 8 ウ	調度部	筆臺	漢語抄云筆臺
51	十三 10 ウ	調度部	青黛	漢語抄云青黛
52	十三 11 才	調度部	同黃	漢語抄云同黃
53	十三 15 ウ	調度部	柎	玉篇云柎械也說文云柎 <small>音酷</small> 手械也漢語抄云柎 <small>天之加</small> 今按柎又木名也以音可分柎械之柎 <small>勅久柎櫓之柎</small> <small>女久反</small>
54	十四 7 ウ	調度部	食單	唐式曰鐵鍋食單各一 <small>漢語抄云食單須古毛</small>
55	十四 8 才	調度部	碇	陸詞切韻云碇 <small>尺戰反與碇同</small> 展繪石也漢語抄云 <small>岐沼以太</small>
56	十四 10 ウ	調度部	箴	唐韻云箴 <small>音成</small> 織具也漢語抄云 <small>乎佐</small>
57	十四 11 才	調度部	繮車	說文云繮 <small>音對反</small> 著絲於筭也漢語抄云 <small>沼岐加利不</small>
58	十四 11 才	調度部	繮筭	說文云筭 <small>音無反與數同</small> 繮絲管也漢語抄云 <small>久太</small> 辨色立成云管子 <small>和名同上</small> 新撰萬葉集亦用之
59	十四 11 ウ	調度部	織複	孫愐曰織複 <small>音服</small> 機之卷繪者也漢語鈔云 <small>井乃阿之</small>
60	十四 12 ウ	調度部	絰絲	說文云絰 <small>口蟬反</small> 惡絲也漢語鈔云 <small>介之以度</small>



	所在	部	語彙	「漢語抄」
61	十四 12 ウ	調度部	反轉	辨色立成云反轉 <small>夕流漢抄說同</small>
62	十四 12 ウ	調度部	繆車	唐韻云繆 <small>蘇遭反又所</small> 絡絲取也漢語抄云繆車 <small>於保</small>
63	十四 13 才	調度部	鍋	字書云鍋 <small>音戈</small> 紡車收絲者也字亦作柶漢語鈔云 <small>郡美</small> 唐韻云紡 <small>芳兩反</small> 續也蔣鮪切韻云績 <small>則歷反</small> 續麻苧名也
64	十四 14 才	調度部	縛壁	釋名云縛壁以席縛著於壁也漢語抄云縛壁 <small>多郡</small>
65	十四 14 才	調度部	障子	漢語抄云障子 <small>屏風之</small>
66	十四 16 ウ	調度部	笕	唐韻云笕 <small>當侯反漢語抄云波</small> 飼馬籠也
67	十四 16 ウ	調度部	椽子	蔣鮪切韻云椽 <small>力委反漢語抄云椽子加禮比計今</small> 椽子中有障之器也四聲字苑云餉 <small>式亮反字亦作</small> 以食送人也
68	十四 17 ウ	調度部	橫首杖	唐韻云欸 <small>他禮反與體同漢語抄云</small> 橫首杖也
69	十五 3 ウ	調度部	鞵頭	唐韻云鞵 <small>音龍漢語抄云</small> 鞵頭也鞵 <small>音基</small> 馬絡頭也 <small>今案絡頭</small>
70	十五 4 才	調度部	馬刷	漢語抄云馬刷 <small>干麻波太氣</small>
71	十五 4 才	調度部	挫薙	唐式云剉薙一具 <small>漢語抄云久佐岐</small>
72	十五 5 才	調度部	旋子	漢語抄云旋子 <small>毛度保利</small>
73	十五 5 才	調度部	鱗	唐韻云鱗 <small>音廢漢語抄云</small> 弋射收繳具也
74	十五 5 ウ	調度部	竝	四聲字苑云竝 <small>其高反漢語抄云久比知</small> 取獸械也
75	十五 6 才	調度部	梏	唐韻云梏 <small>音固漢語抄云</small> 射鼠斗也
76	十五 6 才	調度部	鼠弩	漢語抄云鼠弩 <small>於一</small> 云鼠弓
77	十五 6 才	調度部	囹	唐韻云囹 <small>音訛漢語抄云</small> 網鳥者媒也
78	十五 6 才	調度部	糝 <small>附撰</small>	唐韻云糝 <small>刃知反和</small> 所以黏鳥也 <small>撰</small> 所以捕鳥也
79	十五 6 才	調度部	矧	唐韻云矧 <small>張留反漢語抄云</small> 射鳥矢名也
80	十五 6 ウ	調度部	魚梁	毛詩注云梁 <small>音良和</small> 魚梁也唐韻云籍 <small>土角反漢語抄云</small> 取魚箔也
81	十五 7 才	調度部	簠	纂要云簠 <small>虎郭反又土角反</small> 以鐵施棹頭因以取魚也
82	十五 7 才	調度部	泛子	蔣鮪切韻云泛子 <small>漢語抄云宇介今案</small> 釣別名也
83	十五 7 ウ	調度部	犁	唐韻云犁 <small>音黎和名</small> 墾田器也 <small>必益反和</small> 犁耳也漢語抄未底 <small>為佐利</small> 未骨未稜 <small>等利久比</small> 未箭 <small>太ヶ利</small> 未鑿 <small>佐岐下字</small>
84	十五 8 才	調度部	鍤	國語注云鍤 <small>音傳漢語抄云</small> 鋤屬也釋名云鍤迫地去草也
85	十五 8 才	調度部	鈞	麻果切韻云鈞 <small>音麥反又音狄反漢語抄云</small> 鈞鈞也

	所在	部	語彙	「漢語抄」
86	十五 8 才	調度部	馬杷	唐韻云杷 <small>白賀反一音琶辨色立成云馬杷字麻久波一云馬齒</small> 作田具也 <small>鏹騰</small> <small>鏹騰二音漢語抄和名上同</small> 鐵齒杷各也
87	十五 8 才	調度部	權	楊雄方言云齊魯謂四齒杷為權 <small>音權漢語抄云佐良比</small>
88	十五 8 ウ	調度部	杷	郭璞方言注云江東杷之無齒者為杷 <small>音拜漢語抄云江布利</small>
89	十五 8 ウ	調度部	杵	唐韻云杵 <small>虛殿反漢語抄云古須岐</small> 鍬屬也
90	十五 9 才	調度部	鋌	漢語抄云鋌 <small>辭戀反又市連反和名路久魯加奈</small> 轆轤之裁刀也
91	十五 9 ウ	調度部	鉗鑑	漢語抄云鉗鑑 <small>浮譚二音和名乃之加太乃久岐</small> 頭高大釘也
92	十五 9 ウ	調度部	準繩	漢語抄云準繩 <small>美豆波加利</small>
93	十五 9 ウ	調度部	鑿	唐韻云鑿 <small>音譚一音暫漢語抄云加奈布久之</small> 犁鐵又土具也
94	十五 9 ウ	調度部	椽擊	纂文云齊人以大槌為椽擊 <small>漢語抄云阿比</small>
95	十五 10 才	調度部	檜楚	漢語抄云檜楚 <small>比曾俗用檢會二字今案楚字是也</small>
96	十五 10 ウ	調度部	孃	唐韻云孃 <small>音驚漢語抄云多都岐廣刃斧也</small>
97	十五 11 才	調度部	鋸	考聲切韻云鋸 <small>雷內反又音戾漢語抄云嚴毛連</small> 鑽也
98	十五 11 才	調度部	柎椌	纂文云方椎 <small>直追反字亦作槌</small> 謂之柎椌 <small>終葵二音漢語抄云散伊都連</small>
99	十五 11 ウ	調度部	墨斗	漢語抄云墨斗 <small>須美都保</small>
100	十五 11 ウ	調度部	刀子	漢語抄云刀子 <small>賀太奈都半反</small>
101	十五 12 ウ	調度部	鬚筭	陸詞切韻云鬚 <small>音次漢語抄云鬚波介</small> 以漆塗物也
102	十五 12 ウ	調度部	錯子	唐韻云錯 <small>倉各反漢語抄云錯子古須利</small> 鑪別名又摩也
103	十五 13 ウ	調度部	韃	唐韻云韃 <small>薄拜反漢語抄云韃韃袋布岐加波</small> 韋囊吹火也野王案韃所以吹冶火令熾之囊也
104	十五 13 ウ	調度部	蹈韃	日本紀私記云蹈韃 <small>太ヶ良今按漢語抄用蹈字非也</small>
105	十五 13 ウ	調度部	和炭	漢語抄云和炭 <small>迺古須美今案一云加知須美</small>
106	十五 14 才	調度部	鋏鉗	漢語抄云鋏鉗 <small>加奈波之下奇炎反</small>
107	十五 14 才	調度部	鋏礎	漢語抄云鋏礎 <small>加奈之岐</small>
108	十五 14 才	調度部	鉸刀	漢語抄云鉸刀 <small>波佐美上古教反</small> 所以切銅鐵
109	十五 14 才	調度部	鑿子	四聲字苑云鑿 <small>音處字亦作鋸漢語抄云鑿子夜須利</small> 所以利鋸齒也
110	十五 14 才	調度部	鑽	陸詞切韻云鑽 <small>徐感反上聲之重漢語抄云大加祿</small> 剪鋏器也
111	十六 1 ウ	器皿部	鍍	四聲字苑云鍍 <small>音富漢語抄云散賀利今案春秋後語云懸釜而炊云ヶ部類書器皿部中別無有此器之名</small> 似釜而大

	所在	部	語彙	「漢語抄」
				口一云小釜也
112	十六 2 才	器皿部	銚子	四聲字苑云銚 <small>徒弔反辨色立成云銚子</small> 燒器似鎬鎬而上有鑲也唐韻云鎬鎬 <small>烏育二音漢語抄云和名同上</small> 溫器也
113	十六 2 才	器皿部	鎬	唐韻云鎬 <small>音倉字亦作鎬漢語抄云阿之奈倍今案俗說非瓶而所炊之飯謂之鎬飯鎬音如唐是愚者偏見當字在旁所讀傳歟</small> 小鼎也鎬 <small>即逢反</small> 溫器三足有柄也
114	十六 3 ウ	器皿部	匱	說文云匱 <small>初爾反一音移漢語抄並俗用椽字所出未詳或說云此器有柄半插其中故名半插也</small> 柄中有道可以注水之器也
115	十六 5 ウ	器皿部	椀	陸詞切韻云椀 <small>音與拳同漢語抄云佐須江</small> 器似斗屈木為之考聲切韻云椀盃類也
116	十六 7 ウ	器皿部	筥	方言注云蘿形小而高者江東呼為筥 <small>呼擊反漢語抄云阿自賀</small> 今按又用簣字見史記
117	十六 8 才	器皿部	筥筥	四聲字苑云筥筥 <small>二音與帶音同漢語抄云賀太美</small> 小籠也
118	十六 8 才	器皿部	筥	四聲字苑云筥 <small>博繼反漢語抄云飯</small> 蔽甌底竹筐也
119	十六 8 ウ	飲食部	醪	玉篇云醪 <small>力刀反漢語抄云濁醪毛呂美</small> 汁滓酒也
120	十六 8 ウ	飲食部	醪	說文云醪 <small>音與盃同漢語抄云加須古女俗云糟交</small> 醇未醪也唐韻云醪 <small>所宜反又上声醪俗云阿久</small> 下酒也
121	十六 9 才	飲食部	酎酒	說文云酎 <small>直祐反漢語抄云豆久利加倍世流佐介</small> 三重釀酒也西京雜記云正且作酒八月成名曰酎酒一名九醞 <small>於運反通俗文云醞醞酒於國家也蔣勣切韻云醞於醞反酒舟下雙也</small>
122	十六 10 ウ	飲食部	饗饋	四聲字苑云饗饋 <small>修紛二音漢語抄云加太加之木乃以比</small> 半熟飯也
123	十六 16 才	飲食部	炒饅	唐韻云炒饅 <small>早備二音漢語抄云魚比保之乃以乎俗云火旱</small> 火乾也
124	十六 19 才	飲食部	山葵	養生秘要云山葵 <small>和名和佐比漢語抄用山薑二字今案所出未詳</small> 補益食也
125	十七 1 ウ	稻穀部	糲	唐韻云糲 <small>音兼漢語抄云美之呂乃以稱</small> 青稻白米也
126	十七 2 才	稻穀部	糲	唐韻云糲 <small>音與造同漢語抄云毛美與稱今按本朝式等所謂為糲者</small> 春稻成穀之名也 <small>米穀雜也</small>
127	十七 2 ウ	稻穀部	秬	唐韻云秬 <small>音活漢語抄云乃古利之祿</small> 春穀不潰者也
128	十七 2 ウ	稻穀部	米	陸詞切韻云米 <small>莫禮反和名與稱</small> 穀實也說文云粒 <small>音立伊奈豆比</small> 米甲也爾雅注云糠 <small>音康和名沼賀</small> 米皮也唐韻云糲 <small>先結反漢語抄云古米佐木一云阿良毛土</small> 米麥破也

	所在	部	語彙	「漢語抄」
129	十七 7 ウ	菓蓏部	鸚實	漢語抄云鸚實 <small>俗云阿字之智一云字久比須乃岐乃美今按所出未詳</small>
130	十七 8 ウ	菓蓏部	麥李	陶隱居本草云麥李 <small>漢語抄云麥秀時熟故以名之兼名</small> 苑注云青房 <small>今按即五月熟李也</small>
131	十七 9 才	菓蓏部	櫟椶	爾雅注云櫟椶 <small>櫟加二音漢語抄云櫟椶</small> 柚屬也
132	十七 13 才	菓蓏部	薺	崔禹錫食經云薺 <small>音解和名呂俗用睡字漢語抄用野老二字今按所出並未詳</small> 味苦小甘無毒燒蒸充糧兼名苑注云黃薺其根黃白而味苦者也
133	十七 15 ウ	菜蔬部	神仙菜	崔禹錫食經云紫菜狀如紫帛疑生石上是物有三四種以紫色為勝俗呼曰神仙菜 <small>漢語抄云阿末乃里俗用甘苔</small>
134	十七 16 才	菜蔬部	海髮	崔禹錫食經云海髮味鹹小冷其色黑狀如亂髮 <small>和名以木須漢語抄云小凝菜</small>
135	十七 16 才	菜蔬部	莫鳴菜	本朝式云莫鳴菜 <small>奈ヶ里會漢語抄云神馬藻三字云奈乃里會今案本文未詳但神馬莫騎之義也</small>
136	十七 16 才	菜蔬部	鹿角菜	崔禹錫食經云鹿茸狀似水松 <small>和名豆乃萬太</small> 文選江賦注云鹿角菜 <small>漢語抄云和名同上</small>
137	十七 16 ウ	菜蔬部	石薺	唐韻云薺 <small>常倫反漢語抄云石薺古毛一云水葵菜</small> 水葵也辨色立成云海蓴 <small>和名上同</small>
138	十七 16 ウ	菜蔬部	水雲	漢語抄云水雲 <small>毛豆久今按所出未詳</small>
139	十七 19 才	菜蔬部	苣	孟詵食經云白苣 <small>其呂反上声之重和名知散漢語抄用苣苣二字上烏禾反今按苣字未詳</small> 寒補筋力者也
140	十八 3 才	羽族部	鷹	廣雅云一歲名之黃鷹 <small>俗云和二歲名之撫鷹</small> 三歲名之青鷹白鷹 <small>今按青白隨色名之俗說鷹白者不論雌雄皆名之良太質不論青白大者皆名於保太加小者皆名勢宇漢語抄用兒鷹二字為名所出未詳俗說雌鷹謂之兒鷹雌鷹謂之大鷹也</small>
141	十八 3 ウ	羽族部	鷓	兼名苑云鷓一云鷓 <small>鷓音淫鷓鷓也野王按鷓音遙又去声漢語抄云波之太賢兒</small> 鷓 <small>鷓古能里</small> 似鷹而小者也
142	十八 3 ウ	羽族部	鷓鷃	廣雅云鷓鷃 <small>帝屑二音漢語抄云乃世</small> 鷓屬也
143	十八 3 ウ	羽族部	鷓子	廣雅云鷓子 <small>鷓音非漢語抄云都布利</small> 鷓屬也
144	十八 3 ウ	羽族部	雀賊	唐韻云雀賊 <small>音戎漢語抄云和名悅賊</small> 小鷹也
145	十八 4 才	羽族部	鴟	本草云鴟一名鳶 <small>鴟音祇音鉛和名土比</small> 爾雅注云鳶一名鴟 <small>音狂漢語抄云會止比</small> 喜食鼠而大目者也
146	十八 4 ウ	羽族部	恠鴟	爾雅注云恠鴟 <small>漢語抄云與多加</small> 晝伏夜行鳴以為恠者也

	所在	部	語彙	「漢語抄」
147	十八 5 才	羽族部	鴿	陸詞切韻云鴿 <small>音黔又音琴漢語抄云比米</small> 白喙鳥也
148	十八 5 才	羽族部	鶻	孫愐切韻云鶻 <small>音脂漢語抄云之女</small> 小青雀也
149	十八 5 ウ	羽族部	鷓鴣	唐韻云鷓 <small>音坐漢語抄云</small> 鳥名也
150	十八 5 ウ	羽族部	鷓鴣	唐韻云鷓 <small>音東漢語抄云鷓鴣豆</small> 鳥名也
151	十八 6 才	羽族部	鷓鴣	四聲字苑云鷓鴣 <small>獨春二字漢語抄云鷓鴣鳥</small> 黃色聲似春者相杵也
152	十八 6 ウ	羽族部	鷓鴣	唐韻云鷓 <small>音空漢語抄云沼江</small> 恠鳥也
153	十八 6 ウ	羽族部	鷓鴣	張華博物志云鷓鴣鳥 <small>休留二音漢語抄云以比止與</small> 人截手足棄地則入其家拾取之
154	十八 7 ウ	羽族部	鷓鴣	崔禹錫食經云鷓鴣 <small>和名久比奈漢語抄云水雞</small> 貌似水雞能食鷓故以名之
155	十八 9 才	羽族部	鷓鴣	爾雅集注云鷓 <small>音彌一音施漢語抄云多加閉</small> 一名沈鳧貌似鴨而小背上有文
156	十八 9 才	羽族部	鷓鴣	野王按鷓 <small>胡篤反漢語抄云古布</small> 大鳥也
157	十八 9 ウ	羽族部	蒼鷺	崔禹錫食經云鷺又有一種相似而小色蒼黑並有水湖間 <small>漢語抄云蒼鷺茨止佐木</small>
158	十八 10 才	羽族部	鷓鴣	唐韻云鷓 <small>他后反漢語抄云久呂止里</small> 黑色水鳥也
159	十八 11 才	羽族部	毳 <small>毳附</small>	考聲切韻云毳 <small>川芮反謂爾古許</small> 細弱毛也四聲字苑云毳 <small>所劣反文選獻湯讀</small> 鳥理毛也
160	十八 12 ウ	羽族部	肫	唐韻云肫 <small>章倫反與春同漢語抄云無無木</small> 鳥藏也
161	十八 15 ウ	毛群部	麋	四聲字苑云麋 <small>音眉漢語抄云於保之加</small> 似鹿而大毛不斑以冬至解角者也
162	十八 16 才	毛群部	獠	文選注云獠 <small>上乃交反下音庭漢語抄云萬太</small> 獠屬也
163	十八 16 ウ	毛群部	貉	說文云貉 <small>音鶴漢語抄云無之奈</small> 似狐而善睡者也
164	十八 17 ウ	毛群部	鼯	文選注云鼯 <small>精勳二音漢語抄云乃良祿</small> 小鼠也
165	十九 2 ウ	鱗介部	鱸魚	唐韻云鱸 <small>音堅漢語抄云加豆</small> 大鯛也大曰鯛小曰鮠 <small>音野王</small> 按鯛 <small>音同</small> 鱸魚也 <small>鱸魚見下文今按可為鱸魚之義未詳</small>
166	十九 2 ウ	鱗介部	鮫魚	玉篇云鮫 <small>居遙反漢語抄云古都</small> 魚名也

	所在	部	語彙	「漢語抄」
167	十九 3 ウ	鱗介部	鯉	唐韻云鯉 <small>音唐漢語抄云</small> 魚名也 <small>鯉魚子太古之</small>
168	十九 4 才	鱗介部	鱸魚	唐韻云鱸 <small>直稔反與朕同漢語抄云乎古之</small> 魚名似鰕而赤文
169	十九 4 ウ	鱗介部	鱒魚	唐韻云鱒 <small>音唐漢語抄云加世佐波</small> 魚有橫骨在鼻前如竹斤斧者也 御覽鱗介部云新婦魚 <small>辨色立成和名上同</small>
170	十九 4 ウ	鱗介部	鮪	唐韻云鮪 <small>音枯漢語抄云世比今</small> 婢妾魚也 <small>禮婢妾謂妾謂婢女</small>
171	十九 5 才	鱗介部	鰓	漢語抄云 <small>鰓以和之今按本文未詳</small>
172	十九 5 才	鱗介部	鮪魚	唐韻云鮪 <small>扶板反上声之重又輕音漢語抄云波里萬知</small> 魚名也
173	十九 6 才	鱗介部	曙	文字集略云曙 <small>音曙漢語抄云美</small> 鯉屬也
174	十九 6 才	鱗介部	鮪	唐韻云鮪 <small>音時漢語抄云波曾</small> 魚名也似鮪肥美江東四月有之
175	十九 7 才	鱗介部	鯨	崔禹錫食經云鯨 <small>奴窩反和名奈萬豆漢語抄云鯨字所未詳</small> 貌似（魚臣）而大頭者也
176	十九 7 才	鱗介部	鰕魚	唐韻云鰕 <small>居衛反漢語抄云阿散知</small> 魚名大口細鱗有斑文者也
177	十九 7 ウ	鱗介部	鯢魚	陶隱居本草注鯢魚今之鯢魚也四聲字苑云鯢 <small>音題漢語抄云比師古以和之</small> 小鮪魚黑而少味也
178	十九 7 ウ	鱗介部	鮪	四聲字苑云鮪 <small>巨灰反漢語抄云波江又用字所未詳</small> 魚似鮪而白色
179	十九 7 ウ	鱗介部	鮪	玉篇云鮪 <small>音末一音麥漢語抄云加末豆加</small> 小魚名也
180	十九 8 才	鱗介部	鮪魚	文字集略云鮪 <small>音白漢語抄云之呂乎</small> 魚薄身白色也
181	十九 8 才	鱗介部	細魚 <small>附海糠</small>	漢語抄云細魚 <small>字留里古</small> 海糠魚 <small>阿美今按所出並未詳</small>
182	十九 8 ウ	鱗介部	脰	考聲切韻云脰 <small>匹交反漢語抄云伊乎能布江</small> 魚腹中脰也又人膀胱肉也
183	十九 8 ウ	鱗介部	鰓	文字集略云鰓 <small>防抄反上声之重漢語抄云保波良</small> 魚腭也唐韻云鰓 <small>敷沼反</small> 脇前也
184	十九 9 才	鱗介部	龜	大戴禮云甲虫三百六十四神龜 <small>居追反和名加米</small> 為之長也兼名苑云龜一名鼈 <small>音敷漢語抄云字美加米</small>
185	十九 10 才	鱗介部	石陰子	本草云石陰子 <small>漢語抄云甲贏加世</small> 是物生海中陰精故以名之
186	十九 10 才	鱗介部	靈羸子	本草云靈羸子 <small>漢語抄云棘甲羸字仁</small> 貌似橘而圓其甲紫色生芒角者也
187	十九 13 才	鱗介部	老海鼠	漢語抄云老海鼠 <small>保夜俗用此保夜二字</small>
188	十九 16 ウ	蟲豸部	蝨蜚	兼名苑云蝨蜚 <small>煩終二音</small> 春黍 <small>漢語抄云春黍譜以翻豆木古萬呂</small>

	所在	部	語彙	「漢語抄」
189	十九 17 ウ	蟲彡部	齧髮虫	玉篇云蠛 <small>相蒙反漢語抄云加美木里無之</small> 齧髮虫也
190	十九 24 ウ	蟲彡部	蟻蠓	爾雅集注云蟻蠓 <small>上亡結反下亡孔反漢語抄云加豆手無之日本紀私記云蟻未久奈木</small> 小虫亂飛也磴則天風春則天雨
191	十九 24 ウ	蟲彡部	蛭	唐韻云蛭 <small>音誘漢語抄云比乎無之</small> 朝生暮死虫也
192	二十 2 才	草木部	萱草	兼名苑云萱草一名忘憂 <small>萱音喧漢語抄云和須禮久佐俗云如蕪蕪二音</small>
193	二十 8 ウ	草木部	仙靈毗草	陶隱居本草注云淫羊藿 <small>和名字無木奈一云夜末止里久佐</small> 羊食此藿一日白遍故以名之一名剛前蘇敬曰俗名仙靈毗草是 漢語抄云仙靈毘草末良多介里久佐
194	二十 14 才	草木部	莞	唐韻云莞 <small>音完一音丸漢語抄云於保井</small> 可以為席者也
195	二十 16 ウ	草木部	紫葛	本草云紫葛 <small>和名衣比加豆良</small> 文選蜀都賦云蒲萄亂漬 <small>葡音陶漢語抄云蒲萄衣比加豆良乃美</small>
196	二十 19 ウ	草木部	檉	唐韻云檉 <small>音震漢語抄云水佐或說木佐者蚌貝文相似故取名焉今案取和名者義相近矣以此字為木名未詳</small> 木文也
197	二十 19 ウ	草木部	栒	唐韻云栒 <small>音永漢語抄云佐久木</small> 水可為笏也
198	二十 20 ウ	草木部	柞	四聲字苑云柞 <small>音祚一音昨和名由之漢語抄云波波會</small> 本名堪作梳也
199	二十 20 ウ	草木部	楮	玉篇云楮 <small>音居一音踰漢語抄云閉美</small> 水腫節中為杖也
200	二十 20 ウ	草木部	檣	唐韻云檣 <small>音黨漢語抄云之岐美</small> 香木也
201	二十 20 ウ	草木部	柘	毛詩注云桑柘 <small>音射漢語抄云豆美</small> 蠶所食也
202	二十 22 才	草木部	欒	蘇敬本草注云欒 <small>魯官反漢語抄云木欒子無久禮連之乃木</small> 其子堪為數珠者也
203	二十 25 才	草木部	荊	唐韻云荊 <small>音京漢語抄云奈末江乃木</small> 木名也
204	二十 25 才	草木部	桤	玉篇云桤 <small>音零一音冷漢語抄云比佐加木</small> 荊可作染灰者也
205	二十 25 ウ	草木部	楸	唐韻云楸 <small>音秋漢語抄云比佐木</small> 木名也
206	二十 25 ウ	草木部	檜	唐韻云檜 <small>音秋漢語抄云奈良</small> 堅木也
207	二十 25 ウ	草木部	梗	四聲字苑云梗 <small>音曳漢語抄云祢須三毛知乃木</small> 鼠梓木也

## 2) 「漢鈔云（説）…」と記されている逸文

	所在	部	語彙	漢鈔云／漢抄説
1	一 3 ウ	天部	霰雨	孫愐曰霰雨小雨也音雨終同漢鈔云 <small>之久禮</small>
2	一 4 ウ	天部	暴風	史記云暴風雷雨漢鈔云 <small>八夜知又乃和木乃加世</small>
3	一 5 ウ	地部	嶽	蔣鮐切韻曰嶽高山名也五角反又作岳訓與丘同

				未詳漢鈔云 <sup>美太介</sup>
4	一 9 ウ	地部	田	釋名云土已耕者為田從年反 <sup>和名太</sup> 漢鈔云水田 <sup>古奈太</sup> 田填也
5	一 10 才	地部	火田	漢鈔云 <sup>也以八太</sup>
6	一 10 才	地部	畷	力求反火田也不耕而火種也見唐韻漢鈔云 <sup>也以八太</sup> 今按野老傳云橫截山做畷謂之截幡其先燒後耕謂之燒幡既謂田疇何不耕作漢鈔之說唐韻之義頗為相違耳
7	一 11 才	地部	畷	四聲字苑云田間道昌雪反漢鈔云 <sup>奈八天</sup>
8	一 11 才	地部	培塿	風俗通云培塿田中小高也音上部下力拘反漢鈔云 <sup>豆牟禮</sup>



### 1.1.3 『和名類聚抄』における『辨色立成』の逸文

「辨色立成云…」と記されている逸文

	所在	部	語彙	辨色立成
1	一 1 ウ	天部	暈	郭知玄切韻云暈氣繞日月也音運此間云日月 <small>加左</small> 辨色立成云月院也
2	一 11 ウ	地部	糞堆	辨色立成云 <small>阿久太布</small> 上附問反下都回反
3	一 11 ウ	地部	土塊	辨色立成云塊土片也音會 <small>和名豆知久禮</small>
4	一 13 ウ	水部	桔槔	辨色立成云桔槔鐵索井也結高二音和 <small>名加奈豆奈為</small>
5	二 6 オ	人倫部	乳母	日本紀師說 <small>女乃於止</small> 言妻妹也事見彼書唐式云皇子乳母皇孫乳母 <small>乳母和名米乃止</small> 辨色立成云孀母 <small>和名知於毛</small> 今按即乳母也乃禮反字亦作姝
6	二 8 ウ	人倫部	市郭兒	辨色立成云市郭兒 <small>和名伊知比止</small> 一云市人
7	二 9 オ	人倫部	白水郎	辨色立成云白水郎 <small>和名阿萬</small> 今按云日本紀云用漁人二字一云用海人二字
8	二 19 オ	人倫部	婦兄	辨色立成云婦兄婦之兄也
9	二 19 オ	人倫部	婦弟	辨色立成云婦弟婦之弟也
10	三 3 オ	形體部	耳埤	辨色立成云耳埤 <small>和名美々太比埤丁果反</small>
11	三 5 オ	形體部	板齒	辨色立成云板齒 <small>和名奴加波楊氏說同之</small>
12	三 8 オ	形體部	鬢 <small>目片附</small>	唐韻云尻 <small>苦部反和名之利</small> 鬢也 <small>徒譚反俗云井佐良比</small> 坐處也 <small>音竺字亦作目辨色立成云目片之利無多今按烏獸之尻也</small>
13	三 11 ウ	形體部	股	唐韻云髀 <small>傍禮反上聲之重與髀同辨色立成云圍股毛々</small> 股也 <small>公戶反上聲</small> 古文股字也
14	三 15 ウ	形體部	兔缺	續晉陽秋云魏泳之生而兔缺 <small>俗云以久知</small> 辨色立成云缺脣也
15	三 17 ウ	形體部	瘡	毛詩注云腫足曰瘡 <small>唐韻時種反足病也辨色立成云於曹阿志此間云古比</small> 又云卑濕之地其人多瘡
16	三 20 ウ	形體部	苦舩	辨色立成云苦舩 <small>布奈夜毛非</small>
17	三 20 ウ	形體部	擇食	辨色立成云擇食 <small>和名豆波利又楊氏說同</small>
18	三 23 ウ	形體部	瘡	漢書音義云瘡 <small>陸玉反和名比美辨色立成云之毛久知</small> 手足中寒作瘡也
19	四 7 オ	術藝部	毬杖	辨色立成云骨搥 <small>竹花反也打</small> 打毬曲杖也

	所在	部	語彙	辨色立成
20	四 7 才	術藝部	紙老鴟	辨色立成云紙老鴟 <small>世間云以紙為鴟形乘風能飛一</small> 云紙鳶 <small>師勞之</small>
21	四 7 才	術藝部	獨樂	辨色立成云獨樂 <small>和名古木</small> 有孔者也 <small>都玖利</small>
22	十 1 ウ	局處部	兩下	唐令云門舍三品已上五架三門五品以上三門兩 下辨色立成云兩下 <small>和名</small> <small>萬夜</small>
23	十 3 ウ	局處部	樓	辨色立成云 <small>太加</small> 一云 <small>和名</small> <small>止乃</small> 一云 <small>呂</small>
24	十 5 才	局處部	助鋪	辨色立成云助鋪 <small>和名</small> 一云 <small>比太</small> 如衛士屋也 <small>古夜</small> <small>岐夜</small>
25	十 6 ウ	局處部	邸家	辨色立成云邸 <small>丁禮</small> 今按俗云人可謂停賣取賃處也 <small>反</small> <small>和名</small> <small>津屋</small>
26	十 7 ウ	局處部	花瓦	辨色立成云花瓦 <small>鍔瓦也阿布</small> <small>美加波良</small>
27	十 7 ウ	局處部	䟽瓦	辨色立成云䟽瓦 <small>都夕美</small> <small>加波良</small>
28	十 8 才	局處部	鷄尾	唐令云宮殿者皆四阿施鷄尾 <small>辨色立成云</small> <small>久都賀太</small>
29	十 8 ウ	局處部	懸魚	顏之推詩云懸魚掩金扇 <small>懸魚俗云如字辨色立成云屋脊</small> <small>桁端懸板名也凡桁端者有之</small>
30	十 8 ウ	局處部	樽風	辨色立成云樽風板 <small>上音布惡反和名如</small> <small>字楊氏漢語抄說同</small>
31	十 9 ウ	局處部	欄額	辨色立成云欄額 <small>設之良</small> <small>沼岐</small>
32	十 12 ウ	局處部	雞栖	考聲切韻云梢 <small>毛報</small> 今之門雞栖也辨色立成云雞栖 <small>反</small> <small>鳥居也楊</small> <small>氏說同</small>
33	十 13 ウ	局處部	鑿釵	辨色立成云鑿釵 <small>斗乃比較天</small> 門鈎也 <small>楊氏說同</small>
34	十 14 才	局處部	鑲子	唐韻云鎖 <small>樵果反俗</small> 鑲鑲也 <small>作鑲子</small> 楊氏漢語抄云鑲子 <small>藏乃賀岐辨色</small> <small>立成云藏鑲</small>
35	十 14 才	局處部	棖	爾雅注云棖 <small>音唐和名保古多知</small> 門兩旁木也 <small>辨色立成云戶類</small>
36	十 14 ウ	局處部	馬道	辨色立成云馬道 <small>俗音米</small> 向堂之道也 <small>多字</small>
37	十一 8 才	牛馬部	特牛	辨色立成特牛 <small>俗語云</small> 頭大牛也 <small>古度比</small>
38	十一 9 才	牛馬部	黃牛	宜都記云黃牛灘有人牽黃牛 <small>辨色立成云</small> <small>阿米字之</small>
39	十一 9 才	牛馬部	烏牛	辨色立成云烏牛 <small>楊氏漢語</small> 黑牛也 <small>抄云麻伊</small>
40	十一 9 ウ	牛馬部	桃花馬	辨色立成云桃花馬 <small>華花毛之</small> <small>紅色者也</small>
41	十一 10 才	牛馬部	騮馬 <small>紫馬</small>	辨色立成云 <small>紫毛栗</small> <small>毛也</small>
42	十一 10 ウ	牛馬部	油馬	辨色立成云油馬 <small>糟毛</small> <small>馬也</small>
43	十一 11 ウ	牛馬部	鼻梁	辨色立成云鼻梁 <small>俗云波</small> <small>奈美祿</small>

	所在	部	語彙	辨色立成
44	十一 12 才	牛馬部	脊梁	辨色立成云脊梁 <small>世都賀俗 云世美祢</small>
45	十一 12 才	牛馬部	歷草	辨色立成云歷草 <small>曾保岐俗 云曾布岐</small>
46	十一 12 才	牛馬部	尾株	李緒曰尾株欲鹿鹿猶大也辨色立成云尾柱一云 尾根 <small>俗云乎 保祢</small>
47	十一 12 才	牛馬部	烏頭	李緒曰烏頭欲舉 <small>辨色立成云曲肘 俗云久波由岐</small>
48	十一 12 才	牛馬部	夜眼	辨色立成云夜眼 <small>與米漢語 抄說同</small>
49	十一 12 ウ	牛馬部	蹄 <small>護杵 附</small>	玉篇云蹄 <small>徒奚反訓比豆米辨色 立成云護杵和名上同</small> 牛馬蹄也
50	十二 12 才	燈火部	火筋	辨色立成云火筋此波之下治撻反
51	十二 15 才	布帛部	冠 <small>幘頭 附</small>	兼名苑注云冠 <small>音二 官</small> 黃帝造也辨色立成云幘頭 <small>加宇布利幘 音僕今按漢</small> <small>語抄說同唐 令等亦用之</small>
52	十二 16 才	裝束部	巾子	辨色立成云巾子 <small>此間巾 音如渾</small> 幘頭具所以插髻者也
53	十二 17 ウ	裝束部	背子 <small>領巾 附</small>	辨色立成云背子 <small>和名加 長岐沼</small> 形如半臂無腰襴之袷衣也 楊氏漢語抄云背子婦人表衣以錦爲之領巾 <small>日本紀私 記云比禮</small> 婦人項上飭也
54	十二 23 才	裝束部	線鞋	辨色立成云線鞋 <small>上仙戰反字亦作綫下戶隼反又戶皆 反楊氏漢語抄云線鞋于開乃久都</small> 純線兼用男 女通著
55	十二 23 才	裝束部	絲鞋	辨色立成云絲鞋 <small>伊止乃久都今 按俗云之賀伊</small>
56	十二 23 才	裝束部	麻鞋	顏氏家訓云麻鞋一握 <small>麻鞋和名乎久豆辨色 立成云麻鞋以麻爲之</small>
57	十二 23 ウ	裝束部	錦鞋	辨色立成云錦鞋 <small>此間音 今開</small> 以綵爲止形如皮履 <small>綵音采 綵音也</small>
58	十四 4 才	調度部	鏡臺	魏武疏云純銀叅帶鏡臺辨色立成云 <small>加加美 加介</small>
59	十四 8 才	調度部	尺	魏武雜物疏云象牙尺辨色立成云尺竹量也 <small>太加波 可利</small>
60	十四 9 ウ	調度部	紅藍	辨色立成云紅藍 <small>久禮乃 阿井</small> 吳藍 <small>同上</small> 本朝式云紅花 <small>俗用 之</small>
61	十四 9 ウ	調度部	黃草	辨色立成云黃草 <small>加伊 奈</small> 本朝式云 <small>刈安 草</small>
62	十四 9 ウ	調度部	鴨頭草	楊氏漢語鈔云鴨頭草 <small>都終 久佐</small> 辨色立成云 <small>押赤 草</small>
63	十四 10 才	調度部	灰汁	辨色立成云灰汁 <small>阿久 久淋</small> <small>阿久 音林</small>
64	十四 11 才	調度部	卧機	楊氏漢語抄云卧機 <small>久豆 比岐</small> 辨色立成說同
65	十四 11 才	調度部	機躡	辨色立成云機躡 <small>尼輒反 萬祿岐</small> 躡踏也
66	十四 11 才	調度部	維筭	說文云筭 <small>勞無反 與數同</small> 維絲管也漢語抄云 <small>久 大</small> 辨色立成云管

	所在	部	語彙	辨色立成
				子 <small>和名同上</small> 新撰萬葉集亦用之
67	十四 12 ウ	調度部	反轉	辨色立成云反轉 <small>夕護漢抄說同</small>
68	十五 2 才	調度部	杏葉	辨色立成云杏葉 <small>伊俣良俗云行衣布</small>
69	十五 2 才	調度部	雲珠	辨色立成云雲珠 <small>字須今按雲母之一名也為馬飾未詳</small>
70	十五 3 才	調度部	蒺藜銜	辨色立成云蒺藜銜 <small>字波良具郡和</small>
71	十五 3 ウ	調度部	承鞞	辨色立成云承鞞 <small>美豆岐俗云一云七寸</small>
72	十五 3 ウ	調度部	樓額	辨色立成云樓額 <small>沼賀ケ既</small>
73	十五 4 ウ	調度部	胃索	辨色立成云胃索 <small>和名加介奈波上音占縣反</small> 取馬繩也
74	十五 8 才	調度部	馬杷	唐韻云杷 <small>白賀反一音琶</small> 辨色立成云 <small>作田具也</small> 鏹騰 <small>瀨騰二音漢語抄和名同上</small> 鐵齒杷各也
75	十五 10 才	調度部	麻柱	辨色立成云麻柱 <small>阿奈奈比</small>
76	十五 10 ウ	調度部	鋸	唐韻云鋸 <small>音斯和名賀奈辨色立成用曲刀二字新萬葉集用鋸字今案鋸字所出未詳但唐韻有鋸視渡反一音夷短牙名也</small> 平木器也釋名云鋸有高下之跡鋸以此平其上也
77	十五 11 ウ	調度部	曲尺	辨色立成云曲尺 <small>麻可利加 祿</small>
78	十五 12 才	調度部	鋸	辨色立成云鋸 <small>加布良惠利臣港反</small> 曲刀鑿也
79	十五 12 ウ	調度部	木賊	辨色立成云木賊 <small>度久散</small>
80	十五 14 才	調度部	鏹割	唐韻云鏹割 <small>並初限反辨色立成云鏹奈良之一云割</small>
81	十六 2 才	器皿部	銚子	四聲字苑云銚 <small>徒弔反辨色立成云銚子</small> 燒器似鎬鎬而上有鏹也唐韻云鎬鎬 <small>烏育二音漢語抄云和名同上</small> 溫器也
82	十六 3 才	器皿部	樽	辨色立成云樽 <small>音與尊同字亦作樽從金見說文今案無和名俗稱去声</small> 酒樽有脚酒器也
83	十六 3 ウ	器皿部	酒臺子	辨色立成云酒臺子 <small>志利佐良今按所出未詳</small>
84	十六 4 才	器皿部	厨子	辨色立成豎櫃 <small>豎立也臣庚反上声之重</small> 厨子別名也
85	十六 5 ウ	器皿部	甑 <small>甑帶附</small>	蔣鮐切韻云甑 <small>音與勝同和名古之鼓</small> 炊飯器也本草云甑帶 <small>和名古之鼓和良辨色立成云炊單和名同上</small>
86	十六 5 ウ	器皿部	秆麵杖	辨色立成云秆麵杖 <small>秆音各旱反牟岐於須紀</small>
87	十六 6 才	器皿部	甕	本朝式云甕 <small>美加今案音長一音伏見唐韻</small> 辨色立成云大甕 <small>和名同上</small>
88	十六 6 才	器皿部	甕	本朝式云甕 <small>佐良介今案所出未詳</small> 辨色立成云淺甕 <small>和名同上</small>
89	十六 6 ウ	器皿部	游堀	唐韻云堀 <small>音剛楊氏漢語抄云游堀由賀</small> 甕也 <small>今案俗人呼大桶為由加乎介是辨色立成云於保美加</small>

	所在	部	語彙	辨色立成
90	十六 6 ウ	器皿部	盆	唐韻云盆 <small>蒲奈反字亦作瓮辨色立成云比良加俗云保止岐</small> 瓦器也爾雅云瓮謂之缶 <small>音不</small> 兼名苑云盆一名孟 <small>音于</small>
91	十六 6 ウ	器皿部	埶	辨色立成云埶 <small>古木反奈閉今案金謂之埶瓦謂之埶字或相通</small>
92	十六 7 才	器皿部	盃	說文云盃 <small>烏管反字亦作碗辨色立成云未里俗云毛比</small> 小孟也
93	十六 8 才	器皿部	笊籬	辨色立成云笊籬 <small>唐韻笊音側教反去声之輕籬音籬楊氏漢語抄云無岐須久比</small> 麥索羹籠也以竹編為之
94	十六 12 才	飲食部	粉熟	辨色立成云粉粥 <small>以米爲之今案粉粥即粉熟也</small>
95	十六 12 ウ	飲食部	黏臍	辨色立成黏臍 <small>油餅名也黏作似人臍臍也上女廉反下音齊</small>
96	十六 18 ウ	飲食部	未醬	楊氏漢語抄云高麗醬 <small>美蘇今按辨色立成說同但本義未詳俗用味醬二字味宜作未何則通俗文有未榆笑醬未者搗未之義也而未訛為未未轉為味又有志賀未醬飛驒未醬志賀者近江出國郡名為名也</small>
97	十七 5 ウ	稻穀部	忸豆	辨色立成云忸豆 <small>杜音邊又比顯反籬上豆也和名阿知萬女</small>
98	十七 8 ウ	菓蓀部	李桃	辨色立成云李桃 <small>都設木毛ケ</small>
99	十七 16 才	菜蔬部	鹿尾菜	辨色立成云六味菜 <small>比須木毛</small> 楊氏漢語抄云鹿尾菜
100	十七 16 ウ	菜蔬部	石莖	唐韻云莖 <small>常倫反漢語抄云石莖古毛一云水葵菜</small> 水葵也辨色立成云海蓴 <small>和名上同</small>
101	十七 16 ウ	菜蔬部	水苔	辨色立成云水苔一名河苔 <small>和名加波奈</small>
102	十七 17 ウ	菜蔬部	江浦草	辨色立成云江浦草 <small>豆久毛一云太久毛</small>
103	十七 20 ウ	菜蔬部	鬼升莢	楊氏漢語抄云鬼升莢 <small>久ヶ散遊一云鬱茂草協二音</small> 草色立成云鬱崩 <small>草今按本文未詳</small>
104	十八 3 才	羽族部	角鷹	辨色立成云角鷹 <small>久萬太加今按所出未詳但角者毛角者之義敷</small>
105	十八 4 ウ	羽族部	梟	說文云梟 <small>古堯反和名布久呂不辨色立成云佐介</small> 食父母不孝鳥也爾雅注云鴟梟者分別大小之名也
106	十八 5 ウ	羽族部	獺子鳥	辨色立成云騰鴛鳥 <small>阿止里一胡雀</small> 楊氏漢語抄云獺子鳥 <small>和名上同</small> 今按兩說所出未詳但本朝國史用獺子鳥又或說云此鳥群飛如列卒之滿山林故名獺子鳥也
107	十八 5 ウ	羽族部	鷓鴣	唐韻云鷓 <small>音東漢語抄云鷓鴣豆久見辨色立成云馬鳥</small> 鳥名也
108	十八 7 才	羽族部	鷓鴣	唐韻云鷓鴣 <small>交青二音</small> 鳥名也辨色立成云鷓 <small>伊微</small> 住海邊其鳴極喧者也
109	十八 8 才	羽族部	連雀	辨色立成云連雀 <small>唐雀也時群飛今按雀有黃雀青雀白雀大雀等之名所出未詳但今俗所稱者雀之有毛冠也是鳥希見疑異國之鳥獸</small>
110	十八 9 ウ	羽族部	鷓鴣	辨色立成云大曰鷓 <small>盧茲二音日本紀私記云志萬豆止利</small> 小曰鷓 <small>啼胡二音弟胡俗字</small>

	所在	部	語彙	辨色立成
				爾雅注云鷓鴣水鳥也背頭如鈎好食魚者也
111	十八 2 才	鱗介部	鯨魚	辨色立成云鯨魚 <small>布可居媛反今按未詳</small>
112	十九 3 才	鱗介部	鱣魚	辨色立成云鱣魚 <small>設良可音宜今按所出未詳本朝式用腹赤二字</small>
113	十九 3 ウ	鱗介部	海鯽	辨色立成云海鯽魚 <small>知沼鯽見下文</small>
114	十九 3 ウ	鱗介部	梳齒魚	辨色立成云梳齒魚 <small>東人云阿波我良</small>
115	十九 4 ウ	鱗介部	鱒魚	唐韻云鱒 <small>音番漢語抄云加世佐波</small> 魚有橫骨在鼻前如竹斤斧者也 御覽鱗介部云新婦魚 <small>辨色立成和名上同</small>
116	十九 4 ウ	鱗介部	鮪魚	唐韻云鮪 <small>音甫辨色立成云奈波佐波</small> 大魚名也
117	十九 5 才	鱗介部	鱈	唐韻云鱈 <small>音馬辨色立成云郡久良魚名也</small>
118	十九 6 ウ	鱗介部	鮠	唐韻云鮠 <small>音免辨色立成云仁倍一云久習</small> 魚名也
119	十九 10 ウ	鱗介部	石炎螺	辨色立成云石炎螺 <small>萬與和楊氏說同</small>
120	十九 10 ウ	鱗介部	大辛螺	七卷食經云大辛螺 <small>和名阿木</small> 楊氏漢語抄云蓼螺一云赤口螺 <small>和名上同辨色立成說亦同</small>
121	十九 11 才	鱗介部	蚌	唐韻云蚌 <small>乎談反辨色立成云成和名木佐</small> 蚌屬狀如蛤圓而厚外有理縱橫即今蚌也
122	十九 11 ウ	鱗介部	馬蛤	唐韻云蛭 <small>音禮辨色立成云萬天</small> 蚌屬也本草云馬刀一名馬蛤 <small>和名上同</small>
123	十九 11 ウ	鱗介部	白貝	唐韻云蛤 <small>古三反一音含辨色立成云於富本朝式文用白貝二字</small> 爾雅云貝在水曰蛤也
124	十九 12 才	鱗介部	錦貝	辨色立成云錦貝 <small>夜久乃斑貝今按本文未詳但俗說西海有夜久島彼島所出也</small>
125	二十 2 ウ	草木部	鹿鳴草	爾雅集注云荻一名蕭 <small>荻音秋一音焦蕭音宵和名波木今按教名用荻字荻會是也辨色立成新撰萬葉集等用等字唐韻等音韻誤反草名也國史用芳宜草三字楊氏漢語抄又用鹿鳴草三字並本文未詳</small>
126	二十 2 ウ	草木部	薄	爾雅云草聚生曰薄 <small>新撰萬葉集和歌云花薄波奈須須木今案即厚薄之薄字也見玉篇</small> 辨色立成云芊 <small>和名上同今案芊音千草盛也見唐韻</small>
127	二十 7 才	草木部	狗尾草	辨色立成云狗尾草 <small>惠沼能古久佐</small>
128	二十 12 ウ	草木部	萊草	辨色立成云萊草 <small>上音來和一名類草名之波</small>
129	二十 12 ウ	草木部	白慈草	辨色立成云白慈草 <small>萬太布里久佐</small>
130	二十 13 ウ	草木部	菰 <small>菰音附</small>	本草云菰一名蔣 <small>上音孤下音蔣將和名古毛</small> 辨色立成云菱草 <small>菱音毅有反一云菰蔣草</small> 七卷食經云菰首味甘冷 <small>和名古毛布豆目一云古毛豆乃</small>
131	二十 14 才	草木部	藺	玉篇云藺 <small>音吝和名為辨色立成云驚尻刺</small> 似莞而細堅宜為席

	所在	部	語彙	辨色立成
132	二十 17 才	草木部	細子草	辨色立成云細子草 <small>和名久曾 加豆良</small>
133	二十 17 ウ	草木部	箬竹	四聲字苑云箬 <small>音與苦同辨色立成云苦竹加波多計本 朝式用河竹二字今案苦宜從竹作</small> 箬竹名也
134	二十 21 才	草木部	合歡木	唐韻云楮 <small>音昏和名称布里乃 木辨色立成云睡樹</small> 合歡木其葉朝舒暮斂者也
135	二十 22 ウ	草木部	樗	陸詞切韻云樗 <small>勅居反和名 本草云沼天</small> 惡木也辨色立成云白膠木 <small>和名 上同</small>
136	二十 24 才	草木部	雞冠木	楊氏漢語抄云雞冠木 <small>賀倍天乃木辨色立成云雞頭樹 加比留提乃木今案是一木名也</small>
137	二十 24 ウ	草木部	烏草樹	楊氏漢語抄云烏草樹 <small>佐之夫乃紀辨 色立成說同</small>

1.2 『和名類聚抄』所引漢和辭書と『世說新語』

所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『世說新語』における用例	『世說新語』における所在
1	一三 ㄅ 暴雨	楊氏漢語抄云白雨 <small>白名雨</small>	時夏月。暴雨卒至。射至狹小。而又大瀟。殆無復坐處。	『世說新語』・上・德行第一/p. 47
2	一 11 才 培塿	風俗通云培塿田中小高也音上部下力拘反漢鈔云 <small>培塿</small>	王丞相初在江左。欲結援吳人。請婚陸太尉。對曰：「培塿無松柏。薰蕕不同器。玩雖不才。義不為亂倫之始。」	『世說新語』・中・方正第五/p. 389
3	二 6 才 乳母	日本紀師說 <small>名乃乳母</small> 言妻妹也事見彼書唐式云皇子乳母皇孫乳母 <small>皇孫乳母名</small> 辨色立成云嬬母 <small>名</small>	漢武帝乳母嘗於外犯事。帝欲申懲。乳母求救東方朔。	『世說新語』・中・規箴第十/p. 695
4	二 9 ㄅ 田舍人	楊氏漢語云田舍兒 <small>田舍名</small>	段去後。乃云。田舍兒。強學人作爾響語。	『世說新語』・上・文學第四/p. 273
5	二 19 才 婦兄	辨色立成云婦兄婦之兄也	衛君長是蕭祖周婦兄。	『世說新語』・中・品藻第九/p. 681
6	二 19 才 婦弟	辨色立成云婦弟婦之弟也	語林曰。婦諸弟往園中食李。而皆計核實錢。故婦婦弟王濟仗之也。	『世說新語』・下・儉嗇二十九/p. 1104
7	四 1 才 騎射	漢書云甘延壽以良家子善騎射楊氏漢語抄云馬射 <small>馬射名</small>	石勒傳曰。勒字世龍。上黨武鄉人。匈奴之苗裔也。雄勇好騎射。	『世說新語』・中・識鑿第七/p. 488
8	十 3 ㄅ 樓	辨色立成云 <small>上乃</small> 一云 <small>名</small>	庾小征西嘗出未還。婦母阮是劉萬安妻。與女上安陵城樓上。	『世說新語』・中・雅量第六/p. 457
9	十 16 才 橋 <small>橋名</small>	說文云橋 <small>名</small> 水上橫木所以渡也爾雅注云梁 <small>梁名</small> 即水橋也楊氏漢語抄云葱臺 <small>名</small> 之橋 <small>橋名</small> 兩端所豎之柱其頭似葱花故云	交亦疑有追。乃坐橋下。在水上據屐。	『世說新語』・上・文學第四/p. 236
10	十一 2 才 舸	四聲字苑云舸 <small>名</small> 高尾舟一云戰士可乘之輕舟也	脩載走投水。舸上人接取。得免。	『世說新語』・下・仇隙第十六/p. 1185
11	十一 3 ㄅ 棹	釋名云在旁撥水曰櫂 <small>名</small> 櫂於水中且進櫂也	卒捨船而泝。因飲酒醉還。舞掉向船曰。何處覺與吳郡。此中便是。冰大惶怖。然不敢動。	『世說新語』・下・任誕二十三/p. 932
12	十一 6 ㄅ 數	說文云數 <small>名</small> 古積也漢語抄云幅所湊也	收事所止。與胡人鞞。胡人失火燒車營。勒史案問胡。胡誑收。	『世說新語』・上・德行第一/p. 50
13	十一 8 ㄅ 駿馬	穆天子傳云駿 <small>名</small> 馬之美稱也	復能乘駿馬。倒著白接離。	『世說新語』・下・任誕二十三/p. 923
14	十一 8 ㄅ 駑馬	唐韻云駑 <small>名</small> 駑馬也野王曰駑 <small>名</small> 馬之最下也郭知玄曰駑 <small>名</small> 負物馬也	陸子所謂駑馬有逸足之用。	『世說新語』・中・品藻第九/p. 629
15	十一 10 才 騅馬	毛詩注云騅 <small>名</small> 蒼白雜毛馬也爾雅注云云騅 <small>名</small> 騅青白如蒼色也	史記曰。項羽為漢兵所圍。夜起歌曰。力拔山兮氣蓋世。時不利兮難不逝。	『世說新語』・下・排調第二十五/p. 1013
16	十一 12 ㄅ 蹄 <small>蹄名</small>	玉篇云蹄 <small>名</small> 徒成去聲蹄名上蹄也	鑿曰。宰相三日不朝。與尺一令騎第。君何慮焉。滿曰。咄。石生。無事馬蹄閒也。投傳而去。	『世說新語』・上・政事第三/p. 211
17	十二 15 才 冠 <small>冠名</small>	兼名苑注云冠 <small>名</small> 黃帝造也辨色立成云漢頭 <small>頭名</small> 有向後者今從後	永嘉末。天下大亂。儼儼相望。冠帶以下。皆割己之資供鑿。	『世說新語』・上・德行第一/p. 43
18	十一 16 ㄅ 袍	楊氏漢語抄云袍 <small>名</small> 普欄之袷衣也	王隱晉書曰。沖字文和。榮陽開封人。有技練才。清虛寡欲。喜論經史。草衣繩袍。不以為憂。果遷司徒。太保。晉受禪。進太傅。	『世說新語』・上・政事第三/p. 213
19	十二 18 才 袷	唐韻云袷 <small>名</small> 人親近也置袷袷女人近身衣也	王君夫嘗責一人無服袷袷。因直內管曲問重閨理。不應人將出。	『世說新語』・下・汰侈三十/p. 1120
20	十四 2 才 鈴	陸詞切韻云鈞 <small>名</small> 以鐘而小楊氏漢語抄云鈞 <small>名</small> 三禮圖云鈞 <small>名</small> 今之鈴其匡以銅為也	以麻油塗掌。占見吉凶。數百里外應浮圖鈞聲。逆知禍福。	『世說新語』・上・言語第二/p. 138
21	十四 4 才 鏡臺	魏武疏云純銀奈帶鏡臺辨色立成云 <small>加美</small>	因下玉鏡臺一枚。姑大喜。…玉鏡臺是公為劉越石長史。北征劉聰所得。	『世說新語』・下・假譎第二十七/p. 1083
22	十四 8 才 尺	魏武雜物疏云象牙尺辨色立成云尺竹量也 <small>大加美</small>	趙云。尺表能審璣衡之度。寸管能測往復之氣。何必在大。但問識如何耳。	『世說新語』・上・言語第二/p. 100





## 1.3 『和名類聚抄』所引漢和辭書と『太平廣記』

所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
1	暈	郭知玄切韻云暈氣曉日月也音運此間云日月 <sup>暈</sup> 辨色立成云月院也	南海秋夏間。或雲物參然。則見其暈如虹。長六七尺。	『太平廣記』・第三百九十四・雷二・南海/p.820 出『續表錄異』
2	暴雨	楊氏漢語鈔云白雨 <small>世名暈</small>	西北有黑龍。亦乘雲而至。風雷相擊。乍合乍離。暴雨大注。自午至申。	『太平廣記』・第一百三十九・懷慶五・周靖帝/p.283 出『廣古今五行記』
3	暴風	史記云暴風雷雨漢鈔云 <small>八風和云乃</small>	明日。有郡中吏曰。太守昨夕宴郡閣。妓樂列坐。無何皆仆地。瞬息暴風起。飄其樂器而去。迨至夜分。諸妓方甯。樂器亦歸于舊所。	『太平廣記』・卷七十五・道術五・楊居士/p.149 出『宣室志』
4	嶽	蔣勣切韻曰嶽高山名也五角区又作岳訓與丘同未詳漢鈔云 <small>嶽</small>	開數招方術。祭山嶽。祠靈神。禱河川。亦為勤矣。勤而不獲。實有由也。	『太平廣記』・第三・神仙三・漢武帝/p.38 出『漢武內傳』
5	田	釋名云土曰耕者為田從年反漢鈔云水田 <small>世名田</small> 填也	子春以孤孀多寓淮南。遂轉資揚州。買良田百頃。郭中起甲第。要路置邸百餘間。	『太平廣記』・第十六・神仙十六・杜子春/p.60 出『續玄怪錄』
6	培塿	風俗通云培塿田中小高也音上部下力均反漢鈔云 <small>培塿</small>	其人每以其前路物導之。或曰樹。或曰椿。或曰險。或曰培塿。或曰窮。全實皆得免咎。	『太平廣記』・卷三百四十八・鬼三十三・李全實/p.721 出『傳異記』
7	糞堆	辨色立成云 <small>培塿</small> 上附間反下部回反	率村人掘糞堆中。深數尺。乃得一紺裙白衫破帛新婦子。焚於五達衢。其怪遂絕焉。	『太平廣記』・第三百六十八・精怪一・韋訓/p.765 出『廣異記』
8	土塊	辨色立成云塊土片也音會 <small>訓</small>	忽見店婦抱嬰兒。使者便持一小土塊與行簡。令擊小兒。行簡如其言擲之。小兒便驚啼悶絕。	『太平廣記』・第二百八十三・巫覡・自行簡/p.597 出『靈異記』
9	乳母	日本紀師說言妻妹也事見彼書唐式云皇子乳母皇孫乳母 <small>宋</small> 為 <small>正</small> 辨色立成云孀母 <small>世名</small> 今按即乳母也乃禮反字亦作妳	蕭氏乳母。自言初生遭荒亂。父母度其必不全。遂將往南山。盛於被中。棄於石上。衆迹罕及。中略父母擊之以歸。嫁為人妻。生子二人。又屬饑饉。乃為乳母。	『太平廣記』・第六十五・女仙十・蕭氏乳母/p.134 出『逸史』
10	市郭	辨色立成云市郭兒 <small>世名</small> 一云市人	楚客知之。為除右臺御史。於朝堂抗衡於貞白。與公羅師。羅師者。市郭兒語。無交涉也。無何。客以反誅。守一以其黨。配流端州	『太平廣記』・卷二百五十九・懷慶二・袁守一/p.537 出『朝野僉載』
11	白水郎	辨色立成云白水即 <small>阿摩</small> 今按云日本紀云用漁人二字一云用海人二字	尋聞家仇與毗羅。自鄆縣白水郎。棄官解印。欲承命請行。陰懷不道。因使得入龍宮。假以求貨。覆吾宗嗣。朝杰公敏靈。知渠披私請行。欲肆無辜之害。慮其反貽伊戚。辱君之命。	『太平廣記』・卷四百九十二・雜傳記九・靈應傳/p.1042
12	屠兒	楊氏漢語鈔云屠兒 <small>世名</small> 屠兒 <small>世名</small> 屠牛馬肉取鷹雞豚之義	唐羅慶三年。徐玉為香州刺史。有屠兒在市東巷。殺一猪命斷。	『太平廣記』・卷四百三十九・畜獸六・香州屠兒/p.927 出『伽藍記』





所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
			各七八尺。	
41	轂	說文云轂 <small>古輿也</small> 輻所湊也	客即見生在楊樹抄行。適上樹即不見。下即復見行樹上。又車轂皆生荊棘。長一尺。斫之不斷。推之不動。	『太平廣記』・卷十一・神仙十一・左慈/p.52 出『集異記』
42	輓	唐韻云輓 <small>車輻也</small> 車脂角也	桐至夏有汗。汚人衣如轉脂。不可浣。昭國鄭相。嘗與丞相數人避暑。惡其汗。	『太平廣記』・第九十八・異僧十二・素和尚/p.196 出『酉陽雜俎』
43	輓	毛詩注云輓 <small>引車也</small> 四轡字苑云輓 <small>輓下絆頸繩也</small>	其母曰。健犢須。走車破輓。良馬須逸輓泛駕。然後能負重致遠。大言董稚。不奇不惠。必非異器定矣。	『太平廣記』・第一百七十・知人二・劉禹錫/p.344 出『嘉話錄』
44	牛藥	春韻篇云藥 <small>牛藥也</small> 字書云藥 <small>牛藥也</small>	居一月。刺史祭嶽。修道甚嚴。忽中夜風雷。而一峯橫下。其緣山磴道。為大石所欄。乃以十牛藥絆以挽之。又以數百人號噪以推之。力竭而愈固。更無他途。可以修事。	『太平廣記』・第九十六・異僧十・懶殘/p.192 出『甘澤謠』
45	特牛	辨色立成特牛 <small>特牛頭大牛也</small>	言訖即過。其夕。數百家牛。及明。皆被體汗流如水。於縣南山曲出一涿。方圓百餘步。里人以此涿因牛而遷。謂之特牛涿也。	『太平廣記』・第四百二十四・龍七・吳山人/p.895 出『獨異志』
46	驂馬	穆天子傳云驂 <small>馬之美稱也</small>	騎督王苑。以驂馬追之。狗徐行。馬不可及。射又逃。苑去復還。	『太平廣記』・第一百三十九・徵應五・王苑/p.282 出『郭氏世語』
47	驂馬	唐韻云驂 <small>馬也</small> 野王曰驂 <small>馬之美稱也</small> 之最下也郭知玄曰 <small>驂馬也</small>	帝曰。其名云何。朔日。因事為名。各步景駒。朔日。自馭之如驂馬塞驢耳。	『太平廣記』・第六・神仙六・东方朔/p.42 出『洞冥記』及『朔別傳』
48	黃牛	宜都記云黃牛 <small>有人牽黃牛</small>	廣陵有朱氏子。家世勤貴。性好食黃牛。所殺無數。常以暑月中。欲殺一牛。其母止之曰。暑熱如此。爾已醉。所食幾何。勿殺也。	『太平廣記』・第四百三十四・畜獸一・朱氏子/p.913 出『稽神錄』
49	烏牛	辨色立成云烏牛 <small>烏牛也</small>	慶孫有烏牛。神於空中言。我是天神。樂卿此牛。若不與我。來月二十日。當殺爾兒。	『太平廣記』・第三百一十八・鬼三・陳慶孫/p.663 出『幽明錄』
50	騾	毛詩注云騾 <small>騾也</small> 青白如茶色也	德宗幸梁洋。唯御騾馬。號曰望雲騾。駕選。飼以一品料。	『太平廣記』・第四百三十五・畜獸二・德宗神智騾/p.916 出『國史補』
51	騾白馬	毛詩注云騾 <small>騾也</small> 形白雜毛馬也爾雅注云騾 <small>今之騾白馬也</small>	慕容廆初有騾白馬。常自乘之。既為石虎所圍。力弱。分將危殆。棄乘將逃。以此馬奔而離之。馬見鞍。輒蹄躡不得近。乃止。俄而鄴使至。石虎國有難。虎旋歸。至是時。馬年四十九歲矣。	『太平廣記』・第四百三十五・畜獸二・慕容廆/p.916 出『廣古今五行記』
52	鼻梁	辨色立成云鼻梁 <small>鼻梁也</small>	崔言者。隸職於左親騎軍。一旦得疾而目昏闇。咫尺不辨人物。眉髮自落。鼻梁崩倒。肌膚生瘡如疥。皆目為惡疾。勢不可救。	『太平廣記』・第七十五・道術五・崔言/p.151 出『神仙感遇傳』
53	尾株	李緒曰尾株 <small>鹿鹿猶大也</small> 辨色立成云尾柱 <small>尾柱也</small>	顧文賦為時所稱。而切於成名。嘗有故事陳於所知。只望丙科盡處。竟別於尾株之前也。	『太平廣記』・第一百八十四・貢舉七・韋貽範/p.376 出『北夢瑣言』

所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
54	夜眼	辨色立成云夜眼 <small>夜眼、辨色、立成、云、夜、眼、同</small>	白馬黒目。目白却視。並不可騎。夜眼名附蠅。尸肝名蠅。亦曰雞舌。綠秩方言。以地黃甘草曬。五十歲生三駒。	『太平廣記』・第四百三十五・畜獸二・馬/p.915 出『酉陽雜俎』
55	蹄甲	玉篇云蹄 <small>玉、蹄、同</small> 也。玉蹄名也。蹄甲也。	白起以詐坑長平卒四十萬衆。天帝罰之。每三十年一斬其頭。迨一規方已。又去一坡中。悉是磨煨火。有數千人。奔走其間。	『太平廣記』・第二百一十一・畫二・韓幹/p.437 出『唐畫斷』
56	煨煨	唐韻云煨 <small>煨、煨、同</small> 。煨火也。又盛也。四聲字苑云煨煨 <small>煨、煨、同</small> 。煨煨也。新火也。	元魏之世。在洛京時。有一才學重臣。新得史記音。而頗訛誤。及見顯璋字為許綵。錯作許繖。	『太平廣記』・第三百八十二・再生八・河南府史/p.794 出『廣異記』
57	純布	唐韻云純 <small>純、純、同</small> 。純似布也。純布也。純布也。	信州刺史周本入觀揚都。舍於邸第。遇私讒日。獨宿外齋。張燈而寐。未熟。聞室中有聲劇然。視之。見火爐冉冉而上。直傳于屋。良久乃下。飛灰勃然。明日。滿室浮埃覆物。亦無他怪。	『太平廣記』・卷二百五十八・噓駭一・元魏臣/p.535 出『顏氏家訓』
58	火爐	聖類云爐 <small>爐、爐、同</small> 。火爐火所居也。	忽有一人乘雲車。駕白鹿。從天而下。來集殿前。其人年可三十許。色如童子。羽衣星冠。	『太平廣記』・第三百六十六・妖怪八・周本/p.760 出『稽神錄』
59	冠帽	兼名苑注云冠 <small>冠、冠、同</small> 。黃帝造也。辨色立成云幘頭 <small>幘、幘、同</small> 。幘頭也。	唐魏王為巾子。向前陪。天下欣欣慕之。名為魏王陪。後坐死。至孝和時。陸嫺亦為巾子。同此樣。時人又名為陸嫺陪。未一年而陸嫺殞。	『太平廣記』・第四・神仙四・衛叔卿/p.40 出『神仙傳』
60	巾子	辨色立成云巾子 <small>巾、巾、同</small> 。幘頭具所以插髻者也。	時楊駿為太傅。使傳迎之。問訊不答。駿遣以一布袍。亦受之。出門。就人借刀斷袍。上下異處。置於殿門下。又復斫碎之。	『太平廣記』・第一百六十三・讖應・魏王/p. 出『朝野僉載』
61	袍	楊氏漢語抄云袍 <small>袍、袍、同</small> 。著襪之袷衣也。	袁州刺史顧金。罷郡還都。有人以紫纓包一物。詣門遺之。開視。則白襪衫也。遽追其人。則亡矣。其年金卒。	『太平廣記』・第九・神仙九・孫登/p.48 出『神仙傳』
62	襪衫	楊氏漢語抄云襪衫 <small>襪、襪、同</small> 。著襪之袷衣也。	王母唯挾二侍女上殿。侍女年可十六七。服青綾之袷。容眸流盼。神姿清發。真美人也。	『太平廣記』・第一百四十五・徵應十一・顧金/p.294 出『稽神錄』
63	挂	漢書音義云諸 <small>諸、諸、同</small> 。大掖衣婦人挂衣也。釋名云挂 <small>挂、挂、同</small> 。掛也。挂人上衣也。	玄宗夢入井。有一兵士。著緋襪。背負而出。明日。使於兵號中尋訪。總無此人。又於苑中搜訪。見一掌關。著緋襪。便引見。	『太平廣記』・第二百七十七・夢二・玄宗/p.581 出『定命錄』
64	褲	方言注云袴面無跨謂之褲 <small>褲、褲、同</small> 。史記云司馬相如著褲。鼻韋昭曰今三尺布作之形如牛鼻者也。唐韻云袴 <small>袴、袴、同</small> 。袴也。袴也。	唐巧人張崇者能作灰畫腰帶紋具。每一勝。大如錢。灰畫燒之。見火即隱起。作龍魚鳥獸之形。莫不悉備。	『太平廣記』・第二百七十七・夢二・玄宗/p.581 出『定命錄』
65	紋具	楊氏漢語抄云紋具 <small>紋、紋、同</small> 。上畫古巧。反置紋具。則成畫也。腰帶及紋具以銅屬。草也。	唐巧人張崇者能作灰畫腰帶紋具。每一勝。大如錢。灰畫燒之。見火即隱起。作龍魚鳥獸之形。莫不悉備。	『太平廣記』・第二百二十六・伎巧二・崔鉉/p.467 出『朝野僉載』
66	鉉子	楊氏漢語抄云鉉子 <small>鉉、鉉、同</small> 。上畫大鉉。著程錢也。	兆參軍盧基之死。鉉之致也。時譏冤之。鉉子流。乾符中。亦為	『太平廣記』・第四百九十九・雜錄七・崔鉉/p.1055 出『玉泉子』

所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
			丞相。黃巢亂。赤其族。物議以為甚之報焉。	
67	麻鞋	顏氏家訓云麻鞋一握 <small>韓愈在平心豆脚色立成之謂麻鞋也</small>	又令小兒拾破麻鞋。每三輛。以新麻鞋一輛換之。遠近知之。送破麻鞋者雲集。數日。獲千餘量。	『太平廣記』・第二百四十三・治生・竇乂/p. 502 出『乾鑿子』
68	木履	續漢書云袁宏著木屐楊氏漢語抄云木履 <small>加部</small>	唐高士廉掌選。其人齒高。有選人。自云解嘲議。士廉時著木履。令嘲之。應聲云。刺鼻何曾嚏。踏面不知嘆。高生兩箇齒。自謂得勝人。士廉笑而引之。	『太平廣記』・第二百五十四・嘲諷二・高士廉/p.526 出『朝野僉載』
69	草履	楊氏漢語抄云草履 <small>俗名草鞋</small>	唐元和中。琚因常調。自鄭入京。道出東都。方過天津橋。四郎忽於馬前跪拜。布衣草履。形貌山野。	『太平廣記』・第三十五・神仙三十五・王四郎/p.88 出『集異記』
70	靴靴	唐令云諸給時服春秋各給靴一兩並靴 <small>唐制靴與屐同出</small>	頻遊寿花插。時乞綉針穿。宝匣擎红豆。妝奩拾翠細。短袍披秦襪。劣咽戴靴毡。展面趨三圣。开扉突七埃。	『太平廣記』・第一百七十五・幼敏・路德延/p.359
71	靴帶	楊氏漢語抄云靴條 <small>即帶</small> 所以繫靴跟也或以革為之喚云靴帶	唐鄭愔為吏部侍郎。掌選。穢汚狼籍。引銓。有選人繫百錢於靴帶上。愔問其故。答曰。當今之選。非錢不行。愔默而不言。時崔湜亦為吏部侍郎。掌銓。	『太平廣記』・第一百八十五・銓選一・鄭愔崔湜/p.379 出『朝野僉載』
72	火珠	漢語抄云火珠 <small>形乃杜欒</small>	唐崔曙舉進士。作明堂火珠詩贖帖。日夜來雙月滿。曙後一星孤。當時以為警句。	『太平廣記』・第一百九十八・文章一・崔曙/p.404 出『本事詩』
73	青黛	漢語抄云青黛	遂前。見多賣藥物。僧道尤衆。良久呻。悉無所覩。唯拾得青黛數十。斗許大。亦不敢他用。而施之浮圖人矣。	『太平廣記』・第四百五・竇六・開元漁者/p.849 出『逸史』
74	扭	玉篇云扭械也說文云柅 <small>柅手械也</small> 漢語抄云扭 <small>之字</small> 今按扭又木名也以管可分扭械之扭 <small>即</small> 扭 <small>之字</small>	北齊張和思。斷獄凶。無問善惡貴賤。必披枷鎖扭械。困苦備極。囚徒見者。破膽喪魂。號生羅刹。	『太平廣記』・第一百二十六・報應二十五・張和思/p.255 出『冥祥記』
75	鈞	陸詞切韻云鈞 <small>音</small> 以鐘而小楊氏漢語抄云鈞子 <small>第三禮圖云</small> 鐸 <small>音</small> 今之鈞其匡以銅為也	而衆擲中有鈞聲甚清亮。候之。見一擲咽喉極長。因羅得之。項上有銅鈞。綴以銀鍊。有隱起元鼎元年字。	『太平廣記』・第四百六十二・禽鳥三・鶻鷂/p.980 出『西陽雜俎』
76	權衡	廣雅云鍾 <small>音</small> 謂之權 <small>音</small> 兼名范云銓 <small>音</small> 一名衡 <small>音</small> 也楊氏漢語抄云權衡 <small>音</small>	當今天子聖明。羣僚用命。外拓四方。內齊七政。而子位處權衡。	『太平廣記』・第二百五十三・嘲諷一・辛壹/p.525 出『朝野僉載』
77	鏡臺	魏武疏云純銀參帶鏡臺 <small>音</small> 立成云 <small>音</small>	又曰。火爐牀上平身立。便與夫人作鏡臺。	『太平廣記』・第二百五十七・嘲諷五・薛能/p.532 出『打情詩』
78	尺	魏武雜物疏云象牙尺辨色立成云尺竹量也 <small>音</small>	年可八十餘。彈視若童子。常服朱砂。舉體皆赤。冬不著衣。坐一龜。廣長三尺。	『太平廣記』・第一・神仙一・黃安/p.34 出『洞冥記』
79	浴斛	楊氏漢語抄云浴斛 <small>音</small>	王曰。致鐵最樂。遂收鐵。一宿得五斗。置大浴斛中。令一人脫衣而入。被鐵所擊。宛轉號叫。苦痛不可言。食頃而死。帝與王看	『太平廣記』・第二百六十七・酷暴一・南陽王/p.556 出『朝野僉載』

所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
			『太平廣記』における用例 之極喜。	
			魯公曰。官階盡。得五品。身著緋衣。帶銀魚。兒子補齋郎。其之望滿也。范尼指坐上紫絲布食單曰。顏郎形色如此。其功業名節稱是。壽過七十。已後不要苦問。	『太平廣記』・第二百二十四・相四・范氏尼/p.463 出『戎幕閑談』
81	紅藍	辨色立成云紅藍 <small>乃力</small> 并吳藍 <small>本朝式云紅花</small>	乃昇石崖上立。坦然無塵。行數里。旁有草如紅藍。莖葉密。無刺。其花拂拂然。飛散空中。	『太平廣記』・第三百八十一・再生七・趙裴/p.792 出『酉陽雜俎』
82	灰汁	辨色立成云灰汁 <small>乃林</small>	幡木像悉火之。好活燒鯉魚。不具湯而食。垢面不洗。洗之輒雨。其中以為雨候。將死。飲灰汁數斛。乃念佛坐。不復飲食。百姓日觀之。坐七日而死。時盛夏。色不變。支不摧。	『太平廣記』・第八十三・異人三・蘇州義師/p.167 出『酉陽雜俎』
83	機	國語注云織殺經緯以機 <small>成</small> 成布也楊氏漢語抄云高機 <small>今按機巧之處</small> 說文云緯 <small>有</small> 織橫絲也謂緯則經可知	墨子解帶為城。以機為械。公輸般乃設攻城之機。九變而墨子九拒之。公輸之攻城械盡。而墨子之守有餘也。	『太平廣記』・第五・神仙五・墨子/p.40 出『集仙錄』
84	麓	說文云麓 <small>音</small> 竹篋也	廟東有溫湯水口。溫湯療治萬病。泉所發之麓。俗謂之士亭山。北水熱甚諸湯。療病者。要須別消息用之。	『太平廣記』・第三百九十七・山・大翻山/p.826 出『水經』
85	宛	唐韻云宛 <small>音</small> 飼馬籠也	是夕更深。聞叩門甚急。及開門。乃古生也。領一宛子入。謂仙客曰。此無雙也。今死矣。心頭微暖。後日當活。微權湯藥。切須靜密。	『太平廣記』・第四百八十六・雜傳記三・無雙傳/p.1033
86	鞍 <small>音</small>	說文云鞍 <small>音</small> 馬鞍也蔣斬切韻云鞍 <small>音</small> 除鞍也	子敖聊爾答云。能作馬鞍。乃令原釋。子敖亦不知所以作此言時。後遂得遁逸。乃造一觀音小像。貯以香函。行則頂戴。	『太平廣記』・第一百一十・報應九・南宮子敖/p.221 出『冥祥記』
87	鞍橋	楊氏漢語抄云鞍橋 <small>音</small> 一云鞍瓦	仲朋初謂是鸞棲鳥。俄便入仲朋懷。鞍橋上坐。月照若五斗栲栳大。毛黑色。頭便似人。眼射如珠。	『太平廣記』・第三百六十二・妖怪四・梁仲朋/p.753 出『乾麋子』
88	雲珠	辨色立成云雲珠 <small>音</small> 一	王母復教侍女李方明。出丹墀之函。披雲珠之笈。	『太平廣記』・第五十六・女仙一・上元夫人/p.119 出『漢武內傳』
89	鞦韆	唐韻云鞦 <small>音</small> 馬絡頭也	梁陶弘景字通明。明榮藝。善書畫。武帝嘗欲徵用。隱居畫二牛。一以金鞦頭牽之。一則透迤就水草。梁武知其意。遂不以官爵逼之。	『太平廣記』・第二百一十一・畫二・陶弘景/p.168 出『名畫記』
90	鞦韆	唐韻云鞦 <small>音</small> 所以黏鳥也	宋初。淮南郡有物取人頭髻。太守朱誕曰吾知之矣。多買鞦以塗壁。夕有一蝙蝠大如雞。集其上。不得去。殺之乃絕。觀之。鈞籛下已有數百人頭髻。	『太平廣記』・第四百七十三・昆蟲一・朱誕/p.1007 出『幽明錄』
91	魚梁	毛詩注云梁 <small>音</small> 取魚笱也	歙州赤嶺下有小溪。俗傳昔有人造橫溪魚梁。魚不得下。半夜飛從此嶺過。其人遂於嶺上張網以捕之。	『太平廣記』・卷四百六十六・水族三・赤嶺溪/p.993 出『歙州圖經』









所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
132	肥	唐韻云肥 <small>音抄云腫脹赤</small> 鳥臙也	元理曰。狙上蒸肥一頭。廚中荔枝一盤。皆可以為設。廣漢再拜謝罪。入取。盡日為敬。	『太平廣記』・第二百一十五・算術・曹元理/p.444 出『西京雜記』
133	麋	四聲字苑云麋 <small>音抄云鹿之類</small> 似鹿而大毛不斑以冬至解角者也	荀曰。本謂雲龍駭駭。乃是山鹿野麋。獸微而弩種。是以發運。張撫掌大笑而已。	『太平廣記』・第二百五十三・嘲諷一・陸士龍/p.524 出『世說』
134	猿	風土記云猿 <small>音抄云狢</small> 善負子乘危而投至倒而還者也兼名苑云一名獼猴 <small>音抄云狢</small> 文選云猿狖失木唐韻云獼猴 <small>音抄云狢</small>	又養一猿名生公。常以之隨。逐月夜泛江。登金山。擊鐵鼓琴。猿必嘯和。傾壺達夕。不俟外賞。醉而後已。	『太平廣記』・第二百一・才名・李約/p.411 出『因話錄』
135	貉	說文云貉 <small>音抄云貉</small> 以狐而善睡者也	昔我幼時。曾入古冢。爾來形體漸大。求出不得。狐兔狸貉等。或時入冢。方得食之。	『太平廣記』・第四百五十六・蛇一・忻州刺史/p.965 出『廣異記』
136	鮓	唐韻云鮓 <small>音抄云鮓</small> 魚名也	又吳郡獻松江鱸魚乾鱸六瓶。瓶各一斗。作鱸法。一同鮓魚。	『太平廣記』・第二百三十四・食・吳饌/p.480 出『大業拾遺記』
137	鯪魚	唐韻云鯪 <small>音抄云鯪</small> 魚名大口細鱗有斑文者也	真卿為湖州刺史。與門客會飲。乃唱和為漁父詞。其首唱即志和詞。曰西塞山邊白鳥飛。桃花流水鯪魚肥。青箬笠。綠蓑衣。斜風細雨不須歸。	『太平廣記』・第二十七・神仙二十七・玄真子/p.77 出『續仙傳』
138	鮎	本草云鮎魚 <small>音抄云鮎</small> 一名鮎魚 <small>音抄云鮎</small> 上善飲鮎魚和安山鱸魚 <small>音抄云鮎</small> 崔馬錫食經云鮎似鱗而小有白皮無鱗春生夏長秋衰冬死故名年魚也	鮎魚如鮎。四足長尾。能上樹。天旱。輒含水上山。以草葉覆身。張口。鳥來飲水。輒吸食之。	『太平廣記』・第四百六十五・水族二・鮎魚/p.991 出『西陽雜俎』
139	鯪魚	陶隱居本草注鯪魚今之鯪魚也四聲字苑云鯪 <small>音抄云鯪</small> 鯪魚黑而少味也	孔子厄於陳。絃歌於館中。夜有一人。長九尺餘。皂衣高冠。叱聲動左右。子路引出。與戰於庭。仆之於地。乃是大鯪魚也。長九尺餘。	『太平廣記』・第四百六十八・水族五・子路/p.996 出『搜神記』
140	龜	大戴禮云甲虫三百六十四種龜 <small>音抄云龜</small> 為之長也兼名苑云龜一名龜 <small>音抄云龜</small>	忽見一龜。大如車輪。四足各躡一小龜而行。又有百餘黃龜從其後。三人叩頭。請示出路。龜乃伸頸。若有意焉。因共隨逐。即得出路。	『太平廣記』・第一百三十一・報應三十・益州人/p.264 出『異苑』
141	蚶	唐韻云蚶 <small>音抄云蚶</small> 蚌屬狀如蛤圓而厚外有理縱橫即今蚶也	瓦屋子。蓋蚌蛤之類也。南中舊呼為蚶音慈。子。頃因盧鈞尚書作鱗。遂改為瓦屋子。以其殼上有稜如瓦甃。故以此名焉。	『太平廣記』・第四百六十五・水族二・瓦屋子/p.989 出『續表錄異』
142	蟻	爾雅集注云蟻 <small>音抄云蟻</small> 小虫亂飛也隨則天風春則天雨	樓下有井。井中無水。黑而且深。小虫蟻蜘蛛網之類。色黑而小。每晚晴。出自于隙中。作團而上。遙看類烟。以手攬之。即蚊蚋耳。	『太平廣記』・第四百九十五・雜錄三・潤州樓/p.1048 出『辨疑志』
143	萱草	兼名苑云萱草一名忘憂 <small>音抄云萱</small>	萱草一名紫萱。又名忘憂草。吳中書生謂之療愁。嵇康『養生論』云萱草忘憂。	『太平廣記』・第四百八・草木三・忘憂草/p.858 出『述異記』
144	菹	本草云菹一名菹 <small>音抄云菹</small> 辨色立成云菹 <small>音抄云菹</small> 七卷食經云	大液池邊。皆是彫菹菜菹。綠節蒲蕪之類。菹之有米者。長安人	『太平廣記』・第四百一十二・草木七・彫菹/p.870 出『西京雜記』

所在	語彙	『和名類聚抄』における逸文	『太平廣記』における用例	『太平廣記』における所在
		菰首味甘冷 <small>和名名也。菰首。菰首。菰首。</small>	謂為彫葫。葭蘆之未解葉者。謂為紫蘆。菰之有首者。謂為綠節。	
145	莎草	唐韻云莎草 <small>唐韻云莎草。莎草。莎草。</small> 草名也	又曰黃陵廟前莎草春。黃陵女兒苦裙新。輕舟小楫唱歌去。水遠山長愁殺人。	『太平廣記』・第四百九十八・雜錄六・李暉玉/p.1054 出『雲溪友議』
146	莞	唐韻云莞 <small>唐韻云莞。莞。莞。</small> 可以為席者也	徐宿之界有陣湖周數百里。兩州之莞荊菴葦。迨芰荷之類。賴以寶之。唐天祐中。有漁者於網中獲鐵鏡。亦不甚識。	『太平廣記』・第二百三十二・器玩四・陣湖漁者/p.477 原闕出處。明鈔本作出『玉堂閒話』
147	柞	四聲字苑云柞 <small>柞。柞。柞。</small> 本名堆作梳也	漢五柞宮。有五柞樹。皆連抱。上枝覆蔭數十里。	『太平廣記』・第四百六・草木一・五柞/p.851 出『西京雜記』
148	柘	毛詩注云桑柘 <small>毛詩注云桑柘。柘。柘。</small> 蠶所食也	神錦衾水蠶絲所織。方二尺。厚一寸。其上龍文鳳彩。殆非人工。其國以五色石鑿池塘。採大柘葉。飼蠶於池中。	『太平廣記』・第二百二十七・伎巧三・重明柞/p.468 出『杜陽編』
149	厚朴	本草云厚朴一名厚皮 <small>厚皮。厚皮。厚皮。</small> 藥性云重皮 <small>厚皮。厚皮。厚皮。</small> 厚朴皮名也	其實正莖。高五十大。數張如蓋。葉長一丈。廣二尺餘。似昔芋。色青。厚五分。可以架。如厚朴。材理如支。	『太平廣記』・第四百一十・草木五・如何樹實/p.864 出『神異經』
150	藥	蘇敬本草注云藥 <small>蘇敬本草注云藥。藥。藥。</small> 其子堆為數珠者也	一日遊終南山之靈應臺。臺有觀音殿基。詢其僧。則曰梁棟藥爐。悉已具矣。屬山路險峻。輦負上下。大役工徒。非三百繯不可集事。	『太平廣記』・第八十四・異人四・王居士/p.168 出『關史』
151	樗	陸詞切韻云樗 <small>陸詞切韻云樗。樗。樗。</small> 惡木也辨色立成云白膠木 <small>樗。樗。樗。</small>	湘水至清。深五六丈。下見底。碎石若樗蒲子。白沙如霜雪。赤岸若朝霞。	『太平廣記』・第三百九十九・水・湘水/p.833 出『湘川記』
152	荆	唐韻云荆 <small>唐韻云荆。荆。荆。</small> 木名也	選一趨捷官健。撰書臧付之曰汝往某山中。但荆棘深處即行。覺張導師送此書。任汝遠近。使者受命。挈糧而去。	『太平廣記』・第四十五・神仙四十五・賈敦/p.102 出『逸史』
153	椿	唐韻云椿 <small>唐韻云椿。椿。椿。</small> 木名也楊氏漢語抄云海石榴 <small>唐韻云椿。椿。椿。</small>	論九玄之逸度。沉萬椿之長生。真言玄朗。高譚玉清。	『太平廣記』・第五十八・女仙三・魏夫人/p.121 出『集仙錄』及『本傳』
154	楸	唐韻云楸 <small>唐韻云楸。楸。楸。</small> 木名也	皆高門華屋。齋館敬麗。楸槐蔭途。桐楊夾植。當世名為貴里。	『太平廣記』・第三百二十七・鬼十二・形鸞/p.681 出『洛陽伽藍記』

## 2.第二章 江戸期漢文小説における近世漢語語彙の日本語への流入

### 2.1 江戸期漢文小説における創作作品

#### 『唐話纂要』の書誌情報

題簽	『唐話纂要』
卷次	六卷六冊
書名	『唐話纂要』（内題） 『唐話纂要』（巻一から巻五の版心書名） 『和漢奇談』・『奇談通俗』（巻六の版心書名）
見返し	なし
序	「享保元年歳次丙申秋九月」に「紀府侍醫高希樸仲敦甫」による序あり
(編) 著者名	岡島冠山

#### 参考資料：

1. 長澤規矩也編 「唐話纂要六巻」 『唐話辭書類集』第六集 （汲古書院 1972.01）

## 2.1.1 『唐話纂要』所収「奇談通俗」における傍注音

\* 出現回数 10 回以上

	出現回数	初出箇所	漢字	傍注音
1	104	p.236	之	ツウ
2	76	p.235	而	ルウ
3	71	p.236	其	キイ
4	62	p.235	人	ジン
5	61	p.235	有	ユウ
6	58	p.238	不	プ
7	52	p.236	日	エ
8	47	p.235	八	パ
9	46	p.235	孫	ソロン
10	39	p.236	一	イ
11	36	p.237	大	ダア
12	35	p.242	容	ヨン
13	33	p.235	也	エ
14	32	p.238	以	イ
15	32	p.265	德	テ
16	31	p.270	與	イユイ
17	28	p.237	此	ツウ
18	27	p.238	平	ビン
19	26	p.235	於	イユイ
20	25	p.235	爲	ワイ
21	25	p.236	乃	ナイ
22	24	p.235	者	チエ
23	24	p.236	下	ヒヤア
24	24	p.236	無	ウ
25	24	p.236	然	ゼン
26	24	p.238	是	ズウ

	出現回数	初出箇所	漢字	傍注音
27	23	p.235	家	キヤア
28	23	p.238	治	ヅウ
29	22	p.237	中	チヨン
30	21	p.240	上	ジヤン
31	20	p.238	聞	ウエン
32	19	p.235	事	スウ
33	19	p.235	若	ジヤ
34	19	p.236	來	ライ
35	19	p.236	年	ネン
36	19	p.238	父	ウ 6 / フウ 13
37	18	p.235	自	ツウ
38	18	p.236	我	ゴウ
39	18	p.242	娘	ニヤン
40	18	p.243	吾	ウ
41	17	p.236	神	ジン
42	17	p.240	又	ユウ
43	16	p.235	三	サン
44	16	p.236	天	テン
45	16	p.236	至	ツウ
46	16	p.236	所	ソウ
47	16	p.238	子	ツウ
48	16	p.240	足	ツヲ
49	15	p.235	小	ヅヤウ
50	15	p.237	亦	イ
51	14	p.235	則	ツエ
52	14	p.236	光	クハン
53	14	p.236	日	ジ
54	14	p.237	相	スヤン



	出現回数	初出箇所	漢字	傍注音
55	14	p.237	同	ドン
56	14	p.237	言	エン
57	14	p.238	何	ホウ
58	14	p.239	因	イン
59	14	p.240	翁	ウヲン
60	14	p.240	心	スイン
61	13	p.235	十	シ
62	13	p.236	或	ウヲ
63	13	p.236	今	キン
64	13	p.236	二	ルウ
65	13	p.237	如	ジュイ
66	13	p.238	郎	ラン 12 ツセ 1
67	13	p.245	金	キン
68	13	p.274	船	チェン
69	12	p.235	故	クウ
70	12	p.235	五	ウ
71	12	p.235	少	シヤウ
72	12	p.235	時	スウ
73	12	p.236	必	ヒ
74	12	p.236	出	チュ
75	12	p.237	敢	カン
76	12	p.241	既	キイ
77	12	p.243	已	イ
78	12	p.244	豊	フヲン
79	12	p.245	矣	イ
80	11	p.235	後	ヘウ
81	11	p.235	前	ヅエン

	出現回数	初出箇所	漢字	傍注音
82	11	p.236	救	キウ
83	11	p.236	知	ツウ
84	11	p.237	見	ケン
85	11	p.238	命	ミン
86	11	p.238	恩	エヘン
87	11	p.239	及	ギ
88	10	p.235	在	ヅアイ
89	10	p.235	被	ビイ
90	10	p.235	欲	ヨ
91	10	p.235	未	ウイ
92	10	p.235	夜	エ
93	10	p.236	忽	ホ
94	10	p.237	衆	チヨン
95	10	p.238	間	ウエン
96	10	p.241	送	ソン
97	10	p.241	焉	エン
98	10	p.245	兩	リヤン
99	10	p.266	公	コン

### 2.1.2 『唐話纂要』所収「孫八救人得福」訳文における傍注

「孫八救人得福」訳文における漢字語彙の傍注（ルビ）

	初出箇所	語彙	ルビ
1	六九オ	簪在	ソノカミ
2	六九オ	長崎	ナカサキ
3	六九オ	孫八	マコハチ
4	六九オ	膂力	チカラ
5	六九オ	遊俠	ヲトコダテ
6	六九オ	自得	タノシミ
7	六九オ	後	ノチ 六九オ／アト
8	六九オ	逐放	ツイハウ
9	六九オ	遂ニ	ツイ
10	六九オ	干隔滂漢	ヒカゲモノ
11	六九オ	京都	キヤウト
12	六九オ	流落	ヲチブレ
13	六九オ	五條橋	ゴジヤウハシ
14	六九オ	旅宿	リヨシユク
15	六九オ	烟	タバコ
16	六九オ	賣テ	ウリ
17	六九オ	世	ヨ
18	六九オ	渡	ワタ
19	六九オ	毎ニ	ツネ
20	六九オ	少許	スコシバカリ
21	六九オ	沽テ	カフ
22	六九オ	客	カク
23	六九オ	邀へ	ムカ
24	六九オ	只	タダ

	初出箇所	語彙	ルビ
25	六 9 オ	盡醉	ヂンスイ
26	六 9 オ	欲シテ	ホツ
27	六 9 オ	顧	ミ
28	六 9 オ	前	サキ 六 9 オ / マヘ
29	六 9 オ	窺	ミ 六 14 オ / ウカカ 六 9 ウ / ヲヲ
30	六 9 オ	小節	セウセツ
31	六 9 オ	拘ル	カカハ
32	六 9 オ	程ニ	ホド
33	六 9 オ	盂蘭盆	ウラホン
34	六 9 オ	時節	ジセツ
35	六 9 オ	家々	イエイエ
36	六 9 オ	燈籠	トウロウ
37	六 9 オ	處々	トコロトコロ
38	六 9 オ	戲文	ヲドリ
39	六 9 オ	誠ニ	マコト
40	六 9 オ	繁華	ハンクハ
41	六 9 オ	比ヒ	タグ
42	六 9 オ	惟	ヒト
43	六 9 オ	寂寞	サビシク
44	六 9 オ	酒後	シュゴ
45	六 9 オ	瞌睡	ネムリ
46	六 9 オ	忽チ	タチマ
47	六 9 オ	容貌	ヨウハウ 六 12 オ / カタチ

	初出箇所	語彙	ルビ
48	六 9 オ	端嚴	ヲゴソカ
49	六 9 オ	衣冠	イクハン
50	六 9 オ	整齊	タタシ
51	六 9 オ	官人	クハンニン
52	六 9 オ	徑	タタチ
53	六 9 オ	笏取	シヤクトリ
54	六 9 オ	向テ	ムカツ
55	六 9 オ	汝	ナンチ
56	六 9 オ	煩	タノミ
57	六 9 オ	特	ワザト
58	六 9 ウ	我	ワカ 六 10 ウ / ワレ
59	六 9 オ	常ニ	ツネ
60	六 9 ウ	祐ル	マモ
61	六 9 ウ	少年	シヤウネン
62	六 9 ウ	光拵	イタヅラモノ
63	六 9 ウ	屈セ	クツ
64	六 9 ウ	坂下	サカノシタ 六 9 ウ / サカシタ
65	六 9 ウ	困テ	クルシミ
66	六 9 ウ	其	ソノ
67	六 9 ウ	危キ	アヤウ
68	六 9 ウ	急	キフ
69	六 9 ウ	速	スミヤカ
70	六 9 ウ	往テ	ユヒ
71	六 9 ウ	救フ	スク
72	六 9 ウ	日後	ジツゴ

	初出箇所	語彙	ルビ
73	六 9 ウ	重報	ヲモキムクヒ
74	六 9 ウ	決シテ	ケツ
75	六 9 ウ	一声	ヒトコヘ
76	六 9 ウ	答テ	コタヘ
77	六 9 ウ	睡リ	ネム
78	六 9 ウ	夢	ユメ
79	六 9 ウ	托	タク 六 12 ウ / タノマ
80	六 9 ウ	靈夢	レイム
81	六 9 ウ	知リ	シ
82	六 9 ウ	頓テ	ヤカ
83	六 9 ウ	綽テ	トリ 六 11 オ / トツ
84	六 9 ウ	奔リ	ハシ
85	六 9 ウ	直ニ	タタチ
86	六 9 ウ	抵リ	イタ
87	六 9 ウ	試	ココロミ
88	六 9 ウ	二更	シコウ
89	六 9 ウ	左側	コロオヒ
90	六 9 ウ	月明	ツキアキラカ
91	六 9 ウ	燈光	トホシビカカヤ
92	六 9 ウ	照シテ	テラ
93	六 9 ウ	白日	ハクジツ
94	六 9 ウ	果	ハタ
95	六 9 ウ	夥	ムレ
96	六 9 ウ	光捆	イタヅラモノ
97	六 9 ウ	從漢	ケライ・ジウボク

	初出箇所	語彙	ルビ
98	六 9 ウ	幾害	ホトント
99	六 9 ウ	幾多	アマタ
100	六 9 ウ	簇擁テ	ムラカツ
101	六 9 ウ	皆	ミナ
102	六 9 ウ	兇	アラキ
103	六 9 ウ	怕	ヲソ
104	六 9 ウ	勸解	トリサエル
105	六 9 ウ	塊タル	ツカネ 六 14 オ / クハイ
106	六 9 ウ	面貌	カオハセ
107	六 9 ウ	玉	タマ
108	六 9 ウ	砌タル	ソミ
109	六 9 ウ	身軀	ミフリン
110	六 9 ウ	氣色	キシヨク
111	六 9 ウ	和順	クハジユン
112	六 9 ウ	粧扮	ヨソオヒ・シヤウソク
113	六 9 ウ	真	マコト・シン
114	六 9 ウ	男中	ナンチウ
115	六 9 ウ	美	ビ
116	六 9 ウ	刀	カタナ
117	六 9 ウ	揮	フツ
118	六 10 オ	躍出	ヲトリイテ
119	六 10 オ	罵	ノツ
120	六 10 オ	艸賊	ソウゾク
121	六 10 オ	等	ラ
122	六 10 オ	幼弱	ヨハキ
123	六 10 オ	欺負	アザムク

	初出箇所	語彙	ルビ
124	六 10 オ	怒	イカ
125	六 10 オ	同	ドウ 六 12 ウ／ヲナシ
126	六 10 オ	抜	ヌキ
127	六 10 オ	圍定	トリカコン
128	六 10 オ	聞フ	タタカ
129	六 10 オ	大力	ヲオイチカラ
130	六 10 オ	少シ	スコ
131	六 10 オ	背	ムネ 六 15 オ／セナカ
132	六 10 オ	用	モ 六 13 オ／モチ
133	六 10 オ	打番シ	ウチタヲ
134	六 10 オ	精神	セイシン
135	六 10 オ	倍	マスマス
136	六 10 オ	強リ	ツヨカ
137	六 10 オ	鋒	ホコサキ
138	六 10 オ	當ス	カタラ
139	六 10 オ	盡皆	コトコトクミナ
140	六 10 オ	四方	シハウ
141	六 10 オ	逃散	ニケサリ
142	六 10 オ	乃	スナハ
143	六 10 オ	主従	シウジウ
144	六 10 オ	己	ヲノレ
145	六 10 オ	宅	タク
146	六 10 オ	帶歸	ツレカヘリ
147	六 10 オ	先	マヅ



	初出箇所	語彙	ルビ
148	六 10 オ	憫ケル	ナグサメ
149	六 10 オ	謝シテ	シヤ
150	六 10 オ	御蔭	ヲカケ
151	六 10 オ	虎	トラ
152	六 10 オ	口	クチ
153	六 10 オ	脱	ノガ
154	六 10 オ	一命	イチメイ
155	六 10 オ	恩	ヲン
156	六 10 オ	報	ムク
157	六 10 オ	御名	ヲンナ
158	六 10 オ	承テ	ウケタマハ
159	六 10 オ	通家	ツウカ
160	六 10 オ	好ミ	ヨシ
161	六 10 オ	結	ムスブ
162	六 10 オ	郎君	ラウクン
163	六 10 オ	自ラ	ミツカ 六 15 ウ／ヲノツカ
164	六 10 オ	福分	フクブン
165	六 10 オ	俺	ワレ
166	六 10 オ	何	ナン 六 13 ウ／ナニ
167	六 10 オ	預ル	アツカ
168	六 10 オ	名	ナ
169	六 10 オ	誰	タレ
170	六 10 オ	御子息	ゴシソク
171	六 10 オ	尊寓	ヲンヤド
172	六 10 ウ	伊	イヅレ

	初出箇所	語彙	ルビ
173	六 10 ウ	光拵	イタツラ
174	六 10 ウ	為ニ	タメ
175	六 10 ウ	逼迫	セハメ
176	六 10 ウ	御物語	ヲンモノカタリ
177	六 10 ウ	姓名	セイメイ
178	六 10 ウ	小人	ソレカシ
179	六 10 ウ	北野	キタノ
180	六 10 ウ	居住ス	キョヂウ
181	六 10 ウ	今宵	コヨイ
182	六 10 ウ	戯	ヲトリ
183	六 10 ウ	遊	アソ
184	六 10 ウ	一僕	イチボク
185	六 10 ウ	邊ニ	ベン
186	六 10 ウ	彼	カノ 六 11 オ／カレ 六 14 オ／カンコ
187	六 10 ウ	酒店	シュテン
188	六 10 ウ	誘テ	イナサク
189	六 10 ウ	共ニ	トモ
190	六 10 ウ	酌ン	ウマ
191	六 10 ウ	斷然	フツト
192	六 10 ウ	従ハ	シタカ
193	六 10 ウ	發ル	ヲコ
194	六 10 ウ	累	ワンラヒ
195	六 10 ウ	恩人	ヲンニン
196	六 10 ウ	及ヒ	ヲヨ
197	六 10 ウ	嘆	タン

	初出箇所	語彙	ルビ
198	六 10 ウ	備細	ツフサ
199	六 10 ウ	語り	カタ
200	六 10 ウ	天満天神	テンマンテンシン
201	六 10 ウ	靈	レイ
202	六 10 ウ	現シテ	ケン
203	六 10 ウ	性命神	マモリ・ウヂガミ
204	六 10 ウ	酒果	シユクハ
205	六 10 ウ	供テ	ソナヘ
206	六 10 ウ	祭拜シ	サイハイ
207	六 10 ウ	曾テ	カツ
208	六 10 ウ	怠慢	ヲコタル
209	六 10 ウ	感シ	カン
210	六 10 ウ	遣シテ	ツカハ
211	六 11 オ	疑ヒ	ウタカ
212	六 11 オ	則チ	スナハ
213	六 11 オ	是	コレ
214	六 11 オ	僕	ホク
215	六 11 オ	相双ンテ	アヒナラ
216	六 11 オ	拜	ハイ
217	六 11 オ	慌忙	アハテテ
218	六 11 オ	扶起シ	タスケヲコ
219	六 11 オ	好言	カウゲン
220	六 11 オ	大勢	ヲフゼイ
221	六 11 オ	腳步	アシヲト
222	六 11 オ	來テ	キタツ
223	六 11 オ	敲ク	タタ
224	六 11 オ	催シ	モヨフ

	初出箇所	語彙	ルビ
225	六 11 オ	災	ワザハヒ
226	六 11 オ	招ク	マネ
227	六 11 オ	奔出	ハシリイテ
228	六 11 オ	開ヒテ	ヒラ
229	六 11 オ	反テ	カヘツ
230	六 11 オ	老翁	ラウヲウ
231	六 11 オ	許多	アマタ
232	六 11 オ	引ツレ	ヒキ
233	六 11 オ	問	トヒ
234	六 11 オ	只今	タダイマ
235	六 11 オ	足下	ゴヘン
236	六 11 オ	何故	ナニユヘ
237	六 11 オ	父	チチ
238	六 11 オ	三木治平	ミキチヘイ
239	六 11 オ	死	シ
240	六 11 オ	捨テ	ステ
241	六 11 オ	救命	イクメイ
242	六 11 オ	心	キモ
243	六 11 オ	銘シテ	メイ
244	六 11 オ	忘レ	ワス
245	六 11 ウ	未タ	イマ
246	六 11 ウ	云	イイ
247	六 11 ウ	了ラザル	ヲハ
248	六 11 ウ	声	コエ
249	六 11 ウ	聞知	キキシリ
250	六 11 ウ	對面	タイメン
251	六 11 ウ	悦ブ	ヨロコ

	初出箇所	語彙	ルビ
252	六 11 ウ	一事	イチジ
253	六 11 ウ	所為	シワザ
254	六 11 ウ	詳ニ	ツマビラナ
255	六 11 ウ	今夜	コヨイ
256	六 11 ウ	小兒	セカレ
257	六 11 ウ	歸ラザル	カヘ
258	六 11 ウ	分テ	ワケ
259	六 11 ウ	尋覓	タヅネ
260	六 11 ウ	幸	サヒハイ
261	六 11 ウ	禍	ワザハヒ
262	六 11 ウ	遭シ	アヒ
263	六 11 ウ	親自	ミツカラ
264	六 11 ウ	夜	ヨ
265	六 11 ウ	已	ステ
266	六 11 ウ	深シ	フケ
267	六 11 ウ	送	ヲク
268	六 11 ウ	私宅	シタク
269	六 11 ウ	愈黍	イヨクカタシケ
270	六 11 ウ	大丈夫	ダイヂヤウフ
271	六 11 ウ	作事	ナスコト
272	六 11 ウ	終リ	ヲハ
273	六 11 ウ	有リ	ア
274	六 11 ウ	情愿	ネガツテ
275	六 11 ウ	届ク	ト
276	六 11 ウ	回ル	カヘ
277	六 11 ウ	建仁寺	ケンニンジ
278	六 11 ウ	慢線	タラリ

	初出箇所	語彙	ルビ
279	六 11 ウ	聞	キキ
280	六 11 ウ	父子	フシ
281	六 11 ウ	延テ	ヒイ
282	六 11 ウ	後堂	ウラノヤシキ・コウタウ
283	六 11 ウ	欸待	モテナシ
284	六 11 ウ	元來	グハンライ
285	六 12 オ	累代	ルイタイ
286	六 12 オ	豪富	ブンケン
287	六 12 オ	田庄	テンシヤウ
288	六 12 オ	甚	ハナハタ 六 12 オ / アマ
289	六 12 オ	等閑	トフサリ
290	六 12 オ	能ク	ヨ
291	六 12 オ	對	タイ
292	六 12 オ	家計	カケイ
293	六 12 オ	頗	スゴフ
294	六 12 オ	富テ	トミ
295	六 12 オ	別	ベツ 六 14 オ / ワカ
296	六 12 オ	不足	フソク
297	六 12 オ	但	タタ
298	六 12 オ	恨	ウラム
299	六 12 オ	幾個	アマタ
300	六 12 オ	子	コ
301	六 12 オ	喪テ	ウシナツ
302	六 12 オ	留メ	トト
303	六 12 オ	父母	フホ

	初出箇所	語彙	ルビ
304	六 12 オ	愛スル	アイ
305	六 12 オ	手中	シュチウ
306	六 12 オ	性	セイ
307	六 12 オ	任	マカ
308	六 12 オ	自由	ジュウ
309	六 12 オ	困リ	ヨ
310	六 12 オ	遠ク	トホ
311	六 12 オ	險然	スンテニ・ホトンド
312	六 12 オ	非命	イヌ
313	六 12 オ	致	イタ
314	六 12 オ	且	カツ
315	六 12 オ	醜	ミニクク
316	六 12 オ	年	トシ
317	六 12 オ	大タル	タケ
318	六 12 オ	毎度	マイト
319	六 12 オ	是非	ゼヒ
320	六 12 オ	不艦不慙	フラチ
321	六 12 オ	之	コレ
322	六 12 オ	放心	ハウシン
323	六 12 オ	通誠	モフサク
324	六 12 オ	災殃	ワサハイ
325	六 12 オ	保佑	マモリ
326	六 12 オ	禱リ	イノ
327	六 12 オ	驗シ	シル
328	六 12 オ	向キ	サ
329	六 12 オ	神恩	シンラン
330	六 12 ウ	委細	イサイ

	初出箇所	語彙	ルビ
331	六 12 ウ	心腹	シンフク
332	六 12 ウ	如何	イカカ
333	六 12 ウ	御	ゴ
334	六 12 ウ	承允	シヤウイン
335	六 12 ウ	此	ココ 六 13 ウ / コレ
336	六 12 ウ	假使	タトヒ
337	六 12 ウ	河	カハ
338	六 12 ウ	蹈ミ	フト
339	六 12 ウ	火	ヒ
340	六 12 ウ	入ル	イ
341	六 12 ウ	願	ネカハ
342	六 12 ウ	御示シ	ヲンシメ
343	六 12 ウ	言	ゲン
344	六 12 ウ	駟馬	シメ
345	六 12 ウ	追	ヲヒ
346	六 12 ウ	喜ヒ	ヨロコ
347	六 12 ウ	既	ステ
348	六 12 ウ	御	ゴ 六 13 オ / ヲン
349	六 12 ウ	兄弟	ケイテイ
350	六 12 ウ	義	キ
351	六 12 ウ	契	チギ
352	六 12 ウ	永ク	ナカ
353	六 12 ウ	教訓	キャウクン
354	六 12 ウ	靠	ヨラ
355	六 12 ウ	辭	ジ



	初出箇所	語彙	ルビ
356	六 12 ウ	案	アン
357	六 12 ウ	慌テ	アハテ
358	六 12 ウ	計較	アイホツ
359	六 12 ウ	失ヒ	ウシナ
360	六 12 ウ	満面	マンメン
361	六 12 ウ	通紅	モミヂ
362	六 12 ウ	夫人	フシン
363	六 12 ウ	眾	モロモロ
364	六 12 ウ	管家	ケライ 六 15 ウ / テダイ
365	六 12 ウ	喚	ヨビ
366	六 12 ウ	盃	サカツキ
367	六 12 ウ	大酔	タイスイ
368	六 12 ウ	蘭	タケナヲ
369	六 12 ウ	仰	アホ 六 15 ウ / ヲウ
370	六 12 ウ	歇	ヤスマ 六 12 ウ / ヤスミ
371	六 12 ウ	帳	チヤウ
372	六 13 オ	縁	エン
373	六 13 オ	千里	センリ
374	六 13 オ	逢	アフ
375	六 13 オ	重	ヲモ 六 14 オ / カサネ
376	六 13 オ	情深	シヤウフカ
377	六 13 オ	双	ソウ
378	六 13 オ	爲	ナル

	初出箇所	語彙	ルビ
			六 13 ウ／タメ
379	六 13 オ	珍	メツラ
380	六 13 オ	佳會	カクハイ
381	六 13 オ	羨ミ	ウラヤ
382	六 13 オ	次	ツキ
383	六 13 オ	筵	エン
384	六 13 オ	設ケ	モフ
385	六 13 オ	飲酌	インシヤフ
386	六 13 オ	家	ケ
387	六 13 オ	男女	ナンニヨ
388	六 13 オ	人品	シンヒン
389	六 13 オ	各	ヲノヲノ
390	六 13 オ	愛憐	アイレン
391	六 13 オ	蒙リ	カフム
392	六 13 オ	感心	カンシン
393	六 13 オ	勝	タヘ
394	六 13 オ	若	モシ
395	六 13 オ	某	ソレカシ
396	六 13 オ	敢テ	アヘ
397	六 13 オ	犬馬	ケンバ
398	六 13 オ	勞	ラウ
399	六 13 オ	施	ホドコ
400	六 13 オ	客中	タビ
401	六 13 オ	隴	サゾ
402	六 13 オ	朝夕	テウセキ
403	六 13 オ	不便	フベン
404	六 13 オ	我方	ワカカタ

	初出箇所	語彙	ルビ
405	六 13 オ	移ラ	ウツ
406	六 13 オ	住	ヂウ
407	六 13 オ	諫	イサメ
408	六 13 オ	決	ケツ
409	六 13 オ	議	ギ
410	六 13 オ	縦	タト
411	六 13 オ	貴宅	キタク
412	六 13 オ	時常	ヲリヲリ
413	六 13 オ	拜候	ヲミマヒ
414	六 13 オ	用事	ヨウジ
415	六 13 オ	遠慮	エンリヨ
416	六 13 オ	見教	シメシ
417	六 13 オ	弥	イヨイヨ
418	六 13 オ	愛敬	アイキヤウ
419	六 13 オ	謝礼	シヤレイ
420	六 13 オ	固	カタク
421	六 13 ウ	受	ウケ
422	六 13 ウ	情意	ジャウイ
423	六 13 ウ	合	カナ
424	六 13 ウ	義氣	ギキ
425	六 13 ウ	愁	ウレヒ
426	六 13 ウ	遍	アマネク
427	六 13 ウ	傳	ツタヘ
428	六 13 ウ	奇談	キダン
429	六 13 ウ	或	アルヒ
430	六 13 ウ	閑談	カンダン
431	六 13 ウ	序	ツイテ

	初出箇所	語彙	ルビ
432	六 13 ウ	餘間	ヨケン
433	六 13 ウ	房屋	ヤシキ
434	六 13 ウ	散在	サンザイ
435	六 13 ウ	洞院	トウイン
436	六 13 ウ	在	ア
437	六 13 ウ	屋	ヤ
438	六 13 ウ	以前	イゼン
439	六 13 ウ	妖精	ヤウセイ
440	六 13 ウ	占棲	シメフマ
441	六 13 ウ	受	ウケ
442	六 13 ウ	妖屋	ハケモノヤシキ・ヤウラク
443	六 13 ウ	更	コウ
444	六 13 ウ	至	イタ
445	六 13 ウ	門前	モンセン
446	六 13 ウ	經	トヲ
447	六 13 ウ	實	ジツ 六 12 オノタカラ
448	六 13 ウ	患	ワツラ
449	六 13 ウ	相識	チカヅキ
450	六 13 ウ	望	ノゾ
451	六 13 ウ	早速	サツソク
452	六 13 ウ	探聽	キキタテ
453	六 13 ウ	冷笑	アサワラツ
454	六 13 ウ	太平	タイヘイ
455	六 13 ウ	清淨	シヤウジャウ
456	六 13 ウ	世界	セカイ
457	六 13 ウ	然	シカ

	初出箇所	語彙	ルビ
458	六 13 ウ	妖怪	バケモノ・ヤウクハイ 六 14 ウ／ヤウクハイ
459	六 13 ウ	衢	マチ
460	六 13 ウ	屋中	ヲクチウ
461	六 14 オ	棲	スマ
462	六 14 オ	縦然	タトヒ
463	六 14 オ	虚實	キヨシツ
464	六 14 オ	仕方	シカタ
465	六 14 オ	驚	ヲトロヒ
466	六 14 オ	無用	フヨウ
467	六 14 オ	去年	キヨネン
468	六 14 オ	角	カク
469	六 14 オ	妖火	ヤウクハ
470	六 14 オ	魂	タマシイ
471	六 14 オ	散	チラ
472	六 14 オ	驚恐	ヲドロキ
473	六 14 オ	臍	ホゾ
474	六 14 オ	噬	カン
475	六 14 オ	退悔	クヒ
476	六 14 オ	京中	キヤウヂウ
477	六 14 オ	咲話	ワラヒグサ
478	六 14 オ	万一	マンイチ
479	六 14 オ	疎失	アヤマチ
480	六 14 オ	怎生	イカカ
481	六 14 オ	再三	サイサン
482	六 14 オ	意	ココロ
483	六 14 オ	耳	ミミ

	初出箇所	語彙	ルビ
484	六 14 オ	腰	コシ
485	六 14 オ	寶刀	ハウタウ
486	六 14 オ	挿	サ
487	六 14 オ	手	テ
488	六 14 オ	銅燈	ドウトウ
489	六 14 オ	提	サ
490	六 14 オ	中堂	チウドウ
491	六 14 オ	坐	ザ
492	六 14 オ	燈火	トホシビ
493	六 14 オ	取	トツ
494	六 14 オ	喫	キツ
495	六 14 オ	漸	ヤフヤ
496	六 14 オ	前後	ゼンゴ
497	六 14 オ	捱至	ヲシイタ
498	六 14 オ	震動	シンドウ
499	六 14 オ	響	ヒビ
500	六 14 オ	竈後	ヘツツイノウシロ
501	六 14 オ	地下	ニハ
502	六 14 オ	東隅	ヒカシノスミ
503	六 14 オ	柱根	ハシラノネ
504	六 14 オ	光	ヒカリ
505	六 14 オ	迸出	ハナツ 六 14 オ / ワキイテ
506	六 14 オ	騰々	トウトウ
507	六 14 オ	飛独	トビアガリ
508	六 14 ウ	燦々	サンサン
509	六 14 ウ	照耀	テリカヤキ

	初出箇所	語彙	ルビ
510	六 14 ウ	廻施	メグリ
511	六 14 ウ	惧	ラメレ
512	六 14 ウ	仍	ナヲ
513	六 14 ウ	銅燈	ドウトウ
514	六 14 ウ	提	サケ
515	六 14 ウ	跟定	ツキマトウ
516	六 14 ウ	扁	ヘン
517	六 14 ウ	廻リ	メク
518	六 14 ウ	火原	ヒモト
519	六 14 ウ	所	トコロ
520	六 14 ウ	忽然	ゴツガシン
521	六 14 ウ	見	ミ
522	六 14 ウ	尚	ナヲ
523	六 14 ウ	別ニ	ベツ
524	六 14 ウ	異ル	コトナ
525	六 14 ウ	眼	ニナコ
526	六 14 ウ	巖然	ゲンゼン
527	六 14 ウ	天	ヨ
528	六 14 ウ	明ケ	アケ
529	六 14 ウ	再ビ	フタタ
530	六 14 ウ	怪キ	アヤシ 六 14 ウ / クハイ
531	六 14 ウ	夜來	ヤライ
532	六 14 ウ	始終	シチウ
533	六 14 ウ	詳	ツマビ
534	六 14 ウ	恐	ヲソ
535	六 14 ウ	柱	ハシラ

	初出箇所	語彙	ルビ
536	六 14 ウ	根	ネ
537	六 14 ウ	掘開	ホリヒラ
538	六 14 ウ	平	タイラ
539	六 14 ウ	掘	ホラ
540	六 14 ウ	終	ワヅカ
541	六 14 ウ	錘々	ソウソウ
542	六 14 ウ	作	ナ
543	六 14 ウ	晃々	クハウクハウ
544	六 14 ウ	放	ハナ
545	六 14 ウ	缸	ツホ
546	六 14 ウ	黄金	ヲウゴン
547	六 14 ウ	掘出	ホリイダ
548	六 14 ウ	内	ウチ
549	六 14 ウ	金	キン
550	六 14 ウ	牌	フタ
551	六 14 ウ	上	ウヘ
552	六 15 オ	行字	クウジ
553	六 15 オ	刻付	トリフケ
554	六 15 オ	輿	アタ
555	六 15 オ	孫	ソン
556	六 15 オ	金氣	キンキ
557	六 15 オ	先人	センジン
558	六 15 オ	留置	トトメライ
559	六 15 オ	分明	フンミヤウ
560	六 15 オ	文字	モンジ
561	六 15 オ	收	ヲサ
562	六 15 オ	老爺	ラウヤ



	初出箇所	語彙	ルビ
563	六 15 オ	福ヒ	サイハ
564	六 15 オ	宜ク	ヨロシ
565	六 15 オ	収	ヲサメ
566	六 15 オ	遮莫	サモアラバアレ
567	六 15 オ	字	ジ
568	六 15 オ	太タ	ハナハ
569	六 15 オ	拘束	ヘンクツ
570	六 15 オ	我存	ワカゾン
571	六 15 オ	念ニ	ネン
572	六 15 オ	權且	カリニカツ
573	六 15 オ	頻ニ	シキ
574	六 15 オ	執意	カタク
575	六 15 オ	氣キ	セ
576	六 15 オ	兄長	ケイチヤウ
577	六 15 オ	扭戻	サカラフコト
578	六 15 オ	枚	ヲサメ
579	六 15 オ	義絶	ギゼツ
580	六 15 オ	活ベ	イキ
581	六 15 オ	叫テ	コハワツ 六 10 オ / ヨバ
582	六 15 オ	抱ツキ	ダキ
583	六 15 オ	涙	ナンド
584	六 15 オ	流シテ	ナカ
585	六 15 オ	哭シ	ニク
586	六 15 オ	感嘆	カンタン
587	六 15 オ	撫テ	ナデ
588	六 15 オ	賢弟	オトト・ケン

	初出箇所	語彙	ルビ
589	六 15 ウ	息メ	ヤス
590	六 15 ウ	都テ	スベ
591	六 15 ウ	了簡	リヤウケン
592	六 15 ウ	我等	ワレラ
593	六 15 ウ	衆	モロモロ
594	六 15 ウ	取出	トリ
595	六 15 ウ	筭	カゾエ
596	六 15 ウ	書付	カキツケ
597	六 15 ウ	數	スウ
598	六 15 ウ	悉ク	コトコト
599	六 15 ウ	交シテ	ワタ
600	六 15 ウ	面目	メンモク
601	六 15 ウ	改テ	アタラメ
602	六 15 ウ	大生理	ヲフアキナヒ
603	六 15 ウ	過サル	スキ
604	六 15 ウ	掙メ	シク
605	六 15 ウ	夢中	ムチウ
606	六 15 ウ	告	ツケ
607	六 15 ウ	宣ヒ	タマ
608	六 15 ウ	最	モツトモ
609	六 15 ウ	思ヒ	ヲモ

### 2.1.3 『唐話纂要』所収「徳容行善有報」訳文における傍注

「徳容行善有報」訳文における漢字語彙の傍注（ルビ）

	初出箇所	語彙	ルビ
1	六22ウ	李徳容	リトクヨウ
2	六22ウ	楊州	ヤウジウ
3	六22ウ	乃チ	スナハ
4	六22ウ	富貴	フウキ
5	六22ウ	嫡子	チヤクシ
6	六22ウ	諸人	シヨニン
7	六22ウ	敬ヒ	ウヤマ
8	六22ウ	素リ	モトヨ
9	六22ウ	風景	フウケイ
10	六22ウ	聞	キキ 六28ウ／キ 六25オ／キイ
11	六22ウ	遊ビ	アソ
12	六22ウ	我	ワ 六23オ／ワカ 六23ウ／ワレ
13	六22ウ	幸ヒ	サイハ
14	六22ウ	便リ	タヨ
15	六22ウ	荷物	ニモツ
16	六22ウ	販テ	ハコビ
17	六22ウ	原	ハラ
18	六22ウ	寓	ヤド
19	六22ウ	稲山	イナサ
20	六22ウ	大浦	ヲフウラ
21	六22ウ	等	トウ

	初出箇所	語彙	ルビ
			六25ウ／ラ
22	六22ウ	來往	ライヲウ
23	六22ウ	消遣	ナグサミ
24	六22ウ	既ニ	スデ
25	六22ウ	荆棘林	クルワ
26	六22ウ	當代	トウダイ
27	六22ウ	名妓	ナトリ・メイキ 六23ウ／メイキ
28	六22ウ	偽テ	イツハリ
29	六22ウ	粧ヒ	ヨソホ
30	六22ウ	假テ	ニセ
31	六22ウ	飾タル	カザリ
32	六22ウ	足サル	タラ
33	六23オ	海外	カイクハイ
34	六23オ	美	ビ
35	六23オ	乃チ	スナハ
36	六23オ	對シテ	タイ
37	六23オ	繁華	ハンクハ
38	六23オ	郷	サト
39	六23オ	只	タタ
40	六23オ	美人	ビジン
41	六23オ	少	スクナ 六24ウ／スコ
42	六23オ	畝殘	イトノコリ
43	六23オ	答	コタヘ 六28オ／コタ
44	六23オ	山水	サンスイ

	初出箇所	語彙	ルビ
45	六23オ	清ク	キヨ
46	六23オ	秀	ヒイデ
47	六23オ	其	ソノ
48	六23オ	氣	キ
49	六23オ	受テ	ウケ
50	六23オ	間	ママ
51	六23オ	生	シヤウ
52	六23オ	貴公	キコウ
53	六23オ	未タ	イマ
54	六23オ	之	コレ 六26オ／コテ
55	六23オ	遇	アヒ
56	六23オ	語	カタ
57	六23オ	數	ス
58	六23オ	過テ	スキ 六26ウ／スグ
59	六23オ	後	ノチ 六27オ／アト
60	六23オ	徳容	トクヨウ
61	六23オ	頃	コノコロ
62	六23オ	賣	ウリ
63	六23オ	妾	セフ
64	六23オ	父母	フボ
65	六23オ	困窮	コンキウ
66	六23オ	救	スク
67	六23オ	旅宿	リヨシユク
68	六23オ	倡伴	トギ

	初出箇所	語彙	ルビ
69	六23オ	所	シヨ
70	六23オ	居	イ
71	六23オ	御	ヲン 六23オ / ゴ
72	六23オ	寂寞	ツレツレ
73	六23オ	慰メ	ナクサ
74	六23オ	願	ネカハ 六27オ / クハン
75	六23オ	速ニ	スミヤカ
76	六23オ	談合	ダンカフ
77	六23オ	恐ク	ヲソラ
78	六23オ	先	セン 六23ウ / マツ
79	六23オ	料リ	ハカ
80	六23オ	打咲ヒ	ウチワラ
81	六23オ	躰	テイ
82	六23ウ	李公	リコウ
83	六23ウ	見	ミ
84	六23ウ	尚	ナヲ
85	六23ウ	等閑	ナヲザリ
86	六23ウ	况ヤ	イハン
87	六23ウ	市上	マチ
88	六23ウ	處女	ムスメ
89	六23ウ	吾子	ゴヘン 六23ウ / ナンヂ
90	六23ウ	實事	ジツジ
91	六23ウ	信	シン

	初出箇所	語彙	ルビ
92	六23ウ	嘆	タン
93	六23ウ	惜	ヲシイ 六26ウ／ヲシミ
94	六23ウ	真	マコト
95	六23ウ	他人	タニン
96	六23ウ	爲	タメ
97	六23ウ	得	エ
98	六23ウ	吾	ワレ 六24ウ／ワカ
99	六23ウ	固リ	モトヨ
100	六23ウ	急フ	キ
101	六23ウ	求メ	モト
102	六23ウ	知	シ
103	六23ウ	適	タマタマ
104	六23ウ	宜キ	ヨロシ
105	六23ウ	勸	イサタ
106	六23ウ	何	ナニ 六25オ／ナ
107	六23ウ	益	エキ
108	六23ウ	再	フタタ
109	六23ウ	争	アラソ
110	六23ウ	已	ステ
111	六23ウ	留	トト 六24ウ／トトメ
112	六23ウ	相	アヒ
113	六23ウ	少之	シバラク
114	六23ウ	朴實	ハクジツ

	初出箇所	語彙	ルビ
115	六23ウ	自	ミヅカ
116	六23ウ	名	ナ
117	六23ウ	凡	オヨ
118	六23ウ	毎ニ	コト
119	六23ウ	來歴	ライレキ
120	六23ウ	分明	フンミヤウ
121	六23ウ	別	ベツ 六26ウ／ワカ
122	六23ウ	疑フ	ウタガ
123	六23ウ	試	ココロミ
124	六23ウ	成就	ジャウジユ
125	六23ウ	致	イ 六25オ／イタ
126	六23ウ	委曲	イキヨク
127	六24オ	躊躇	チウチヨ
128	六24オ	是	コレ 六25ウ／コテ 六27ウ／ココ
129	六24オ	難キ	カタ
130	六24オ	今夜	コヨイ
131	六24オ	彼	カレ
132	六24オ	宿所	シユクシヨ
133	六24オ	往キ	ユ
134	六24オ	則チ	スナハ
135	六24オ	氷人	ナカダチ
136	六24オ	成	ナリ 六27ウ／ナ



	初出箇所	語彙	ルビ
137	六24オ	相談	ソウダン
138	六24オ	主	アルジ 六26オ／ツカナドリ
139	六24オ	翁	ヲキナ
140	六24オ	迎へ	ムカ
141	六24オ	問	トヒ 六25ウ／ト
142	六24オ	汝	ナンチ
143	六24オ	客	カク
144	六24オ	誘ヒ	イザナ
145	六24オ	示シ	シメ
146	六24オ	及	ヲヨ
147	六24オ	禮	レイ
148	六24オ	叙へ	ノ
149	六24オ	進ル	ススム
150	六24オ	村酒	ソンシユ
151	六24オ	且	カツ
152	六24オ	盃盤	ハイバン
153	六24オ	備	ソナハ
154	六24オ	家	イエ
155	六24オ	貧キ	マヅシ
156	六24オ	洗フ	アラ
157	六24オ	壁	カベ
158	六24オ	枝	シ
159	六24オ	鎗	ヤリ
160	六24オ	架ケ	カ
161	六24オ	張	チャウ

	初出箇所	語彙	ルビ
162	六24才	弓	ユミ
163	六24才	懸ケ	カ
164	六24才	床	ロコ
165	六24才	領	リヤウ
166	六24才	鎧甲	ヨロヒ
167	六24才	傍	カタハラ
168	六24才	腰	コシ
169	六24才	置ク	サシヲ
170	六24才	言語	ケンキヨ
171	六24才	俗ケラス	ゾク
172	六24才	動止	ドウシ
173	六24才	法	ハフ
174	六24才	如何様	イカサマ
175	六24才	由	ヨシ
176	六24才	工商	コウシヤウ
177	六24才	類	タクヒ
178	六24才	竊ニ	ヒソカ
179	六24才	訝リ	イブカ
180	六24才	姓名	セイミン
181	六24才	來由	ユクタテ
182	六24ウ	姓	セイ
183	六24ウ	安田	ヤスダ
184	六24ウ	内記	ナイキ
185	六24ウ	以前	イゼン
186	六24ウ	祿	ロク
187	六24ウ	辭シテ	ジ
188	六24ウ	故郷	コキヤウ

	初出箇所	語彙	ルビ
189	六24ウ	離レ	ハナ
190	六24ウ	遂ニ	ツイ
191	六24ウ	住ス	ヂウ
192	六24ウ	初	ハシメ
193	六24ウ	宿資蓄貨	タクハエ
194	六24ウ	坐	ザ
195	六24ウ	食ハ	クラヘ
196	六24ウ	崩レ	クヅ
197	六24ウ	飲ハ	ノメ
198	六24ウ	海	ウミ
199	六24ウ	乾ク	カハ
200	六24ウ	理リ	コトハ
201	六24ウ	纒	ワツカ
202	六24ウ	過半	クハハン
203	六24ウ	使ヒ	ツカ
204	六24ウ	捨	ステ
205	六24ウ	清光	スキト
206	六24ウ	無シテ	ナク
207	六24ウ	艸根	サウコン
208	六24ウ	内	ウチ
209	六24ウ	五口	ゴカウ
210	六24ウ	養	ヤシナ
211	六24ウ	半粒	ハンリフ
212	六24ウ	助ケ	タス
213	六24ウ	加之	シカノミナラス
214	六24ウ	拙荆	ニヤウバア・セツケイ
215	六24ウ	病	ヤマヒ

	初出箇所	語彙	ルビ
216	六24ウ	臥シテ	フ
217	六24ウ	藥	クスリ
218	六24ウ	施ス	ホドコ
219	六24ウ	死スル	シ
220	六24ウ	待	マツ 六28オ / マチ
221	六24ウ	困リ	ヨ
222	六24ウ	姉女	アネムスメ
223	六24ウ	阿豊	ヲトヨ
224	六24ウ	身	ミ
225	六24ウ	換テ	カヘ
226	六24ウ	母	ハハ
227	六24ウ	危急	キキフ
228	六24ウ	欲	ホツ
229	六24ウ	決シテ	ケツ
230	六24ウ	止ム	トド
231	六24ウ	孝念	カウネン
232	六24ウ	感	カン
233	六24ウ	托セ	マカ
234	六24ウ	憐憫	レンミン
235	六24ウ	宣フ	ノタマ
236	六24ウ	如何シテ	イカン
237	六24ウ	御持	ヲンモチ
238	六24ウ	此等	コテラ
239	六24ウ	兵器	ヘイキ
240	六24ウ	武士	ブシ
241	六25オ	性命	イノチ

	初出箇所	語彙	ルビ
242	六25オ	失	ウシナ
243	六25オ	太平	タイヘイ
244	六25オ	故主	コシウ
245	六25オ	事	コト
246	六25オ	披掛	ヨロフ・ヒクハ
247	六25オ	馬	ウマ
248	六25オ	上テ	ノソ
249	六25オ	陣上	チンジャウ
250	六25オ	捻り	ヒネ
251	六25オ	前	マヘ 六27オ／サキ
252	六25オ	戦死シテ	タチシニ
253	六25オ	前恩	ゼンラン
254	六25オ	報	ムク 六26オ／ホウ
255	六25オ	此	コレ
256	六25オ	所持	シヨチ
257	六25オ	此言	コノコト
258	六25オ	果シテ	ハタ
259	六25オ	武士	ブシ
260	六25オ	落魄	チチブレ
261	六25オ	者	モノ
262	六25オ	忠義	チウギ
263	六25オ	志	ココロサシ
264	六25オ	鉄石	テツセキ
265	六25オ	心	ココロ
266	六25オ	長上	チャウシヤウ

	初出箇所	語彙	ルビ
267	六25オ	待	ダイ
268	六25オ	須臾	シバラク 六27オ／シユユ
269	六25オ	弟妹	ヲトトイモト
270	六25オ	喚出シテ	ヨヒイダ
271	六25オ	豊娘	トヨヒメ
272	六25オ	左	ヒダリ
273	六25オ	弟	ヲトト
274	六25オ	携	タヅサ
275	六25オ	右	ミギ
276	六25オ	妹	イモト
277	六25オ	輕ク	カロ
278	六25オ	蓮歩	アシ・レンホ
279	六25オ	移シ	ウツ
280	六25オ	徐	シブカニ・ユルク
281	六25オ	行	ハコビ
282	六25オ	出來リ	イテキタ
283	六25オ	父	チチ
284	六25オ	肩下	カタハラ
285	六25オ	風鬢霧鬢	カゼノモトトリキリノビンヅラ
286	六25オ	綽約多姿	タヲヤカナルスガタ
287	六25オ	誠	マコト
288	六25オ	當世	トウセイ
289	六25オ	神魂飄蕩テ	タマシイウカレ
290	六25オ	收	ヲサメ 六28オ／ヲサマ
291	六25オ	近ク	チカ

	初出箇所	語彙	ルビ
292	六25オ	細ニ	コマカ
293	六25オ	却テ	カヘツ
294	六25オ	己	ヲノレ
295	六25オ	玉蘭	ギョクラン
296	六25オ	青春	トシ
297	六25オ	相等	アヒヒトシ
298	六25オ	容貌	カタチ
299	六25オ	髣髴	ソノママ 六25ウ／ハウホウ
300	六25オ	宛然	エンゼン
301	六25オ	一様	イチヤウ
302	六25ウ	暗ニ	ヒソカ
303	六25ウ	戀慕	レンボ
304	六25ウ	情	ジヤウ
305	六25ウ	去テ	サツ
306	六25ウ	悽慘	カナシミ
307	六25ウ	意	ココロ
308	六25ウ	頭	カフベ
309	六25ウ	低テ	タレ
310	六25ウ	黙々	モクモク
311	六25ウ	良久	ヤヤヒサシ
312	六25ウ	言	モノ
313	六25ウ	誤テ	アヤマツ
314	六25ウ	稱ハザル	カナ
315	六25ウ	角	カク
316	六25ウ	催促	サイソク
317	六25ウ	回	カエ

	初出箇所	語彙	ルビ
318	六25ウ	嘖テ	シカツ
319	六25ウ	多言	タゲン
320	六25ウ	幾何	イクバク
321	六25ウ	今年	コトシ
322	六25ウ	喟然	キゼン
323	六25ウ	甲子	トシ
324	六25ウ	差ハズ	タガ
325	六25ウ	異ル	コトナ
326	六25ウ	孰	イズレカ
327	六25ウ	辨シ	ベン
328	六25ウ	憫	アハレミ
329	六25ウ	發シ	ハフ
330	六25ウ	覺ヘズ	オボ
331	六25ウ	悦ザル	ヨロコビ
332	六26オ	如キ	ゴト
333	六26オ	狀	カタチ
334	六26オ	推量シ	スイリヤウ
335	六26オ	頻リニ	シキ
336	六26オ	歸ンコト	カヘラ
337	六26オ	幾ト	ホトン
338	六26オ	宥シ	ユル
339	六26オ	歎息	タンソク
340	六26オ	勝ザリ	タヘ
341	六26オ	孝行	カウコウ
342	六26オ	稱美	シヤウビ
343	六26オ	義	ギ
344	六26オ	結テ	ムツヒ



	初出箇所	語彙	ルビ
345	六26オ	顧ル	ミ
346	六26オ	同胞	ドウバウ
347	六26オ	即夜	ソクヤ
348	六26オ	白銀	ハクギン
349	六26オ	表シ	ヒヤウ
350	六26オ	再拜シテ	サイハイ
351	六26オ	深ク	フカ
352	六26オ	厚意	カウイ
353	六26オ	謝	シヤ
354	六26オ	父翁	フヲウ
355	六26オ	世々	ヨヨ
356	六26オ	恩	ヲン
357	六26オ	誓ヒ	チカ
358	六26オ	時常	ヲリヲリ
359	六26オ	錢米	センバイ
360	六26オ	送ル	ヲク
361	六26オ	婚禮	コンレイ
362	六26オ	嫁	カ
363	六26オ	一應	イツシキ・イチヲ
364	六26オ	雑用	ザクヨウ
365	六26オ	認	ワキマエ
366	六26オ	衣裳	イシヤウ
367	六26オ	破褥	コギフトン
368	六26オ	櫃箱	ジツハコ
369	六26オ	首飾	テグサ
370	六26オ	粗細	ソサイ
371	六26オ	諸	シヨ

	初出箇所	語彙	ルビ
			六27オ／モロモロ
372	六26オ	家伙	ダウグ
373	六26オ	桶	ヲケ
374	六26オ	鍋	カマ
375	六26オ	碗	ワン
376	六26オ	碟	サラ
377	六26オ	至ル	イタ
378	六26オ	迄	マデ
379	六26オ	悉ク	コトコト
380	六26オ	縦ヒ	タト
381	六26オ	朝臣	チヤウシン
382	六26オ	女	ジヨ
383	六26オ	命官	メイクハン
384	六26オ	婦	フ
385	六26オ	娶ル	メト
386	六26ウ	傳聞	ツタヘキキ
387	六26ウ	美談	ビダン
388	六26ウ	是年	コノトシ
389	六26ウ	生理	アキナヒ
390	六26ウ	利	リ
391	六26ウ	貨物	ニモツ
392	六26ウ	多ク	ヲヲ
393	六26ウ	買取リ	カヒト
394	六26ウ	歸帆	キハン
395	六26ウ	日限	ニチゲン
396	六26ウ	定リ	サダマ
397	六26ウ	夫婦	フウフ

	初出箇所	語彙	ルビ
398	六26ウ	兩家	リヤウケ
399	六26ウ	櫻	サクラ
400	六26ウ	馬場	ババ
401	六26ウ	雲龍寺	ウンリウジ
402	六26ウ	客廳	ザシキ
403	六26ウ	於テ	ヲイ
404	六26ウ	大筵	タイエン
405	六26ウ	設ケテ	モフ
406	六26ウ	餞別シ	センベ
407	六26ウ	衆皆	ミナミナ
408	六26ウ	泪	ナミダ
409	六26ウ	酒テ	ソソヒ
410	六26ウ	孝	コウ
411	六26ウ	室家	シツカ
412	六26ウ	道	ミチ
413	六26ウ	記内	キナイ
414	六26ウ	資	タスケ
415	六26ウ	日	ヒ
416	六26ウ	晩テ	クレ
417	六26ウ	酒宴	シユエン
418	六26ウ	終	ヲワ
419	六26ウ	次日	ツキノヒ
420	六26ウ	辰	タツ
421	六26ウ	刻	コク
422	六26ウ	上船	ジャウセン
423	六26ウ	婿	ムコ
424	六26ウ	大	ヲフ

	初出箇所	語彙	ルビ
425	六26ウ	歩頭	ハト・ガシ
426	六26ウ	再三	サイサン
427	六26ウ	順風相送	ジュングウアヒラク
428	六26ウ	叫	ヨバワ
429	六26ウ	流シテ	ナカ
430	六26ウ	是日	コノヒ
431	六26ウ	艘	ソウ
432	六26ウ	同時	ドウジ
433	六26ウ	出船	シュツセン
434	六26ウ	乗	ノリ
435	六26ウ	獨り	ヒト
436	六26ウ	上海	ジャウカイ
437	六26ウ	餘	ヨ
438	六26ウ	廈南	カナン
439	六26ウ	洋中	ヤウチウ
440	六27オ	臨シ	ノゾミ
441	六27オ	或	アルヒ
442	六27オ	左	ヒダリ
443	六27オ	互	タガイ
444	六27オ	帆	ホ
445	六27オ	望	ノゾ
446	六27オ	連テ	ツラナリ
447	六27オ	忝リ	ハシ
448	六27オ	程ニ	ホド
449	六27オ	翌	ヨク
450	六27オ	卯	ウ
451	六27オ	各	ヲノヲノ

	初出箇所	語彙	ルビ
452	六27オ	五嶋	ゴタウ
453	六27オ	外洋	グハイヤウ
454	六27オ	スル	カカ
455	六27オ	俄ニ	ニハカ
456	六27オ	東北	トウボク
457	六27オ	作り	ヲコ
458	六27オ	浪	ナミ
459	六27オ	滾テ	ワヒ
460	六27オ	響テ	ヒビヒ
461	六27オ	雷	ライ
462	六27オ	似リ	ニタ
463	六27オ	風波	フウハ
464	六27オ	衝	ツカ
465	六27オ	斜キ	カタム
466	六27オ	進退	シンダイ
467	六27オ	窮ケリ	キハマリ
468	六27オ	一捲	ヒトマキ
469	六27オ	捲翻	マキカヘ
470	六27オ	片時	ヘンシ
471	六27オ	一余	ヒトヲシ
472	六27オ	余取レ	ヲシトラ
473	六27オ	竟ニ	ツイ
474	六27オ	影蹤	カゲアト
475	六27オ	在	ア 六27ウ／アリ
476	六27オ	顛翻ズ	ヒルガエサ
477	六27オ	風浪	フウラン

	初出箇所	語彙	ルビ
478	六27オ	危	アヤウキ
479	六27オ	甚	ハナハダ
480	六27オ	急	キフ
481	六27オ	是時	コノトキ
482	六27オ	船主	フナヌシ・センシユ
483	六27オ	才副	モノカキ・ザイフ
484	六27オ	總管	モトジメ・ソウクハン
485	六27オ	香公	フナカミノヤク・コウコウ 六27ウ／ヤナカシノヤク人・カウコウ 六28オ／カウコウ
486	六27オ	頭目	ヤクシヤ
487	六27オ	船神	フナカミ
488	六27オ	馬祖	バソ
489	六27オ	拜伏	ハイフク
490	六27オ	命	メイ 六27ウ／イノチ
491	六27オ	脱ン	ノガレ 六27ウ／ノガ
492	六27オ	禱ル	イノ
493	六27オ	三國志	サンコクシ
494	六27オ	戲文	ヲドリ
495	六27オ	還	ホトカ
496	六27ウ	壇	ダン
497	六27ウ	紙錢	ゼニカミ
498	六27ウ	焼テ	ヤヒ
499	六27ウ	弥陀佛	ミダブツ
500	六27ウ	念シ	ネン

	初出箇所	語彙	ルビ
501	六27ウ	普門品	フモンホン
502	六27ウ	誦	トナヘ
503	六27ウ	都テ	スヘ
504	六27ウ	悲聲齊起テ	カナシナコエヒトシクヲコツ
505	六27ウ	泪水相濕ス	ナンタアヒウルヲ
506	六27ウ	舵公	カヂトリ
507	六27ウ	力	チカラ
508	六27ウ	用	モチヒ
509	六27ウ	舵牙	カヂヅカ
510	六27ウ	抱キ	イダ
511	六27ウ	放タザリ	ハナ
512	六27ウ	上下	ウエシタ
513	六27ウ	新キ	アタラシ
514	六27ウ	衣服	イフク
515	六27ウ	更換	アラタメ
516	六27ウ	端然	タンゼン
517	六27ウ	客艙	キヤクベヤ
518	六27ウ	椅子	イス
519	六27ウ	目	ミ
520	六27ウ	閉テ	トヂ
521	六27ウ	動ゼズ	トウ
522	六27ウ	媽祖	バソ
523	六27ウ	附移	ツキウツリ
524	六27ウ	善人	ゼンニン
525	六27ウ	長崎	ナガサキ
526	六27ウ	貧窮	ヒンキウ
527	六27ウ	婚姻	コンイン

	初出箇所	語彙	ルビ
528	六27ウ	皇天	クハウテン
529	六27ウ	故ニ	ユヘ
530	六27ウ	天帝	テンテイ
531	六27ウ	仁慈	ジンジ
532	六27ウ	憐タマヒ	アハレミ
533	六27ウ	翻シテ	ヒルガヘ
534	六27ウ	損フ	ソコナ
535	六27ウ	許	ユル 六27オ / タテ
536	六28オ	風神	フウジン
537	六28オ	龍王	リウヲウ
538	六28オ	退キ	シリブ
539	六28オ	爾等	ナンチラ
540	六28オ	懼ル	ヲソ
541	六28オ	靈	レイ
542	六28オ	現シテ	ゲン
543	六28オ	附キ	ツ
544	六28オ	特ニ	コト
545	六28オ	諭ス	シメ
546	六28オ	言訖	イヒヲハ
547	六28オ	後	シルヘ
548	六28オ	倒	タヲ
549	六28オ	隨テ	シタカツ
550	六28オ	本性	ホンシヤウ
551	六28オ	始終	シヂウ
552	六28オ	曾テ	カツ
553	六28オ	人事	ジンジ



	初出箇所	語彙	ルビ
554	六28才	省ス	シラ
555	六28才	奇異	キイ
556	六28才	思ヒ	オモ
557	六28才	催シ	モヨフ
558	六28才	忽チ	タチマ
559	六28才	息	ヤミ
560	六28才	海面	カイメン
561	六28才	平カ	タイラ
562	六28才	盤水	ボンスイ
563	六28才	大難	タイナン
564	六28才	賀シ	カ
565	六28才	洪徳	コウトク
566	六28才	隠レ	カク
567	六28才	遠近	エンキン
568	六28才	傳へ	ツタ
569	六28才	弥	イヨイヨ
570	六28才	然ル	シカ
571	六28才	難儀	ナンギ
572	六28才	驚キ	ヲドロ
573	六28才	渡海	トカイ
574	六28才	禁シ	キン
575	六28ウ	翌年	ヨクネン
576	六28ウ	同船	ドウセン
577	六28ウ	書簡	シヨカン
578	六28ウ	持參	ヂサン
579	六28ウ	委細	イサイ

## 2.2 江戸期漢文小説における翻訳作品

### 2.2.1 『通俗赤縄奇縁』における傍訳と『小説字彙』の比較

『通俗赤縄奇縁』の書誌情報

題簽	赤縄奇縁
巻次	四巻二冊
書名	赤縄奇縁（外題） 通俗赤縄奇縁（内題） 赤縄奇縁（版心）
見返し	なし
序	「宝曆辛巳年之春」に「無愧散人」による序がある。
（編）著者名	西田維則 訳

『小説字彙』の書誌情報

題簽	小説字彙
巻次	一卷一冊
書名	小説字彙（外題） 畫引小説字彙（見返し） 小説字彙（版心）
見返し	「秋水先生小説字彙廣便于檢閱四方君子從其法以索之則若指諸掌 照彰而明矣誠文海之南鍼也」 「大阪書林」 「稱觥堂賭春堂崇高堂」
序	「元和三年丁巳冬十一月」に「羅浮散人」による序がある
（編）著者名	秋水園主人 輯

『通俗赤繩奇縁』における傍訳と『小説字彙』の比較表

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
1	一 1 ウ	一女	ヒトリノムスメ	なし
2	一 1 ウ	女工	オンナノワザ	なし
3	一 1 ウ	針線	ヌヒハリ	【針線筐】ハリハコ
4	一 1 ウ	標致	キレウヨシ 一 4 オ／キリヤウ 一 13 ウ／キレウ	なし
5	一 2 オ	猖獗	ランヲヲコシ	なし
6	一 2 オ	一隊	ヒトクミ	なし
7	一 2 オ	不良	ヨカラザル	なし
8	一 2 ウ	天明	ヨアケ	なし
9	一 2 ウ	空屋	アキヤ	なし
10	一 3 オ	話	ハナシ	なし
11	一 3 オ	本分	モチマヘ	リチキ
12	一 3 オ	遊手遊食	アソボクラシ	なし
13	一 3 オ	間漢	ノラモノ	なし
14	一 3 オ	同夥	ナカマ	なし
15	一 3 オ	盤纏	ロギン 三 11 ウ／コツカヒサ ン	なし
16	一 3 オ	奇貨	ヨキシロモノ	なし
17	一 3 ウ	連夜	ヨドラシ	なし
18	一 4 オ	飯店	ハタゴヤ 二 15 ウ／ニウリヤ	なし
19	一 4 オ	碎銀	コマガネ	なし
20	一 4 オ	店錢	ヤドセン	なし
21	一 4 オ	烟花	イロサト	なし
22	一 4 オ	商量	ダンカウ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
23	一 4 ウ	渾身	サウミ	なし
24	一 4 ウ	大叔	オヂサマ	なし
25	一 5 オ	門戸	サト	なし
26	一 5 オ	人家	イエ	なし
27	一 5 オ	粉頭	ヲヤマ 四 12 ウ / ケイセイ	なし
28	一 5 オ	過活	スギハイ	スギワヒ
29	一 5 オ	養女	ムスメブン	なし
30	一 5 オ	出色的	スグレモノ	なし
31	一 5 オ	親女兒	マコトノムスメ	なし
32	一 5 オ	看顧	セハニスル	なし
33	一 5 オ	長成	セイジン	【長成了】ヲホキフナツタ
34	一 5 オ	造化	シアハセ	なし
35	一 5 ウ	吹彈	フキモノヒキモノ	なし
36	一 5 ウ	柳巷	クルハ	なし
37	一 5 ウ	規矩	サホウ 一 11 ウ / カクシキ	なし
38	一 5 ウ	鶉兒	クハシヤ	なし
39	一 5 ウ	輕薄	ウハキ	なし
40	一 5 ウ	子弟	ムスコ 一 6 ウ / ワカイモノ	なし
41	一 5 ウ	天癸	ケイスイ	なし
42	一 6 オ	梳弄	ミツアゲ	なし
43	一 6 オ	出身	ナリタチ	なし
44	一 6 オ	子弟們	ムスコドモ	なし
45	一 6 オ	主張	リヤウケン 一 10 ウ / シウケン	なし
46	一 6 オ	財主	カネモチ	ブゲンシヤ

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
47	一 6 オ	三百兩	サングハンメ	なし
48	一 6 オ	商議	サウダン 一 7 ウ / ダンカウ	なし
49	一 6 ウ	幫間們	タイコモチ	なし
50	一 6 ウ	樓上	ニカイ	なし
51	一 6 ウ	命	ウン	なし
52	一 6 ウ	趣	ヲモシロミ 三 7 オ / スイ・ヲモム キ	なし
53	一 6 ウ	行戸	チャヤ	【行戸家】トイヤ 【行戸中】トイヤナカマ
54	一 6 ウ	稱慶	ジリジヒヲイフ	なし
55	一 7 オ	不是	ワルイ	イヤイヤ
56	一 7 オ	陪礼	ワビコト	なし
57	一 7 オ	樓	ニカイ	なし
58	一 7 オ	烈性	ハケシキムマレツキ	なし
59	一 7 ウ	一計	ヒトシアン	なし
60	一 7 ウ	義妹	イモトブニ	なし
61	一 7 ウ	保兒	シモヲトコ	なし
62	一 7 ウ	隨何	クチキキノヒト	なし
63	一 7 ウ	天生	ムマレツキ	なし
64	一 8 オ	著色	イロドリ	なし
65	一 8 オ	伶俐	リコン	リハツモノ
66	一 8 オ	一個	ヒトリ 一 13 オ / ヒトツ	なし
67	一 8 オ	對兒	アイテ	なし
68	一 8 オ	稱贊	ホムル	なし
69	一 8 オ	嬢娘	ヲバサマ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
70	一 8 ウ	恭喜	メデタイ	メダタシメデタシ
71	一 8 ウ	面	カラ	なし
72	一 8 ウ	紅	アカメ	なし
73	一 8 ウ	害羞	ハヅカシガル	なし
74	一 8 ウ	軟殻雞蛋	ニヌキノタマゴ	なし
75	一 8 ウ	怕羞	ハヅカシガル	なし
76	一 8 ウ	本錢	モトデ	なし
77	一 9 オ	道理	ワケ	なし
78	一 9 オ	丫頭們	メロドモ	なし
79	一 9 オ	批點	ヘウバン	なし
80	一 9 オ	行徑	ヤウス	なし
81	一 9 ウ	張郎	ジロベイ	なし
82	一 9 ウ	李郎	タロベイ	なし
83	一 9 ウ	出名的	ゼンヒイ	なし
84	一 9 ウ	羞羞答答	アラレモノイコト	なし
85	一 9 ウ	格的	クツクツト	なし
86	一 9 ウ	暴	ラアラク	なし
87	一 9 ウ	嬌養	アマヤカシ	なし
88	一 9 ウ	體面	クハイブン	なし
89	一 10 オ	好歹	ヨシアシ	なし
90	一 10 オ	磨子	イシウス	なし
91	一 10 オ	老身	ミドモ	なし
92	一 10 オ	勸	イケン	なし
93	一 10 オ	執意	カタイヂ	なし
94	一 10 オ	起頭	ハシメ	なし
95	一 10 オ	要緊	ダイジ	大事ノコト
96	一 10 オ	主意	フンベツ	なし
97	一 10 オ	吊桶	ツルベヲケ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
98	一 10 オ	千歡萬喜	キゲンヨク	なし
99	一 10 ウ	従良	ウケダサルル	なし
100	一 10 ウ	九級浮圖	クヂウノトウ	なし
101	一 10 ウ	只是	シカシ	バカリ
102	一 10 ウ	真従良	マコトノウケダシ	なし
103	一 10 ウ	假従良	ニセノウケダシ	なし
104	一 10 ウ	苦従良	ウルシキウケダシ	なし
105	一 10 ウ	樂従良	タノシキウケダシ	なし
106	一 10 ウ	没奈何	センカタナキ	なし
107	一 10 ウ	了従良	サツハリトシタウケダシ	なし
108	一 10 ウ	不了従良	サツハリセヌウケダシ	なし
109	一 11 オ	好事多磨	スンゼンシヤクマ	なし
110	一 11 オ	兩個	フタリ	なし
111	一 11 オ	蚕蛾	カイコ	なし
112	一 11 オ	表子	アイカタ	遊女ノタグヒ
113	一 11 オ	嫁	ヨメイリ	なし
114	一 11 オ	推	カコヅケ	なし
115	一 11 オ	痴心	ヲロカ	なし
116	一 11 オ	火	ヨク	なし
117	一 11 ウ	小娘	シヨロウ 一 12 オ / ゼヨロウ	なし
118	一 11 ウ	故意	ワザト	ワザト
119	一 11 ウ	公然	ヲシハレテ	なし
120	一 11 ウ	偷漢	マヲトコ	マヲトコ
121	一 11 ウ	倡	ヲヤマ	なし
122	一 11 ウ	婢	ゲシヨ	なし
123	一 12 オ	情性溫和	ココロトテモヤハラカ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
124	一 12 オ	家道富饒	シンダイユタカ	なし
125	一 12 オ	娘子	ホンサイ	なし
126	一 12 オ	嫉妬	ネタム	なし
127	一 12 オ	正妻	ホンサイ	なし
128	一 12 オ	年紀青春	ワカザカリ	なし
129	一 12 オ	出名	ゼンセイ	なし
130	一 12 オ	官司	コウギ 四 9 オ / クジ	【官司完結】公ギノスム
131	一 12 オ	奸徒	ワルモノ	なし
132	一 12 オ	債負	シャクセン	なし
133	一 12 オ	賠償	マドヒツクナフ	なし
134	一 12 ウ	老成	ヲトナシイ	なし
135	一 12 ウ	孤老	ダイジン	ダイジン
136	一 12 ウ	偕老	モロシラガ	なし
137	一 12 ウ	般	ヤウ	なし
138	一 12 ウ	兩下	リヤウホウ	なし
139	一 12 ウ	高興	キゲン 二 12 オ / ヨイキゲン	オモシロイ
140	一 12 ウ	大娘	ヲタカタ	なし
141	一 12 ウ	争闘	ヤカマシイ	なし
142	一 12 ウ	家道	シンダイ	なし
143	一 12 ウ	凋零	ヲチブレ	なし
144	一 12 ウ	奴	ワタクシ	なし
145	一 13 オ	好主張	ヨキリヤウケン	なし
146	一 13 オ	黄花女兒	テイラズノムスメ	なし
147	一 13 オ	千錯萬錯	トニモカクニモ	なし
148	一 13 オ	一主	ヒトカブ	なし
149	一 13 オ	中意	キニイリ	なし



	所在	語彙	傍訳	小説字彙
150	一 13 オ	臭嘴臭臉	クソカラヒキダシタヨ ウナモノ	ミグルシイ男
151	一 13 オ	不中意	キニイラヌ	なし
152	一 13 オ	主兒	カヒテ	なし
153	一 13 ウ	村漢	サイコモノ	なし
154	一 13 ウ	受用	シヤウクハン	エヨウスキ
155	一 13 ウ	私房	ヘンクカネ	内證ノコト
156	一 13 ウ	丈夫	トノゴ	なし
157	一 14 オ	兩便	リヤウカツユノ	なし
158	一 14 オ	會得	ガラン	なし
159	一 14 オ	感激	カタジケナガル 二 6 オノカタジケナイ	【感激不尽】タダジケナイ
160	一 14 オ	欸待	モテナシ	なし
161	一 14 オ	欣然	ヨロコビテ	なし
162	一 14 ウ	空間	スキマ	なし
163	一 14 ウ	嫖錢	ハナタイ	なし
164	一 14 ウ	歡喜	ヨロコヒ	なし
165	一 14 ウ	寶貝	タカラモノ	なし
166	二 1 オ	油店	アブラミセ	なし
167	二 1 オ	小厮	コモノ	なし
168	二 1 オ	過經	ヤウシ	なし
169	二 1 オ	老婆	ニヤウボウ	女房ノコト
170	二 1 オ	義子	ヨウシ	なし
171	二 1 ウ	生理	スギハイ	なし
172	二 1 ウ	夥計	ナカマ	ナカマ又店ノ支配人
173	二 1 ウ	人才	ヒトガラ	なし
174	二 1 ウ	小官人	ワカダンナ	ワタクシ
175	二 1 ウ	看上	ミコミ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
176	二 1 ウ	鈎子	カギ	なし
177	二 1 ウ	勾搭	ヒツカケル	なし
178	二 1 ウ	老實	ジツテイ 三 11 ウ / ヲトナシク	【老實頭兒】リチギナアイテ
179	二 1 ウ	齷齪	キタナイ	なし
180	二 1 ウ	主顧	トクイ	なし
181	二 2 オ	一投	ヒトナゲ	なし
182	二 2 オ	暗々	ヒソカ	なし
183	二 2 オ	一手	カカリアヒ	なし
184	二 2 オ	酸意	リンキココロ	なし
185	二 2 オ	賭博	バクチ	なし
186	二 2 ウ	生意	スギハイ	なし
187	二 2 ウ	筭定	カンジヤウ	なし
188	二 2 ウ	身邊	ミノマハリ	なし
189	二 2 ウ	親	エングミ	なし
190	二 3 オ	親兒	ウミノコ	ホンマノ子
191	二 3 オ	罷々	ヨシヨシ	なし
192	二 3 オ	骨血	チスジ	なし
193	二 3 オ	到底	ツマルトコロ	なし
194	二 3 オ	罷	シマフ	なし
195	二 3 オ	寒夏	フユナツ	なし
196	二 3 オ	被窩	ヨギフトン	なし
197	二 3 オ	打發	ヲクリテ	なし
198	二 3 オ	刻薄	ムコキ	なし
199	二 3 ウ	小房	コイエ	なし
200	二 3 ウ	賃	カリ	なし
201	二 3 ウ	放下	ウチステル	なし
202	二 3 ウ	賣買	シヤウバイ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
203	二 3 ウ	左思右量	トヤカクトアンジル	なし
204	二 3 ウ	賣油	アフラウリ	なし
205	二 3 ウ	熟間	テラレイル	なし
206	二 3 ウ	這些	ココラ	なし
207	二 3 ウ	油坊	アフラヤ	なし
208	二 3 ウ	熟識	ネンコロ	なし
209	二 3 ウ	油擔	アブラニ	なし
210	二 3 ウ	家火	ドウグ	【家伙】セタイダウグ
211	二 4 オ	抬拳	トリタテル	なし
212	二 4 オ	另外	カクヘツ	シングワイ
213	二 4 オ	讓	マケル	なし
214	二 4 オ	便宜	カツテ	【便宜東西】チャウトヨロシ キモノ
215	二 4 オ	出脱	ウリハナス	なし
216	二 4 オ	枉費	ムタツイヘ	なし
217	二 4 オ	劊子	カキツケ	なし
218	二 4 ウ	衙門	ヤンキ	【衙門中散了】役所ヨリカヘ ル
219	二 4 ウ	冊籍	チャウメン	なし
220	二 4 ウ	一箇	ヒトリ	なし
221	二 4 ウ	油桶	アブラヲケ	なし
222	二 4 ウ	標識	メジルシ	なし
223	二 4 ウ	功德	ハウジ	なし
224	二 5 オ	一連	ヒトツヅキ	なし
225	二 5 オ	空担	カラニ	なし
226	二 5 オ	絃歌	ヒキウタヒ	なし
227	二 5 オ	朱漆	シユヌリ	なし
228	二 5 ウ	清整	キレイ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
229	二 5 ウ	女子	ムスメ	なし
230	二 5 ウ	請了	サラバ	フルマフ
231	二 5 ウ	丫髻	ゲジヨ	兒女頭上作兩髻也コシモトナ リ
232	二 6 オ	油瓶	アブラツホ	ツレコ
233	二 6 オ	忠厚	リチキ 二 9 ウ / シンジツ	なし
234	二 6 オ	小可	ソレガシ	ワタクシ
235	二 6 ウ	飽看	ミアキ	なし
236	二 6 ウ	轎夫	ノリモノカキ	なし
237	二 6 ウ	轎子	ノリモノ	なし
238	二 6 ウ	猩紅嚮包	シマウシマウヒノツツ ミモノ	なし
239	二 6 ウ	湘妃竹	マタラタケ	なし
240	二 6 ウ	欖花拜匣	ハナヅクシノインモツ イレ	なし
241	二 7 オ	酒館	サカヤ	なし
242	二 7 オ	氣悶	モタツク	なし
243	二 7 オ	消遣	キバラシ	なし
244	二 7 オ	酒保	サカヤノヲトコ	なし
245	二 7 オ	貴容	ヲキヤク	なし
246	二 7 オ	同伴	ツレ	なし
247	二 7 オ	時新	ハツモノ	なし
248	二 7 オ	碟	サラ	【碟子】皿シ
249	二 7 オ	葷菜	ナماغサモノ	なし
250	二 7 オ	那邊	アナタ	なし
251	二 7 ウ	那里	アナタ	なし
252	二 7 ウ	花園	シモヤシキ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
253	二 7 ウ	適間	イマガタ	サキホド
254	二 7 ウ	流落	ヲチブレ	なし
255	二 7 ウ	吹弾歌舞	フクヒクウタフマフ	なし
256	二 7 ウ	琴	コト	なし
257	二 7 ウ	棋	ゴ	なし
258	二 7 ウ	書	モノカク	なし
259	二 7 ウ	晝	エ	なし
260	二 7 ウ	大財主	ヲヲカネモチ	なし
261	二 7 ウ	終	ヨフヨフト	なし
262	二 8 オ	娼家	チヤヤ	なし
263	二 8 オ	一邊	カタテニ	なし
264	二 8 オ	油担	アブラニ	なし
265	二 8 オ	癩蝦蟇	ヒキガヘル	なし
266	二 8 オ	陰溝	スイドウ	なし
267	二 8 オ	天鵝	ハクチャウ	なし
268	二 8 ウ	乞兒	コジキ	なし
269	二 8 ウ	怕	キヅカヒ	なし
270	二 8 ウ	思想	シアン	なし
271	二 9 オ	小經紀	コアキナイ	なし
272	二 9 オ	扣除	ヒイテトリ	サン用シテ引クトコ
273	二 9 オ	打點	コシラヘ	トトノヘルコト
274	二 9 ウ	張望	ノソク	なし
275	二 9 ウ	媽々	カカサマ	なし
276	二 9 ウ	一瓶	ヒトツボ	なし
277	二 9 ウ	公道	セケンナミ	なし
278	二 9 ウ	應諾	ウケアヒ	なし
279	二 10 オ	特地	ワザワザ	なし
280	二 10 オ	一担	イツカ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
281	二 10 ウ	雙日	テフノヒ	なし
282	二 10 ウ	單日	ハンソヒ	なし
283	二 10 ウ	街	マチ	なし
284	二 10 ウ	層	カサネ	なし
285	二 11 オ	空閑	ヒマ	なし
286	二 11 オ	對門	カドアハセ	なし
287	二 11 オ	兌舗	リヤウガヘミセ	なし
288	二 11 オ	管家	アダイ	なし
289	二 11 オ	五兩	コジウメ	なし
290	二 11 オ	等子	ハカリ	ハカリ
291	二 11 オ	頭紐	モトラ	なし
292	二 11 オ	散碎銀子	コマカネ	なし
293	二 11 ウ	法馬	フンドウ	フンドウ
294	二 11 ウ	剛々	チャウト	チャウト
295	二 11 ウ	花柳	イロサト	なし
296	二 11 ウ	看低	アナトラルル	なし
297	二 11 ウ	大錠	チャウギン	なし
298	二 11 ウ	兌換	リヤウガヘ	なし
299	二 11 ウ	新様	ハヤリデ	なし
300	二 11 ウ	齊整	リツハ	リツハ
301	二 12 オ	愧心	ハヅカシン	キミワルキココロ
302	二 12 オ	時常	ツネツネ	なし
303	二 12 オ	闖客	ケイセイカヒ	なし
304	二 12 オ	小官	ワカタンナ	小姓ヲ云フ
305	二 12 オ	濟楚	リツハ	なし
306	二 12 オ	拜望	ヲミマヒ	なし
307	二 12 オ	老積年	スツハノカハ	なし
308	二 12 オ	那個	ドレゾ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
309	二 12 ウ	丫頭	メロ	呉中呼女子賤者為丫頭也コシ モト又コモノナド婢ヲ云
310	二 12 ウ	鬪	カフ	茶屋ノ帳面ナリ
311	二 12 ウ	探望	ミマヒ	オミマイ申ス
312	二 12 ウ	屁股	シリベタ	なし
313	二 12 ウ	相識	チカヅキ	なし
314	二 13 オ	宅上	ヲイエ	なし
315	二 13 オ	姐々	アネサマ	なし
316	二 13 オ	風流	ヤサシイ	なし
317	二 13 オ	胡説	ワケモナイコト	なし
318	二 13 オ	奚落	アナトル	なし
319	二 13 ウ	歇錢	アケセン	遊女ヤノトマリ代
320	二 13 ウ	東道錢	サカダイ	なし
321	二 14 オ	經紀	アキング	なし
322	二 14 オ	費心	ココロツカヒ	なし
323	二 14 ウ	白丁	ムヒツ	なし
324	二 14 ウ	做主	サシズ	なし
325	二 14 ウ	詩社	シクハイ	なし
326	二 14 ウ	東道	サカダイ	テイジユ
327	二 14 ウ	大後日	アサツテ	なし
328	二 15 オ	光景	ヨウス	なし
329	二 15 オ	計較	モクロミ	なし
330	二 15 オ	綿布	モメン	なし
331	二 15 オ	紬段	ツムキ	なし
332	二 15 オ	作成	トリモツ	オトリモチ
333	二 15 オ	理會	ガテン	なし
334	二 15 オ	典舗	シチヤ	シチヤ
335	二 15 オ	見成紬衣	テキアヒノソムキノキ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
			ルモノ	
336	二 15 オ	斯文	ヨイシウ	学者ノコト
337	二 15 オ	演習	ケイコ	なし
338	二 15 ウ	僕従	トモニハリ	なし
339	二 15 ウ	乖巧	カシコイ	なし
340	二 15 ウ	府裏	ヤシキ	【府裡】ヤシキ
341	二 15 ウ	見成	テキアイ	デキアイ
342	二 16 オ	棋師	ゴウチ	なし
343	二 16 オ	房主	イエヌシ	なし
344	二 16 オ	下次	ツギノタヒ	カサネテ又ツギトモ
345	二 16 ウ	申牌	サル	なし
346	二 16 ウ	傍晩	クレカタ	なし
347	三 1 オ	大半日	ヒナカスギ	なし
348	三 1 ウ	凜風酒	カゼノセギ	寒氣ヲシノグサケ
349	三 1 ウ	慢々	ユルユル 三 11 ウ／ユクリト	ユルユルナリ
350	三 1 ウ	房子	ヘヤ	なし
351	三 1 ウ	臥室	ネマ	なし
352	三 2 オ	古玩	フルドウグ	なし
353	三 2 オ	貼	ハリツケ	なし
354	三 2 オ	美酒佳肴	ムマキサケヨキサカナ	なし
355	三 2 オ	排列	ナラベタテ	なし
356	三 2 オ	女兒們	ムスメドモ	なし
357	三 2 オ	相陪	ヲトギ	なし
358	三 2 ウ	寂寞	サビシキ	なし
359	三 2 ウ	海量	ジャウゴ	なし
360	三 2 ウ	陪伴	シヤウバン	なし
361	三 2 ウ	行燈	チャウチン	ボンホリ



	所在	語彙	傍訳	小説字彙
362	三 2 ウ	浴室	ユドノ	なし
363	三 3 オ	夾七夾八	トリツキヒツツキ	イロイロサマサマ
364	三 3 オ	風話	ヲドケバナシ	テンガウグチ
365	三 3 オ	熱鬧	ニキヤカ	ニギヤカ
366	三 3 オ	丫鬟們	ゲジヨドモ	なし
367	三 3 ウ	東道歇錢	サカタイアゲセン	なし
368	三 3 ウ	担閣	ヒマドル	なし
369	三 3 ウ	志誠	シンジツ	なし
370	三 3 ウ	一看	ヒトメミル	なし
371	三 3 ウ	一時	フト	なし
372	三 4 オ	段舗	ゴフクミセ	なし
373	三 4 オ	萬福	アイサツ	なし
374	三 4 オ	大鍾	ヲヲヂヨク	なし
375	三 4 ウ	私室	ワガイマ	なし
376	三 4 ウ	使性	キママ	なし
377	三 5 オ	全	スキト	なし
378	三 5 オ	收拾	トリカタツケ	なし
379	三 5 オ	安置	ヲヤスミ	なし
380	三 5 オ	熱茶	アツキチャ	なし
381	三 5 オ	被	ヨギ	なし
382	三 5 オ	紅被	モミノヨギ	なし
383	三 5 ウ	火炉	ヒパチ	なし
384	三 5 ウ	悪心	ムネワルキ	なし
385	三 5 ウ	乾噓	カラエツキ	なし
386	三 6 ウ	小娘子	ソモジ	なし
387	三 6 ウ	嘔吐	エツキ	なし
388	三 6 ウ	腌臢的	キタナイモノ	【腌臢】ムサイコト
389	三 6 ウ	被褥	ヨギフトン	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
390	三 6 ウ	餘瀝	ヲナガレ	なし
391	三 7 オ	下問	ヲタツネ	なし
392	三 7 オ	想慕	ヲモヒシタヒ	なし
393	三 7 ウ	歎待	アシラフ	なし
394	三 7 ウ	唐突	リヨグハイ	ツツカケテヒヨツト出ル
395	三 7 ウ	責	シカル	なし
396	三 7 ウ	經紀	アキナヒ	なし
397	三 7 ウ	阿正	ヲナイギ	なし
398	三 7 ウ	妻小	ニヨウボウコ	なし
399	三 8 オ	市井	イチマチ	學ノコト
400	三 8 オ	洗臉湯	カホアラフユ	なし
401	三 8 ウ	粧奩	ケハイトウク	なし
402	三 8 ウ	労	ホネヲリ	なし
403	三 8 ウ	資本	モトデ	なし
404	三 8 ウ	些	スコシ	なし
405	三 9 ウ	店中	ミセ	なし
406	三 9 ウ	席卷	ヒツサラヘ	【席卷】ヒンマロメル
407	三 10 オ	好事	トフラヒ	なし
408	三 10 オ	祖墳	センゾノツカ	なし
409	三 10 オ	油舗	アブラミセ	なし
410	三 10 オ	老店	シニセノミセ	なし
411	三 10 ウ	幫手	テツタイ	なし
412	三 10 ウ	中人	キモイリ	キモイリノコト
413	三 11 オ	流寓	サマヨヒ	なし
414	三 11 オ	興旺	ハンシヤウ	なし
415	三 11 オ	飯錢	ハタゴ	なし
416	三 11 ウ	令愛	コソクジィヨ	なし
417	四 1 ウ	柳巷花街	イロドコロ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
418	四 1 ウ	托	カコツケ	なし
419	四 1 ウ	閑漢們	ノラモノトモ	なし
420	四 1 ウ	踏青	ノアソビ	なし
421	四 2 オ	妓家	チヤヤ	なし
422	四 2 オ	套子	シカケ	なし
423	四 2 オ	狼僕	テアラキシモベ	なし
424	四 2 ウ	狼僕們	テアラキケライトモ	なし
425	四 2 ウ	得意	エタリカホ	なし
426	四 3 オ	従者	トモノモノ	なし
427	四 3 オ	賤貨	アスモン	なし
428	四 3 オ	小娼根	ヤスバイタメ	なし
429	四 3 ウ	裏脚	アシツツミ	なし
430	四 3 ウ	本事	テナミ	なし
431	四 4 オ	地位	バシヨ	なし
432	四 4 オ	乞食	コジキ	なし
433	四 4 オ	火坑	ヒノアナ	なし
434	四 4 ウ	白綾	シラアヤ	なし
435	四 4 ウ	汗巾	アセテノゴヒ	なし
436	四 5 オ	管待	アシラヒ	なし
437	四 5 オ	饗應	モテナシ	なし
438	四 5 ウ	奉承	チソウ	チソウブリ
439	四 5 ウ	推托	ジタイ	【推托不過】ジタイスルニセラレヌナリ
440	四 5 ウ	取笑	ヲドケ	なし
441	四 6 ウ	村郎	イナカモノ	なし
442	四 6 ウ	推托	ジタイ	なし
443	四 6 ウ	贖身	ミウケ	なし
444	四 7 オ	大廈	ヲライエ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
445	四 7 オ	箱籠	ツラ 四 15 ウ／ツヅラ	なし
446	四 7 ウ	年紀	トシバイ	【年紀後生】トシワカシ
447	四 7 ウ	假	ニセ	なし
448	四 7 ウ	苦	クルシミ	なし
449	四 7 ウ	方便	リナシ	なし
450	四 8 オ	搖錢樹	カネノナルキ	なし
451	四 8 オ	管	カマフ	なし
452	四 9 オ	幫間	タイコモチ	タイコモチ
453	四 9 オ	跟随	トモマハリ	なし
454	四 9 オ	楳社	ゴクハイ	なし
455	四 11 オ	回話	ヘンジ	なし
456	四 12 オ	皮箱	カハゴ	なし
457	四 12 オ	奇南	キヤラ	なし
458	四 12 オ	綾羅	アヤロ	なし
459	四 12 オ	緞錦	ドンスニシキ	なし
460	四 12 ウ	一般	ヲナジク	なし
461	四 12 ウ	荷包	キンチャク	なし
462	四 12 ウ	沉吟	シアン	なし
463	四 12 ウ	紬子	ツムギ	なし
464	四 12 ウ	玉簪	カンサシ	なし
465	四 12 ウ	兩件	フタシナ	なし
466	四 13 オ	身價	ミノシロ	なし
467	四 13 オ	鵝兒	クハシヤ	なし
468	四 13 ウ	花費	ムダツカイ	なし
469	四 14 オ	做家	シマツ	なし
470	四 14 オ	赤身	ハダカ	なし
471	四 14 オ	孝順	ツケトドケ	なし

	所在	語彙	傍訳	小説字彙
472	四 14 オ	外婆	シウトメ	なし
473	四 14 ウ	亡八	テイシユ	なし
474	四 14 ウ	張	マイ	なし
475	四 14 ウ	奴家	ワタクシ	なし
476	四 15 オ	梳臺	クシドウグ	なし
477	四 15 オ	舗蓋	フトンヨギ	なし
478	四 15 オ	姉妹	ハウバイ	なし
479	四 15 オ	行李	ニモツ	なし
480	四 15 オ	粉頭們	ケイセイトモ	なし
481	四 15 ウ	新人	ヨメ	なし
482	四 15 ウ	丈人	シウト	なし
483	四 15 ウ	丈母	シウトメ	なし
484	四 16 オ	管理	シハイ	シハイスルコト
485	四 16 オ	使婢	ゲジヨ	なし
486	四 16 オ	奴僕	ゲナン 四 16 ウ / ケライ	なし
487	四 16 オ	保佑	タスケ	なし
488	四 16 オ	一套	ヒトククリ	同上 (狂言ノ段ヲ云)
489	四 16 オ	燈油	トモシアブラ	なし
490	四 16 オ	喜拾	キシシ	なし
491	四 16 ウ	擔	カ	なし
492	四 17 オ	活計	スギハイ	スギワイ
493	四 17 オ	過継	ヤウシ	養子スルコト
494	四 18 オ	媳婦	ヨメ	なし
495	四 18 オ	葷	ナマクサキ	なし

## 2.2.2 『勸懲繡像奇談』における傍訳と『小説字彙』の比較

### 『勸懲繡像奇談』の書誌情報

題簽	勸懲繡像奇談
卷次	一篇二冊
書名	勸懲繡像奇談（外題） 勸懲繡像奇談（見返し）
見返し	「服部撫松先生纂評」 「明治十六年第六月版權免許」 「九春社印行」
序	「明治十有六年初秋」に「撫松居士」による序がある
（編）著者名	服部誠一 編

### 『小説字彙』の書誌情報

題簽	小説字彙
卷次	一卷一冊
書名	小説字彙（外題） 畫引小説字彙（見返し） 小説字彙（版心）
見返し	「秋水先生小説字彙廣便于檢閱四方君子從其法以索之則若指諸掌 照彰而明矣誠文海之南鍼也」 「大阪書林」 「稱觥堂賭春堂崇高堂」
序	「元和三年丁巳冬十一月」に「羅浮散人」による序がある
（編）著者名	秋水園主人 輯

### 参考文献：

1. 岡田袈裟男 「翻刻 西田維則訳『通俗赤繩奇縁』 『立正大学大学院紀要』  
第 32 号 （立正大学大学院文学研究科 2016.03.31）

『勸懲繡像奇談』における傍訳と『小説字彙』の比較表

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
1	一上8オ	在下	コノシモ 一下2ウ/ワタシ	なし
2	一上8オ	分割	トキアカス	なし
3	一上8オ	合爨	ヒトツナベ	なし
4	一上8オ	大嫂	ヲヲアニヨメ	なし
5	一上8オ	姉嫂	ヨメナカマ 一上12ウ/アヒヨメ	なし
6	一上8オ	間言	イサカヘ	【間言帳話】ヤクニ 立ヌ帳面ナリ
7	一上8オ	哥嫂	アニヨメ	なし
8	一上8オ	粧奩	ケセウショウ	なし
9	一上8オ	夫家	ヲツトオイシエ	なし
10	一上8ウ	攪掇	タキツケル 一下23ウ/ツカミダス	なし
11	一上8ウ	伯伯們	アニキラ	なし
12	一上8ウ	他是亮裏我是 暗裏	アチラアカルタコチラハ クラシ	なし
13	一上8ウ	到底	ツマリ	なし
14	一上8ウ	散場	ワカレル	なし
15	一上8ウ	消乏	ナクナヲバ	なし
16	一上8ウ	分折	ワカレ	なし
17	一上8ウ	央	タノミ	ヤトフ
18	一上8ウ	撥開	ワケル	【撥】トツテモケル
19	一上8ウ	紫荊	キノナ	なし
20	一上8ウ	析居 <sup>1</sup>	ワカレラル	なし

<sup>1</sup> 「折」の誤植だと考えられる。

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
			一上 13 ウ/ワカレテオル	
21	一上 9 オ	同爷合母	ヒトタネヒトツハラ	なし
22	一上 9 オ	活活分離	イキナケヲワカレル	なし
23	一上 9 オ	大家	ミナミナ	なし
24	一上 9 ウ	闇過不提	アタシゴトハサブオキ	なし
25	一上 10 オ	羯鼓	カワダイコ	なし
26	一上 10 ウ	豆萁	マメガラ	なし
27	一上 11 オ	幾千	スイキヨ	なし
28	一上 11 オ	薦書	カキツケ	ヒキツケ状ナリ
29	一上 11 オ	驟然升擢	ニハカニアゲル	なし
30	一上 11 オ	舉主	アゲタモノ	なし
31	一上 11 オ	罪黜	ヤクヲヤメル	なし
32	一上 11 ウ	抄没	ケルシヨ	なし
33	一上 11 ウ	幫助	タスケル	テツタフコト
34	一上 11 ウ	趕著哥哥	アニヲヲフテ	なし
35	一上 11 ウ	耨鋤	クサギリ	なし
36	一上 11 ウ	疾言倨色	ワルクチタカブル	なし
37	一上 12 オ	鋪陳一副	ヤタイチマイ	【鋪陳】ザシキカザリ
38	一上 12 オ	當	ペシ 一下 17 ウベキ	なし
39	一上 12 オ	口號	クチスサミ	なし
40	一上 12 オ	推阻	コトハリ	なし
41	一上 12 オ	吩咐	イヒツケル	なし
42	一上 12 ウ	行裝	タヒシタク	なし
43	一上 12 ウ	訪識荊此	タツネテチカツキニナル	なし
44	一上 12 ウ	未	サルヲ	なし



	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
			一上 28 ウ/ザルコ 一上 37 オサレバ	
45	一上 13 オ	假暫歸郷	シバヲクキセイノイトマ	なし
46	一上 13 ウ	乗傳	デンマ	なし
47	一上 13 ウ	官詰	ジレイシヨ	なし
48	一上 13 ウ	宜	ペジ	なし
49	一上 14 オ	礎	ヤセチ	なし
50	一上 14 オ	出入跟随	デハイリノトモ	なし
51	一上 14 オ	般般件件	ドレモコレモ	なし
52	一上 14 ウ	心直口快	シヤウヂキナクチ	なし
53	一上 14 ウ	背地	ウシロカラ	なし
54	一上 15 オ	違抛	サカラハヌ	なし
55	一上 15 オ	分多分少	ヲフクテモスクナクテモ	なし
56	一上 15 ウ	元纏束帛	ヌサノシナモノ	なし
57	一上 16 オ	失怙恃	ヲヤニワカレ	なし
58	一上 17 オ	二哥三哥	ヲトウトガタト	なし
59	一上 17 オ	安敢僭先	ドウシテヲサキニノマレ マセウ	なし
60	一上 17 オ	有句肺腑之言 奉告	ハナシガアリマス	なし
61	一上 17 ウ	借花献佛	モツタイナイトイフコト	なし
62	一上 17 ウ	河伯	カハノカミ	なし
63	一上 17 ウ	海若	ウミノカミ	なし
64	一上 18 オ	徽辟	メシダシ	なし
65	一上 18 ウ	苦掙	ホネヲリ	なし
66	一上 19 オ	矯情	ヲキリダテ	なし
67	一上 23 ウ	鵝兒	ヤリテ	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
68	一上 23 ウ	従良	テイシヲモツ 一上 26 ウ/カタツク	なし
69	一上 24 オ	來就怠慢	クイソヲシナクナツタ	なし
70	一上 24 オ	手頭兪短	ゼニガナクナル	なし
71	一上 24 オ	打發	オビタス	なし
72	一上 24 オ	不統口	シカトヘンジゼヌ	云フコトヲキキイレ ヌ
73	一上 24 オ	觸突	アテコスル	なし
74	一上 24 オ	行戸人家吃客 穿客	ワガセウバイハギロクヨ リトルニアリ	【行戸家】トイヤ
75	一上 24 ウ	舊主顧	ヲキヤクガヲテタ	なし
76	一上 24 ウ	鍾馗老道	セウキコナジンデヲニモ コヌ	なし
77	一上 24 ウ	退財白虎	ゼンニナラヌシロモノ	なし
78	一上 24 ウ	七件事	メイハクナコト	なし
79	一上 24 ウ	白白	シラシラシク	【白々地】シラシラ ト
80	一上 24 ウ	叫我衣食從何 處來	ワラシノイシヨクハドコ カラタル	なし
81	一上 24 ウ	討了一頭過活	ヒトリカムトラミツケテ カハレ	なし
82	一上 24 ウ	說謊	ウソハイハヌ	なし
83	一上 25 オ	別人千把銀子 也討出	ヘツノヒトナラセンリセ ウノカネモサイガクデヨ ウ	なし
84	一上 25 オ	窮漢不得出	アクヒンボウニシテハテ キヌ	なし
85	一上 25 オ	討	ミツケ	トツテキテ

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
86	一上 25 オ	粉頭	ヲンナ	なし
87	一上 25 オ	三七二十一	イサイウカマハヌ	なし
88	一上 25 オ	一頓	ヒトリノ	なし
89	一上 25 オ	那光棍	ナマシロヒカラタ	【光棍】ワルモノ
90	一上 25 オ	三百金還措分 得來	サンビヤクリヨウグライ ハアル	なし
91	一上 25 オ	應近	アマリチカヒ	なし
92	一上 25 オ	鐵皮包臉	テツメンヒデモマサカコ ラレマイ	なし
93	一上 25 オ	不于老娘之事	モハヤワタシノコトニク チダシハナラヌ	なし
94	一上 25 ウ	若翻悔時做猪 做狗	モシモコウクワイシタナ ラバシシトモイヌトモナ ラシ	なし
95	一上 25 ウ	留戀	イツツケ	なし
96	一上 25 ウ	束裝	クニヘカヘル	なし
97	一上 26 オ	佳音	ヨキタヨリ	なし
98	一上 26 オ	起身	イトマゴヒ	タビダチホツソク
99	一上 26 オ	錢便無縁	カネノサウダンニエンガ ナイ	なし
100	一上 26 オ	騙盤纏	リヨヒヲカタル	なし
101	一上 26 オ	脂粉	アソビノシロ	なし
102	一上 26 オ	始終	ドウモアヤシヘ	なし
103	一上 26 オ	乾淨	ハツキリコトハル	なし
104	一上 26 オ	慚慚	ヲハヅカシヘ	なし
105	一上 26 オ	統口	ハツキリイフ	なし
106	一上 26 オ	一二十兩	ジウニジウノカネモカサ	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
			ヌ	
107	一上 26 オ	含糊應答	ナントカイツテヲカフ	なし
108	一上 26 オ	下處	イツケスルトコロ	ヤドモト
109	一上 26 ウ	投宿	カリニヤトル	なし
110	一上 26 ウ	借歌	ゼヒナク	なし
111	一上 26 ウ	未必未必	マダホントウデハナイ	なし
112	一上 26 ウ	住	アケツメ	なし
113	一上 26 ウ	礙着面皮	キマリノワルサ	なし
114	一上 26 ウ	不好明言	アケテイワヌ	なし
115	一上 26 ウ	褻嬪	ドウラクモノ	なし
116	一上 26 ウ	早早開交	ハヤクテヲキル	なし
117	一上 27 オ	幾兩盤纏	ワツカノリヨヒ	なし
118	一上 27 オ	搭救	スクツテクレル	スクフ
119	一上 27 オ	小廝	コゾウ	なし
120	一上 27 オ	扯住	ツカマヘル	なし
121	一上 27 ウ	絮褥	ワタブトン	なし
122	一上 27 ウ	妾私蓄	ワタシノタクワヒ	なし
123	一上 28 オ	倘得玉成	ジヨウジユシタナラ	【倘】ヒヨツト
124	一上 28 オ	湊足	アツメテ 一下 16 オ/タス	アツメタス
125	一上 28 ウ	卓	ツクイ	なし
126	一上 28 ウ	允准	ハカリニカケル	なし
127	一上 29 ウ	装檢	セウゾクヲツケル	なし
128	一上 30 ウ	消索	トボシイ	なし
129	一上 30 ウ	薄驢	ハナムケ	なし
130	一上 30 ウ	描金文具	キンマキエノテハコ	【描金】マキエ
131	一上 30 ウ	東西	シナモノ	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
132	一上 31 オ	講足船錢	フナチンヲハラフ	なし
133	一上 31 オ	分文	イチモンナシ	なし
134	一上 31 オ	解庫	クラヲヒラク	シチャ
135	一上 31 オ	鋪蓋	シキモノカサ 一下 14 オ/ネダイ	なし
136	一上 31 オ	轎馬之費	ウマカゴノチンヲハラフ	なし
137	一上 31 オ	汎重	シツトリヲモイ	なし
138	一上 32 オ	種鹽	ヤクノナ	なし
139	一上 32 ウ	船公	センドウ	なし
140	一上 34 オ	斧資	タクワヒ	なし
141	一上 35 ウ	容	ベシ	なし
142	一上 35 ウ	算還	ハラウ	なし
143	一上 37 オ	未曾過手	ウケトラヌ	なし
144	一上 37 オ	須	ベシ	なし
145	一上 37 オ	兌足	カゾヘテ	なし
146	一上 37 オ	依允	セウチスル	なし
147	一上 37 オ	簡看	アラダメ	なし
148	一上 37 ウ	箱子	テハコ	なし
149	一上 37 ウ	可暫發來	タタイマニワタスベシ	なし
150	一上 37 ウ	路引	ミチユキ	なし
151	一上 37 ウ	抽匣	ヒキタシ	なし
152	一上 38 オ	推開	オシヤル	なし
153	一下 1 オ	貝氏	ツマノセイ	なし
154	一下 1 オ	兩疋布兒	ニタンノヌノ	なし
155	一下 1 オ	一副悍毒狼心 腸	ハラノワルイオンナ	なし
156	一下 1 オ	饒舌囁囁	クチャカマシ	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
157	一下1ウ	死飯	ヒヤメシ	なし
158	一下1ウ	説嘴不響	イツデモトホラヌ	云ゴタヘガセヌ人
159	一下1ウ	發蹟	ヨニデタルトキ	なし
160	一下1ウ	如此嘴臉那得 發蹟	ソノクチデハヨニデラレ ナイ	なし
161	一下1ウ	天上弔下	テンノメグミ	なし
162	一下1ウ	打劫不成	ドウシテモワカラヌ	なし
163	一下2オ	多年了信不過	ホントウニハヲモワヌ	なし
164	一下2オ	沒趣	ツマラヌコト	なし
165	一下2オ	厮鬧	ケンクワ	なし
166	一下2ウ	恁様空腦子人	コンナバカナモノモアル	【恁様】コノヤウナ
167	一下3オ	冷落	サビシヒ	なし
168	一下3ウ	沒本錢	ドロボウスルコト	なし
169	一下3ウ	俱是一勇之夫	ミナツヨイオトコ	なし
170	一下3ウ	任憑	マカセタノム	なし
171	一下3ウ	一溜烟跑向	ドントカケダス	なし
172	一下4オ	有些氣象時	アラハレソウナトキハ	なし
173	一下4ウ	換過	キカセル	なし
174	一下5オ	並無一個肯慨 然周濟	スクツテクレヌ	なし
175	一下5オ	到依	ツマリ	なし
176	一下5オ	拿住	ツラヘラル	なし
177	一下6オ	契刀契剔	キツテキツテキリヌク	なし
178	一下6オ	利市	モウケクチ	何ニヨラズ事ヲナス ハジメニ祝フコトナ リ
179	一下6オ	皆熟慣	ヨクシメテイル	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
180	一下6オ	收過	カタツケル	なし
181	一下6ウ	結束	シタクナリ	なし
182	一下6ウ	正撞在網ウ	アイニクアミニカクル	なし
183	一下6ウ	火把	タイマツ	なし
184	一下6ウ	輪起	フリマハシ	なし
185	一下7オ	打翻	ウチカヘサル	なし
186	一下7オ	儘力奔脱	チカラノカギリニゲル	【儘力】チカラ一ハイ
187	一下7オ	繩穿	ナハヲカケル	なし
188	一下7オ	刑名	シラベヤク	なし
189	一下7ウ	杖刑立威	ケイヲヘテイケオクル	なし
190	一下7ウ	囑託希承其旨	ヒキウケテカミノムネヲ トフス	なし
191	一下7ウ	銅肋鐵骨的好漢	キンコツタクマシキヲト コ	なし
192	一下8オ	情絲	コトガラ	なし
193	一下8オ	歎（歎）服	クジヤウスル	なし
194	一下8オ	黨羽	ドウルイ	なし
195	一下8オ	告貸	カネヲカ Ril	カ子カリニユク
196	一下8オ	入夥	ヲトシテナカマニイレル	なし
197	一下8オ	一夥	ヒトツナカマ	仲間人ノ多ヲ云
198	一下8オ	上司	ウワヤク	なし
199	一下8オ	枷杻	アシカセタヒカセ	なし
200	一下8ウ	審	シラベ	なし
201	一下8ウ	軒昂	ケタカイ	なし
202	一下8ウ	碍著	サハリニナル	なし
203	一下8ウ	明放	アラハニハナツ	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
204	一下 8 ウ	盤費	ロヨウ	なし
205	一下 8 ウ	申文	トトケブミ	【申】以書告上也。 【申文各憲】處々ノ 役所へ書付ヲ出スコ ト。
206	一下 8 ウ	萬分	ハンジシアハセ	なし
207	一下 8 ウ	小牢子	ロウバン	なし
208	一下 9 オ	禁長哥	ゴクソツオヤブン	なし
209	一下 9 オ	拽開脚步	ヲブマタニカケル	なし
210	一下 10 ウ	休管是不是	ヨイワルイライフマデモ ナイ	なし
211	一下 10 ウ	推在他身上	カレノミニカカル	なし
212	一下 10 ウ	上前	ススンテ	なし
213	一下 10 ウ	向来	コテマデ	なし
214	一下 10 ウ	緝訪	タツネヨ	なし
215	一下 11 オ	故知	フルキトモ	なし
216	一下 11 オ	頭踏	ギヨウレツ	なし
217	一下 11 オ	迴避	ヨケル	なし
218	一下 11 オ	卓蓋	ヲフキナカサ	なし
219	一下 11 ウ	暫説片時	シバラクオハナシモウサ ン	なし
220	一下 11 ウ	幹辨	アツカフ	なし
221	一下 11 ウ	陳顔	リベンノボクノナ	なし
222	一下 12 ウ	盤纏	ロヨウ	なし
223	一下 13 オ	身故	ミマカル	なし
224	一下 14 ウ	話休	アダシゴト	なし
225	一下 14 ウ	煩絮	ハサテオキ	なし



	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
226	一下 14 ウ	堅執要去	ドウデモサル	なし
227	一下 15 オ	分教	ワケガアル	なし
228	一下 15 ウ	要話	ムダバナシ	なし
229	一下 15 ウ	打抽豊的	シアハセモノ	なし
230	一下 16 オ	焦燥	イラタツ	イラツ
231	一下 16 オ	失心風	ヨイヨイ	なし
232	一下 16 ウ	査檢	アラタメル	なし
233	一下 16 ウ	怎生	ドウシヨウゾ	ドウシテ
234	一下 16 ウ	捷徑法儿	チカミチノヨイホウ	なし
235	一下 16 ウ	陰 <sup>2</sup> 些兒	アブナイ	なし
236	一下 17 ウ	去買上囑下	カヒマケテタノミ	なし
237	一下 17 ウ	這官又不壤	ヤクモヤメス	なし
238	一下 17 ウ	落些	トクヲトル	なし
239	一下 17 ウ	一溜烟走	ドツトニゲル	なし
240	一下 17 ウ	可的	ツガフガヨイト	カギル意
241	一下 18 オ	忒殺	ウタガフ	【忒煞】ハナハダ
242	一下 18 オ	懵懂	オロカ	なし
243	一下 18 オ	把頭掉轉	カブリヲフル	なし
244	一下 18 オ	不來招攬	シヒテマネク	なし
245	一下 18 オ	翻過臉來	ホウヲフクラス	なし
246	一下 18 オ	和盤托出	タンタコト	なし
247	一下 18 ウ	下額子	タカガスクナイ	モモ何ニテモ例二ナルコト
248	一下 18 ウ	原走不脫	ニゲルヨリシカタガナイ	なし
249	一下 18 ウ	到底終須	ツマリサキノミヘタコト	なし
250	一下 18 ウ	一字題起	ナントモイハヌ	なし

<sup>2</sup> 「陰」の誤植だと考えられる。

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
251	一下 18 ウ	好不利害	ナンデモカマワヌ	なし
252	一下 19 ウ	擻唆	ススメル	なし
253	一下 20 オ	不能饒我	イカシテハヲカヌ	なし
254	一下 20 ウ	寒顫	フルヘル	なし
255	一下 21 オ	承直令尉	トマリノヤクニン	なし
256	一下 21 ウ	刷	ムマノシソウ	なし
257	一下 21 ウ	少停便來	シバラクスルトヨヒニクル	【少停】ノチホド
258	一下 21 ウ	不必跟隨	ツヘデクルニヲヨバヌ	なし
259	一下 21 ウ	捨舍奔趕	ヤスマズニカケル	なし
260	一下 22 オ	生口	ムマ	なし
261	一下 22 オ	巴不得	イナミカネル	イソイデナリ
262	一下 22 オ	帶跌趕到	ツヘテカケル	なし
263	一下 22 ウ	緊事	イソキノコト	なし
264	一下 23 オ	豈不乾淨	ソレテスム	なし
265	一下 23 オ	從不曾習慣	コレマテナレナイ	なし
266	一下 23 オ	到	ツマリ	なし
267	一下 23 オ	不做甚麼生意	ナンノヨスギモセズ	なし
268	一下 23 ウ	劍俠	ケンジュツツカヒ	なし
269	一下 23 ウ	便服	フダンギ	なし
270	一下 24 オ	認錯	マチガヒ	なし
271	一下 27 オ	壯士饒命	イノチヲタスケヨ	なし
272	一下 27 ウ	懷著鬼胎	フシキニヲモヒ	なし
273	一下 27 ウ	原到不動	モトノママテカヘル	なし
274	一下 28 オ	颯地	ヒラリト	なし
275	一下 28 オ	會講	ヨクシヤベル	なし
276	一下 28 オ	粘牢	ウゴカナイ	なし

	所在	語彙	傍訳	『小説字彙』
277	一下 28 ウ	饒命	タスケテクダサイ	なし
278	一下 28 ウ	樞來	カキアツメル	なし
279	一下 29 ウ	驗過	ケンシスル	なし
280	一下 29 ウ	做公的	ヤクシヨノテツキ	公キノヤク人
281	一下 29 ウ	眼前	メジルシ	なし
282	一下 30 オ	令炭刑	ケイジヤクニン	なし
283	一下 30 ウ	少叙	ヤスマレヨ	なし
284	一下 36 ウ	香羅帕	テヌグヒ	なし
285	一下 36 ウ	三回五轉	アチラコチラヲサガス	なし
286	一下 41 ウ	現成茶飯	デキアヒノチヤメシ	なし
287	一下 42 ウ	一聲保重	ダイヂニヨセ	なし
288	一下 42 ウ	勿藥	クスリハイラヌ	なし
289	一下 43 オ	好了	スクニナラル	なし
290	一下 43 ウ	摟抱	ダキツク	なし
291	一下 43 ウ	擋開	ツキハナシ	なし
292	一下 44 オ	白首	シラガマデ	なし
293	一下 45 オ	邸報	ウチノタヨリ	なし
294	一下 45 ウ	暮夜之期	カリノチギリ	なし
295	一下 46 オ	柬帖	テガミ	なし
296	一下 49 ウ	一字	ヲカゲ	なし
297	一下 50 ウ	數一數二	イチブシジウ	なし
298	一下 51 オ	衣冠	リツパナヒト	なし
299	一下 53 ウ	打發公差	ゴヨウシヨウトイフコト	なし
300	一下 54 オ	金榜同年	トモタチトイフコト	なし

3.附論 林文月による『源氏物語』の漢訳における注釈について

帖名	所在	林文月譯	注釈	古澤義則	注釈	日本古典文学全集	注釈	谷崎訳	注釈
1 銅壺	— 3	女御和更衣	女御和更衣皆平安时代宫廷女官。女御属三位，往往可晋为皇后；更衣属四，五位之间，侍候皇帝左右。	女御 更衣	后に次ぐ天子の御妃。 女御に次ぐ御妃。	女御 更衣	中宮に次ぐ天皇の夫人。摂関大臣以下公卿の娘となる。 女御に次ぐ夫人。大納言以下殿上人の娘となる。	女御 更衣	皇后、中宮に次ぐ妃 女御に次ぐ妃
2 銅壺	— 3	殿上人之輩	平安朝廷里，部分四位，五位及六位之人，可升殿者，称为殿上人。	上人	殿上人。	上人	殿上人。四位・五位で昇殿（清凉殿の殿上）の間に上ることを許された人と六位藏人。	なし	なし
3 銅壺	— 3	大納言	日本古代朝廷官衔。参与政事，掌传达诏令之职。	なし	なし	大納言	大政官の次官。正三位相当。	なし	なし
4 銅壺	— 3	弘徽殿女御	右大臣，亦古代官名。为大政官之长，辅佐天子理政，相当于我国宰相之地位。其女入宫为女御，住弘徽殿，故称弘徽殿女御。	右大臣の女御	右大臣の御女の女御意。弘徽殿女御と申す。	なし	なし	なし	なし
5 銅壺	— 4	挂桥	旧时日本房屋内临时搭挂，以联络各屋之桥。	打橋	廊下の切目にかける板の橋で取外しのできるもの。	打橋	建物と建物との間に渡した、取りはずしのできる橋。	打橋	渡り廊下の切れ目にかかれる板。随時取りはずしができるようになっている
6 銅壺	— 4	着袴仪式	幼童三至五岁间所举行之仪式。朝廷选择吉日良辰，由专司者为皇子穿上一种宽大的古代日式裙裤。为平安中后期普及之仪式。	御袴着	大凡三四歳から七八歳までに行はれる。著袴親があつて、親戚中尊貴で徳望ある者が任じ袴の腰を結ぶ。	御袴着	着袴とも。三、四歳～六、七歳の間に行ない、以後少年として扱う。皇子の場合、天皇自ら腰結の役に当たることが多い。	なし	なし
7 銅壺	— 6	“死后方眷”	《源注拾遺》所引古歌：	亡きあとまで	死後までも私達の胸のを	「なくてぞ」	「あるときはありのすさびに憎かりき	「なくてぞ	ある時はありのすさびに憎か

			念”	“生时多憎厌，死后方眷念”。		さまならない程の更衣の愛され方だ。		なくぞぞ人は恋しかりける」(源氏親)。	人は」	りきなくぞぞ人は恋しかりける【源氏物語典入所引】
8	銅壺 —6	初負的命妇	五位之宮女为命妇。“初负”为卫府武官。当时以宫女父兄之官衔冠其上，以示其身份地位。此“初负命妇”即父兄位卫府武官之五位宫女。		なし	なし	初負命婦	「初負」は「ゆぎおい」の約。初(失)を入れて背に負う具)を負って宮中を守る者で、衛門府の武官の総称。命婦は中級の女官。父兄または夫に初負がいたのでこうよばれた。	なし	なし
9	銅壺 —6	“暗中相契约，忽得梦里见”	《古今集》恋三、无名氏作和歌句。	關の現	古今十三戀三「ぬば玉の關の」現は定かなる夢にいくらもまさらざりけり」關の中の現実よりもつとはかないものであつた。	關に現にはなほ劣りけり	「うばたまの關の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」(古今・恋三 詠人しらす)。	「關のうつつ」	うば玉の關のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり【古今集】	桐壺帝の歌。宮城野は今の仙台市の東郊にある野で、古くは秋草の名所。ここでは「宮城野」を宮城に、「露」を涙に、「小萩」を若宮に擬して、宮中を吹き渡る寂しい風の音に涙が催されるにつけても、若宮の身の上がいやられるの意
10	銅壺 —7	宮城野外多幼萩	宮城野在今日本仙台市东郊，为产萩草各地。歌中幼萩以喻皇子。	宮城野の	禁中を吹き渡る風の音を聞くにつけても源氏の事が思ひやられる。宮城野は奥州の名所、ここは宮中の意。宮城野の宮をはたらかせた使ひ方。小萩に子の意を含めてある。	宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ	「宮城野」は宮城県仙台市の東の野。萩の名所で歌枕。宮中の意をきかせてある。「露吹きむすぶ」は風が吹いて萩に露を結びせる意。「露」に帝の目に宿る涙の意をきかせる。「小萩」は、幼児、すなわちこの皇子の意を含む。「あらし吹く風はいかに」と宮城野の小萩が上を露も問へかし」(赤染衛門集)。	宮城野の露ふき結ぶ風のおとに小萩がもとをとおもひこそやれ	桐壺帝の歌。宮城野は今の仙台市の東郊にある野で、古くは秋草の名所。ここでは「宮城野」を宮城に、「露」を涙に、「小萩」を若宮に擬して、宮中を吹き渡る寂しい風の音に涙が催されるにつけても、若宮の身の上がいやられるの意	
11	銅壺 —7	‘羞见高砂松’	取《古今六帖》诗句。高砂之松象征长寿。此处更衣老母谓己马齿徒长，羞见长寿之高砂松。	松の思はむ	六帖五「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむ事も恥かし」まだ生きて居るかと松に思はれるのが恥かしい。	松の思はむことだに、恥づかしう思ひたまへばそれば	「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむことも恥づかし」(古今六帖 五)	『松の思はんことも恥づかしう』	いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はんことも恥づかし【古今六帖】	
12	銅壺 —9	宇多天皇	日本平安朝皇帝。西元八八七年～八九七年在位。	なし	なし	なし	なし	なし	なし	









31	帯木 — 24	把头发束在工作室颇为碍事，故得头发束于耳后，以便料理家务。	婦女之长发在工作室颇为碍事，故得头发束于耳后，以便料理家务。	耳はさみがちに	額髪を兩耳の後ろへ挟んで家事に立働く様。	耳はさみがちに	額髪が顔にかかるのを嫌って、それを両耳に挟んで後ろへやり、耳を露出した姿。家事にいそしみ、なりふりかまわぬ姿。	髪のを耳に挟んでばかり	女がいそがしく立ち働く時に、額の髪が邪魔になるので耳のおきに挟むのである
32	帯木 — 24	发梢 当时尼姑无须落发，仅削剪发梢，故云。	当时尼姑无须落发，仅削剪发梢，故云。	なし	なし	額髪	「額髪」は、額から左右に耳よりも前に垂れる髪のこと、いわゆる下り端とは別か。出家した女は、「尼そぎ」といって、頭髪は背中の辺で切り揃えるので、額髪も短く切られるのである。	額髪	当時の尼は剃らずに、ただ髪の先を削いでいた
33	帯木 — 26	‘泛若不系之舟’ 语见《庄子》列御寇篇。	つながぬ舟の	繋がぬ舟	「澹ナルコト 深キ淵ノ静ナルガ若ク 泛キタルコト 繋ガザル舟ノ如シ」(文選・鵬鳥賦) または、「情ナキ水モ方円ノ器ニ任せ 繋ガザル舟ハ去住ノ風ニ随フ」(白氏文集・偶吟詩)による。	なし	なし	なし	
34	帯木 — 28	屈指 屈指之“指”为双关语，谓指数目，兼谓被咬伤之手指。	手を折りて	手を折りてあひみしこと数ふればこれひとるやは君がうきふしえ恨みじ	紀有常が、長年連れそった老妻が尼となる際に贈った歌「手を折りてあひみしことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり」(伊勢物語十六)の上句を用い、下句にも数を出した。同じく夫婦仲を扱いながり、内容をすり替える。「やは」は反語。「ふし」は箇所之意と、指の関節の意とをかけ、手の縁語。	手を折りてあひみしことを数ふれば	「年頃馴染んで来た間のこと を指折り数えて思い出してみるのに、この嫉妬の癖一つだけ がそなたの欠点だったのである うか」で、「いやいや、ほかにも まだいやなことがたくさんあつた」という意。てに食いつかれた 時の歌であるから、「手」という語、指に縁のある「ふし」という語を詠み込んである。		

35	帯木	— 28	臨時祭預演	毎年十一月下酉日舉行賀茂祭。于午日在皇宮内預演各種音樂。	臨時の祭	賀茂の臨時祭は十一月の下の酉の日に行われる。それに先だち午の日に調習がある之を調樂といつて宮中で行はれる。	臨時の祭	賀茂神社の臨時の祭り。陰曆十一月下の酉の日に行われる。	臨時祭の調樂	賀茂の臨時祭は十一月の下の酉の日に行われる。それに先立って午の日に祭に奏する奏樂の下稽古があるのを調樂といふ
36	帯木	— 29	几帳の布幔也掖上去	几帳为屏風之一種，以不幔为之。設置寢室前，故此處意味女郎等侍其情人。	物の帷子	几帳御帳壁代などの垂布。	なし	なし	なし	なし
37	帯木	— 29	龍田姫	为秋之女神，擅長染紅葉，故云。	龍田姫といはむにも	染色の技倆は龍田姫といつても不似合ではない。龍田姫は秋の女神で、春の女神佐保姫に對する。	龍田姫	奈良の京の東に佐保山、西に龍田山がある。これを春秋に配し、龍田山は紅葉の名所で、その女神、龍田姫は秋の神、また染色の神とする。指喰いの女は染色にもすべれていたことをいう。	立田姫	秋の女神の立田姫が紅葉などを染めるようにの意
38	帯木	— 29	织女	即牽牛星之妻織女星。	なし	なし	織姫	七夕の織姫星をさす。裁縫の神とされる。	棚機姫	牽牛星の妻織女星のこと
39	帯木	— 29	牽牛织女の縁分	謂牽牛织女尚得于七夕相會也。	なし	なし	なし	なし	長い契	牽牛星と織女の永久に変わらぬ契にあやかればの意
40	帯木	— 30	大納言家	或指左馬頭之父。	大納言	誰か分からぬ。馬頭の父か。父の家に行つて泊らうと思つて居つた所。	大納言	左馬頭の父親か。	大納言の家	この大納言は馬頭の父でもあろうか
41	帯木	— 30	催马乐	日本古典雅樂歌曲之一種。	なし	なし	なし	なし	なし	なし
42	帯木	— 30	和琴	即日本琴。	なし	なし	琴	「琴」は、絃樂器の總稱。ここは和琴。	箏	箏、琴、和琴などの絃樂器を「こと」と總稱するが、現在「こと」と呼ばれている十三絃で柱を立て爪をはめて奏するものがこれに當る。

43	帯木 — 31	石竹花	“石竹花”日语音同“吾儿”。 番此花，表示此女子寓意深刻。	なし	なし	大和撫子	『和名抄』には、「置妻」に「なでしこ」「とこなつ」の両側を与えている。また「やまとなでしこ」は「かわらなでしこ」の異名、中国渡来の「唐なでしこ」(石竹) に対する称で、右の「とこなつ(なでしこ・かわらなでしこ)」と同一物とされている。作者が、別種のものごとく扱っているのは「やまとなでしこ」(子) と「とこなつ」(母) という語感によるだけのことであろう。	なし	なし
44	帯木 — 32	常夏之华	“石竹花”又名“常夏之华”。 女以“石竹花”喻其子，男则称“常夏之华”以喻(指其情妇)，巧妙地转移歌意。	なし	なし	なし	なし	なし	なし
45	帯木 — 33	文章生	平安时代于律令制大学中，学习诗文历史，而通过式部省考试及格者，称为文章生。	文章の生	文人とも進士ともいふ。大学頭の試験に通過して篇文章生となり、それが省試を受けて及第したものを文章生といふ。	文章生	当時の学制では、大学寮の教官として、博士(一人)・助教(二人)・音博士・書博士・算博士(各二人)。学生定員四百人。諸学科中、平安時代には文章道が最も重んぜられ、その階級は、学生→篇文章生→文章生→文章得業生→文章博士(従五位下)と、試験を受けて上ってゆく。	なし	なし
46	帯木 — 33	‘听我歌两途’	白居易《秦中吟》十首之一，《议婚》：“主人会良媒，置酒满玉壶。四座且勿饮，听我歌两途。富家女易嫁，嫁早轻其夫；贫家	わが二つの道	文集秦中吟十首の中の議婚「主人會良媒、置酒滿玉壺、四座且勿飲、聽我歌兩途、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晚孝於	わが両つの途歌ふを 聴けとなん	白楽天「秦中吟」十首の第一、「議婚」の一節に「主人良媒ヲ会ス置酒シテ玉壺ニ滿シ四座且ク飲ムコト勿レ我ガ阿ノ途ヲ歌フヲ聴ケ富家ノ女ハ嫁シ易シ嫁ヌルコト早ケレドモ其ノ夫ヲ	『聽我歌兩途』	白氏文集の秦中吟に、「主人會良媒。置酒滿玉壺。四座且勿飲。聽我歌兩途。富家女易嫁。嫁早輕其夫。貧家女難嫁。嫁晚孝於姑。」とあるのに基づく。

			女难嫁。嫁晚孝子姑。”博士引此诗句盖谓己家虽贫，其女嫁后当较富家女为贤淑也。		姑」		怪ソズ 貧家ノ女ハ嫁シ難シ 嫁スルコト晚ケレドモ姑ニト 婦ヲ娶ル意何如」。要するに、自かわいがってほしい、との趣旨。		「前途」とは富家の女と貧家の女とのことで、嫁に貰うには貧家の女がよいという意味を醸ってある。博士の家は貧家なのである
47	帯木 — 33	极热草药	即俗称大蒜。	極熱の草葉	蒜の事。蒜は解熱劑になる。	極熱の草葉	後文で「ひる」(にんにく)のことわかる。『河海抄』所引の『延喜式』に「蒜極熱草葉也」(現存本『延喜式』にない)とある。暑中の体力の衰えに用いたものか。*この女の言葉は、異様である。「風病」「極熱」「草葉」「服して」「対面」「雑事」などは漢語であり、「たへかねて」「臭きにより」「目のあたりならずとも」なども堅苦しい言い方である。「いと臭きにより」も露骨で、学術的で、デリカシーのない性格を如実に示す。	極熱の草葉	この草葉は「にんにく」のこと
48	帯木 — 34	明知相访黄昏后	观蜘蛛黄昏结网知有人来访，典出于《古今六帖》。或据《诗经》邶风东山“伊威在室，蠨蛸在户”而来。	ささがにの	この歌は古今二十の「わがせこが来べき宵なりささがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」の歌によつたもので、私の来る事も分つて居る筈の夕暮ぐれといふのはわからぬ話だ、今は現に夕暮であるから、夕暮を猶豫してくれといふのならばわかつてゐるけれども。	ささがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせと言ふがあやなさ	「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」(古今・恋四・墨滅歌)による。原歌は下句「くものおこなひこよひしるしも」(日本書紀・允恭・衣通姫)。「ささがに(笹蟹)」は小蟹。その形から蜘蛛の枕詞となり、蜘蛛の意にも用いられる。蜘蛛が巣を張るときは親しい人が訪れてくるという俗信があつた。中国、『詩経』の「幽風」に「伊威ハ室ニ在リ 蠨蛸ハ戸ニ在リ」とあり、元来は中国の俗信。「星間」に「蒜間」(にんにくの臭いがする	ささがにの振舞ひしるき夕ぐれに	「ささがに」は蜘蛛の枕詞または別名。「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも」【古今六帖】という古歌による。私が今日夕暮に訪ねて来そうだということは蜘蛛の振舞いを見ても知れているはずなのに、星間が過ぎてからおいでと言うのは分からぬ話です。「ひるま」は「蒜の臭いが抜ける間」の意味にもなる。「ひる」はに



56	帯木	— 36	渡廊	连接二寝宮の走廊。	なし	なし	なし	なし	なし	
57	帯木	— 36	“小余綾之 砌”	此为“枕词”，典出于风俗歌《玉垂》。谓主人款待宾客，上下奔走，忙于选取小余綾（地名）海滨的海带作为酒肴。	主人も	亭主の紀伊守も御馳走譚達の爲に奔走して居る折。風俗玉垂「玉だれの小がめを中にすゑて、主はもや、肴まぎに、肴とり、こゆるぎの磯の和布刈りあげに」こゆるぎの磯は相模園中郡除綾織。	あるじも肴求むと	「玉垂の小瓶を中に据ゑて、あるじはもや、肴まぎに、肴とり、こゆるぎの磯の、わかめ刈りあげに」（風俗歌・玉垂）による。『馬内侍集』などにも、これを用いた和歌がある。当時人々の愛唱した歌謡らしい。「肴」は当時「酒菜」で酒に添える副食物。「こゆるぎ」は愛模国余綾。現在の神奈川県大磯・小磯のあたり。「こゆるぎ」に「ゆるぎ」をかける。「ゆるぎ」は肩をゆるする形容。「急ぎ」に「磯」をかける。	「こゆるぎの磯」	玉だれの、こがめを中にすゑて、あるじはもや、さかんあまぎに、さかなとりに、こゆるぎの磯のわかめ刈りあげに【風俗歌「玉垂」】
58	帯木	— 36	格子門	日式建築物门窗外之木制细格子門。	なし	なし	格子	なし	なし	
59	帯木	— 36	式部卿宮的 公主	光源氏从妹、为后来之権斎院。	式部卿の宮の姫君	権斎院と申す。	式部卿宮の姫君	姫君	源氏の従妹に当る姫。後の権斎院のこと	
60	帯木	— 36	‘帷幔’	典出催马乐《我家》词。光源氏引此语，旨在暗示主人款待客人。	帷帳も	催馬樂我家「わいへんはとばり帳をも垂れたるを、大君来ませ誓にせむ、御肴に	とばり帳	『とばり帳』	我家はとばり帳をも垂れたるを、大君来ませ誓にせん、御肴に何よけん、鮓、さだをか、か	



66	帯木 — 41		‘无梦缘不 眠’	光源氏引《拾遺集》句謂： 刻骨相思致不眠，遂无由 于梦中相见也。	寝る夜なければ	出所不明。「戀しきを何に つけてか慰めむ夢にも見 えずぬる夜なければ」	寝る夜なければ	恋二 誰人しらず」などを引歌とする か。	『寝る夜な ければ』	恋しきをなにつけてかなぐ さめん夢だに見えず寝る夜な ければ【拾遺集】		
67	帯木 — 43	帯木生兮菌 原区	帯木为传说中产于信州 下伊那郡“菌原伏屋”地区 之奇树，变幻多端，远望 之，其状如立帯；近观之， 则消失不见。光源氏此诗 以帯木喻空蝉（夫人绰 号），谓已相思苦寻，竟迷 途失其踪迹也。	「帯木のこころ を知られで菌原 の道にあやなく 惑ひぬるかな聞 えむ方こそなけ れ」	あなたの本心も知らずに 私はつまらなくまごつい た事だ。此歌は新古今戀一 坂上是則の「菌原や伏屋に 生ふる帯木のありとは見 えてあはぬ君かな」を本歌 としてある。	帯木の心をしらでそ の原の道に	「菌原や伏屋に生ふる帯木のありとて ゆけどあはぬ君かな」（古今六帖五。新 古今・恋 坂上是則一四句「ありとは見 えて」）。帯木は信濃国（長野県）の伝説 に、同国下伊那郡の「菌原伏屋」の森に あった木。梢は、ほうきのように、遠く から見ると見えるが、近よると見えな くなるという。女をそれにとえる。	帯木のこころを知らで 菌原の	「菌原や伏屋に生ふる帯木の ありとは見えて逢はぬ君か な【新古今集】の本歌による。 帯木は遠くから望めば帯を立 てたように見え、近く寄れば 見えなくなる奇木で、信州下 伊那郡菌原の伏屋という所に 生えているという。帯木を空 蝉にたとえて、「帯木という樹 の正体を知らずに菌原へ尋ね て行つて、いたずらに道に迷 ったことよ」の意			
68	帯木 — 43	植凡树兮傍 伏屋	伏屋为双关语：义取前注 菌原伏屋地名；日语发音 则同“茅屋”。空蝉作此答 歌，以傍植于茅屋之凡树 自喻，谓已卑微不足为源 氏所追求，故羞愧自匿若 帯木也。	敷ならぬ伏屋に 生ふる名の憂さ にあるにもあら ず消ゆる帯木と 聞えたり	受領の妻といふ賤しい名 義がつらくくて、死ぬやうな 思ひである私でございま す。	伏屋	地名の「伏屋」に、単しい小屋の意をか ける。	かずならぬ 伏屋に生ふ る名のうさ に	「伏屋」は前記の地名である が、「賤が伏屋」の意味にもな る。物の数でもない茅屋に生 きている身は、受領の妻とい う賤しい名がついている情な さに、いるにもいられない心 地がして、帯木のように消え てしまおうございませす			
69	空蝉 — 50	妻戸	设于寝宮四隅之门，开始 在外边挂上挂物，关时则 在里边挂上挂物。	なし	なし	妻戸	寝殿の四隅に設けられた両開きの板の 扉。	妻戸	寝殿造りの四隅にある両開き の戸。開いたときは外側にか けがねをとめておき、閉じた			





			置入怀中之紙、多隨身怀帯、可以即席咏歌书写之用者。								
75	空蟬 — 54	空蟬蛻	蟬蛻以喻伊豫介之妻脱下之衣裳，此处根据和歌原作（并本帖题目），故保留“空蟬”之词。歌意谓光源氏睹情人脱去之衣裳，犹蟬蛻留壳去无影，虽哀情寂寞怨尤而仍不免劳思眷念也。	空蟬の身をかへてける木の下になほ人からの懐かしきかな	蟬が木蔭に殻を残して行くやうに、薄衣だけを残して姿を隠したあなたではあるが、やはりあなたの薄衣が懐しい、あなたが「人から」の「人」は枕詞。人品の意味に人と殻とを結びつけた言ひ懸けの枕詞で、やがて空蟬の人品の義がひびかせてある。	空蟬のみをかへてける	陸奥国紙など）を折りたんで懐中に入れて持ち、鼻紙、あるいは詠草、消息などの用に供する。「墨紙に」は「ただ」とする本文もある。	なし	なし		
76	空蟬 — 55	“伊勢滨海人之弃衣”	典出《后撰集》恋三和歌句。	かのもぬけを	かひの脱ぎ捨ての小桂を、どんなに著古して垢じみて居た事やらと思ふにつけても。後撰戀三「鈴鹿山伊勢をの海士の捨衣鹽馴れたり」と人やみるらむ」	伊勢をのあま	「鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣しほなれたりと人や見るらん」（後選・恋三女のもとにきぬを脱ぎおきて取りに遣はすとて／藤原伊尹）。「伊勢を」の「を」は強意の助詞。	伊勢をの海人	すずか川伊勢をのあまのすて衣しほなれたりと人やみるらん【後撰集】		
77	空蟬 — 55	忍声吞泣兮 祓有泪。	谷崎译注谓此和歌非空蟬所作，乃《伊勢集》所裁。空蟬饮用此歌寄托，谓己如隐身山香之蟬，露痕虽沾濡其翅翼而无人知晓；私恋之情无处可诉，唯有忍声吞泣，泪湿衣袖也。	空蟬の羽におく露の木がぐれて忍び忍びに濡る袖かな	私はあなたを避けて隠れては居りますが、あなたの御情を思つて人知れず泣いてをります。	空蟬の羽におく露の木がぐれてしのびしのびこぬる袖かな	『伊勢集』の群書類従本、西本願寺本などに見える伊勢御の歌。空蟬が、その心境を、この古歌を思いつくままに書きつけたもの。古歌に現在の思いを託すことは、当時の日常生活では珍しいことではないが、物語の表現に用いた例はこれが最初か。ただし、手法としては、引歌表現の極限的な場合とみるべし。	空蟬の羽におく露の木がぐれて忍び忍びに濡る袖かな	蟬の羽におく露が木の間隠れて人に見えないように、自分も人に隠れて忍び忍びに涙に袖を濡らすことよ。この歌は空蟬の作ではなく、伊勢集にある伊勢の歌で、それを空蟬が思い起して記したのである。		

